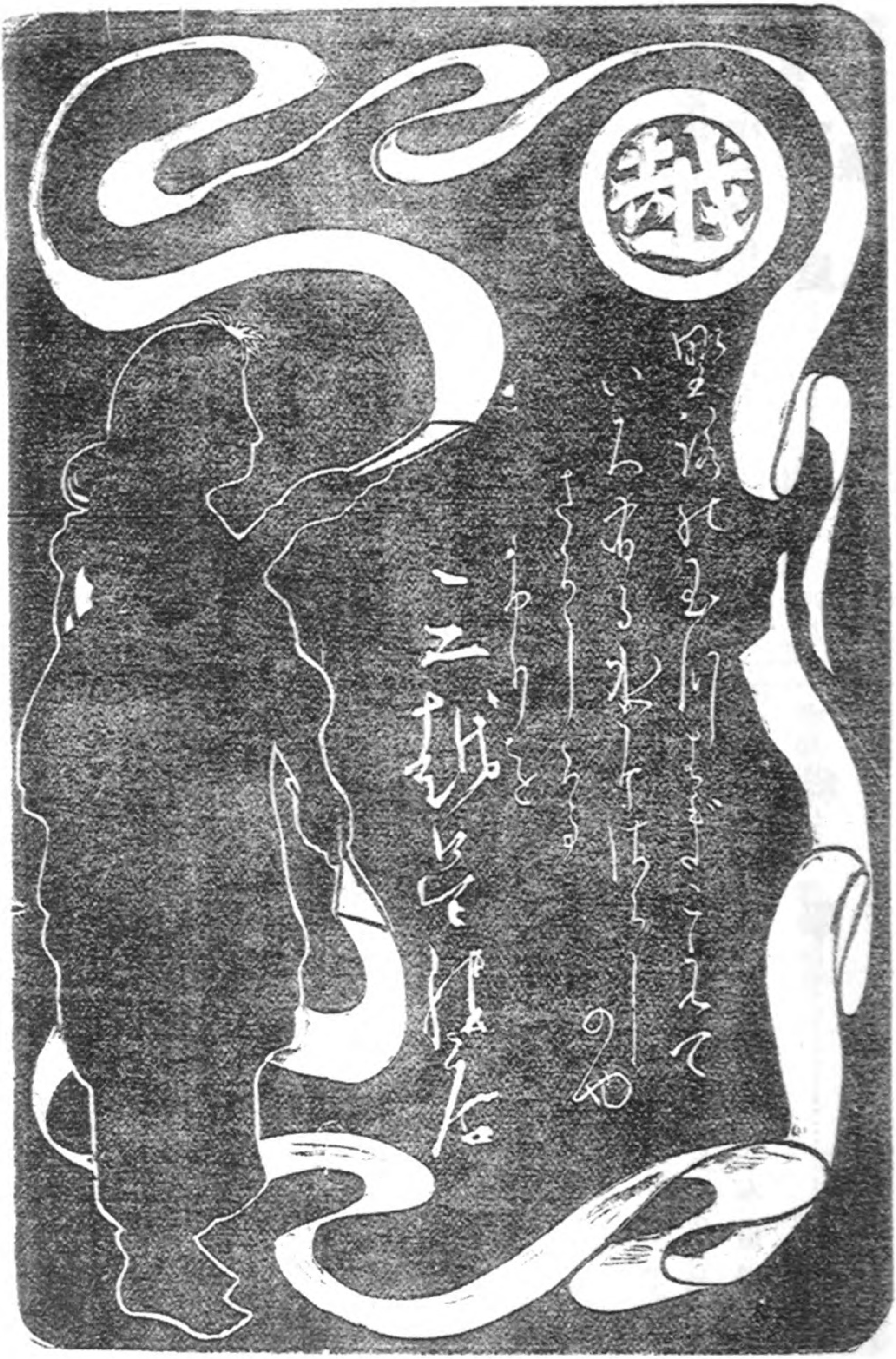
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十八年五月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第五巻第七號




三越呉服店

女學世界 第五巻第七號 目次

●牛乳の代用に次亞燐を飲め不良の牛乳は下痢を催す憂ひあり

◎次亞燐は滋養强壯新藥なり常に服藥せば肉を肥し血を增し食物の消化を補ひ力士の如く肥滿せしむる効を帶び肺病、肋膜、貧血、又は病後衰弱、心臟、神經症、喘息、たんせき、胃病、脚氣、産後の肥立等に効あり牛乳の代用として服藥せば人體の肥料となり且つ次亞燐は食物の消化不良には偉効ある藥劑なり

次亞燐

次亞燐は人體の肥料なり

次亞燐は滋養の大關にて他に優る藥なし
次亞燐は常に服藥せば身體を强壯ならしむ
次亞燐は肉を肥し血を增し食物の消化を補ふ



藥價 大瓶（五週間分 壹圓廿錢 中瓶（二週半分 金七十錢 小瓶（一週間分 金四十錢

賣捌ハ各賣藥店にありなき地方ハ本舖へ

次亞燐は牛乳に優る數倍

次亞燐特効

▲肺病 ▲胃病 ▲肋膜
▲心臟 ▲腦病 ▲神經
▲貧血 ▲衰弱 ▲喘息
▲脚氣 ▲たんせき
▲産前 産後の婦人

其他病後等を補ひ能く全治する大効あり

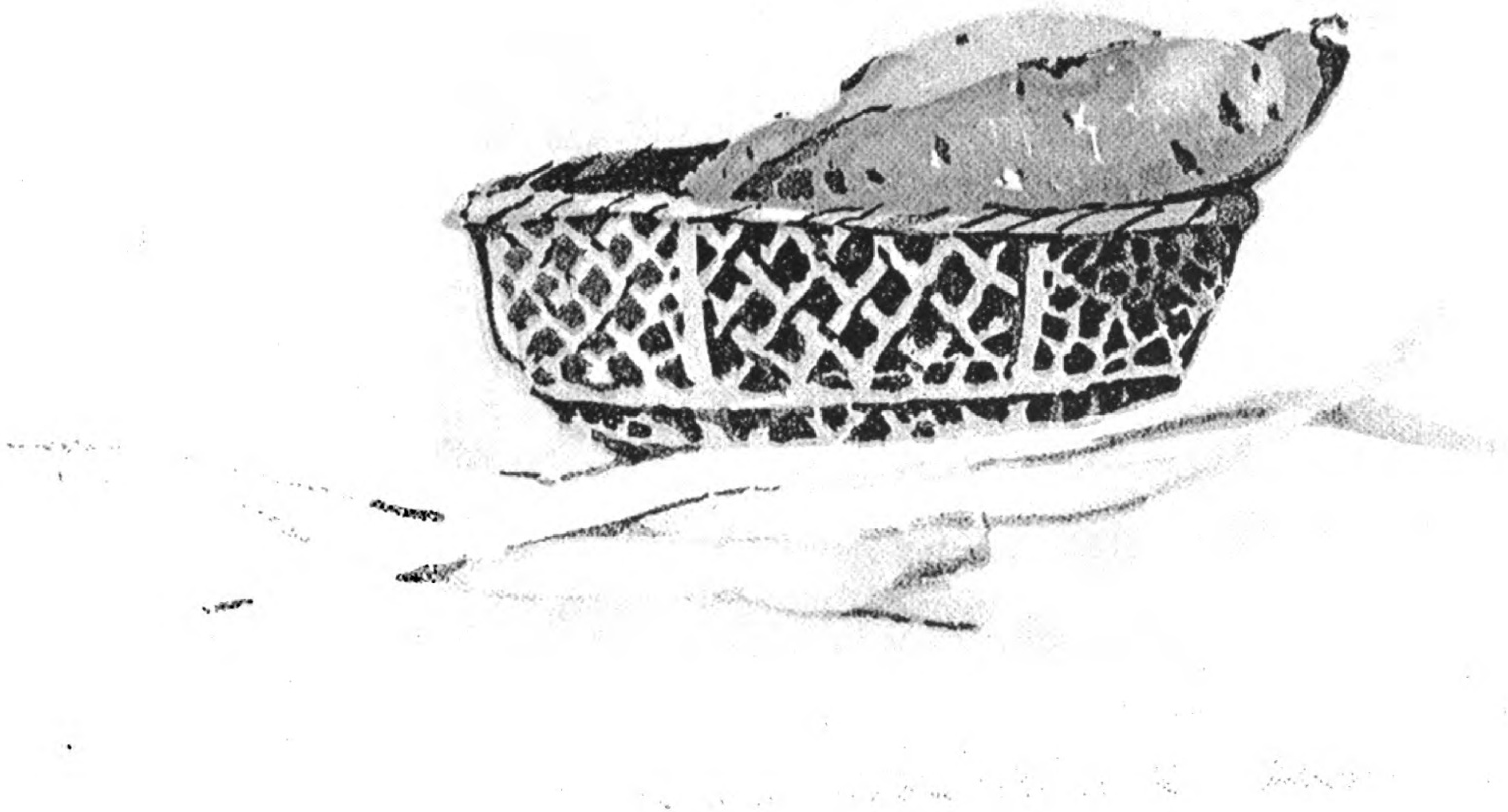
小包送料 大 貳拾錢 中 十五錢 小 拾錢



波ゝ伯部金洲筆

三宅克己筆

目笊

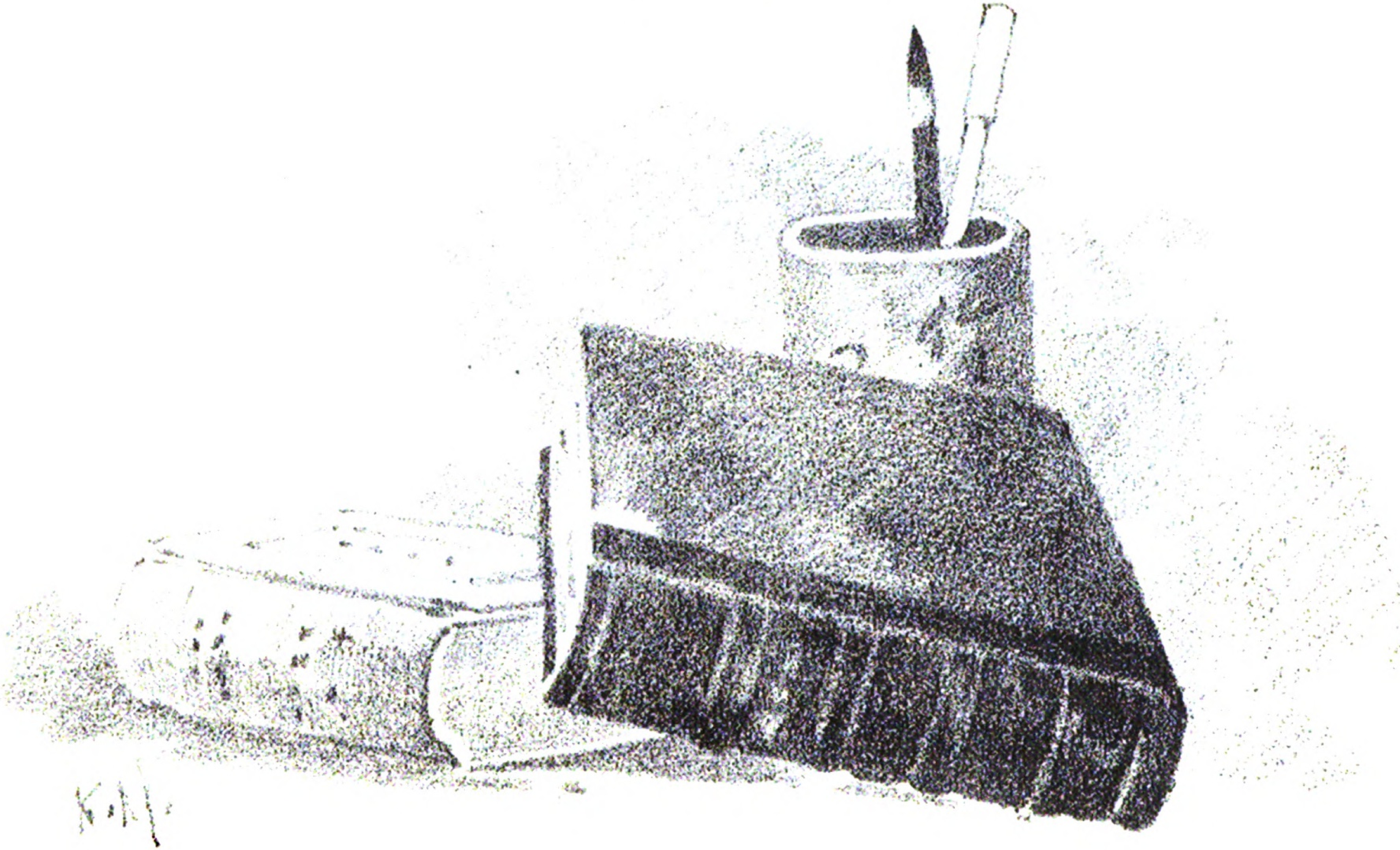


玉ちやん

三宅克己筆



書籍



三宅克己筆



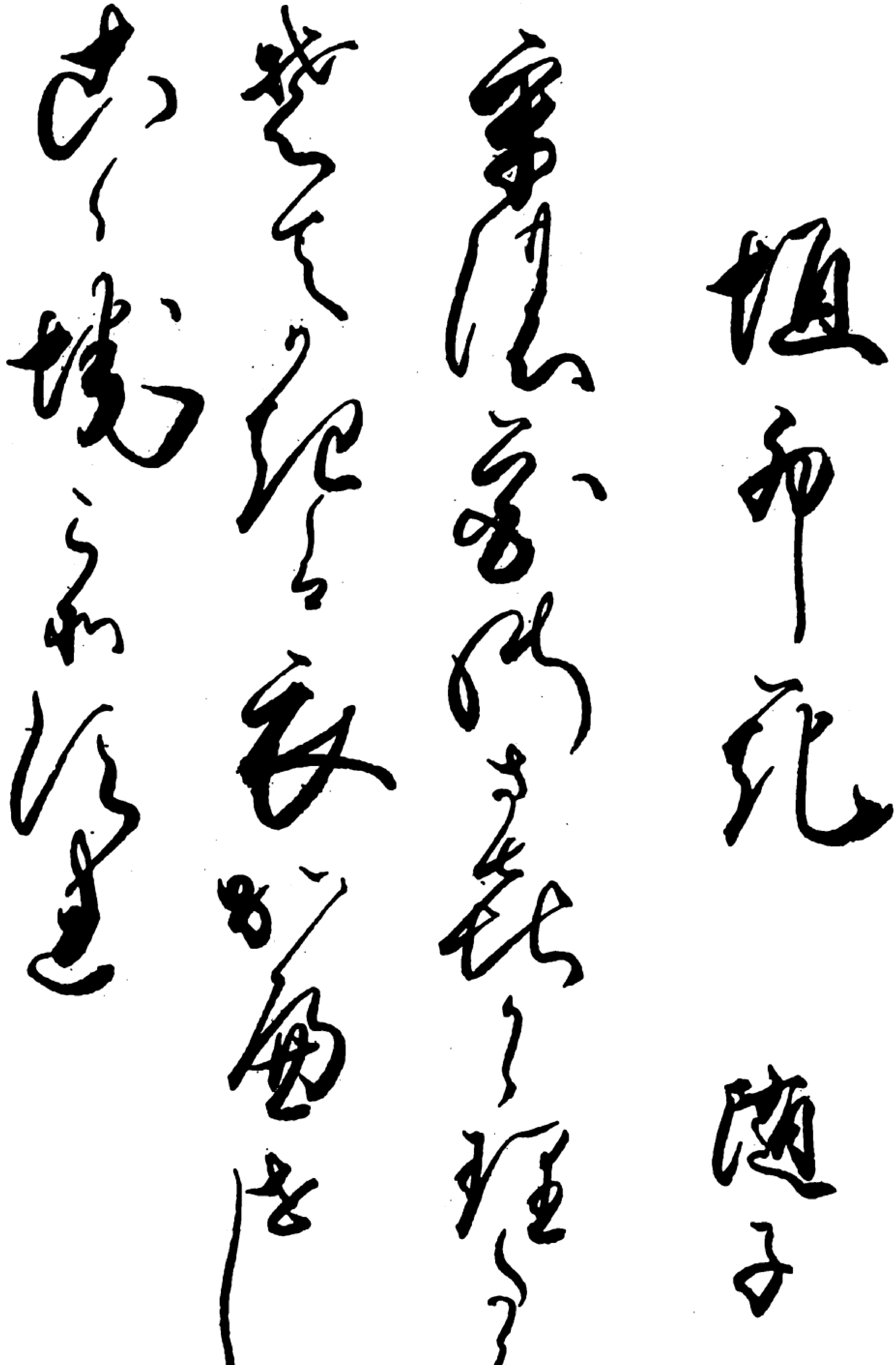
跡見花蹊女史筆

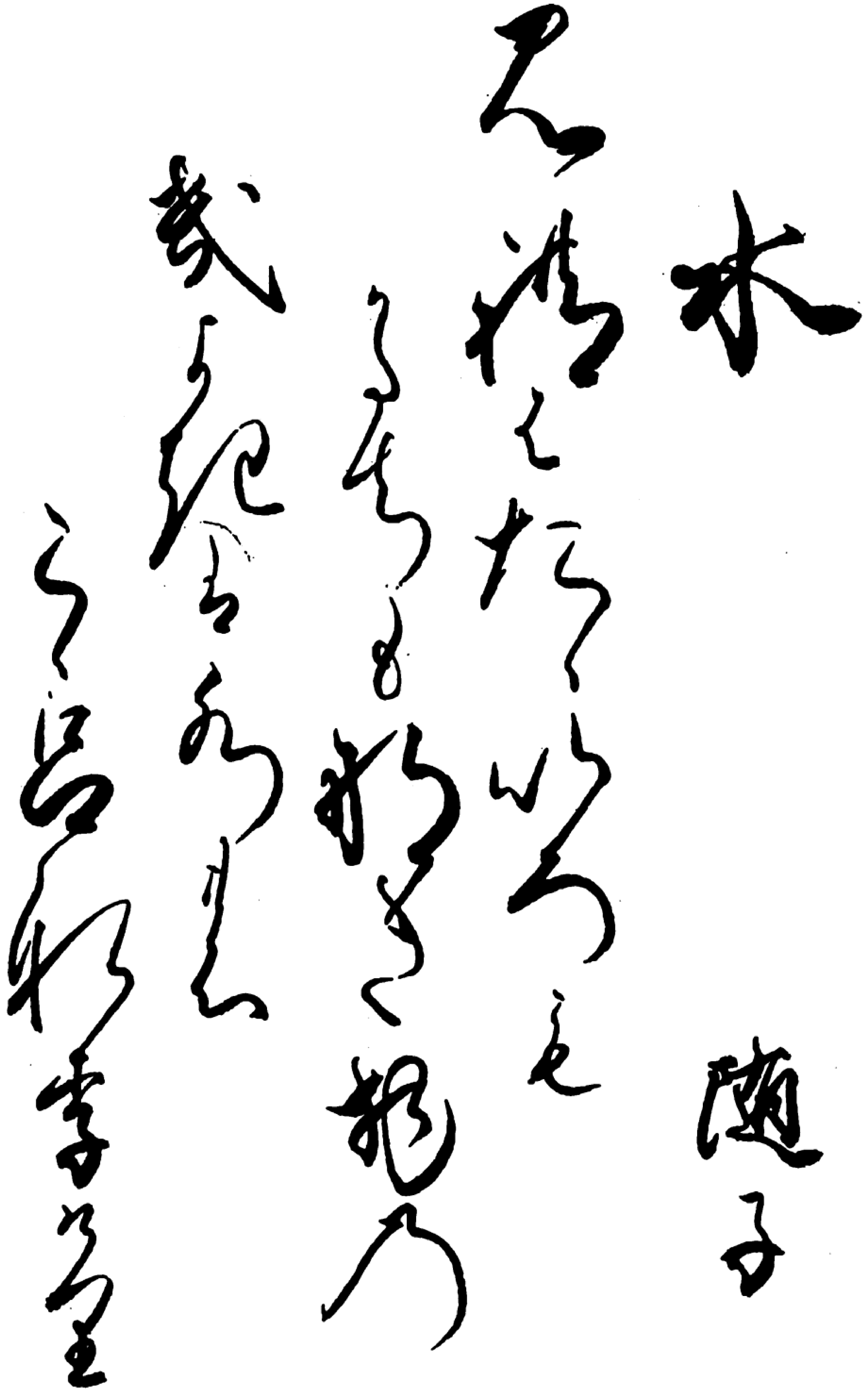
躑躅花

跡見花蹊女史筆



蜂須賀侯爵夫人筆





蜂須賀侯爵夫人筆

農學博士 稻垣乙丙先生著

農藝物理 氣象學

全一冊
洋裝上製總クロース
金文字入紙數六百頁
正價金壹圓五拾錢
小包料拾五錢

第壹章 緒論
●氣象學天文學氣候學及天氣學●空氣及び其實體●空氣の成分●空氣の物理學上の性質●氣象學の關係●氣象の觀測●農藝氣象學

第二章 輻射
●輻射の解說●太陽の輻射に就ての問題●太陽の輻射の觀測●各波長上に輻射強度の分布●太陽常數●空氣中に於る輻射熱力の減耗●宇宙及び空氣の輻射●輻射の生物に及ぼす作用

第三章 温度
●檢温器●寒暖計●氣温の觀測●一日中に於る氣温の變遷●一年中に於る氣温の變遷●平均温度●温度と植物との關係●稼穡上温熱の加減

第四章 地球面上温熱の分布
●同温線●緯線上の平均温度及び同偏温線●高さによりての氣温の低下●地温

第五章 氣壓
●氣壓計(晴雨計)●高さによりての氣壓の低下●地球面上氣壓の配置●一日中の氣壓の變遷●年內氣壓の變遷●空氣の擾亂

第六章 空氣流動の現象即ち風
●風の觀測●風の起動力●空氣の一般の循環●時によりての風向及び風速の變化●地方風●旋風系及び逆旋風系●暴風●風の効害

第七章 濕氣
●絕對的及び關係的濕氣量●濕氣量計及び濕度計●蒸發及び蒸發計●時所及び高さによりての濕氣量の變化●濕氣と農業との關係

第八章 雲霧及び霜露
●凝縮●雲の形狀●雲の觀測附日照計●日々及び年內の雲量變化並に地球面上雲の分布●霜害及び其の豫防

第九章 降水
●降水の觀測●降水の種類●地球面上降水の分布●時によりての降水量の變化●降水と豐作との關係●洪水旱魃及び降雹の豫防

第十章 氣中電氣
●氣中電氣の觀測●氣中電氣の常態●氣中電氣の態度(電雷及びエルマス火)●電氣と植物との關係

第十一章 光學上の現象
●薄光曙夕光及び天の色●暈光環幻日月●紫光ビショップ環及び光雲●虹蜺(ニジ)●蜃氣樓●極光

第十二章 天氣
●天氣圖●氣壓配置と天氣との關係●天氣の變化●天氣豫報●一地に於ての天氣豫考

第十三章 氣候
●氣候の元素及び因子●氣候の種類●氣候帶●温度帶(氣候と生物及び人文との關係)●植物帶●日本植物帶●日本氣候概說●人爲によりての氣候變化●森林氣候

第十四章 結論
●空氣の存在が地球に於る成績

◎附錄(農藝氣象學上著者の論)(一)作物の所要總温量說は既に死亡せるものなり(二)露の生成を說明する新說は全く誤謬なり(三)霜は降るものにあらず(四)霜社研究の報告(五)濕氣と米粒の剛性との關係(六)稻田に要する水量に就ての研究(七)漏洩計

(甲の一)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

家庭教育の最良讀物

獨乙博士アマッチアス先生原著
日本學習院教授大村仁太郎先生譯補

太郎は如何にして教育すべき乎

（旬日にして三版發賣）

太郎は最愛の坊ッちやまなり、未來の紳士なり、學者なり、事業家なり、政治家なり、豪商なり、豪農なり、されど教育の法にして一歩を誤るあらんか、今日の可愛らしき坊ッちやまは、將來手のつけられぬ馬鹿息子となるに至らん。本書は名を太郎の教育に借りて、文明國に於ける幸福なる家庭の新教育法を具體的に述べたるものにして、其教育法の健全、確實にして、而かも單純なる、忽にして家庭最良の讀物たる好評を博し、獨逸國は勿論、墺國に至るまでも上下の家庭を通じて本書を愛讀するに至れり。以てその價値の如何を知るべし。而して太郎を教育するに誤るなくんば、やがてお花にもお千代にも、それを施すに難からざるべし。子をもてる父母は速に一本を購ひ、以て幸福なる家庭の建立を圖れよ。教師は本書によりて、健全なる養護訓育の實を擧げよ。

用紙鮮麗頗美本
和裝全一冊
定價金六十錢
郵稅金八錢

（大好評十版發賣）

學習院教授大村仁太郎先生編述

教育寓話

我子の悪德

美本全一冊定價金六拾錢　郵稅八錢

●每月一回十日發行雜誌●

日本の家庭

定價一冊八錢郵稅壹錢
六冊前金五拾錢郵稅共

第三號要目

▲丁酉倫理會 すみれ會 男女交際會會員（口繪）
●平和の源泉　記者
●婦人の修養　三輪田眞佐子
●心のやみ　三宅花圃
●實驗家政談　星つね子
●家庭教育上の注意　松本孝太郎
▲さつき幟（繪はがき一葉）着色挿入
●富豪の家庭
●シルレル百年祭　大村仁太郎
姉崎正治
●和歌　三宅園選
●子供の育て方について　小田切浦乃
●その他料理法、讀者の領分、雜報等、材料豐富
●貧乏世帶　沼田笠峯
●鷄肉の撰擇　幡幽泉
●臺灣の衛生　關以雄
●近頃の玩具　去扇子
●何が悲しうて泣なさるか　記者
●高慢の角　をぢさん
●衣服の流行模樣　いうせむ
●隣室の小兒　横山健堂
●女子と自由解放　宮田修

▲初號大好評第三版發賣

發兌　東京市神田表神保町二　同文館
關西販賣　大阪市東區備後町四　寶文館

（甲の二）

◎轉居御披露

蝸牛隣りの枝に移りけり

牛込區北山伏町廿九
坪谷善四郎（電話番町一五五九）

（甲の四）

子宮病 自宅療法

妾嫁ぎてより七年此子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すく〳〵と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町　笹岡りん

新發明

おこゑの出るくすり

びおん錠

將校軍人	定價	
敎師	十錢	
僧侶	廿錢	
演舌家	五十錢	
音曲家		
謠曲家	壹圓	

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候

定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地
稀飲丸本舗
美音錠發賣所　萬珠堂藥店　**吉田安五郎**

醫學博士井上通泰先生監輯

家庭衛生叢書

●第五編（近刊）

口繪　三島博士大澤博士

第一、創傷の話　三輪博士

第二、神經の攝生に就て　吳博士

第三、「ヂフテリヤ」の話　宮本博士

第四、皮膚の衛生に就て　田中博士

雜錄

全部十二冊洋裝大判美本
正價一冊　貳拾錢　全部　貳圓拾錢
郵税一冊　六錢宛

發兌元　東京本町　**博文館**

肺病

千葉縣安房郡北條町

私義多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入して御照會あれ

川名助次郎

理學士 吉田弟彦君著 （近刊）

改訂 日本商業地圖

▲附錄＝關係重要諸統計表四十頁

目次

商業の地圖に待つゝある猶航海の海圖に於ける如く作戰の戰圖に於けるが如きものあり是を歐米諸國皆商業地圖の行はれざるなし然るに我國未だ此種の好著良圖のなきは聖代の缺典と云ふべきなり本圖は素と農商務省地質調査所に在つて久しく製圖に從事せし某氏の精圖を基礎として吉田理學士新たに之に加算せらる、運輸の交通此圖に依りて明詳商業の形勢炳焉として掌中を見るが如し況や最近の調査に依つて諸般重要の名數を加へ覽者をして多大の便利を與ふるのみならず附錄の諸統計は錦上花を添ふるの概あり戰勝國の實業家須らく一冊を机上に備ふべき要圖なり。

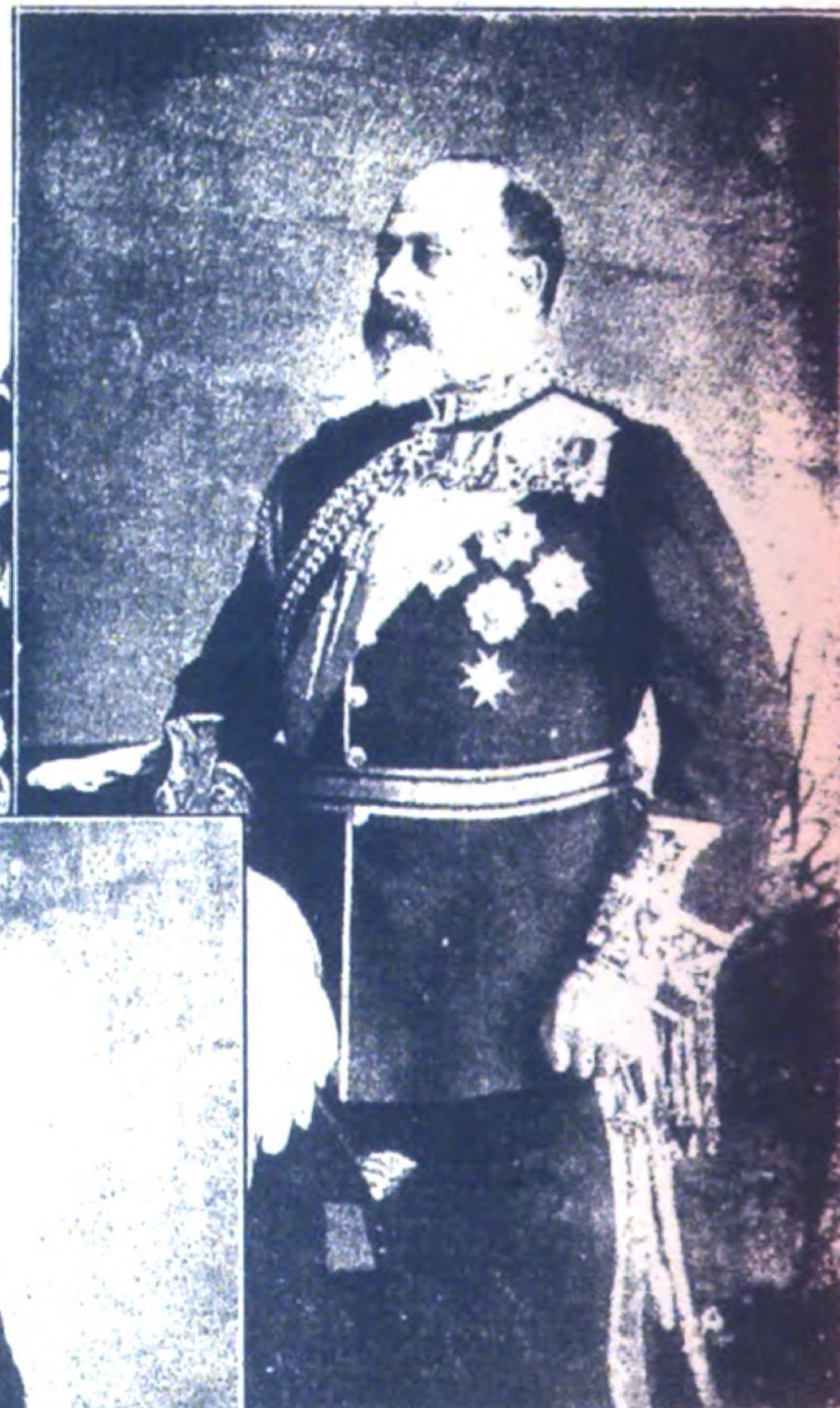
縦一尺二寸横九寸五分

厚表紙金文字入美本

發兌元 東京 博文館

（甲の六）

英國皇帝と其皇后

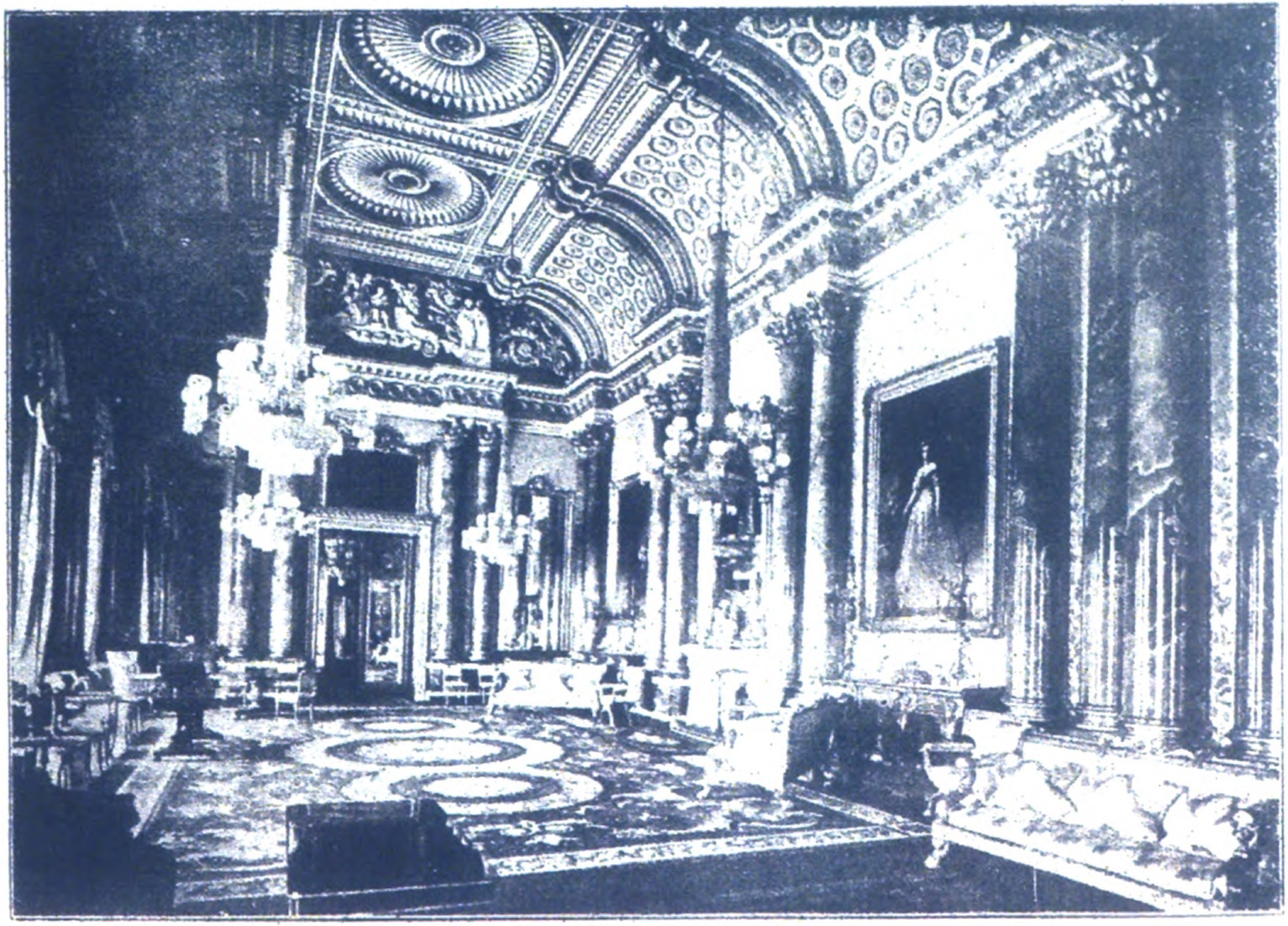


皇帝エドワード七世陛下



皇后アレキサンドラ陛下

ウヰンゾル宮の内殿





英國皇太子ウヱールス公殿下



同　皇妃殿下

大島師團長の家庭



陸軍中將男爵大島久直君の一族

文學博士 前田慧雲先生述

親鸞聖人

（近日發行）

全一册

菊判大和綴雅装
正價參拾錢
郵税六錢

▲卷頭――聖人眞筆六字御名號

本書は前田博士が此程宗祖聖人の傳記に就て所感を述べられたる談話を筆記せしものにて佛教信者特に眞宗信徒が宗祖聖人に就て其宗教的修養をせらるゝ資料には唯一無二の好册といふべし加ふるに文辭平明簡潔にして婦女幼童にも能く了解を與へ通讀の下知らず〳〵佛理の深邃を領知せしむるなり他力本願の流を汲む人は素より佛教專修の篤士は必す此要書を一讀して聖人の偉蹟を研究せられよ。

（乙の一）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

川崎紫山君著

西南戰史

全壹冊

洋裝上製正價金八拾錢　小包送六百匁

明治十年の亂は關ヶ原役以來の大戰にして、維新中興の成就と、國民意向の趨勢とに至大の關係ありて、實に明治史中の一眼目也。然るに世間其原因、結果の趨勢を審かにせし、完全なる西南戰史なるものなし、川崎紫山氏拮据經營、精確なる幾多の材料に據り、且當時の士の目擊耳聞を參照して本書を著はす。西南戰史始めて完書ありと云ふ可し。曩に一部十二卷として出版したるを、今藏架の便を計り增訂して壹卷とせり、讀者一たび眼を此書に曝らさば當時天下の大勢、對外の趨勢及び幾多世間未知の奇事異聞等躍如として紙上に顯はれ拍案快哉を大呼せん

發兌元　博文館

日露戰爭實記

毎月三日　十三日　廿三日三回發行

▲菊判紙數百卅八頁▲寫眞銅版アートペーパー四頁
▲普通寫眞銅版八頁挿入

波羅的艦隊は來れり。戰局は再び多事ならんとす今後本誌の盡す可き、責任益々重大となれり。乃ち各欄に大改良を施し、以て愈々讀者の盛望に副ふ所あらんとす

▲戰局地圖＝斯道專門家の描寫に係る海陸兩方面に於ける戰局地圖を添付し讀者をして戰場の位置に通曉せしむ

▲口繪寫眞版――寫眞技師を各方面に派遣し戰場の實況を撮影せしめ且つ戰局に關する寫眞を滿載して坐ながら戰場に在るの思あらしむ

▲戰時評論――毎編在戰地なる有賀博士の執筆に依り適切にして必讀す可き詳論を掲載す

▲戰爭實記＝有趣味なる文字もて海陸兩方面に於ける戰鬪經過を詳叙し讀者をして明瞭に我軍の事蹟を知悉せしむ

▲戰地通信＝各方面に特派せる我通信員は皆軍事知識に富める專門家なり、其通信の殊に特色を帶べる所以偶然に非らざるなり

▲戰士實話＝戰々を踏み來れる勇將猛卒の實歷談を掲げ、戰場に於ける未聞の事實を發揮す

▲世界の反響＝戰局に對する世界の輿論を收拾し讀者をして宇内の活勢に通曉せしむ

▲日本魂――我軍に於ける忠慣義烈の跡を傳へ我國民をして益々士氣を鼓舞せしむ

▲戰時文藝＝或は悲壯慷慨或は忠勇義烈荀も我士氣を作興するに足る詩歌俳句は悉くこれを本欄に收む

▲戰時叢話＝軍事上に關する總ての說明材料を網羅し殊に戰術問答欄を設けて軍事に關する讀者の質疑に供せしむ

▲陣中片信――戰地よりの通信は斷簡零墨と雖も捨て難きものあり乃ち本欄に於て之を網羅す

▲軍國時事――軍國に於ける重要の時事を收錄し且つ戰時日抄欄を設けて後事の參考に資せしむ

◉壹冊正價金拾錢……郵稅壹錢五厘

前金 ●一ヶ月(三冊)金貳拾八錢五厘 ●三ヶ月(九冊)金八拾參錢 ●六ヶ月(十八冊)金壹圓六拾錢 ●一ヶ年(三十六冊)金參圓拾五錢 ▲外ニ要郵稅

發兌元　東京本町　博文館

日露戰爭

寫眞畫報

毎月一回八日發行　外に臨時増刊發行

第貳拾貳卷

◉毎月一回發行▲大判(縱八寸五分橫五寸八寸)石版刷彩色表紙▲石版極彩色刷二枚▲アートペーパー四頁▲石版及寫眞銅版三十二枚▲記事六十四頁(精巧木版數多挿入)

◎開戰と共に生れし寫眞畫報は皇軍連戰連勝の餘榮を受けて卷を重ぬる事既に二十二卷、江湖大喝采の間に毎卷數千萬部を印刷するに至れり五月八日發行本誌目次大要左の如し

◎彩色石版　旭光四照（は佛國に六年の研究を積みて新に歸朝せられし）中村不折畫伯筆

光澤寫眞版　戰勝將軍、近衛師團司令部夜間執務等八頁（光彩陸離）

軍國畫譜　波艦隊の東航（敵軍鬼將あり博愛捕虜に及ぶ）等（東城鉦太郎、久保田金仙、尾竹國觀、福原霞外）諸畫伯の名畫八頁

戰局寫眞版　新に滿洲より到着せし奉天鐵嶺附近戰地寫眞旅順其後の光景、勇將猛卒の英姿等二十四頁一として珍ならざるは無し。

◎記事、與京昌圖以北諸方面の戰況よりバルチック艦隊の動靜、佛國中立違反の顚末を敍し傍ら內外重要の時事を掇摭し。其他從軍講談、雜錄、小說、漫筆等、趣味不盡。

◉壹册正價金貳拾錢……………………郵税貳錢
前金（三册金五拾七錢●六册金壹圓拾錢●十二册（一ヶ年）貳圓拾五錢）▲外要郵税

發兌元　東京本町　博文館

伊東大將題字　平田勝馬君著

黄海大海戰

洋布上製正價九拾錢　郵税廿錢

全一册

征淸の一役、陸軍に於ける平壤包圍攻擊と對峙して最も壯快の觀を極めたるを、黄海大海戰とす。本書篇中記する處一として當時戰に臨みし將校の直話に出でざる無く其雷轟電激の狀、雲湧瀾翻の態、眞に讀者をして魂飛び神躍らしむ。顧みれば前後殆ど一年有半に涉る征淸役中に於て其將を斬り壘を屠るの快戰擧げて數ふべからずと雖も、日淸勝敗の大勢を一決して終に我をして優勝の位置に立たしめたる所以のものは一に黄海の大海戰に我の能く全勝を占めたるに歸す是故に後世征淸の事蹟を知らむと欲せば必ず本書を讀で其海軍の消息を知るべし。

發兌元　博文館

（乙の三）

（乙の四）

大隈重信伯講述　武井宗十郎君筆記

大隈伯時局談

全一册洋裝菊判正價三拾錢　郵稅六錢

大政黨の首領大隈伯刻下の時局に對して豈一大識見なくして可ならんや、夫れ伯爵一たび演説すれば倫敦市場忽ち公債の騰落を見るにあらずや、其一言一行の社會に大勢力あること以て見るべきなり、今や伯爵時局に對して滿腔の熱血を吐き帝國戰後の大經營と對露對淸對韓の政策に於て縱論橫説餘す所なく以て天下の輿論を斷ず言々剴切句々烈賓、讀者をして思はず拍案快躍せしむ見よ刻下國民の必讀すべきもの本書にあらずして抑も何ぞ

發兌元　博文館

每月一回一日發行

太陽

定期增刊年四回

第拾壹號

第七號　五月一日發行

◎年刊十二册▲定期增刊四回（定價同一）大判（四六判二倍大）紙數二百五十六頁

◎寫眞版アートペーパー四頁普通十六頁▲本文中の寫眞版數十個挿入

口繪

望遠鏡にて撮影せし雪の富士○上海祝捷會○外國在邦人の旅順開城祝捷會○天津在留邦人の奉天戰捷祝賀會○大和風景○十和田湖風景○京都紀念動物園○岡崎義香氏筆源氏五十四帖○米國ロツキー風景○物故諸名士○懸賞寫眞披露等

○滿韓經營所見　伯爵　大隈重信
○今後の財政と外交　松田正久
○戰捷の原因　法學博士　添田壽一
○戰捷と國民的自覺と日本文明の將來　文學博士　姉崎正治
○樺太島領有の實を完からしむる方法に就て　林學博士ドクトル　本多靜六
○假名遣の改定に就いて　文學士　吉岡鄕甫
○東久世伯外二氏の「國定修身書に關する意見」を讀む　在獨乙文學士　吉田熊次
○日本國民の深省を促す　文學博士　建部遯吾
○得庵居士とポベトノスチエツフ　島谷部春汀
○物故の三名士　同人
○砧の里　江見水蔭
○クラリツサ　中島孤島譯

○霓の曲　勝間舟人
○余の知れるツルゲチツフ　荒木嘯羽譯
○文藝時評數項　大町桂月
　長谷川天溪
○軍艦の話　工學博士　寺野精一
○高山植物の話　寺崎留吉
○蟻の社會生活　箕作元八
○革命時代の佛蘭西と現今の露西亞　文學博士　男爵　石黑況翁
○茶會の記　坪谷水哉
○大和巡り
○滿洲の處分は通告にて足る　法學博士　戸水寬人君談
○旅順經營の研究問題　海軍技監　工學博士　石黑五十二君談
時事評論　評論の評論

◎壹册正價金參拾錢……郵稅參錢

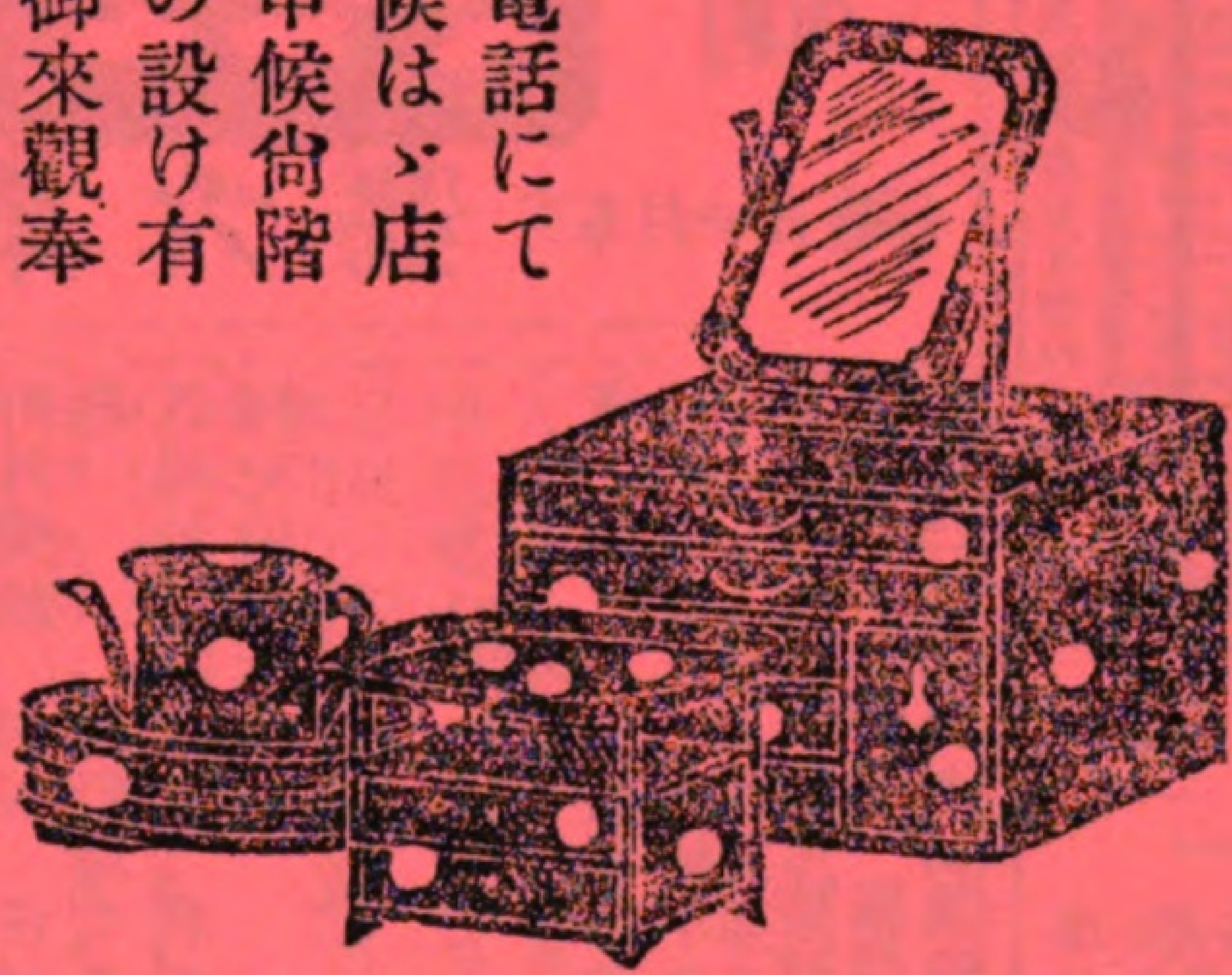
前金（要郵稅）◎四册金壹圓拾五錢◎八册金貳圓貳拾錢◎十六册金四圓貳拾錢▲外に要郵稅

發兌元　東京本町　博文館

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候

御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



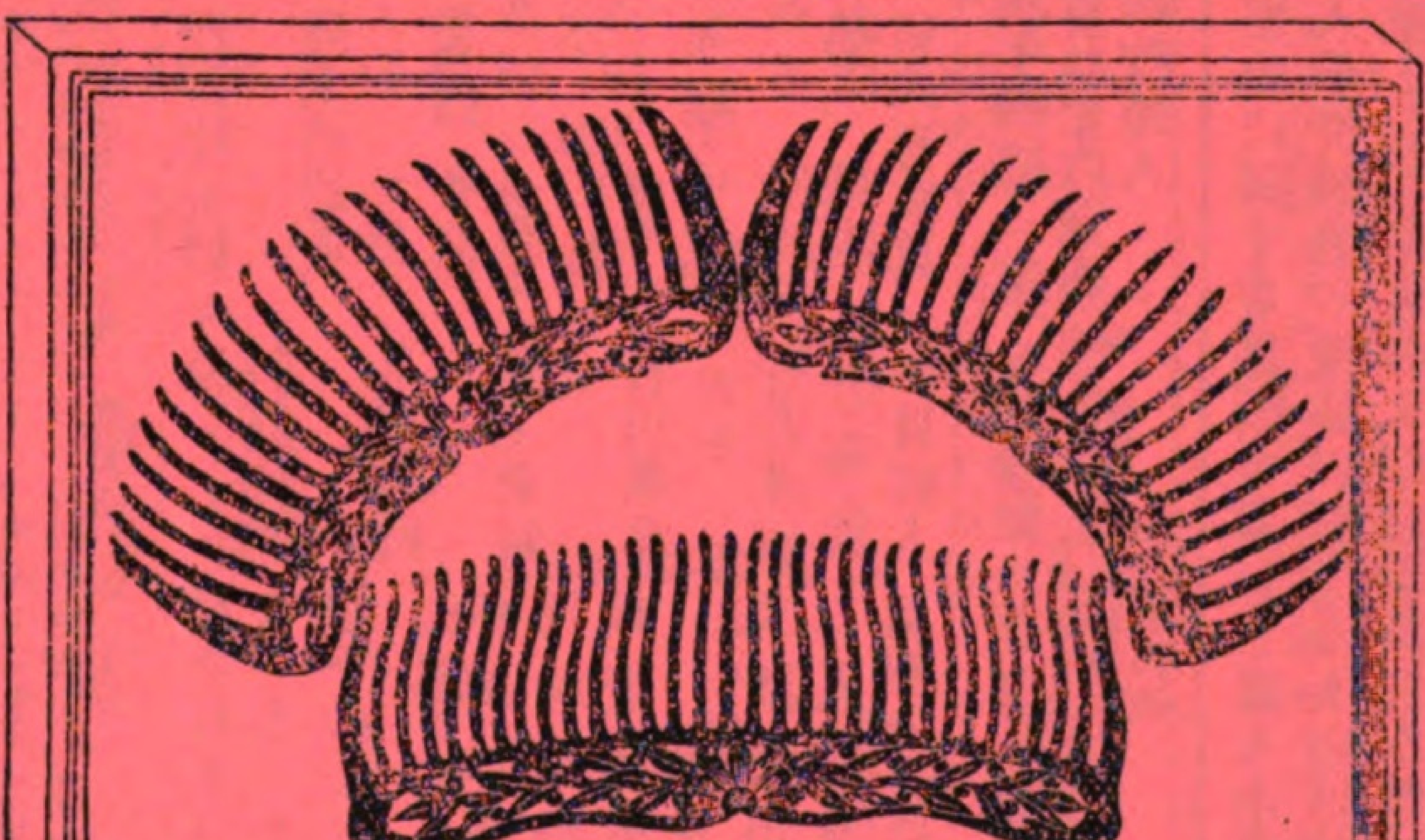
柏

東京市日本橋區通壹丁目

黒江屋漆器店

電話本局八百拾四番

束髪用三枚櫛



定價

黒鼈甲製六圓以上拾五圓

ゴム製四十錢以上壹圓半

東京銀座尾張町

白牡丹本店 松田

電話新橋五五一番

(乙の八)

浦鹽斯德市街



浦鹽婦人風俗





最新和英辭典發賣廣告

見本御入用の諸君は郵券二錢御添附次第進呈す

袖珍新式 日英辭典

京都帝國大學法科大學教授農學博士新渡戸稻造先生
東京帝國大學文科大學教授
東京外國語學校長文學博士高楠順次郎先生
共編（姓名イロハ順）

全一冊

○定價金壹圓
○壹萬部限 特價金七拾八錢 郵稅八錢

●縱五寸●橫二寸五分●紙數千二百餘頁●總クロース綴

●製本既成●

新式 日英辭典

京都帝國大學法科大學教授農學博士新渡戸稻造先生
東京帝國大學文科大學教授
東京外國語學校長文學博士高楠順次郎先生
共編（姓名イロハ順）

全一冊（前書ノ省略）

○定價金五拾五錢
○壹萬部限 特價金四拾貳錢 郵稅四錢

●袖珍判●紙數千五百餘頁●總クロース綴

●五月中旬發賣●

發行所 東京神田（電話本局特七三三二一六番）三省堂書店

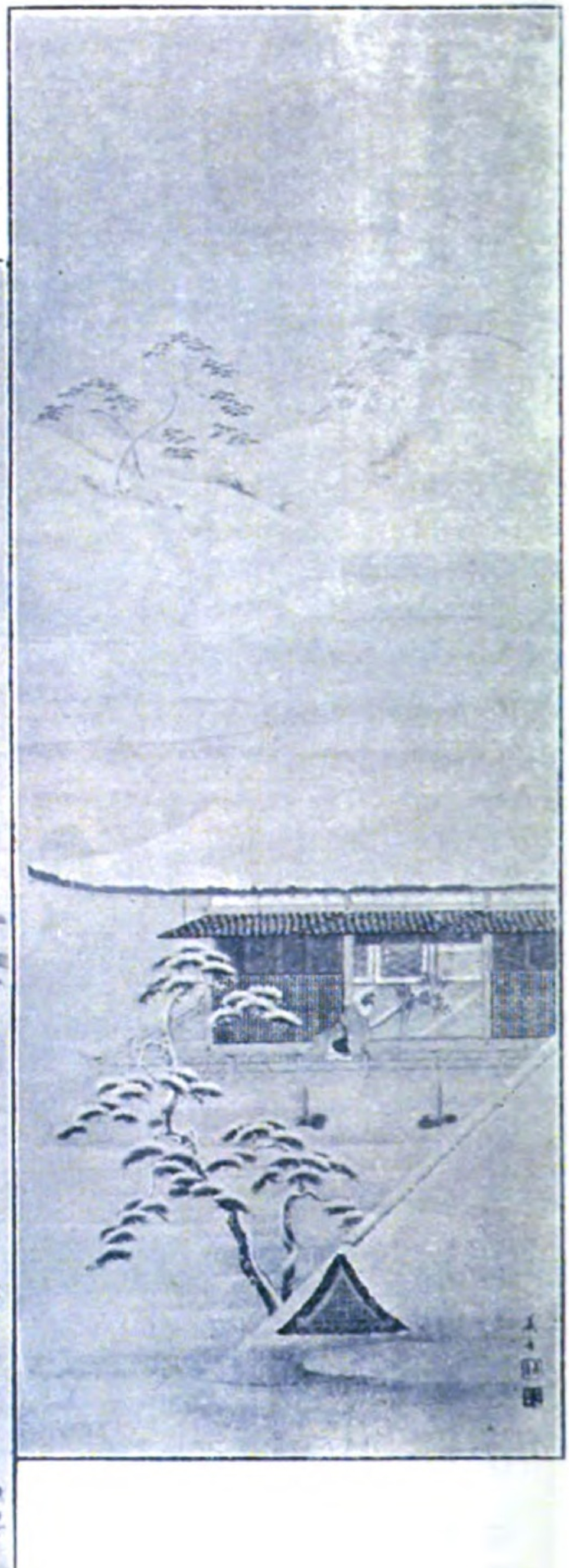
（丙の一）



造花材料
日本女子大學校御用
共立女子職業學校御用
日本女子美術學校御用
最新流行
造花器械
造花用繪具各種
摘み細工原料
花簪原料
根掛原料
刺繡用金糸平金類
和洋リボン各種
東京日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛商店
（特電話浪花一六四三）
定價表御入用の方は雜誌名記入
往復はがきにて申込の事
八官町廣告堂案

（丙の二）

（丙の三）



源氏五十四帖の内行幸の巻（岡崎義香氏筆）



同　明石の巻

女學生活人畫

（東京裁縫女學校に於る）



曾我夜討
十郎　石橋もと子
五郎　加山きん
虎御前　齋藤ぬい子



牛若丸
牛若丸　岡田てる
淨瑠璃姫　濵川つる
侍女　山本かれ



中將姫
中將姫　黒崎とう子
照日の前　岡田とみ子
佳の江　都筑ます子

水哉 坪谷善四郎君著

日本漫遊案内

全二冊 上巻東部 下巻西部

洋裝總クロース中形美本紙數千二百頁

正價一冊壹圓 郵税一冊拾錢宛

新刊發賣 **下巻** 日本西半部

曩に本書の上巻を以て、日本の東半部なる東海、東山、北陸、北海の四道を案内せし本書は、今此に下巻を發刊するに至る、而して下巻收むる所は**近畿、中國、四國、九州、琉球、臺灣**に及び、皆著者が親しく各地を歴巡して、視察する所に據る。大都名邑勝地舊蹟、神社佛閣、温泉、浴場等の案内は言ふも更なり、海山の形勝、水陸の交通、産業の情況、風俗の美惡、旅館、料理店、舟車の費額、土産物の調進に至るまで盡く之を詳記し、傍ら歴史を説き、人物を説き、古今の詩歌を挿み、加之著者特得の各地風景寫眞數百圖と各都市の**銅版密刻圖二十餘種**を添へ、別に一枚折日本西半部**着色詳密圖**を附す、凡そ地方に旅行するものは必ず一本を缺くべからざるは勿論、一室内に在つて之れを讀むも、座ながらにして名所を知り山光水色自然の美景を賞するを得べきなり。

兩卷共都市銅版圖二十餘圖寫眞版入十餘葉各半部の詳密地圖等を附す

上巻 日本東半部

東山道、東海道 北陸道、北海道

東半部着色詳密大地圖挿入



(丁の二)

發兌元 東京本町 博文館

新刊廣告

農學博士 佐藤昌介先生校閲
農學士 佐藤昌先生新著

農業經濟原論

五月中旬發賣

著者已に農業經濟專攷を以て名を成せり、而して斯學の大家佐藤博士の嚴密周到なる校閲を經たり、故に議論正確、應用適切、本邦農界の現狀に鑑み、歐米名家の學説を參照し、土地、學力、資本の要素より、農業の組織及金融に至るまで、遍く詳細に論述して、農業經營者に方針を示し、些の間然する處なき好著たり、今や時局漸く發展し、旭旗宇內に光芒を放つの好期に際して、稿成り梓に上せり、苟も農を以て世に立ち、農を以て心とするの士は、幸に一讀に吝なる勿れ。

全壹冊洋裝大判
特製頗美本
正價壹圓貳拾錢
郵便税拾錢

農學士 梁田斌先生
蠶業專攷 園田國三郎先生 合著

實用養蠶新書

新刊發賣

全壹冊大判
洋裝美本
正價金五拾五錢
郵便税八錢

邦國を富まし一家を起すべき營利事業は、養蠶を措て他に非ざるべし、事變は蠶業に影響せりといふも、戰局發展し、平和克復の時に至らば、戰後の經營、一に此業の奬勵にあらん哉、今此書を公にす、實に國家に盡す義務の一端なるを信ず、著者は斯界有名の士、研究年ありて稿を脫せらる、故に所說確實且實驗的にして、特に蠶室構造蠶種論等の如きは、同種の著書中、確に一頭地を抜けり、茲に印刷工成るに臨み、一言世に告ぐる事爾り。

(丁の三)

發兌書肆 東京市日本橋區本町 博文館
發兌書肆 東京神田區表神保町 東京堂

醫學博士井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

本叢書講話承諾諸先生

醫學博士 入澤達吉先生
醫學士 石原久先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 片山國嘉先生
醫學士 賀古鶴所先生
醫學博士 賀古桃次先生
醫學博士 田代義德先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 井上通泰先生
醫學博士 井上善次郎先生
醫學博士 吳秀三先生
ドクトル 富士川游先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 淺川範彦先生
醫學博士 青山胤通先生
醫學博士 朝倉文三先生
醫學博士 佐々木政吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 北島太一先生
醫學博士 桐淵鏡次先生
醫學博士 北里柴三郎先生
醫學博士 三浦守治先生
醫學博士 三輪信太郎先生
醫學士 宮本叔先生
醫學博士 弘田長先生
醫學博士 森林太郎先生

第壹編 既刊

第貳編 既刊

第參編 既刊

第四編 既刊

第五編

近日發行

每月一回發行
全部六冊洋裝菊版
正價全一冊貳拾錢
全部壹圓拾錢
郵稅一冊各六錢宛

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(丁の五)

◉新刊廣告◉

立教學院長ドクトル、オヴ、フイロソフイー元田作之進先生著　新刊

和英 英和 兵語辭典

全壹册袖珍總皮
金文字入頗美本
正價金壹圓
郵便税六錢

我國世界の最强を以て誇りし露國と戰を開きてより、海陸の軍戰ひては勝ち攻めては取らざるなく、武威大に揚りてより今や將に軍事に於て宇内の師表と仰がれんとし、又我軍事の整頓完備を稱せざるはなし。然るに兵語辭典に於ては、只獨りチヤーチル氏の著せるものあるのみ、而も語多く陸軍語に偏し、製本の體裁携帶に不便なり、豈に瑕瑾と云はずして可ならんや。著者は多年の勞を以て海陸兩軍の用語を網羅し殆んど遺憾なからんとす。體裁裝釘優美亦た携帶に便なり。願くは榮譽ある海陸の將校、並に世の軍事に熱心なる人士の需用に應ぜんことを。

岡田市治先生著　新刊　既成發賣

二十世紀 英語異同辨

全壹册袖珍
洋裝美製本
正價金四拾五錢
郵便税八錢

凡そ語學を修むるものは、類語の意義を辨別し、適語を適所に用ひんことを期せざるべからず。英語異同辨の書、英米に多く之れありと雖も、皆其自國人の爲にせしものなれば、邦人の用に適せざるの點あること、固より免かれざる所なり。本書の著者は自ら多年敎室に於て得たる經驗を基として、編纂を遂げたれば、本邦人の望に應ずること此の書の如きは出版界多く其類を見ること難かるべし。世の語學に篤き人士一本を座右に備へずして可ならんや。

◉發兌書肆　東京市日本橋區本町三丁目　博文館◉

◉發兌書肆　東京市神田區表神保町　東京堂◉

(丁の六)

新刊廣告

シャルとウイルの用法

宇野光三郎先生著
全壹册袖珍美本

英語の語法中シャルとウイルの用法ほど解し難きものは少し、之を文典に索むるに明解を得ず、之を敎師に問ふも亦適切なる解說を得ること難し、實に學生をして五里霧中に迷はしむる者なり。本書は最近の學說に基きて、シャルとウイルの用法を最も詳細平易に說明し、深遠に過ぎず卑近に失せず、引例豐富にして、誠に英語海を照す一燈臺たるに値す英學者は必ず一本を備ふべきなり。

正價金廿五錢郵稅四錢
英學新報社藏版

最新蔬菜栽培書

農學博士 南 鷹次郎先生閲
農學士 今村猛雄先生著

全壹册大判
特製傾美本 正價金貳圓 郵稅十錢

本書は編を分ちて通論及び各論とし。通論には蔬菜全般に關する栽培の要素を說き、各論には蔬菜七十餘種を記載し、詳細に解說して栽培の方法を示し、疾病害蟲の驅除法、良品種をも指示せるを以て、園藝家は實地の友とすべく、農學を修むる士は座右の參考に供すべく、農業學校にありては應に敎科書に適すべし、而して其說明の親切丁寧、挿画の緻密明晰なるは、此種の著書中他に比類少き一大良書なれば、速に購讀の榮を給へ。

實用肥料學

農學博士 佐藤昌介先生序
農學士 増田貞吉先生著

全壹册大判
洋裝美本 正價金五拾五錢 郵稅八錢

本書は普通に用ゐらるゝ動植物性の肥料は云ふまでもなく、鑛物性肥料につきても、丁寧に說明し、尙氣候と、土質との關係より、各作物につきての適肥や、用量をも實驗上より示し、また肥料に關する諸法規等をも附記したるものなれば、各種の方面に向つて、眞に參考とすべき良書なり、まして農業學校にありては、敎科書として適當なるを信ず、今や軍國多事の時に當り、農事を以て國に報いんと欲するの士は應に一本を購びて國家の發展に後れざらんことを期せられよ。

(丁の七)

發兌書肆 東京市日本橋區本町 博文館
發兌書肆 東京市神田表神保町 東京堂



女學世界

第五卷第七號

（五月五日發行）

家庭の節制

家庭はよろしく安逸ならざるべからず、又よろしく氣樂ならざるべからず、蓋し我々は家にありて嚴格と窮屈なるを欲せざればなり、されど安逸氣樂は決して我儘勝手の意味にはあらず、人間眞の安樂は道德の制限によりて始めて確め得らるべきものなり、然らざれば一人の氣儘は他の一人と衝突して風波葛藤を生ずるに至り、其結果家庭全體の不和不快を醸すに至るを常とす、是れ主婦たるものゝ能く心すべき事なるべし。



時論

婦人と平和思想

大村仁太郎

何の方面から觀察しても、婦人の特色は愛である、美である。それ故婦人は愛の化身、美の化身であると云うても決して過言ではあるまい。又温和で、暖かい慈悲同情の念に富で居るのも婦人である、それ故婦人の居る所には、破壞もなく、鬪爭もなく、亦激怒もないのである。之れに反して婦人の居らぬ所には、動もすれば種種の衝突が起り、恐るべき風波が捲き揚げられるのである。されぱかの和氣靄々たる家庭に於ける團欒の樂みは、まことに婦人の賜物にて、此の方面に於ける吾人の幸福は、主として婦人の力によりて基づけるものと云はねばならぬ。婦人は既に斯の如き天性を具へて居るものであるから、何所までも之れを圓滿に發展させるのは、女性の使命であらうと思はれます。家庭の方面に於て此の天性を發揮させる手段は、今更事新しく喋々する必要もないが、尚ほ他に一層よく婦人の特性を發揮せしめ、之れを表彰する事が出來る大きな舞臺があるのです、私は聊か之れに付て述べて見やうと思ふのである。

世界の國々が互に爪を磨がき、牙を研いで、各々其の權勢や威力を張らうと試みて居る間は、所詮世界の平和は希望する事が出來ないものである。假令鬪爭は、鮮

血の河を流したり、死屍の山を積んだりした結果、一時終結して、平和が回復されたとするも、それは敗北した一方が、眞に少時の間、止むを得ず屈服すると云ふに過ぎないので、やがて時機が來れば、それが復た首を擡げて、天下は再び元の不秩序や混亂の姿となるのである。彼のベルター、フオン、ズツトナル女史が、無用の劍戟を棄てよと絶叫した、有名なる所論中の大理想が實現されて、天下の諸國が愛と人道との根底の上に建てられない以上は、眞個の平和は到底望み得べからざるのである。

されば渾身暖かい同情と優しい愛とを以て充たされて居る婦人が、愛と人道とを基礎として起る所の平和の主動者となり、之れを唱道するは當然の任務であつて、之れこそ婦人の天性を發揮するに最も適當なる舞臺ではあるまいか。千五百廿九年佛蘭西と西班牙との間に結ばれたカムブレイの和約が、西班牙のカール五世帝の叔母マルガレツターと佛蘭西のフランツ一世王の母ルイーゼとの調停によりて成立つたのは、大に吾人の意を得たもので、實に自然に適合した好個の事蹟と云うて宜しい。世人が此の和約を呼んで「ターメンフリーデ」即ち婦人の手に成りたる和議と云ひ、婦人の本領が殘りなく發揮されたのを稱揚するのは、洵に至當の事であらうと思はれるのである。

獨逸に於ては千八百七十年の獨佛戰爭以來、國民の思想が専ら尚武的となり、國家の保全と平和とは、一に軍事上の發展によりてのみ期せられるものと考へ、細腰纎々風にも堪へぬ婦人すらも、劍戟を練る音を聞く時は、恰も天來の福音に接したかの如く喜んだのである。故に歐米諸國の婦人が國民の思想を寛和し、世界の人民をして永久平和の惠みに浴さしめやうと奔走して居た當時に於て、獨逸の婦人は其の運動に對して何等の注意を拂はなかつたのである。然し獨佛戰爭以後二十餘年を經過して、獨逸國民は漸く多年の迷夢より醒め來り、平和を標榜する會合が大に勃興する樣になつてからは、其の影響忽ち婦人社會に波及して、遂にモルゲンス

タインなど云ふ女丈夫が輩出して盛に女性の平和に對する天分を論じ、獨逸國の婦人をして、其の使命を自覺せしむる樣になつたのである。其の後獨逸國に於て組織されたる婦人會は、佛國のそれ等と氣脈を通じて、一致協力、躍起となりて世界的平和說の唱道に從事した。而して先き比露帝が主唱して蘭國ヘーグに萬國平和會議を開いた其の年、ハンブルヒに於て催された聯合婦人大會にては、平和思想の普及と平和の保全とが、女性の任務であるとまで宣言する事になつたのである。而して此の會合は、其後もあらゆる障碍と艱難を物ともせず、忍耐勉勵、或は檄を東西の各國に飛ばし、或は所々に集會を催ほして、其の趣旨を普及させ樣として、驀然に進んで居るのである。

我が國にても當時亦此の檄に接したけれども未だ此の會に參加するまでには至らなかつた、兎に角も其の檄文が當時吾が國の婦人を刺激して、其の注意を此の方面に向はしめたのは明かなる事實である。

現代の獨逸文壇で名聲嘖々たる詩人ウヰルテンブルフは、曾て余が彼の地に遊んだとき、今日の日東帝國は之を四季に譬ふれば、正に春光融々たる時代にあると云ふた事がある。然り、吾が帝國は實に計り知れぬ程多望多幸なる前途を持つて居るのである。而して偶々起つた日露戰爭の如きは、既に吾が國威を遺憾なく發揚し、千載不朽の威名を世界に輝かして居るのである。

此の幸福なる未來と立派なる現在とを持つて居る天地に生れた吾が國の婦人は、十分に其の本然の性質を發揮し、而して平和の主動者となりて、國家の爲め、人道の爲め、大に盡瘁せねばならない。但し平和論を唱道する時期に付ては、頗る熟慮を要するは申すまでもないが、要は吾が國の婦人が、今日より此の大なる仕事に着目して、時機を失せず、其の天分を盡すやうに心がけねばならぬ。

聞けば露西亞では、女子の中に纖弱い身をも顧みず、奮然劒を提げて、滿洲の軍に馳せ加はつたものがある

との事、事實の如何は兎に角是れ等は實に女子の本分を忘却したもので、嘗て世界に平和の木鐸を鳴らした露帝が、今や其の假面を脫いで、主戰論者となつたのと共に、背理と矛盾の好個の對象と云はねばならない、戰局の前途は遼遠である、今日平和を論ずるのは、甚だ早計であるが、兎も角も今後の婦人は如上の覺悟を持たねばならぬ事と思ひます。

米國婦人の活動力

ミス、ホワイト述

總ての進步の始めは產業的なるが如く、米國婦人が社會上の勢力の發端は先づ產業界に於ける勢力の植附にありき、其結果として今日に於ては產業界各方面に於て男子に對抗し、動もすれば男子を凌ぐ有爲の婦人を見ざるは無く、一世紀の昔に於ては何人も夢想だもせざりし狀師界、僧侶界に於て、纖婉なる婦人軍の勢は益々加はりて、倔强男子の守る金城鐵壁をも打破らんず形勢也、されば米國大學校に於ける二三の例外は兎も角、多く、男子と同じく女子にも入學の自由を與へて、若干の婦人教授さへある程なり、彼の戰爭は男子の獨占事業にして、かよわき婦人の關り知る所にあらざりしが、芋の蔓の如く伸張して已まざる米國婦人の勢力は、此所にも伸びて、過ぐる年の米西戰爭には男勝りの看護婦の一隊が、ナイチンゲール氣取で從軍し、案外に成功を見て男子の跋扈を挫き、爲に婦人の勇氣は增して將來雄飛の基礎を据ゑたり。

宗教界に於ては各宗派共に婦人が教師となり得るの自由あり、之を以て千八百九十九年の統計は全國婦人教

師一千二百三十五人を示し、而かも其數は日を逐うて驚くべき增加を爲しつゝありといふ、是此の種の事業が最も婦人に適當なるに依る者にして、今後更に一百年を經過せば其形勢は全く今日と一變し、敎界の全權は全く婦人の手に歸し、説敎壇には肩怒らせる婦人の影勇ましき時代を來すに至らん。

婦人は創作を知らず、唯だ單に男子を模倣するに過ぎずとは、英國のベサントが五十年の昔其著書に發言し、以來幾度か繰返されたる所なるが、今となりては事實の否定する所となりしこそ時勢の進歩と云ふべけれ。合衆國に於ては千八百〇九年今より百年前一婦人が一の發明をなして特許を得たるを始め其後女子にして新發明の榮冠を戴くもの續出し、特許局の名簿は其大半を女子に占められ、其の數晩近四半世紀間に於て殆んど四千有餘に達し、特許局の官吏相顧みて、男子の末路を嘆ずるに至れり。

又狀師界に於ける婦人の勢力を云へば、世人は恐らく異樣の感をなし、「女辯護士」と云ふ用語の耳新らしきに一驚を喫すべきも、合衆國に於ては此の事實少しも珍らしからず、今を距る二十一年前合衆國高等法院の法廷に辯護をなすの自由を婦人に與ふるの議案。一たび聯邦議會を通過してより、女狀師にして此の特權を得たる者十五人、而も此の條令は其實各洲法廷の門戸を婦人に向つて開放したるが故、今日に於ては聯邦各州にて婦人も立派に裁判官に任せらるゝの自由を有せり。

合衆國婦人の官界に於ける大勢力の現今の如く至れる發端は、南北戰爭の當時にして、時の將軍スピンナルが紙幣整理の爲め女子を雇用したるに根源す、婦人の細心にして注意深きは當時大に此方面に於て男子の企て及ばざる所を證したりき、今日に於ては大藏省に於ける金勘定は悉く婦人の手に任せられ、ワシントン政府に於ては婦人の奉職者六千百人中高地位に立ち、重任を負へる者甚だ尠からず此の外猶は郵便事務に從事する者また多く、工場視察、關稅官吏の重職を奉ずる者も亦罕ならざるなり。

其他新聞記者として、或は美術家として、社會の各方面に於ける米國婦人の勢力は至つて大なる者也、然れども余は一々之を詳述するの勞を省かんが爲めに、千八百九十九年の統計を掲載せん。

▲婦人にして各職業に從事する者

新聞記者	八八八人	醫師	四、五五五人
美術家	一〇、八一〇	建築師	二二
齒科醫	三三七	辯護師	二〇八
牧師	一、二三五	獸醫	二
機關師及火夫	四七	大工	一九一
獵師	二一	馬丁	二四
寺小使	三〇	汽車汽關師火夫	四
煉瓦及石工	四二	樵夫	二三
車匠	一	屠殺人	一二九
馭者	二三七	水先案內者	一
請負人	八三	鍛冶師	五九
羅賣人	二	石掘者	二〇
裁縫師	六八、一五五	石炭採掘者	二一九
旅館番頭	五、三一五		

吾人は此の統計を見て、米國に於て婦人の勢力の大なる所以の決して偶然にあらざるを信ずるものなり。夫れ實行は雄辯なり、事實は勢力なり、男女の同等は女子の獨立より來り、女子の獨立は女子の職業より來ることを知らざるべからず、職業とは即ち自勞自活を意味す、是れ男女同等の根柢なり、今日の如く衣食住は勿論、婦人が紅粉の資に至るまで悉く男子に仰ぐ如き狀態にありては到底全等の實を全ふすること能はざるや火を見るよりも明かなり。されば今日に於て婦人の地位を高むるの一策は「何如にせば女子に職業を與へ得る乎」にあり、若し此問題にして實地に解釋せられて、婦人が社會の各方面に侵入するに於ては、男女全等は云

はずして行はれ、進んで女子獨尊の天下を見るも決して難からざるべし。

此の國にして始めて此の勢力あり、若し婦人參政權問題の、事實に於て最も早く解釋せられ、最も早く其の結果如何を試驗せし國は米國ペスワイヲミング洲なり、今を距る三十年前に於て早く既に女子に男子仝等の政權を與へ、其結果極めて善良なりき。之に續きて米國婦人が政治上の光明に接したるはコルラド洲とす、該洲に於ては十年前に於て女子に選擧權及被選權を與へ、其結果として立法部には三人の女代議員を見るに至れり。又ウター洲に於ては憲法は政治上に於て男女同等を容認し、婦人にして現に同州元老院に議員たり、曾て一度合衆國元老院議員の候補者として選擧場裡に馳驅したるカンノン夫人あり、更に千八百九十六年に至りてアイダホ洲亦其隣國たるコロラド、ヨーミング、ウター諸洲の先例に倣ひて憲法を改正し、女子參政權を認め、其立法部に於ては既に一の女政治家あり、如斯女子參政權が大西洋方面の東部に起らずして、却て寒風吹き荒む西部に起れるは東部の西部に比して保守的精神の強きに依るもの乎、然れども、今や將さにロッキー山麓に發生しつゝある女子參政權は、ロッキー山の山颪と共に全合衆國を風靡するに至らんとす。

既にこの如くなれば其交際社會に於ける勢力も又極めて大にして、今日に於て婦人倶樂部の存在するもの其數二千二百餘、其會員三萬二千餘あり。

ホーア氏は合衆國婦人の前途を豫言して曰く、二十世紀に於て吾合衆國は必ず婦人の大統領を見るべしと、今日の形勢を以てせば米國聯邦議會に議員を出し、外交官の椅子は婦人に依りて占められ、ホーア氏の豫言は着々として事實に現はれ來らんとす若し將來或る學者の豫言の如く男女の地位全く轉倒するの國ありとせば、其は第一に米國なるべし、世界の諸國は後進の米國をして婦人問題に先進の名をなさしめんとす。

米國の女子元と纖弱婉麗の質なりといへども一たび其精神を鼓舞し其手足を動かせば遂に能く斯の如き偉人の成績を擧ぐ。本邦女子が從來蟄々たりしは爲す能はざるにあらず、爲さゞりしなり、余輩は元より殊更に我が淑徳ある婦人を右の如くなれとは云はず、只從來餘り内氣に只何事も男子に屈從し來りたる女子に就て他邦の例を擧げ、以て多少の奮發を促さんと欲するのみ。

社交

浦鹽斯德の婦人界

貿易事務官夫人　川上とき子

昨年彼の金州丸の遭難に際し船長として敵艦に行きし儘歸り來らぬ八木政吉氏を當時船長と戴いた山城丸が、神戸を發してより十日目に浦鹽斯德の港口にさしかゝりました、時は明治卅三年十二月廿七日の朝。

抑も浦鹽なる名が自分の心に止まつたのは今は早や亡き數に入りし最愛なる兄が、シベリヤの水產事業に志し、觀察のためとて二十七年の春浦鹽に渡り、暫くしてかの地の景を揭きし一葉のはがきを送り越した時からです。然るに兄は歸朝後間も無く病死したので浦鹽の事はいつしか記臆の底に埋もれてしまひました、處が三十三年の暮、緣あつて嫁いた夫が丁度浦鹽駐在を命せられて居りましたから、忽ち行李を整へて出掛ることに成りました。

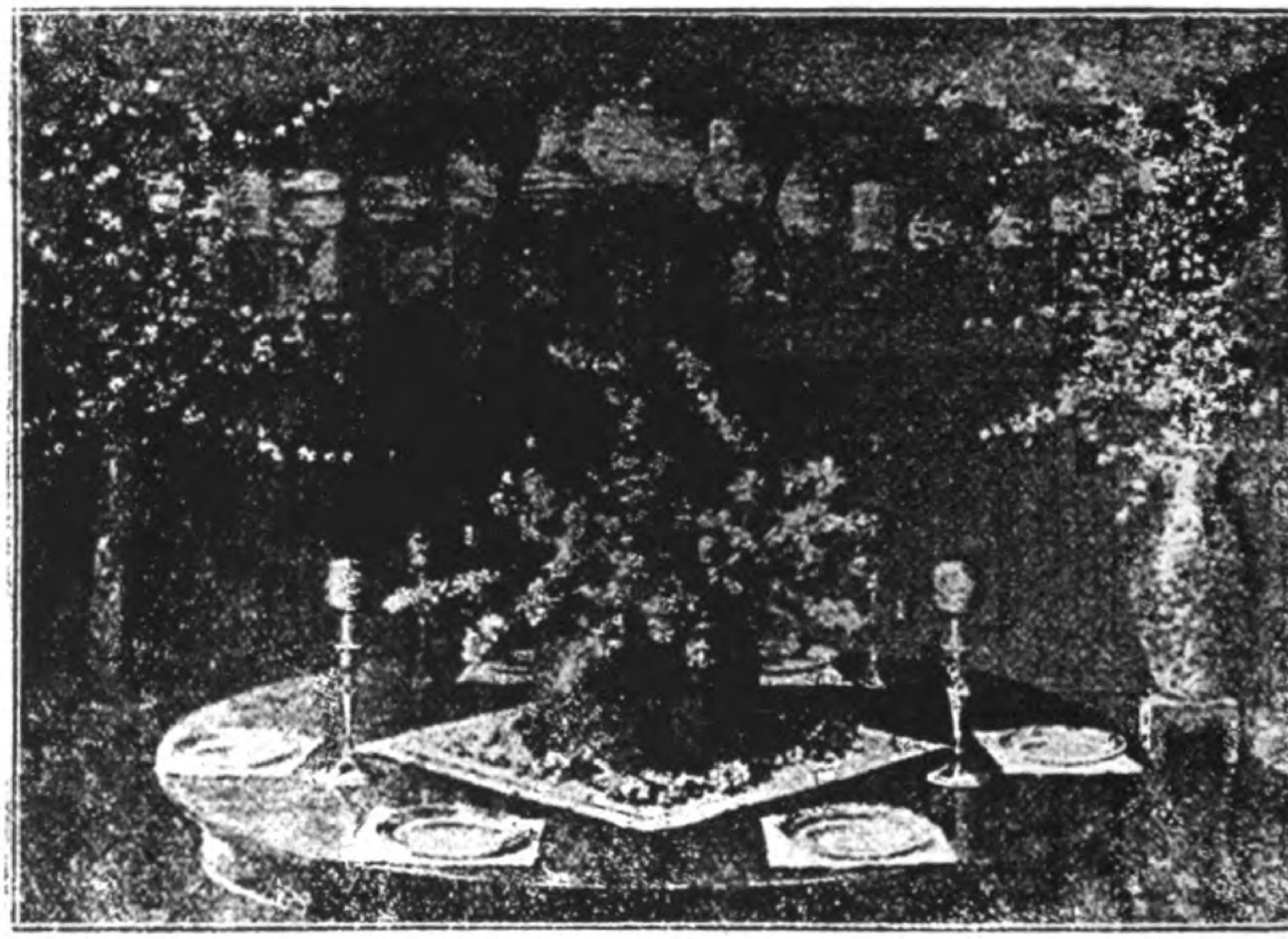
出立の前、心得にと思ひ○○氏の「西伯利亞旅行記」てふ書物を讀みましたが、其氣候を叙せる段に到り、驚いたので御在ます、夫で見ると冬は乾燥甚しく爲に器物が龜裂し、夏は濕氣が強くて壁の隅々に水が溜り、年中曇天勝で太陽の照ること少なく、澄み渡る明月を眺むることなどは、殆ど無い樣に記るされてありましたので、出立の前夜丸の內を通つて恰かも水の樣な冬の月が靜かなる大空に冴え渡つて、玉の樣な姿を御濠の水鏡に映出せる造化の妙畵に對した時などは、

あゝかゝる美しい風光も當分見る事が出來ぬかと悲しく思ふた程でした。然るに船が進み進んで、いよ〳〵浦鹽が見ゆるといふて事務長が知らせに來た時は、始めての外國なり、早く見たしの念に驅られて、身は一層注意深く温かに裝うて甲板上にいでました。

一番心に掛つた日和はと見ると、實に立派な晴天で蒼空一朶の雲さへ認め得ません、市街は山の斜面に建てられ、白堊赤甍櫛比して中々立派で厶います、船は徐々と灣内に進まうといたしますが、二里餘りの灣内、一面に大小幾萬の氷塊を以て閉塞されてあるので、中中運びが付かず、動もすれば氷片が船體に突きあたらうとしますから、其の間をくゞつて船をやる船長の苦心は非常なものでした、夫故市街は呼べば答ふる目の前に在りながら、錨を卸すことが出來ず、豫定より四時間後れて正午過ぎ漸と投錨しました。

船の投錨した周圍は結氷して居るので梯は直に氷の上にと卸ろされ、客は皆海を渡つて（と申せば大層不思議ですが實は氷の上を歩いて）上陸しました、見ると頭に二つの耳の立つた毛深い帽子を戴いた化物の樣な者が、幾人となく船の周圍に集つて來て、何かわやわや騷ぎ立て船から卸す荷物を運搬して居る、聞けば夫れは支那人の人夫、所謂浦鹽で俗に「マンザ」と呼び、船舶の出入毎に乘客の荷物の運搬や本荷の積卸しをする族なのです、然かし此「マンザ」に對する露國警官の無情には驚きました、私が出迎の人々に擁せられて梯を降らうとしますと、直ぐ下に一人の「マンザ」が立つて居て手荷物があるなら運ばし呉れと大聲に叫んで、うるさく纏はるのを、二三歩離れて見て居つた一人の警官は、イキナリ來つて之を撲ぐり倒し仰のけ樣に堅氷の上に轉げるのを、又もや靴でしたゝか蹴りました、初めてかゝる亂暴を見た目には誠に恐ろしく、側らの人に尋ぬると浦鹽では下等勞働は重もに支那人がするのと、而して此の手合に下劣な人間が多いのとで、所謂「マンザ」なるものゝ輕蔑さるゝ事は一通でない、獨り警官のみならず普通の露西亞人からも隨分手ひどい目に逢はされて、人間視されて居られぬので御在ます。

扨て私は迎の人に手を引かれて氷を渡り陸に上りますと、『お迎の馬車が待たしてありますから御召下さい』と呼ばはつて居ります、けれど四面を見渡しても乗用らしき馬車は見えない。私は「ランドー」か「クーペー」かさなくは意氣な「ウヰクトリヤ」があることゝ思ひましたから、何處に在るのかと訝しく思うて立つて居ますと『サーこれにと』促がされました、見ると成程五六歩先に一臺の「ウヰクトリヤ」（二頭立の幌馬車）が在りますが、其穢いこと馬の毛には少しも光澤がなく、馭者と申せば半ば恐ろしげな半ば阿呆らしい顔した大男で、赤き木綿の



西洋婚禮の食卓（春季の飾附）

袖なし様のものを着た、露西亞人であります、東京の黒鴨仕立とは雲泥の違ひ。扨乗りますと一鞭の下に動き出しましたが、凹凸の道路を走り行くその響と動搖とは今にも揺り落とさるゝかと我れ知らず同乗者の袖に縋がつた程でした、この馬車は日本の辻車の様に幾十臺となく街上に立つて居り、一時間八十錢、一寸なら二十錢の賃金さへ拂へば何人でも乗れるのです、而して此の馬車のむさくるしい事は御話にならない、稀には塗立の大層奇麗な車箱に、御者も少しはさつぱりとした風の者もないではありませんが、

それは稀で多くは不潔なものです、勿論浦鹽中に自用の馬車を持つて居る人もありますが、そは僅かです、貸馬車屋は二三軒ありますが一時間五圓といふ高價の損料を拂はねばなりませんから、高等官でも紳商でも、多くは已むなくこの穢い辻馬車に乗るのです。

さて此のがた〳〵馬車に搖られながら賑かな街を通つて五六町往きますと緩かな坂――その角に建てある菊の紋章を附した木造の家に着きました、是ぞ則ちシベリヤに在る我同胞保護の爲め設けある帝國貿易事務館でありまして自分の行李はこゝにと下ろされました。

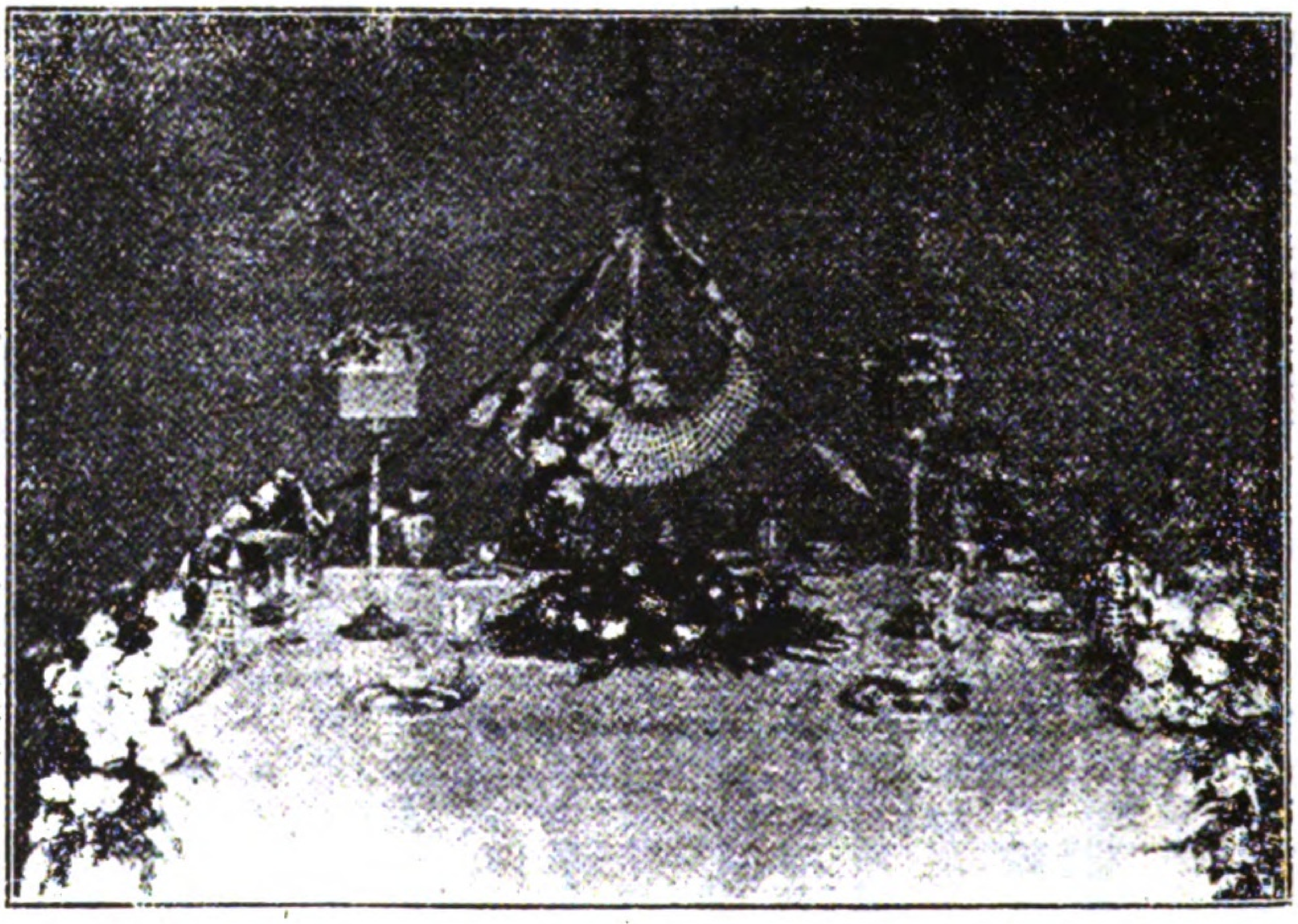
▲冬の浦鹽

冬季の寒さは實に耐つたものではありません、寒氣の甚しい日は街上にある寒暖計が列氏の零度以下二十度乃至二十五度に降ることがあります、如何に寒さの嚴しいかは物置に入れてある鯛や鮪の身が四五時間水に浸して溶かした上でなくては庖丁の刄が當てられぬといのでも分りませう、故に耳鼻などの凍傷することさへあるのです、然かし裕福なロシヤ人は何百圓乃至何千圓を抛つて毛皮の裏の着いた、若くは厚い綿入の外套に身を包み、頭に同じく毛皮或は綿入の帽を戴き、足には普通の靴の上に「ガローシュ」といふ厚いゴム靴を穿つなど、防寒の用意が行渡つて居りますから、外出を苦にしません、男はいふまでもなし、女さへ嚴冬手を携へて三々五々街上を散歩するのを見掛るは珍らしくありません。

浦鹽の冬の天氣は誠に晴朗で、來る日も〳〵一點の雲翳さへない程です、而して烈しい寒氣は實にピリピリ肌を刺すやうですが、その凛たる寒氣の中に得云はれぬよい氣持がするので、私は大風雪を除いては必ず毎日二三十分は運動しました。さてその戸外の寒氣の烈しいに引き換へ、室内の温度は又格別なもので、「ペチカ」とて露國固有の暖爐は煉瓦もて床から天井まで築き上げられてあります、是は大きなもので下の方に方一尺許の口があり、早朝二十本乃至二十四五本の薪をくべ、燃え盡して炭火の如くなるを度合に固くその

口を鎖して置けば、一晝夜間室内至つて暖かく綿入一枚で凌がれるのです、それで十一月の初旬から窓はみな二重にして、目ばりをし、綿をつめ僅かの風通が設けてあるのみです、それ故暖かいは暖かいが空氣の流通はよくありません、をかしい事は浦鹽に住みなれた日本人が冬日本に歸ると十中八九は風をひきます、之れ、全く家屋の構造によるのでムいます。

浦鹽の冬は此の通り寒いのですが、其寒い中でも露西亞人はなほ戸外の遊戯を樂みます、即ち壯年も幼者も等しく樂しんで待つて居るのは正月



仝上（宮榮の表彰）

十日前後より始まる氷滑りです氷滑りの場所は二ケ所ありますが軍港司令官の官邸の下の海が凍結すると、そこに設けらるゝのが最も完全でまた賑かでムいます、中學の學生など學校に行く前に來て滑るのもあり。女でも朝早く氷滑り用の靴をさげて兩の頬を眞紅にして歸り來るものがあります。

併し通例に四時過が最 賑かで十代の子供や三十前後の人々までが、勢よく滑走つて居ります、老人は唯だ見物に行つて居るのみですが若手の上手な人達は氷の上で舞踏を試みるなど、誠に氣味のよい面白い運動でムいます、茲には毎週二回音樂隊

の吹奏があり夜分は電燈を點します、而して一期五圓を出せば何人でも會員になり、好きな時入場して滑る事が出來ます、時々競爭會が開かれて勝者に賞品が渡りますが、この時は實に壯んなものムいます。

冬の娯樂としては氷滑りの外に演劇と音樂會があります、演劇も音樂も折々は都から名ある藝人が來て勤める相です、昨年の暮は「藝者」といふ題目の「オペラドカ」が大層な人氣で大入でムいました、私も行つて見ましたが、これは半ば歌、半ば所作で「オペラ」のやうに上品なものではありませんが、併し面白いものです、浦鹽に興行されるのは「ドラマ」と「オペレアドカ」ですが、「オペレアドカ」は隨分風俗上如何はしいものもあるので、學校時代の男女兒をば入れません、小さい學生の爲めには別に淸楚なものを演じますので教師か舍監の監督の下に見物につれ行かれます、また子供の爲めには晝興行の芝居があつて、此處では極無邪氣な可愛らしい事が演ぜられますから、子供が芝居に行つた爲め惡い感化をうけるやうな事は決してありません。

冬にはトランプもはやり、上中下みなその分に應じ金をかけて遊ぶやうです、或人は一夕に二千、三千、負けたの、勝つたのと云うて居ります、是には婦人も隨分交つて居るやうです。

▲夏の浦鹽

浦鹽の夏は案外に暑いが、暑中分けて人の忌むのは塵芥でムます、紅塵萬丈と云ふ語は浦鹽の夏の實景かと思はれる位です、それ故この暑さと塵とを避けんが爲めに汽車で一時乃至二時間の距離にあるセダンカ、ヘルコーなどいふ所に避暑します、この邊の土地の森林は數百年來斧の刄を知らぬ大木のみで木の下蔭に立ちよれば夏を忘るゝ思ひがします、祭日や日曜の汽車はいつも滿員で歸り列車の室内は木苺の籠、野花の束など充ち〳〵て花めづらしき浦鹽に田舍の香を運んで來ます、

さりながら浦鹽の中にも亦苦熱を忘るゝ別天地があるのです、夏の夕波止場に客待して居る一艘のマンザ

舟を雇うて海に漕ぎ出ますと涼風徐ろに吹いて然かも塵埃の立たう筈なく、片へに緑りの山を眺め、片へには市街を望みつゝ、楕圓形なる港の内を其處此處と漕ぎまはるたのしさ、而も夏に成ると露國の軍艦が少くも四五艘は碇泊して居るので毎夕日沒と共に夕の祈禱が捧げられ讃美歌が唱はるゝのですが、暮れかゝる波の上に靜かに太きベースの音で「入相」の譜をきく時は實に崇高な感想が迸ります。

併し多くの人の樂は魚釣りです、小さき海老を餌として糸を垂れると、場所によつて鰈、たら子、めばる、ガン／＼ジーと呼ぶかじかの様なものなどが懸ります、如何ほど多くの魚が居るのか知れませんが、釣り博士を以て任じて居る私の夫などは夕方五時頃から七時八時頃までも釣る時は百尾近い魚を持つて歸るのは珍らしくありませんでした、曾て釣りした事のない女子供にさへ六七尾は釣れるのですから誠に面白う御在ます、

▲浦鹽の上流婦人

私は着後間もなく領事の妻として知事夫人を始め一通りの訪問を致しましたが、ロシヤの婦人は一般にさつぱりして愛嬌があり親切で初對面の折にても厭にすまして客に手持無沙汰を感じさする様な事は少しもありません。

私は餘り廣く交際を求めませんでしたが、三年の滯在中に交つた人のうち、重なる婦人の有樣を少し記して見ませう、

▲軍務知事陸軍中將チユチヤゴフ夫人

チユチヤゴフ夫人はもと公爵の血族だけに自ら上品な風采を備へ年は五十格好ですが容顔はつや／＼として、もの言ふ毎に溢るゝ計りの愛嬌を湛へらるゝのです、中將は曾てベルギー國に公使館附武官として駐在せられた事のある故か、御夫婦とも外國人には特更懇篤を示さるゝやうです、私が初めて訪問した時にも英語もて「私にも貴婦位の娘があつて、ウフトムスキー公爵(旅順港内に露艦の司令官として居られた人)の許に嫁して居りますが、今日丁度同じ年頃の貴婦にお

目に懸つて、誠に嬉しく思ひます、この後は御遠慮なく度々お訪ね下さい、何なりと御相談相手になりませう」など〻如才なきこと言うて居られました。

夫人は鹽浦慈善會の會頭で盲目、不具者、扨は軍人の遺族で貧困なもの〻爲めに力を盡され、知事の官邸で折々委員會も開かれ、仲々に忙はしいのですが、毎日午後四時から五時の間は在宅して訪問の客を受けられます、で、訪問に參りますと兵卒が取次ぎに出て、一椀の茶と一皿の菓子とを運んで來ます、女中は一人の日本婦人を雇ひ置くのみで、一切兵卒で用を辨じて居られました。

又た夫人は此の慈善會の爲めに時々慈善演劇會又は音樂會を催されますが役者は無報酬で演ずるので、諸雜費を除いての收入は擧げて慈善會に寄附するのであります、此の折は例つも一枚の切符に御自分の名刺を入れて送つて越されます、是は「ベル、エタージ」即ち上等棧敷の切符で買うて呉れとの意味なのです、人によりては十圓の切符なら十圓丈拂ふもありますが、私共は十圓の切符なら二十圓、十五圓のなら二十五圓、或は三十圓拂はねばならぬやうな地位に居つたので、仲々うるさいこともありました。

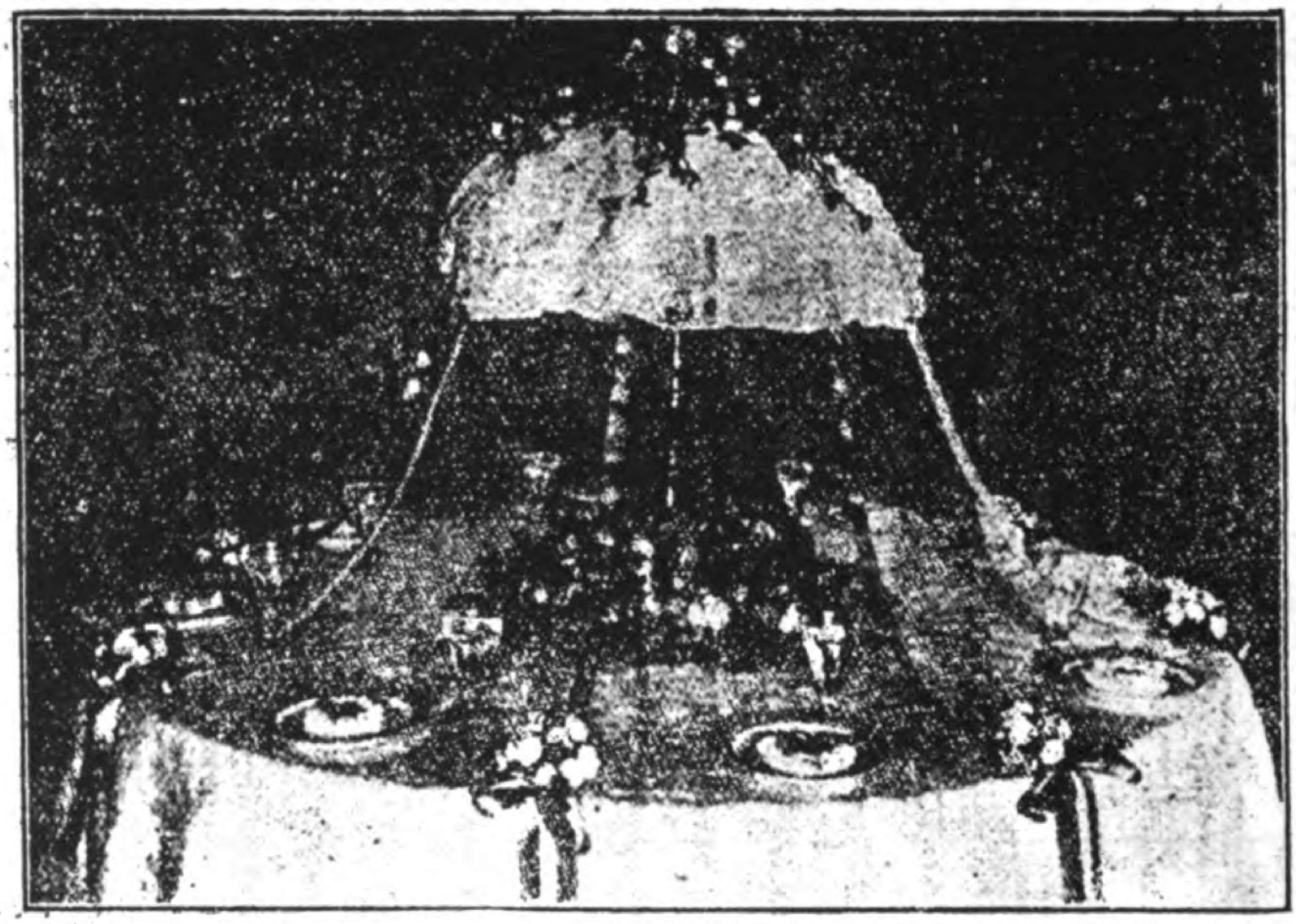
浦鹽では海軍の將校の方は裕福で、官邸も知事の官邸は軍港司令官に遠く及びません、給料も比較的少ない相ですが、其等の故か、尤も性質にもよりませうが、チユチヤゴフ夫人は宴會を催して盛んに多くの婦人を招くなどの事はありませんでした。

それに引換へ派手なのは、

▲軍港司令官チユフニン少將の夫人

でした。夫人は未だ四十にはなりますまい、美人といふ程でもありませんが、衣服の着こなし應待の素振りの上手な事、どこか佛蘭西風のある人で英、佛、獨の語に通じ、文學美術の嗜も深く、一寸した話にも趣味を多く持つた人です、ロシヤ人の或一部からは剛慢とか不遜とか譏らるさうですが、私に對しては誠に親切で、且は英文學の話など氣の合ふ點もあつたので度々往來して心易く致しました、茶事や、夜會、晩餐

會なども中々趣向を凝し珍味佳肴を列べ、盛宴を張られましたが、集る客は浦鹽の所謂官界の頭株と僅かの陸軍軍人を除いては、重に海軍の將校が多くて、實業家は殆んど席に見當りませんでした、之はチユフニン少將が非常に商人嫌ひで出入を許さなかつたからでムいます日曜と月曜とが夫人の應接日で、此時はいつも海軍の人等が澤山に見えて居り、夫人は最初のパリの流行を追ふた打扮でしとやかに然かも輕く、客の間を取持つて居られます、夏には心易き知合のみを招いて午後四時より六時位までの間で茶菓を餐應された事もありましたが、そんな時は



仝上（飾り傘）

例も二階の「ウアランダ」（外廓）でニッ三ッの小なテーブルと椅子をそこゝに配置されましたこの「ウアランダ」からの眺望と申すものは實に浦鹽第一と言ふても差支ないほどでムいます、で、此の「ウアランダ」に腰うちかけて眺ますと右の方に幅廣き階段があつてその下には百花爛熳たる花園があり、その花園から少し坂になつて二萬坪餘りの庭園が在るのですが、その下はすぐ海となり、海を隔てゝ山があるのも悉く皆自分の爲めに造化が手を入れた庭かと思はるゝほど工合よく出來て居るので、私の拙い筆には迚も書かれませんが、私はこの「ウアランダ」に

坐した時はいつも一種愉快な感じがして、小説でよむ歐洲封建時代の王侯の庭園は斯くやと思ふた事もありました。ある時夫人はこの庭で慈善市を開かれました、そして夫人が頭となりて數多の若き夫人や令嬢方を賣子とし茶店と酒店を出されましたが、夫人に對する敬意を表するとで領事などは實にシャンパン一杯に十留を拂ふた事もありました。チュフニン少將は今は露都に在る海軍大學校の校長になつて居ります。

▲東洋學院長ポズチエツ夫人

浦鹽の東洋學院と申せば大學の資格を有するもので重に東洋の語學を研究の爲めに設けてあるのです、その院長は勅任官で縣知事と同じ格です夫人は教育あるロシヤ上流婦人界のよき代表者で英語も少しは話し佛語は中々流暢に操つり、獨乙語は殊によく語り、學識もあり音樂、手藝にも長じた婦人でしたが、一方に於ては最もまめな世話女房で、室内の整理、器具の配置、窓縁の植木鉢の世話など一切自分で致されます、而して料理も一々臺所に出て監督され三日に一度四日に一度は市場に行いて品物の有無、價の相場など取調べ、決して下女下男に任して置きません、其故料理も經濟的に出來清新で美味なものが膳に上ります。

夫人は毎日午前の内に家事上の用を終へて、午後は二時から四時までロシヤ文を語學研究の爲め英、獨、佛の三ケ國語に譯出されます、四時から五時までは特別な場合を除く外は銀座通りといふやうな街を歩いて運動され、五時から六時まで來訪者に逢はれます。

夫人は大層私を愛されて、毎週月曜の午後五時よりは乾度招いて下さいました、それで五時に行ますと、すぐ食堂に導いて茶菓を饗されます、食卓は純然たるロシヤ風で例も珍らしき菓子が五種乃至七種位載せてあります、そしてその内の一二は必ず手製の菓子なので、いつも强いられました、茶は夫人自ら酌んで出さるゝのです、三十分も經ちますと夫人の居間で刺繍を始められましたが、是は寺院の祭壇の前に敷くために奉納するのだと申され熱心に掛つて居られました、刺繍と申しても毛糸で花鳥を刺繍るので、巾三尺長さ一

丈餘りのものですから中々捗取りません、それを私は手傳半分に習ひました、而して縫ひながらロシヤ語を習ひますのに、夫人の教授方の巧みなる故か面白く思うて吾れ知らず覺ゆる樣に感じました。七時に夕食をして食後はピヤノを習ひ、舞踏を浚ひ、愉快に時を過し十時を打てば下女に送られて歸る事になつて居りました。

ボズチエフ氏が一昨年轉任して露都に歸らるゝまで二年間といふもの、始終、變ることなく、いつも〳〵同じ笑顏で迎へ、笑顏で送り、五時間の間少しの倦める樣子もなく



仝上（薔薇と天使）ホームザヤーナル所載

心よく遊せて下さるのでした。

この夫人は……風采も立派に學問技藝も豐かなのに拘はらず稀に慈善演劇會に臨まるゝ位を除いて、浦鹽の交際社會には絶えて顏を出されません、或時『何故貴婦は交際社會にお出掛にならぬのです』との問に對し、『自分は晩餐會も好き、舞踏も好きですが、其は自分の知合が集てする時の事、この土地の樣に烏合の族と騷いだとて、何の愉快がありましよう、自分はこの土地では殆んど友人を求めません唯だ一刻も早く都に歸り度いのです』と述べられましたが、職務上餘儀なく浦鹽に來て居る都人の中、教育ある人達はみな斯

う言つた觀念を抱いて居るやうで、所謂生え拔の浦鹽人を輕蔑して居ります。

▲港務局長エゲルマン夫人

エゲルマン夫人はロシヤ人には珍らしい正邪の念の強い明瞭な頭腦を有つた至て親切な快濶した人で、浦鹽の日本人は間接直接に非常に世話になりました、この夫人は米國人を父と仰ぎ、ロシヤ人を母として生れたので、どこか米國の婦人らしい所もありますが、交際社會の八方美人とは事變り寧ろ剛直な性質で如何な高官の人にでも自分の氣に合はねば決して頭を下げません。

夫人は片親が米人丈に英語に精通して居らるゝので私とは互に充分に意思を云ひ表はし得らるゝ處から、自然この夫人とは最も親しく交際致しました。夫人も矢張交際社會に顔出なさらず、或時私に對ひ「川上さん私は夫の地位から申せばこの土地の上流として交際社會に立てるのですが、どうも、この地の夫人連と交はる氣には成れません、身には美麗な衣服を纏ひ口には立派な事を言うて居つても裏面を知つて居る私の眼には、誠に淺ましくて交はる氣になれません」と申されました。其故夫人を圍繞する男女は多くもないが何れも率直な表裏のない人ばかりでした、交際社會に出る事を好まぬ夫人も、これ等の人達とは往來をして、或は茶話會をして音樂の合奏をたのしんだり。或時は晩餐會を催ほして舞ふたり唱つたり致しますが、いづれも知り合の間ですから、皮肉な冷評も意地のわるい譏も聞く事なく、いかにもたのしげな交際で御在ました、夫人は剛直な代りに自分が親しく思ふ友人には眞情を籠めて親切になされます、曾て私が大病の時などは自分が日頃一方ならず愛育して居られた雛鷄を毎朝一羽づゝ潰し自ら煮てソープを調へて下さいました。

▲旅順港口に沈沒せしペトロパウスク艦

三十四年の夏でしたが或る夜の事、軍港司令官チエフニン少將の邸宅に舞踏會が催され、私も招待されて參りましたが、今日を晴と着飾りし數十名の婦人が百名餘りの男子に打交り、花に狂ふ蝴蝶の如く輕き裳を

飜して舞ひつ踊りつして居る中に、舞はぬ自分は一老紳士の傍に坐を占めて見て居りました、するとその時かねて知る一人の士官が寄つて來て、露語もて何かその紳士に話しましたが、やがて私に對ひ『私の乘つて居るペテルパウスク艦の艦長グレウヱ大佐を御紹介申度いです』と佛語で引合せました、するとその紳士は『御目に懸つて誠に喜ばしく存じます、私は日本にはあなたなど未だお生れにならぬ時分に行つて居ります』と驚く許りの流暢な日本語で語り出しました、ただその言葉が言へるのみでなく、その音調がいかにも日本人らしく、一時間ばかり日本語で語り續けました。是が緣故でその後、大佐は度々私の宅を訪問なさいましたが、或日夫と共にペテルパウスク艦に遊びに來るやうにとの招ぎ狀が參りましてミルングと云ふ男爵の中尉がわざ〱ボートを以て迎に見えました、ペ艦は當時修繕中で「ドック」に入つて居りましたが、端艇が船渠の入り口に行きますと、グレウヱ大佐は二三の靑年士官を從へて雨の如き霧の中に立つて出迎へて居られました、導かるゝ儘に階段を上り、幾室かを通つてまた階段を下り、漸く艦長室に入りました、室は餘り廣くはありませんが、友人の寫眞や大佐が諸國廻航の折々に求められた樣々な器物やらで飾られて、中には日本の刺繡も厶いました。

私達は大佐とミルング男との先導で艦內を殘らず見ましたが、何せよ一萬餘噸の大艦でありますから中の構造は實に堅牢宏大なものであります、士官室、食堂、機關部を始とし殘らず見物しましたが、中に一室「市場」といふ處がありました、是は航海中士官でも下士卒でも何か欲しい時には、此處へ來れば酒、パン、菓子、小間物、紙筆の類まで何なり求めらるゝやうになつて居るのだ相です、扨て見物の後『茶を上げますから、どうぞ此方へ』と例の日本語で言はるゝまゝに從うて行けば、五十疊敷計りの大きな楕圓形の部屋に導かれました、これは司令官の食堂なので、四壁の純白なる、一點の塵も止めない處に如何にも立派さが籠つて見えました、室の中央に一脚のテーブルがあり、珍

らしい果實や、菓子など數多く列んでをります、艦長がこの日殊に私達の爲め相伴として招いで置かれた七名の將校方は多少皆英か佛か或は又少しの日本語かを操つる人々で、中には日本の風俗に關し淺からぬ研究をされたと思はるゝ人も厶いました、併し艦長グレウエ大佐の精通には及びません、大佐はこんな事を話されました『私は日本料理が好きですが、一番は鰻でその次はすき燒です、或時長崎に碇泊中一人の士官を連れて鰻屋へ行きました、翌くる朝何氣なしにその日の新聞を見ると驚くぢやありませんか、チャント前日私が鰻屋に行つた事が出て居るのです、日本では何も出來ません、すぐ新聞に出されますから』とて呵々と笑はれました。茶もすみて後立つて室内を見ますのに、

室の一方に高貴な織物の幕が兩方に絞り上げられて、入口を半ば覆ふた一室があります、大佐の話によるとそれは司令長官の居間で此度東洋艦隊司令長官スクリドルフ中將が、四五日の中にこの「ペチル、パウスク」に坐乘せられて、この室を占めらるゝのだといふ事が分りました。

露國海軍將校中隨一と稱へられしマカロフ提督も此ペテル艦に座乘せられ、この部屋に起臥せられつゝ去んぬる四月の十三日旅順の港口で水雷の爲め艦の爆沈と共に敢なくなられしかと想ひますれば、一種追懷の念か禁じ得ません、然かし自分の知つて居つたグレウエ艦長は三年前少將に榮進して艦を下り旅順の軍港司令官になつて居りました。



觀察

婦人と精神病

（精神病院參觀の記）一

記者

▲可憐の同胞

現今我邦には十萬の精神病者があるとは、統計表の我等に示すところである、即ち我五千萬同胞の五百分一は、この悲しむべき疾患にかゝつて、精神的に死んで居るので、實に驚くべき次第であります、若しこの人々にして、かゝる病にかゝらずば、或者は政界の偉材となり、或者は戰陣の勇將となり、或者は商界の覇王となり、或者は文壇の明星となり、或者は家庭の良妻賢母となり、假令然らざるものも、亦たそれ相應の働きをなして、社會のため多大の貢献をなすであらうに、憐れむべし彼等の疾患は、その情感を傷り、その知性をくらまし、その意志を破碎し、彼等をして可惜天授の材能を喪失し、埋木の花さくこともならず、空しく瘋癲白痴の汚名を冠せられて、冷酷なる社會の嘲罵虐待の下に屈伏せざるを得ざらしめたのである、思へば彼等の運命ほど情けないものはない、聞く所によれば、獨乙などでは、國内に百四十有餘の公立精神病院があつて、その恩澤によりて全治の幸福を享くるものが、甚だ多いといふ、然るに我邦の狀態を顧みると公立精神病院と云へば、僅に東京府の巣鴨病院あるばかり、外に田端腦病院を始め一二の私立病院はあるが十萬の精神病者はおろか、その百分一をも收容することは出來ぬ、實に現代の一大恨事と謂はねばならぬ、けれども有は無に優る、これ等數個の病院あるは、やがて完全なる設備の出で來る端緒で、その前途は希望の光明を以て輝いて居る、記者はこの頃、田端、巣鴨の兩病院を見舞うて、親しく彼等精神病者の狀態を見、深くその不幸を憐れむと共に、廿世紀文明の光をうけて、救治の惠を被るもの年々に多きを聞き、社會のた

め心窃に之を祝したのです。聊か左に所觀を記して同情に富める讀者の一讀を煩はさうと思ふ。

▲巢鴨病院

本郷追分より、中仙道を北に進み、哲學館を左に見て鷄聲ヶ窪を過ぎ、酒井邸の前を經、行くこと一二丁の右側に、新しい煉瓦塀を繞らした、廣大な一構は、門札の掲ゆる如く、即ち東京府巢鴨病院です、記者は一昨年の暑中、心合へる鄉友を伴うて、こゝを參觀したが、會醫員が外出して居らなんだので、看護長の案内に從つて、僅に病室を巡覽したばかり、病院の方針、醫療の効果等につきては何の取調べも出來ず、遺憾を抱いて歸つて來た、其後は世事匆忙、再訪の機會もなくて月日を過したが、去る二月中端なくその必要を生じ、春日和のいと心地よき朝、江北の寓居を出で、途次田端腦病院を訪ひ、巢鴨病院に着いたのは、午後二時少し過ぎであつた（腦病院には、院長副院長外出してあられたので、記事を得ず）

門を入つて、先づ目を喜ばせたのは、境内の光景です、右の方には、僅に落成した、瀟洒たる煉瓦の建物が二棟聳え、左の方は廣濶なる園畝の、數町歩もあらんと思はるゝ内に、三四木造の新家屋が點在して、うらゝかなる日光の照すさま、記者は樂園にでも入つた心地して、まづ玄關に至り、受付に就きて參觀の許可を得た。

▲尼子四郎氏

受付に居た青年の「暫しこゝに」と云ふがまゝに、應接室に待つこと三十分許り、ツト入口の戸を開けて入つて來られたのは、記者の舊識なる尼子ドクトルであつた、ドクトルは實に當世得易からざる君子醫で、利のために動かず、名を追うて走らず、醫は仁術なりの心を堅く持して、細民貧者の治療には、敢て報酬を求めず、權門富豪の招聘も、禮なければ斷じて應ぜず讀賣新聞の覆面隱士は、その古今人物競に於て、ドクトルを推賞して古人富岡鐵陽に比したが決して溢美の言でない、記者は豫て、ドクトルが近來大學病院に勤めらるゝ由を聞いて居たが、この病院に在らるゝは、

毫も期待しなかつた、そこで記者は舊識のドクトルに案内され、參觀上好都合で導ひかるゝまゝに、婦人室の方へと赴いた。

▲病　　室

玄關から右に行くと男室で、左は婦人室である、事務室と醫員室との前を通つて、突き當つた所に、院内の關門とも云ふべき、錠前附きの格子戸がある、こゝを入つて右に曲り、長い〳〵廊下を挾んで、大小幾多の病室が並んで居る、大きい方は施療患者の室で二十餘疊敷かれ八人乃至十人の患者を入れてある、小い方は多く自費患者の室で八疊位一室一人若くは二人を入れてある、施療患者の室は、もと八疊乃至十疊であつたが、近來看護上の便利を謀り、かく大室制度を取ることにしたとの事、病室は何れも腰窓附きの板戸をはめ、廊下を通りながら室内の見える樣にしてある、自費患者のは多くその板戸を鎖ざし、施療患者の方は多く開放してあつた。

▲男女の比較

男子の百五十に對して、婦人患者の數は二百三十、頗る多數を占めて居る、これはもと一病院内の現象に過ぬが、之を前數年間の統計に徵するも、婦人は常に男子に比して、六七十名の多數を占めて居るを見れば之によりて社會に於ける全精神病者の男女比較を推測する事が出來やう。然らば、かゝる憐れむべく悲しむべき疾患にかゝるもの何故に男子に少くして婦人に多いか、男子は意志を以て勝り婦人は感情に支配さるゝためか、男子は自主的にして、婦人は從屬的なるためか、是等の問題は、生理上心理上將た社會上複雜なる關係を有し、こゝに輕々しく論斷することは出來ぬが、兎に角精神病者の數が、男女によつて如上の相異あることは、吾人の注目すべきである。

▲沈鬱性患者

參觀の劈頭に、予はドクトルに導かれて、沈鬱性患者の室に入つた、只見ると痩こけた一婦人が蓐上に横臥しつゝ、「ア、死ぬ〳〵今に死んで了ふ」と、悲げな且つ心細い聲で言ひつゝけて居た、ドクトルはその

枕頭に到り、「貴女は何故死ぬのですか」と問はれると患者は「アレ〳〵瓦が飛ぶ、屋根がおちる、家が倒れる、今に潰されて了ふ」といつた、乃ち幽鬱性患者の特點で、かく常に悲しむべく怖るべき想像を描きつゝそれを眼前の事實の如く感ずるのである、これが此種の患者の特質であるが、思ふに此の如き病症にかゝつた因由を索ねたならば必ず其間に悲慘なる大打撃の存することであらう。

△驕慢病者

記者は次に驕慢病者の室に入つた、此種の患者は、自己の價値を過大に信じて、人を視ること土芥の如く何人に向つても眼下に睥睨して壯言大語し自ら喜ぶのである、記者は一昨年參觀のときも、男室に於てこの種の患者を視たが、記者が看護長と共に室外に立つと彼は机に凭つて何やら書見しつゝ予等を顧みて直に起ち上り、傲然と八字の髯を捻り、「オイ看護長、呉(院長の事)は居るか居るだらうな」、といふ調子であつた、「イエ、今日は御用で、最早歸られました」、「ナニ最早歸つたと、フヽン、いかん奴だなア、今日は是非乃公が面會すると云うて置いたのに、乃公に無斷で歸るとは不都合千萬な奴だ、彼の馬鹿野郎奴」とどん〳〵床を踏み鳴して、元の席に就いた、けれども之は相當の經歷のある人ださうであつた、さてこの度のはいと優しかるべき姫御前の身で、かゝる病氣に罹り放言傲語して憚らないのであるから、一入參觀人の目を惹くのであつた、ドクトルは、新聞紙で封書樣のもの三通作つて持て居るこの婦人を見、「ハア手紙が出來ましたね「私が屆けてあげませう」と云はれると、「ソー屆けて呉れるかい、併しね尼子、この一通はネこの病院に關する私の改良意見が書いてあるのだ、大事な書面だから、間違なく呉に屆けておくれ」といふ其の容貌と、其言葉は實に奇態であつた、「よろしい乾度屆けます、處で貴女に一つお頼みしたいことがあります、それは外でもございません今日參觀に參られた此お方に、貴女が當院に入つた理由を聞かせてあげて下さらぬか」と云ふと、「ソーさ、聞きたければ聞かせないこともない

が、一體この人は如何いふ人だえ、ナニ女學世界の記者で、吾々のために盡力して呉れると、ソンなら話してもやらうが、併しね尼子、その前にお前に云つて置きたいことがある、先刻の呉に宛てた書面にもよく認めて置いたが、この病院は實に不都合な病院だ、この間私がこゝの障子を一尺ばかり開けたのだ、すると男室の患者が、窓の外に立つて居るぢやないか、私がお前は男室の患者ではないか、矢鱈に出られる筈がないのに、如何してこゝに來たのかと云ふと、男室では自由に出入を許すのだから、私がこゝへ來るのに何も不思議はないといつた、して見ると、男子と婦人とは、その待遇が違つて居る甚だ不公平だ、こんな不公平な規則はすぐに改正して貰ひたいのだ、今一つ言ひたいことは、當院では、何の病氣もないものを、精神病だなどゝ名をつけて入院さすことだ、私などは健全な人間だ、何の異狀もないものを、無理やりにこんな所へ入れて、外出も自由に許さないなんて、こんな馬鹿氣た規則は、何處の國の法律にもありはしない、萬國公法にだつて、決してこんな規則はない、呉などには萬國公法など迚も解るまいが、かう云ふ不道理なことをするのは甚だよろしくない、早速改正する樣に、お前からいふて貰ひたい」と、氣焔萬丈である、倘何事をか云ひ出さんとするを、ドクトルは、「承知しました、必ずさう云ふて置きませう」と、懇ろな言葉を殘して室を出る、その後影を見送つて、さも得意氣に鼻

發狂の原因（肉體的）
（田端腦病院の統計）

	男	女
腦病	一四	四
神經病	一四	三六
梅毒	五六	六
中毒	一二	〇
熱性病（インフルエンザをも含む）	一〇	二
如上外の病	二四	八
外傷	一六	二
房事及手淫	六	〇
産褥及分娩	〇	八
生來の衰弱	一六	二
破瓜	〇	二
酒	八〇	二

つて居た、可笑いと言ふよりはむしろ憐れな彼女の姿は、今尙記者の眼に見える樣である。

▲患者の靜穩

我々が廊下を話しつゝ戻つて行くと、「尼子さん」と呼ぶものがある、振返つて見ると、年の頃四十前後、背高く身裝賤しからぬ一人の患者が、揚子をつかひながら後から來る、尼子ドクトルはその手に持つて居る紙片を見て、それは何ですかと受取つて讀下した、「尼子さん、貴君は猫撫聲で人を喜ばせるのが上手だが廣島男は油斷がならない、こんな病院に何時まで居たつて、マア氣狂はなほりませんなア」と嘲笑するのを、ドクトルはさうかなあと輕く答へて、更に一の格子戸を開けて、右手の廊下へと入つた、するとこれも年頃四十許りの、いと黑い顏に、白粉を厚く塗くた一人の施療患者である、室の前を過ぐる我々を見て、尼子さん／＼と、頓狂な聲して、奥より駈け出で、「貴君は暫く見えませなんだね、貴君が見えないので、私は心配で／＼御飯も喉に通りませんでした」と、怪しきお世辭をならべた、これは大變だと、呵々大笑して行過ぐると亦た一人の患者が廊下に立つて記者の身裝を凝視め、「オヤ／＼この人は！この人の着て居る羽織はこの間私の家で盜まれたのだよ、ひどい人だね」と前に立ち、後に廻つて眺めて居た、このとき「私はあの人と行くのだよ、どうか放してお呉れよ」と叫ぶ聲を聞きて、傍の室を顧みると、一人の患者が、看護婦に助けられて居る手を、振放さんと試みて居るのである、當日の參觀中、最も深く記者の注意を惹いたのは、即ち是等數人の患者であつた、この外には我等が通行の際、殊に看護婦の付添うて警戒し居たのが一兩名あつた許りで、一般の患者は前年に比して、驚く許り靜穩であつた、前年は狂躁室に監禁せられたものが五六人もあつたが、這回は一人もさる患者を見なかつたのである、僅々一兩年の中に、かゝる相異を生じたのは、如何なる結果であるか、記者はドクトルの說明に從つて、聊か左に其の源因を述べやうと思ふ。

▲自由制度

束縛壓制の舊慣を改めて、自由制度を院内に勵行したのは、右の如き好結果を收めた第一の源因である、元來精神病者と云へば、瘋癲と嘲り、白痴と罵り、非常く之を厄介視し、甚しきは罪人でもあるかの如き虐待をするのが、社會一般の傾向であつた、病院などでも多く束縛主義を執り、少しく取扱にくいものは、或は狂躁室に監禁し、或は手足に革錠を施したものであつたが、今日では醫學上全く之を否認するとなり該病院でも、數年來は斷然自由主義を取り、狂躁患者などの、時に神經興奮の結果、甚しく危險の患あるとき杯、一時狂躁室に入るゝこともあるも、其他の場合に於ては、凡て之を解放し、一定の病舍内は、自由に往復するを許してある、一室に監禁してすら暴行止まざる患者を、自由に解放したならば、如何なる亂暴をなすも知れずとは、何人も杞憂するところであるが、實際解放して見ると、氣も和ぎ心も落つき、案外の結果を示して居るとの事です。自由を與へよ、然らずんば死を與へよとは、人情自然の要求で、精神病者が、監禁の下に狂暴を極め、自由を得て靜穩に歸するも、亦たこの理に外ならぬと見える、世の親族知友間に、精神病者を有するものは、大に心すべきことである。

▲同情と患者

次は患者に對する同情である、リンコルンの言に、人を愛し人に愛せらるゝは、人生最大の幸福なりといふことがあるが、實に同情相愛は、社會を成せる人類の生命である、全く社會の同情を失ふときは、如何なる哲人傑士も、絶望喪心の悲境に陷いり、深厚なる社會の同情を持つときは、陋巷に肱を枕として猶無限の樂みが在る、所謂天地を動かすの至誠は、同情の絶大なるもので、無智無識の嬰兒をして、事なく人生の山路を辿らしむるは、慈愛ふかき父母の同情で、可憐なる精神病者をして、復活の光明に浴せしむるも、醫員始じめ看護婦の同情に待つ外はないのである。該病院に於ては近來自由解放の制度を執ると共に、患者を遇するに專ら同情を以てし、醫員はその父母兄弟の如く看護婦はその知己朋友の如く、彼等をして、身の精神

病院に在るを忘れ、常に親族知友の間に在るの感あらしむる様務めて居らるゝが、是れ實に好結果を來せる有力な源因である。

▲患者の作業

患者に作業を執らしむるは、精神病者の治療上最も有効な方法であるとは、近來醫家の定說との事で、巣鴨病院では、數年前よりこの方法を實行して頗る効果を收めて居るのである。記者は尼子氏の案内に從うてその製作品を觀、又たその仕事場をも視た、彼等が各種の手藝に於て、思の外に熟達をなし居るには感服したのである、彼等の中には、發病前既に書畫彫刻等の技術に長じて居るものがある、彼等の技術は病氣のために、格別の影響を受けないで、その製作品には、頗る人目を驚かすものがある、記者が一昨年參觀の際には、男患者中、二階建の大宮殿を模造して、實に精巧を極めたものがあつた。この頃救治會の雜誌によつて見ると、その作品は、昨年春期の日本美術展覽會で一等褒狀を得たとの事、今回も亦た一人の患者が、生理書中の挿畫を見て、腦髓の模型を刻んで居るものがあつた、談話を交ゆれば茫然として要領を得ないが、刀を執れは、一點一畫法に隨ひて來る、殊に畫を能くする或婦人患者が、少女の猫に戯るゝ圖をかいて、

　さ乙女や、猫をぢやらして、春遊び

と、一首の俳句を其の肩の所に題して居たには、實に謂ふべからざる感を起したのである、記者は覺えず之を口の中に繰返して、若しかゝる病魔に襲はれずは、彼女は今將た如何に美はしき生涯を送つて居るだらうと、坐にその身の上を想ひやつて、同情の感禁ずることが出來なかつたです、是等は何れも發病前より身に藝能を具へて居たものだが、然でないものは、教師を聘して日課として、種々の工藝を教授するので、その工藝の重なるものは、男子部では、大工、左官、園藝土木、機織、裁縫、紙撚細工、女子部では、裁縫、編物、機織、紙撚細工、草取などで、その作品は、精神病者慈善救治會といふものがあつて、その手で之を販賣し、原料の價を差引いた殘額を、患者の利益とする

定めなのです、現今の所では、この作業に從事するものは、僅に一部分に止まつて居るが、其の結果は甚だよろしいので、一方には之がために漸次輕快に赴むき若くは全治するものが多く、他方には日々相應の收益を得て、天晴生業に適するものも出來、實に一擧兩得の有様である。記者は瘋癲よ白痴よと呼ばれて終生の廢人であるが如くに、社會から度外視された同胞が此の如き恩寵に浴するを見て大に廿世紀の文明に感謝せざるを得ないのです。

▲狂躁室と離隔室

狂躁患者の中には、病勢の募るときは、往々危険なものがあるので、狂躁室と稱して、之を監禁する室が、男女とも各五つ六つ宛設けてある、が、前述の様な譯で、近來患者が静穏なため、今は全く無用に屬して、患者の他の病氣に罹つたものゝ寢室にあてゝある患者中、傳染病に罹つたものは、別に隔離室を設けてその中に入れてある、離隔室は、亞鉛張りの床の上に寢臺を並べてあつて、清潔を保ち、消毒を行ふ上に頗る便利な様に出來て居るのである。

▲婦人の仕事場

患者の作業をなすためには別に仕事場が設けてある婦人の仕事場は、玄關を出でゝ、其の右に突き出た講堂の背後を廻つて二三十間行つた

發狂の原因（精神的）
（田端腦病院の統計）

原因	男	女
家族近親の疾病死亡につき苦心	三六	二三
財産上即ち貸借賣着	五〇	二三
相續上	一六	〇
失敗落膽及損失	三四	八
男女の關係失戀若くは嫉妬	二六	一四
離婚と結婚上	一二	一八
處世上の苦心	三〇	二
政治上名譽上の苦心	一四	二
業務熱中	二四	〇
家内不和（繼母等を含む）	二八	二六
試驗落第	六	〇
徴兵に關する苦心	一〇	〇
訴訟及び其他	一〇	二
感動（喜怒、驚怖等）	二六	〇
地震、火災、水難等	六	四
自己の病を苦にするもの	二	〇
迷信	六	六
苦學及び其他の苦心	三二	四
家族の身上に就ての苦心	八	四
子の無きを苦にして	〇	二

所にあり、小奇麗な新築の木造家屋で、中は八疊二間になつて居る。記者が行つたとき、入口の室には五六人の患者が編物をなし、奥の室には、七八人の一群を相手に、裁縫教師が裁縫の縫ひ方を敎へて居る二三人の看護婦が、その中に交はつて、同し樣に敎授を受けて居た、記者等の始めて入つた時には、二人の顔を窃み見る樣にして、ニタ〳〵と笑ふものが一二人あつたが、其の他は凡て靜肅で、熱心に其の手を動かして居つた、奥の間の片隅には、一臺の機織器械が据えてあり、入口の間の一隅には、編物、織物が陳列しあつてその織物は紙撚を緯にして織つたもので頗る見事に出來て居ました。

▲洗　濯

この家を出ると、右へ三四十間も隔つた所に、更に一軒の木造家屋がある、その周圍の物干竿には、患者の衣服とも見ゆる洗濯物が數多干してある、院内の洗濯は以前には一々洗濯婦を雇入れて、させたのだが、今は一の作業として、患者にさせることになつて居るとの事である、それから玄關の前を過ぎて、左の方に行くと、前に云ふた、二棟の建物がある。

▲新 築 の 病 舍

これは病舍として新に築いたので、中は各二個の大きな室に分れ、一方は日本風に疊を敷き、他は西洋風に出來て居る、落成した許りの事ゆゑ、裝置は未だ整うて居ぬが、天井高く、窓あかるく、かゝる家に住ふたならば、それだけでも、病氣は輕くなるだらうと思はれた。

▲農 事 場

それから塀に沿うて後の方に行き、小さき雜木林の傍を過ぎ、十餘町歩もあるべき、長閑やかな畑の、麥、大根、葱などが仕付けてある所へ出た、これは患者の農事塲で、その中央には新しき木造の家屋があつて、作業の物音靜かに聞え、彼方の隅には患者の豚畜ふ小屋があつて、田舍の趣を成して居る、そして塀を隔てゝ東北隣は岩崎氏の駒込邸で、規模の廣大にして建築の瀟洒たる、庭林の蔭森たる、流石は大富豪の勢

ひを示して居る。記者は尼子氏と共に暫しその間を徘徊して、寛閑の光景に見惚れ、ア、この樂園ありて、始めて精神病治療の目的を達するであらうと感じた、思へ陽春三月、花笑ひ鳥歌ふの時、鋤鍬を執つてこの樂園に耕やすの患者を、自然の美にうたれては氷れる心も釋け、三春の樂を感じては、傷める胸も開け、その病の次第におこたるべきは、疑を容れない。

▲運動と精神病

踵を返して運動場に至れば、話頭は自然患者が運動のことに及んだ。尼子氏の言によると、その運動は一樣でない、テニス、ボール、器械體操、自由遊戯等、各その好む所に從つて、看護婦が附き添うてさせる、そして近來男患者には、體操學校から教師を聘して、體操を教授させて居る、又病氣の輕いものは、時々醫員が引率して、郊外散歩を試みるとの事であつた、去年八月發行の慈善救治會の雜誌を見ると、六月二日三宅醫學士が七名の患者を伴うて、堀切の菖蒲園、淺草の花屋敷などに遊んだ記事と、七月九日森田醫學士の引率で、植物園に遊び、盲啞學校を參觀した記事が掲げてあり、その結末にかう云ふ事がいうてある。

常に病室に引籠り絶て世の有樣を知らざる事とて、患者のよろこびは傍の見る目も嬉しき許りにて、中にはかく時々外に出らるれば、何時迄病院に居るもいとはずとさへ云ふものあり、或は多くの費用をかけ慰めくれる事の有難しとて、ひたすら禮を云ふあり、或は作業を一層勵まんと云ふあり、或は十三年振りにて外を見たりなどいふも珍しからず、かばかりの事にかくよろこぶ彼等の樣、いと哀れにぞ見ゆるなり。

と、郊外運動の彼等に及ぼす影響の如何に大なるかは之によりて、知ることが出來る。

▲音樂會

次に患者の憂悶を慰して、治療上効果の少からぬは音樂です、患者中音樂の嗜好を有するものには、言ふまでもなく之をすゝめ、又時に音樂會を催して、一般患者に聞かしめるとの事、去る頃の音樂會には東京音

樂學校の渡邊校長、山田、島崎の兩教授が、十餘名の生徒と共に來會して、ピアノ、セロ、ヴワイオリン等を彈せられ、患者の中にも、琴、三絃を彈じ、一寸法師の舞踊をなすものがあつて、與趣湧くが如き間に時を移し、頗る良好の結果を收めたとは、同院年報の示す所で實に左もあるべきことゝ思はれるのです。

▲遺傳と精神病

同院の統計を見ると、精神病は父祖の遺傳に出るものが多數を占めて居る、三十五年度の調査にては百九十七人の患者中、有遺傳者は百分の六十七で、之を無遺傳者の、百分の二に比べると、殆んど三十二倍の多きに達して居るのです、併し父祖の遺傳あるものとて悉く發病するものではない、その發病には必ず外來の誘因が伴うて居る、外來誘因の最多數を占めて居るのは、家事に關するもので、その中第一位に立つは財政の困難で、次は家庭の風波、次は家人の疾病死亡等である、其の他男子に在つては、勉學の過度、精神の過勞、女子に在つては職業上の痛心、自己疾病の苦慮などが、發病の誘因となる場合が多い、そして猶この外に、身體誘因とて身體上の障害が、腦髓を侵し、間接に禍害を精神に及ぼすものがある、その身體障害の重なるものは、多く顚癇若くは酒精中毒に基くのであるとの事。

▲時候と精神病

精神病の發するのは春夏の間に多く、秋冬の候に少いので、左に掲ぐる統計は、東京府下で發病したものに就いて調べたものだ。

	入院者總數中	百分比
十二月乃至二月（冬）	二三	二〇
三月乃至五月（春）	三二	二八
六月乃至八月（夏）	三三	二九
九月乃至十一月（秋）	二七	二三
合計	一一五	一〇〇

▲年齡

年齡と精神病とは、頗る親密の關係を有つて居る、小兒期に在つては、心身の發育全からず、社會の關係單純で、極めて無邪氣の生涯を送り、老人期に至りては、心身次第に衰へ、漸く世事に遠かりて、所謂小兒

の昔に蹶るので、共に精神病を發することは少い、精神病の最も多く發するは、血氣正に盛んに、社會的關係の漸く繁く複雜ならんとする靑年期若くは壯年期である。

▲氣質の病癖

次に精神病と密接の關係あるは人々の氣質である、精神病者中氣質の病癖あるものは百分の七十を占めて居る、中に就いて感覺過敏のものは百分の五〇、感情急變のもの百分の一九、好惡急變のもの百分の十二、心配性が百分の十一想像力亢進が百分の八の割合を示して居る、去ればかゝる氣質の病癖あるものは、當人は勿論、その親族知友の人々が、常にこゝに注意して、その病癖の矯正に務めたならば、此の如き悲しむべき疾病をば未然に救ふことが出來やうと思はれる。

精神病者職業別（田端腦病院の統計）

學生（男女）	九〇	官吏、公吏	三六
敎師、傳道師	一五	農	三一五
會社員	二七	米穀商	二七
醫師	二一	吳服、木綿商	二四
技手	二一	飲食屋、旅人宿	三〇
僧侶、神官	一五	荒物、唐物商	二七
軍人	六	酒、醬油、味噌製造	三九
畫工	三	菓子	一八
辯護士	三	藝妓、待合、貸席業	二一
雜	三〇	質屋	一八
無職	三三	金貸	三
賣藥	一四	煙草商	一八
土工、鍛工、左官、大工其他	四六		

▲巢鴨病院の沿革

巢鴨病院は明治十二年六月、創めて上野舊養育院內に開設して、東京府癲狂院と名けて、養育院在來の患者五十人を收容したのです、同十四年に至り、患者の數が次第に增加して、病室が狹隘を告げ、且その敷地が文部省の御用地で、同省から返還を請求せられたので、本鄕東片町に移轉し、百五十人の患者を收容する病舍を新築したが、又同十九年に至り、更らに現在の小石川巢鴨駕籠町に移轉し宮內省から一萬餘圓の御下賜金を得て今の病舍を建てたので、その敷地は二萬餘坪、その建坪は九百二十七坪二合五勺、その內部は左の樣に區別されて居る。

種類	室數	坪數	種類	室數	坪數
病室	一四六	六三八	事務室	一	八
狂躁室	三六	六二	藥局	一	六
講室及院長室	一	三一	看護長室	一	三
醫局	一	八	湯呑室	一	八
診察室及應接室	一	八	附屬建物	九	一三三
			合計	一八九	九〇四

▲職員

同病院の職員は、院長吳秀三氏を始め、醫員三宅、森田、尼子氏外數人で、外に五名の事務係と、男女各三名づゝの看護長と約百八十人許の看護人が置いてある、看護人は醫員を助けて、患者の取扱に任ずるもので、最も大切な責任を有するものにも係はらず、從來のは兎角無敎育で、其の職分を盡すことが出來ない、故に近來は最もその人撰に注意し、且つ看護長をして大學の看護學講習を受けしめて、大に看護事務の改良を行ふた結果、近來殆ど面目を一新したとの事である。

▲入院の必要不必要

精神病者の中にも、いろ〳〵の種別があつて、悉く入院さする必要はない、先づ入院を最も必要とするのは、第一に危險な行爲をするもので、彼等の中には幻覺というて人も何も居らないのに恐ろしい姿が見え、怖い聲の聞ゆる樣に覺ゆるものがある、又病的苦悶というて、自分の苦痛を避くるために、無暗に人に喰つてかゝるものがある、又興奮發揚といふて、無分別に暴れ廻り、又被害的妄想とて、人の己を殺すとか打つとか妄想するものもある、又病的嫉妬心というて、夫婦間の疑甚しく、其の極妻若くは夫を害しやうとするものもある、又癲癇狂というて、四十歳頃に至つて急に氣の暴くなる人もある、その事情はそれ〳〵一樣ではないが、之を放任して危險の虞あるものは入院させねばならぬ。第二は自殺の恐あるものです、自殺を考へつゝあるものは、常に家族等の油斷に乘じて、之を遂行しやうとするもので、これは實に不安心千萬なのである、かゝるものは、此の如き病者に對して、完全な設備もあり、完全な看護人の附添うてゐる、精神病院に這入るのがよい。第三には、病氣のため絕食の傾向あるもので、かゝる患者は速に入院させて、人

工藝養を與へねばならない、かの生れつきの白痴とか病氣の慢性的のものとかいふものは、興奮の甚しき時丈け入院さすれば平常は自宅に置いて差支ないのです。そして系統的好訴症とて、矢鱈に人と爭ふを好むもの誇大妄想とて、無暗に大きなことを考へ居る人などを入院さすれば却つて立腹して興奮するも、退院すれば平靜に歸する樣なのは、病院に入れるは寧ろ有害なのです。

婦人と精神病

昔佛戰爭當時、夫の戰死を耳にして心を失ひし妻、子の從軍に魂を消したる母、さては愛兒に別れて心神に異狀を呈したる父母など甚だ多かりしが當時吾國は決して斯る氣體の男女を見ざるは寔に悦ばしき事ながらやゝもすれば駁貝なる婦人中に此の類を見ることなしとも限られず兎に角戰時に於て出征軍人家族中に精神病者を生ずるの實例は古來尠からぬことなりと又戰鬪員にして凱旋の後、精神の過勞よりして突然腦を痛め、其の結果往々にして發狂者を生ずることあり次に結婚期を過ぎて尙ほ結婚せずあるを婦人ゝ大耻辱と思ひ詰めたる果てが、精神に異狀を呈して發狂せるがあり、要するに婦人の發狂者は滿二十四五歲よりして四十歲までの間に多くして而も有夫のものなりと聞くからには愈以て、「日本在來の家庭の圓滿ならざるが上に奈何に日本の婦人が現在するかを窺ふに足る可し、而して婦人が精神病に罹る誘因は男女の關係を主とし、家內の不和、其の他衣食住より來る苦痛等ある中に注意を拂ふ可きは良人の放蕩（例へば蓄妾の如き）を苦にしたる時、子供の無きを苦にしたるとき、若くは子供の放埒を苦にしたる時、嫉妬的苦悶等頗ぶる多く、中にも婦人の迷信なり、此の狂者は彼の法華敎信者と、天理敎信者とに限られたるものゝ如く、中に病體を以つて按摩にかゝりつゝ祈禱を受けたる其夜より直ちに發狂して、其翌日入院したる患者さへありと要するに男の狂者と女の狂者とを比較すれば男子は大金を拵へて見せるとか、大臣になるとか、時々口を開いて壯語すれど、まづは一體に緘默の方なるに、女子は全然饒舌にして始終戀愛的の口吻をもらしつゝあるもの多し。

▲慈善救治會

記者が終に臨んで紹介したいのは、前に言ふた精神病者慈善救治會のことである、同會は醫科大會教授の夫人方が發起したので、明治三十五年十月、上野公園東京音樂會に於て慈善音樂會を開き其の實收千五百八十三圓を基本として、成立したもので爾來數多の會員を募集して、可憐なる精神病者のため、多大の扶助を與へて居るのですかの巢鴨病院に於て、患者の作業に用ふる原料は、全く同會で給與するとの事、であります。（完）

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS.

女學世界英文欄

Conducted by Isoh Yamagata.

山縣五十雄

AN EXAMPLE OF GENUINE KINDNESS.

An American paper recently received contained the following:—

"When New York was visited by its latest snow blizzard recently, a pretty young woman, stylishly clothed in furs, pitied a famished little newsvendor, took his unsold evening papers, sold out two dozens of them to a fascinated crowd, gave him the money, and disappeared."

Such an act of genuine kindness evokes in everybody's mind a strong sense of admiration. Few, however, venture to practise it. Only a man or a woman, who is truly noble and morally courageous, can do it. Most people hesitate to do it for fear that they may be laughed at, although they have a strong desire to help the poor and week. Morally speaking, such people are coward.

眞實の深切の一例

近頃到着した米國の一新聞に下の話が出て居りました：—

『近頃紐育で最近の大雪荒れのあつた時流行の毛皮製の衣服を着けた一人の美しき妙齡の婦人が。饑え疲れた一人の新聞賣りの小僧を憐み。賣り殘りの夕刊新聞を取つて。見惚れたる群集にそれを二ダース賣りつけ。金は其小僧に與へて。やがて消え去りました』。

かゝる眞實なる深切の行爲は誰の心にも感賞の念を起させます。然し敢て之を實行する人は稀であります。眞に心貴く道德的に勇氣のある男子や女子のみ之れを行ふことが出來るので。大抵の人は憐れなる者弱き者を助けたいと思ふ心は强くとも。笑はれるであらうと心配して。之を行ふことを躊躇します。道德的にいへば。かゝる人は卑怯者であります。

〔註〕 Snow blizzard 雪の大荒し—stylishly clothed 流行の衣服を着けたる—famished 饑え疲れたる—newsvendor 新聞賣り—evening papers 夕刊新聞—facinated 見惚れたる，魂を奪はれたる—evokes 喚起す—for fear 心配して—the poor and week 憐れなる弱き者。

AN ADMIRABLE GIRL STUDENT.

Not long ago, I saw in Tokyo a young school girl, who is an equal of the brave young American woman above referred to. I was walking down a certain steep road in koishikawa, when I saw a horse trying to pull up a heavily-laden cart. Under the merciless lashes of the driver, the poor beast, covered with sweat, was straining its every muscle to the utmost, but could not make the cart move an inch. I went at once to its help, and tried to push the cart from behind, but the road being too steep and the load too heavy, my effort was of little avail. At this moment, a pretty young girl student, faultlessly dressed, came along, carrying in the one hand a silk umbrella and in the other a bundle of books. She saw me in that situation, and without the least hesitation, she put her umbrella and books on the road-side and joined me in pushing the cart. Soon a crowd gathered and several willing hands came to our rescue, with the result that the cart was easily and quickly pushed up the road. I turned to the young lady to thank her, but she was already

感ずべき女學生

遠からぬ前私は東京に於て上にいへる雄々しき米國婦人に比敵する女學生を見ました。私は小石川の或坂途を下りる時。一頭の馬が重荷を積み載せた車を牽き上げやうとして居るのを見ました。憐れなる馬は馬方の無慈悲の鞭の下に。汗にまみれて。一生懸命の力を出して居りましたが。一寸も車を動かすことが出來ませぬ。私は直ちに其助けに行き。後から車を押し上げやうとしました。然し途は餘りに傾斜し。荷は餘りに重きが故に。私の盡力も殆ど何等の効がありませぬ。かゝる所へ。點の打ち所なく裝ふたる一人の愛らしき女學生が。片手には絹の蝙蝠傘を。片手には本の包みを携へて來合はせましたが。それと見るより少しも躊躇せず。路傍に蝙蝠傘と本とを置いて。私に加勢して車を押しました。やがて人々が集まつて來て。數名の人が喜んで加勢してくれた爲め。車は難なく速かに坂途を押上げられました。そこで私は其妙齡の貴女に禮を言はうと思つて振り向きましたところ。はや立去つて。途を走り下り。蝙蝠傘と本とを拾ひ上げ。隱れてしまひました。

〔註〕 Not long ago 遠からぬ前—an equal 同じき者。比敵する者—above referred to 前にいへる—steep road 坂途—heavily-laden 重き荷を載せたる—Under the merciless lashes of the driver 無慈悲にも馬方に鞭打たれて—was straining its every muscle to the utmost 其各筋を極度まで伸張して居た

gone. She ran down the road, picked up her umbrella and books and disappeared.

＊　＊　＊

＊　＊　＊

"THE MOTHER OF FRANCE."

On January 15th, this year, mine. Loubet, the mother of the President of the Rupublic of France, died at Montelimar from an attack of congestion of the lungs. The old lady was ninety-five years of age at the time of her death.

Mine. Loubet was the widow of a small farmer, and had lived her entire life on the farm of La Terrase, at marsanne, near Montelimar. She was a simple countly woman, a typical farmer's wife, thrifty, cheerful, and deeply religious.

She was known throughout France since her son's accession to power as "The Mother of France." Her son repeatedly desired her to come to Paris and live with him at the Elysée, but she invariably shook her head with the remark: "I was born on the farm, and on the farm I shall remain. I should only be unhappy in that grand palace."

When M. Loubet was elected to the highest position in the land, the old lady was by no means elated. "I shall see less of him now than ever," she sighed, as she went about her household duties.

(一生懸命の力を出して居た)—was of little avail 効なかりし—faultless 過誤なく。非難すべき點なく—several willing hands came to our rescue 數人が喜んで我等に加勢した。

＊　＊　＊

＊　＊　＊

"佛國の母"

今年一月十五日佛國共和國大統領の母なるルーベ夫人は肺の充血にかゝりてモントリマーに於て死去しました。此老婦人は其死去の時九十五歳でありました。

ルーベ夫人は小農の寡婦で。一生モントリマー附近のマルサンヌに於けるラ、タ－ラスの田園に暮らしました。夫人は質樸なる田舍婦人で。倹約で快濶で宗敎の信仰厚き。標本的の農家の主婦でありました。

其子が權勢の地位に登つた以來。夫人は『佛國の母』として佛國中に知らるゝやうになりました。其息子は屢々巴里へ來て一所にエリゼー宮中に於て暮らすやうにと請ひ求めましたけれど。夫人はいつも頭を振りて『私は田園に於て生れたから一生田園に殘つて居ります。私は彼の大なる宮殿に行けば却て樂しくありますまい』といひました。

ルーベ氏が國中最高の位置に選擧された時に。老婦人は少しも高ぶり喜ぶ所はありませんでした。夫人は從前の如く家事を取り扱ひながら嘆息していふやう。『私は今は前よりも彼れに會ふことが少なくなるでせう』と。

當時夫人は其地方の知事に向ひていふやう『思ひ掛けないぢやありませぬか。彼れが十四歳の時天子樣を拜ませやうと巴里へつれて

To the local Prefect she said at the time, "Why, bless the boy, when he was fourteen years old I took him to Paris to see the Emperor, and little thought that he would become the head of the nation. Well, I hope he won't forget me and will come to see his old mother on the farm occasionally."

At the first opportunity that offered, the President went down to Montelimar. He was received at the station by the authorities and a brass band. Flags were flying and there was great enthusiasm. A long procession followed the presidential carriage out to the farm.

Here Mme. Loubet received her son, and after a few moments said to him, come on, Emile, I want you to do something. I am too old to knead the bread, but I never let any one else bake it. You must help me." And the President of France took off his coat, rolled up his sleeves, and put the bread in the oven as if he had been on the farm all his life, and had known no greater care than making bread for his mother.

The affection between mother and son was always most touching, and when the old lady passed away, the President wept like a child and could not be consoled for many days.

行きましたが。其時には彼が此國の元首とならうとは少しも思ひませんでした。私は彼れが私を忘れないで。時々田舍へ私に會ひに來ることを望みます」と

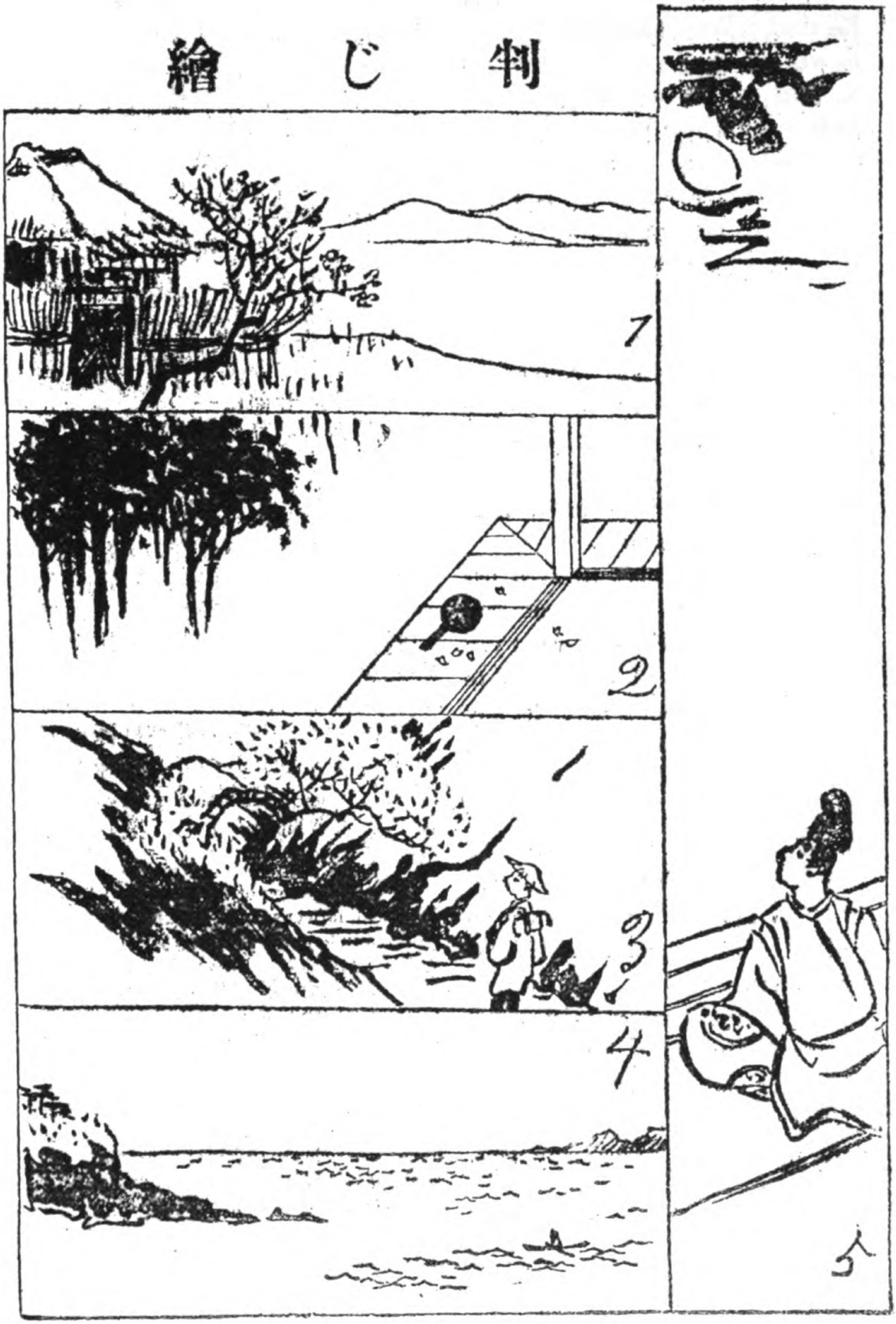
大統領は機會の來ると共にモントリマーへ行きました。停車場には官吏や樂隊が迎へに出て。旗は掲げられ。熱心な歡迎があり。其生れた農家まで長い行列が大統領の馬車に附いて行きました。

ルーベ夫人は其處で其子を迎へ。暫くしていふやう『サア。エミールや。お前に一つして貰ひたい事がある。私は年を取つてパンを捏ることが出來ぬが。然し私は誰にもそれを燒かしたことがない。お前に手傳つて貰らはなければならぬ』そこで佛國の大統領は上衣を脫ぎ去り。袖をまくり上げ。さながら一生の間農家に居て其母の爲めにパンを作る事より以上の心配を知らないかの如く。竈にパンを入れました。

此母と子との間の愛情は極めて感ずべきものがあつて。老婦人が死去した時。大統領は子供の如く泣き。永き間怏々として樂しみませんでした。

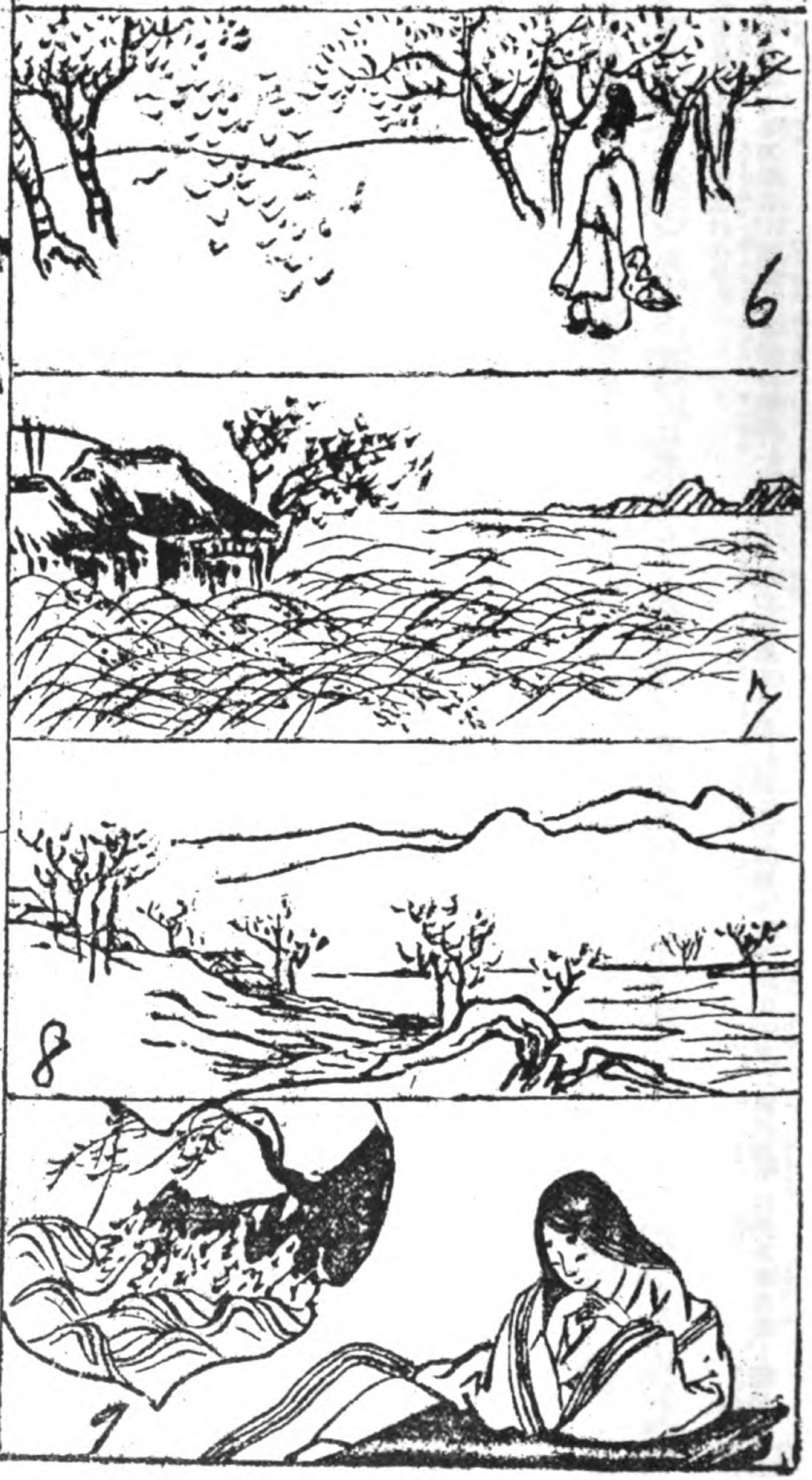
〔註〕 Congestion of the lungs 肺の充血—a typical farmer's wife—標本的農夫の女房—accession to power 權勢の地位に上る事(ここには大統領となりしをいふ)—Elysée エリセー宮(佛國大統領の官邸)—invarially 常に—highest position in the land 國中最高の地位(即ち大統領の地位 —was by no means elated 決して喜ばなかつた—I shall see less of him 彼れを見ることが少なくなるであらう—household duties 家事の勤め—local Prefect 其地方の知事—at the first opportunity that offered 機會が來ると直ぐに(閑を得るとすぐに)—presidential carriage 大統領の乘れる馬車—Emile 大統領の名。

判じ繪



下の十圖は名高い歌の意を畫にしたものです
此等は總て百人一首の中から撰びました
殘らず判じた方には賞品三圖を呈す
解答は女學世界宛——用紙端書——〆切五月廿日





小兒を持てる母親の爲に

一記者

小兒には猥りに藥劑を用ゆべからず、大人はともあれ、小兒に猥りに藥を與ふるときは、身體の發育を妨げ羸弱のものとなし、天眞の健全を毀るに至るものなり、されば世の母たるものは、持藥などゝ藥を與ふるは甚だ宜しからざる習慣といふべし。されば先づ藥劑は非常なる毒物といふ思想を抱き居て、病魔に攻められ、くるしむときは、止むことを得ずとするも經驗なき庸醫の診察を乞ふは危險至極なり、殊に乳兒の如き未だ言語を了解し能はざるものには、最も注意せざるべからず、古き諺に病傷は、猶ほ癒すべし、藥傷は醫し難しとあり大に注意せざるべからず、されば衛生の最上方便は平素身體を健全にして容易に病に犯されざるの工風を講ずるにありと知るべし、之れには飲食を節制し起居常を守り、過勞を來さず攝生するを可とす、又世間の母親はやゝもすれば小兒の衣服につき、餘り暖を取り過すの嫌あれど是れ大なる誤りなり、人には習慣といふことあり、寒氣に向ふ時に襟卷をなせばその冬は、到底すて難きものとなる、衣服も亦同じ、故に古人の說に飽食煖衣は、身を破るの基と云へり、山野に棲む鳥獸を見るべし、冬なりとて、別に被物はなし、これ習慣性なり。

▲營養事項

初生兒に最も營養品として適當なるは、母乳なれど、もし母貧血性にして乳の分泌せざるか或は乳房を害することあるときは、乳母若くは、家畜の乳汁に依らざるべからず、且つ畜乳は多くの危險あるを以て、苟も母たるものは、成べく自己の身體を健全に保ち自己の乳汁を以て、飼養とすることこそ望ましけれ。

乳汁の量と性質とは營養物の含窒素量に關するものなれば、居常習慣の食物を採れば可なり、併し臭こきもの又烈しき香氣ある例へば韮、葱、蒜等は、多量に食すべからず、成べくは全く用ゐざるを望む、少量の葡萄酒は適當せり、併し「アルコール」分多きものは、よろしからず。

授乳するに必要なる要件は、温浴し身體を清潔になし、空氣の流通よき處に適當の運動をなすべし。第二乳は猥りに與ふるなく、整然と時間

を極めて、與へよ、何となれば乳汁は號泣を靜める爲めに、與ふるものにあらざればなり。第三母は決して兒を懐にして褥に就くべからず誤つて小兒を窒息せしむるの恐れあり。

生後七ヶ月を經過せば授乳は一日に三回位に抑制すべし、少しく鹽を加へたる肉漿汁を鷄卵半個或は一個に和し與へ、先づ齒牙發生し始むる頃には、穀粉を水及び乳汁と共に給してよし、二枚の齒牙發生したるときに授乳は大に減ずべし、大人と同じく定期に牛乳を與ふるはよし、されども黴菌の危險を避くる爲め煮沸するをよしとす。

▲遺尿の注意

遺尿は男子の方、女子よりも多し、初生より十二三歳位まで時としては二十歳を過ぎて治せざるあり、この原因は腦の尋常ならざるによるか、睡眠酣なるときまでも尿が膀胱内に、充滿すれば、尿の通常刺戟にて醒むるものなり、小兒は未だ腦の發達不充分なる爲め、これを感ずること鋭敏ならず、故に遺尿するなり、遺尿を攝生的に治療なすには、小兒をして、就眠時前數時間液體を飲むを禁じ、仰臥せしめず、必ず側臥をとり、横に臥せしむべし、又裳を腹部に卷き冷えざる樣にすべし、その裳には、紐を付け、その紐を脊柱の上にて結ぶ、さすればねがへりをうち背臥するときは結節の爲めにいたみを感じ眼をさますものなり。

世間往々遺尿するとて苛責するものあれどこれ策の得たるものにあらず、或人一小兒につき甚だしき罰を加へたるに小兒は、おそれて局所を結束し、遂に病となりしことあり。

▲過傷と疥癬

小兒は皮膚非常に、軟き者なれば皮膚と皮膚と觸れてすりむくことあり、最も臀部腋窩及び頸部に多し、小兒健全にして肥滿せるものは、自然すりむくも羸弱なるものは、褶襞の、ぬれたるものがぶれて、生ず、故に褶襞は濕はざる樣に注意すべし、このすりむきの豫防として皮膚のふれる處には石松子の粉をふりまくべし、こは乾燥せしむる目的なり、その他日々適當なる溫湯に浴せしむるを可とす。

疥癬は皮膚内に生ずるものなり、一家に一人の患者あれば、一家悉く傳染す、故に初發の者は注意して、治療すべし、併し其治療とて大人とは自ら差あり、小兒は皮膚薄きを以て、あまり刺戟を加ふべからず、最も適當なる療法は「ペイリウバルサム」十五グラムを用ゐ、或は「アルコール」十分を加へて後に用ゆるも可なり、日暮に之を塗擦して翌朝芥子湯に入り、十分塗擦すれば疥癬蟲を撲滅せしむるを得可し、患者の衣服は充分洗滌すべし、成べくは煮沸して洗へよ、然らざれば硫黄にて蒸せば猶よし。

又寒中母の懐にあるものは、凍傷などは、なきものなれど、歩行し得るに至る時は勢ひ免るべからず、雪を掴みて戰爭をなし、其興に乘じ凍傷となることは、往々見る處なり、然る場合には凍傷となりし局部例へば足ならば足を充分雪を以て、こするべし、決して直ちに暖むることをなす勿れ、若し時過ぎて、皮膚甚だ乾く時は「ヨヂユームチンキ」をぬるべし、又は脂肪に火酒を混じてぬるべし。

▲日常の注意

小兒の際起居の習慣より鳩胸又鷄胸の佝僂病に罹るあり、これは小兒の臥寢法、負背法、抱法の不正より起るものなり、又學童となりて、此病になるものあり、机に寄りかゝるよりなるなり、故に讀書其他稽古をなす時は、椅子によりかゝるとも机によりかゝらざる樣にすべし、特に女子は脊柱骨彎曲を起し易し、故に時々裸體になして、脊柱の狀態を檢し若し、少しにても曲りし樣なれば醫師の診察を乞ふべし

▲口中の掃除

小兒の口中は必ず清淨になせ、乳齒と雖も成齒の如く注意せざれば後年に危害を生ずるなり、齒は人も知る消食機關の第一位を占め、且つ容貌に關係あり、故に常に注意して熱物或は冷物を食はず殊に硬きものをかみくだかざる樣になせ、小兒は鼻にて呼吸することを慣らす時は、口中自ら清らかにして肺に入る空氣も亦鼻中にて塵埃を防げばなり、猥りに粗硬のものを食する時は、齒の表皮なる琺瑯質を摩損し實質をあらはし、炎を起す事あり、又焮衝を起し或は、齒齦變色して、暗紫色となるなり、粗惡の磨粉を用ゐるよりも、寧ろ清水を、やはらかき齒刷にてそゝぎ齒牙を洗淨するにしかず。

▲齒の衞生

婦女子の齒は男子の齒よりも弱し其原因は種々あらんが先づ姙娠すれば酸味を好むこの酸味は齒に大禁物なり、その禁物を好むによる、又胎兒に齒牙の組織を形成する石灰質を與へざるべからず故に石灰分を多く食ふは必要なり、又或博士の說によれば子宮の病患が齒牙より來りしといへり、又懷姙中に齒痛を覺ゆることあり、その痛みは子宮の新に作用をなして漸々に神經を刺衝するより起るものにして、蟲齒より來るにあらざれば蟲齒の治療をなすも益なくして却て害あり婦女子は比較的男子より齒を健全に保つことを務むべし。

▲步行の注意

小兒の步行を始むるに注意を要す、身體の發育は頭部より、下肢に及ぼすものなれば頭部は非常に發達するも下肢は未だ發育せざるものなり、故に世の母たるものは、早く步行せしめんとて、無理に立たしむるものあり、これ人情なれども發育の不充分なるために不具となる事あり、故に能く注意すべし。

小兒の脈搏及び男女に於ける脈數の大體を知ること又婦女に必要ならん、十二歲までは漸次脈搏を減ずと雖も、婚嫁期には、一身に變化を起し增加し、又此期を過ぐれば再び減少す、六十歲以上に至れば更に增加す、胎兒は一分時間に百以上の脈數あり、婚嫁期は八十内外、三十歲頃は七十内外なりある生理學者の說に寒冷なる大氣は、溫暖なる大氣より新陳代謝を盛になすと然り寒中は暑時に比べて食慾すゝみ消化を完全ならしめ精神活潑となり、皮膚より排泄せる水分の量は減じて尿量の增加を見るものなり。

東洋婦人會

東洋婦人相互の親睦を計り世界女權の圓滿大成を企圖する目的を以て設立せられたる東洋婦人會の第二常集會は去月十五日午後二時より永田町なる清國公使館内に於て開會せられたり會長鍋島侯爵夫人の開會の辭に次で清國公使楊樞氏支那語の謝辭、次に坪井理學博士の演說あり、右終つて蓄音器を卓上に据へ數番の音曲を披露したる後ち直ちに會食に移り和氣靄々たる間に十二分の歡を竭して全く散會したるは五時頃なりしが當日來會者の重なるものは日本人側よりは會長鍋島侯爵夫人黑田侯爵夫人、三島子爵夫人、五島子爵夫人、清岡秋子、三輪田眞佐子、奥田、目賀田、原、山脇、の各夫人及び子爵長岡護美氏、清國人側よりは楊樞氏夫人以下清國公使館員の各夫人令孃等なりし

寢具の改良

誌友「婦女新聞」は家庭慰安の方法に就て常に用意周到なる注意を示しつゝあるが去月發行の誌上寢具に就てと題して左の有益なる記事あり曰く日本室に西洋風の寢臺を備ふる譯には行きませぬから矢張日本室には日本風の夜着布團を用ゐる外ありませんが、寢具はなるべく良いものにしたい、他行の着物を一枚少なくしても夜着布團は立派なのを平常用にしたいと思ふのです。無論よいといつても程度です、絹の皮に眞綿、そんな贅澤はいりませぬ。唯、綿もあまり堅くなくて、肌さはりの惡くないのをといふのです。つまり、他行の着物に相當する樣にといふのです。かう申すと家庭子は甚だ利己主義を鼓吹するとの誤解があるかもしれませぬが決してさうぢやありません。要は、所謂なき家庭の見え坊に反對するのです。良き眠は同時に善き働きを意味します。のみならず高潔なる品性は家庭の些細な注意から養はれる場合が多いのです。

寢衣を衞生的にすべしとは心ある人から常に唱へられる處、これは一般によほど良くなつたことゝ思ひますが、尙十分に注意すべきです。

寢具について、尙一つ御相談申したいのは、布團の仕立方です。從來の布團は大きいばかりで、寒さをふせぐといふ目的にはどうもかなつてゐない樣です。あり來つたもので、慣れてゐるからこそ誰も奇には感じませぬが、四角なあの布團(夜着は別として)といふものを或る便利な寢具を有してゐる人種から見ましたなら、その野蠻的にして人體に不調和なるに驚くでせう。此程あづま布團といふのが發明になつてをります。無論、理想的に出來てゐるとは申せますまいが、從來のものに較べるとどんなに、便利で、經濟的で、そして體裁がよいかしれませぬ。これらを參考して十分に工夫をこらしていたゞきたいものです。尤も、從來の仕立方に一つの長所があります。それは、布巾を其まゝに用ゐる故、はり直して、上下にし、前後にし、裏表にすることができるといふ點であります。この長所はある點までなるべく利用すべしだと思ひます。云々

女子と柔道

高等師範學校長　嘉納治五郎君談

（問）近頃は女子で柔道の修練をする人が漸々出來るさうですが、女子にも柔道は必要なものでせうか。

（答）世人の所謂必要には二種の意味がある。即ち食物は生活を保つに必要であると云ふ意味の必要と、音樂詩歌を學ぶは女子の爲に有益であると云ふ樣な輕い意味の必要とかう二種がある。柔道の人世に於けるは、食物が生活に於けるやうな意味の必要では無論ないけれども、柔道の修行は女子の體育上並に心育上有益である、即ち必要であると云ふことを自分は信ずるのである。又柔道とは全體如何なる性質のものであるかと云ふことに就て、世人は往々誤つた解釋を下して居るやうに思ふ。活潑なる壯年男子が氣を振り起して相互に勝負を爭うて居るやうな所を見て、斯る運動は女性には荒ッぽ過ぎると云ふかも知れぬ。又今日の進歩した教授法を知らず、昔流の稽古の法式のみを見て、柔道は危險なものであるとか、荒ッぽ過ぎるとか思ふ人があるかも知れぬ。乍併柔道と云ふものは、本來素人の考へるやうな荒ッぽい事をするものではない。一般の女子に對しては、女子に適するやうな方法を以て教授することが出來る、又特殊の目的を有する女子には、男性と同じやうな修練を爲せても支障あるまいと思ふ。

(問) では柔道を修練する法式に如何なる種類がありますか

(答) 先づ柔道の柔と云ふ辭を解説せねばならぬ。即ち柔道の柔は『柔かな』『素直な』と云ふ意義である。從つて柔道の本質は柔かに素直にして他人に勝つ方法を練習し、身神を鍛錬する所のものに外ならないのだ。されば自己の力を以て他者の力に抵抗すると云ふことは斯道の主眼とする所でなく、他者の力に順應して我力を用ゐ、我が體を働かせ、最も僅少の力を以て他者を制御し得る方法を講ずるを以て旨とし、激烈に肢體を働かせるよりは、素直に動かすと云ふことを、修行上に於ける普通の法則としてある。勿論競爭上時としては激しく體力を使用する事を利とする場合もあるけれども、夫れは修行上必ずしも肝要ではない。素直にして穩かなる方式に據つて修練するときは、舞や能と同種類のもの丶樣にも見えるである。また斯道の理法に隨ひ荒ッぽい操練をしやうと思へば、隨分過激な仕方も出來る。故に柔道は、修行者の種類に因りて程よく之を斟酌活用し得べく、兒童は兒童のやうに、老人は老人のやうに、女子に對しては女子に適するやうに、教授することが出來るものである。

(問) 兒童は何歳位より柔道を修むることが出來ますか。

(答) 兒童は歩行をなし得る已上は、柔道を教授することが出來る。唯だ極小い兒童に對しては、肢體の動作を無理に爲せぬやうに注意せねばならぬ。か丶る場合には可成經驗に富んだ教師を要する。注意すべきは夫れ丈けの事で、既に十分歩行し得る兒童以上の者には、十分柔道の修業を施すことが出來ます。

(問) 貴説に依り女子にても亦幼年者にても修業し得ることは解かりましたが、體育上柔道の特に價値ある點は何處にありますか。

(答) 先づ第一には身體の動作を自在にする。之が柔道の大に貴ぶべき所である。普通の體操では筋を動かす種類が大抵極つて居る。又多くは不自然な運動の法式である。體操の種類によると或種類の筋丈を多く動かして偏重の弊がある。然るに柔道は殆ど全身の筋を働かせる。反ることもすれば、屈むこともする、押すこともすれば、捻ることもする、又伸ばすこともする

而して其が皆な自然的である。本來體育の修練は或短日月間之を行つて後廢止るやうでは其目的を十分に達する事は出來ない。何でも永續しなければ十分の結果を收むることは出來ぬ。

また或種類の體操の如きは一定の動作を繰返すに過ぎない。同じ事を繰返へすと修行者に興味を與へない。興味がないと遂に倦んで來て止めるやうになる。然るに柔道に至つては、技術の熟練にも理論の講究にも殆ど極度がない。何年修めても其前程がある。夫れ故にこれは體育上必要だと云うて無理に練習を强ずとも、修練して居る間に自然興味が生じて來るから、修行者はその興味に誘はれて何時までもこれを研究する氣になる。之は柔道が普通の體操と餘程趣を異にする點である。且つ現今の如き多事多忙なる時世に於ては、何學を修め何業を營むに就ても、一定の時間内で可成



ぼけに菜の花（池の坊生花共進會の出品）

多くの結果が得られるやうに努めなければならぬが、柔道は此點に於ても大に有効である。何故なれば柔道の修業たる、單に身體を鍛錬するの良法たるに止まらず、併せて精神を鍛錬する方法として最も効力多き上に、又護身術としても男女老少を問はず缺く可らざる妙技であるからである。故に此點より考へて見ると、柔道は複雜且つ煩忙なる方今の社會に於ける體育法としては最も有益多趣なるものである。以上は專ら柔道の價値即ち効力に關する說である。

（問）　次に女子の護身術としての効力に就き伺ひたい。

（答）　男子と女子とを問はず、柔道は護身術として適當と云ふよりは寧ろ必要なものである。何故なれば人を襲撃するには今日は種々の方法ありて、或は爆裂彈を擲ぐるものもあれば、短銃とか匕首とかを使用するものもある。從つて他の攻擊を防禦するにも矢張同じ様な武器を使用する、けれど突然襲撃を受けた時には、爆裂彈や短銃は愚か、刀劍、棍棒でさへも急に持つて來る譯にはゆかない。所が柔道を心得て居れば、たとひ不意に他人に押付けられても、夫れを撥返へすことが出來るし、又打掛けられても身體を轉はして避けることが出來るし、又亂暴者に出逢つても直ちに取押へることが出來る。加之危險と云ふものは他人から襲はれて起るもの許ではなく、時としては不慮の危險、高い所から墜つる事もあれば、滑つこい道路に顚ぶやうな事もある。然るに柔道を修めて居るものは、かゝる場合に臨んでも、自己の身體を自在に取扱ひ得るより、普通の人ならば死する場合にも怪我をする位で濟み、怪我をする場合は着衣が汚れる位ゐで濟む。且つ又柔道の修練は、人の心を修め膽を練り、沈毅剛邁の志操を大に涵養することが出來る結果、獨り形體上危險を感ずる場合のみならず、人類社會の種々なる事變に遭遇しても、能く臨機應變の方法を取りて之に處し、寄せ來る幾多の禍害を防守し又は輕減することが出來るものである。

（問）　方今女子で柔道の修行をなし居る者は多數ありますか。

（答）　いや、たんとはない、男子と比較すると誠に僅

少である。自分の所へも以前から屢々志願者があつたけれど、女子を男子と同一道場で教へることは教育上好ましからぬ事であるし、又縦令女子丈を特別道場を設けて教授せしむることにしても、適當な教師を得ることは餘程困難である。故に已むを得ず少數の女子に限りて、或時は自分が自ら教授の任に當り、又或時は門弟中より適任者と認むる人物を擇び、餘暇に來て貰つて間に合せて居るやうな次第である。併し現在修行して居る女子の中で、一と通り他人に教授し得る伎倆を備へたものが出來るやうになつたならば、女子の柔道も一層擴張し普及さるゝやうに進むであらう。



白林にウン丁子（同上其二）

（問）昔日は女性に優れた柔道家がありましたらうか。

（答）昔時も今時と同じ事で、一般の女子で柔道の稽古を積だ者は左程多くはなかつた。併し武家の妻女には相應に達した者も尠なくなかつた。或時先師から聽いた話に據ると、一日同門の女子が一人で上野邊を歩いて居つた。然るに亂暴にも或男子が不意に後から其女に抱付いた。で何の猶豫もあらばこそ、咄嗟の間に起倒流の形にある術で美事に其男子を

前に擲付けて、素知らぬ顔をして自家へ歸つて來た。其男子は痛く面目を失つたと見えて、其儘追駈けて來ることも爲なかつたと云ふ事である。兎に角人世は種種な禍害に満ちて居る上に、特に女子は他人より迫害を受くる恐れあるものなれば、設令今日の如き文明社會に生れ、生命財産に對しては既に法律の保護を受けて居るにしても、それのみに依頼して安んせず、自衛上一と通り柔道を心得て置く必要があるのである。

家庭衛生 胃の攝生法

醫學博士　長與稱吉君談

胃の養生を説くには、先づ順序として、胃の生理の概要を述べて置く必要がある。

元來我々の胃には、二種の重なる官能がある、即ち其一は分泌の官能であつて、他の一は運動の官能である、其他胃には知覺官能、吸收官能などをも備へて居るが、夫は前の二種の官能に比すれば、左迄重要のものではない。

分泌官能とは胃壁の粘膜の中にある多くの腺から、一種の液、即ち所謂胃液を分泌するを云ふのである、此胃液の中には、鹽酸と『ペプシン』とが含まれて居て之が爲に我々の嚥下した肉類などが、消化せられるのであつて其狀態は恰も水の中に入れた氷砂糖が漸く溶けてゆくやうなものである、然るに此鹽酸と『ペプシン』との胃液の中に含まれて居る量には、一定の度があつて、其量が適當であれば、胃は健康を保ち、誠に消化がよいのであるが



金盞花に白藤

若し其量が多きに過ぐるとか、少きに失するとか云ふ場合、即生理的の平均を失ふた場合には食物を消化する作用が弱つて、所謂消化不良に陷るのである。

運動官能とは名の現はす如く、胃の運動によりて其内容を一定の時間内に、腸に送る作用を云ふのである。

故に分泌官能は醱酵素及鹽酸の爲に營まる丶化學的作用であつて、運動官能は器械的作用である。

胃液の中に含まれて居る鹽酸の量、動物の種類の異なるに從つて夫々相違があるが、肉食動物は肉のみならず骨迄も消化しなければならないのであるから、其胃液中の鹽酸の量の多いのは自然の勢である、即ち其



量を檢するに、凡〇、三乃〇、四「プロセント」ばかりある、之に反して菜食動物は、其食物の關係上鹽酸の必要が少いから、其含量は僅に〇、一乃至〇、一五「プロセント」に過ぎないのである、吾吾人類は肉食もすれば菜食もするから、胃液中の鹽酸の量も、丁度肉食動物と菜食動物との中間であつて、歐洲人、殊に獨逸人に就て調べたところでは、〇、一七乃至〇、二「プロセント」とを含んで居る、余が日本人に就て調べたところでは、先づ〇、一二乃至〇、一六「プロセント」と認めてよい。

さて運動官能はどうかと云ふに、夫は食物の種類と分量とで相違があるが、余は日本人の食物の分量を平均して、普通一食を飯三椀、牛肉三十匁、豆腐半丁と假定し、之に就て試驗したところが、其食物が正味五

時間で全く膓の方へ送られて了ふと云ふことを知り得た、之を先づ運動官能の一位と看做してよいのであるが、然し之は幼時からの習慣によつて、非常に異つて來るもので、農夫の如きは一度に五六椀宛の飯を一日四度も食べても、胃の官能は十分之に耐え得るのである、斯くの如く一位以下に下つた時、即前に擧げた食物を五時間にて消化して膓に送ると云ふことが出來なかつた時には、立派に病氣と云つてよいのである。

生理の事は先づ是くらゐにして置いて、次に胃の攝生に就て少しく述べて置かう。

往時は胃の攝生法と云つても、極めて單純で、消化のよいものを食ふとか、食物の量を減らすとか云ふに過ぎなかつたのであるが、學問が進んで、胃の生理が明らかになるに從つて、其養生法も實驗的に調べられるやうになつたので、唯軟な食物を攝るとか、食量を減ずるとか云ふばかりでなく、上に述べた二種の官能を試驗して、少しでも害があると認めたことは之を避け、又少しでも益があると分つたことは何處までも之を勵行するのであつて、つまり生理作用を實驗的に確めた如く、養生法も亦實驗的に基礎を設けられたのである。

第一に胃の養生法として守らなければならない必要は、咀嚼即食物を嚙みこなすことである、是は實に大切で、十分注意して勵行しなければならない、世界のあらゆる動物の胃は、之を二種に區別することが出來る、即ち其一は筋胃、他の一は腺胃である、筋胃とは胃壁の筋肉が著く發育して居るもので、其筋の力で胃の中の食物を器械的に壓潰してこなす働きであるたとへば鷄の胃などは、之に屬する方であつて、食物を咀嚼しないで、丸呑しても、胃の筋の力で之をこなすことが出來る、之に反して腺胃の方は、胃壁の筋の發育は甚だわるいが、其壁の中に多くの腺があつて、夫から分泌する液の化學的の作用で、食物がこなれるので、筋の働は唯其食物を膓の方へ送るに過ぎない、人間の胃は此腺胃の方に屬するのであるから、丁度鷄が其胃でこなすやうに、人間は食物を胃に送る前に、

之を口の中で嚙みこなさなければならない。

此天然的研究によつても、食物を咀嚼すると云ふことの必要がわかる、加之咀嚼は唯器械的の作用があるだけではなく、口の中に出てくる唾液の中には、プチアリン」と名くる醱酵素があつて、食物中の含水炭素、即米、麥などのやうな物を消化させる作用がある、故に咀嚼が十分であればあるほど、食物は器械的と化學的の作用を受けて、大に胃の力を補けることが出來る、尚其他に咀嚼についての利益は胃液の分泌が咀嚼の爲に反射的にたかまると云ふことで、咀嚼の時間が久しければ、其間に胃液が分泌して食物を消化する用意をなし、口腔から降りて來る食物を待ち受け、直に消化に取りかゝることが出來る、殊に胃の弱くなつた人は、猶更反射的に胃の分泌をたかめて胃液の不足が補れるのである。



牡丹

丁寧に咀嚼するとしないとは何れも幼時からの習慣であるが、一般に之をおろそかにする人が多い、胃病患者に就て調査して見ると、大抵一度の食事を五分か七分ですます人、即ち早食の人は胃病に

罹ることが多いやうである。

余の實見した所では、肉眼で見て十分に咀嚼せられて居ると云ふ迄には、三椀の飯に凡そ二十七分間かゝる、即ち一椀の飯を能く嚙み碎くには九分間、まづざつと十分間宛かゝる割合である、故に余の病院に來る患者には、二椀の飯ならば二十分、三椀ならば三十分かゝつて食事をすますやうに注意をして居る、是も初めの内は矢張早く嚥下してならないから、時計をながめながら食事をするやうにすゝめて居る、先づかうして二三週間も習慣させると、成程腹の心持がよいと云ふので、今度は早く食事を濟まさうとしても、夫が出來なくなる。



黄つゝじ

我々は一日三度宛食物を攝るのであるから、口で能く嚙みこなすことが假りに唯少しばかり胃を助けるに過ぎないにしても、一生涯の中にはどの位の利益になるか殆ど想像し得られない程である此攝生法は別に費用を要するわけでも、用意がいるわけでもなく、直に次の食事からでも實行し得られるのであるから、余は一般に世人が之を履行せんことを切に勸める。

次は身體の運動のことであるが、此運動は勿論胃の

養生にも大切であるには相違ないが、夫には時期があつて、いつでも運動さへすればよいと云ふ譯には行かない、食事を濟ませて直に身體を動かすと云ふことは著しく胃液の分泌と胃の運動とを妨げるものである之に反して、適當の時刻に適當な運動をすれば胃の官能を助ける、之は動物に就て試驗しても、人間に就て試驗しても同樣である、食後直に運動すれば、五時間にて消化すべきものも、五時間半乃至六時間を要し食後三時間位過ぎてから適當に運動すれば、五時間にて消化するものならば、四時半位で消化してしまふ。斯の如き食物の消化を完うするには、身體を運動する時期を擇ぶ必要がある、余は先年小學校の生徒に胃病の多い原因は、食後の運動にあると云ふことを統計的に說いたことがある、通例小學校では食後直に運動させると云ふことになつて居るが、之は一體よろしくない、前に述べた通り、食後直に運動すれば、胃の官能を害するのみならず、子供心に早く食事を濟まして遊びたいと云ふことから、食事を急いで濟ませる、即ち咀嚼をおろそかにする惡習慣を伴はせる、此害が幾年もつづくと大切の靑年時代を胃病の爲に苦んで暮すやうになるのである、故は余は學校の運動時刻を改めて午前十時より十一時迄とし、十二時には食事の爲に三十分の時間を與へ、其食後には運動をさせないで習字唱歌などのやうな、やさしい日課につかせ、夫から後に運動を



柳に杜若

させるやうにすることを主張するのである。
兎に角食後の運動はよろしくない、先づ三町や五町の道を徐かに歩む位は差支へないとしても、食事を濟ませば直に運動をすると云ふことが、攝生法に適つて居ると思ふは大なる間違である。

次には食事の時刻であるが、前に述べた如く健康なる胃は凡そ五時間にて普通の食物の消化を了るものであるから、少くも食事と食事との間は、五時間を隔てなければならぬ、然し五時間目に食事をするとしても、之には胃が十五時間のべつに働かなければならないわけであるから、尚其よりも三十分間か一時間も多く隔てるやうにすれば、胃は暫く休むことが出來て、次の働をするに



最も都合がよいのである、又胃の運動は器械的の働であるから、永く休んだあと即ち朝の中は最も能く働くことを得るが、日中になれば最早少しく其働が弱り、晩には尚一層弱て、其働が鈍くなつて居るから、食事と食事との間の時間は、午前よりも午後の方を多く隔てなければならぬ、故に理想的に云へば、朝食と晝食との間には、五時間半、晝食と晩食との間には六時間を隔てることを要する。

ところが世間の實際の食事時刻は、此理想の時刻には甚だあてはまつて居ない、殊に長くする必要のある午後の時刻の方が、却つて午前よりも短かくなつて居るのである、合理的の時刻は、朝食は七

時、晝食は十二時、晩食は七時、晝食は十二時であつて、これはあまり大きな間違はないが、晩食は五時頃に濟まし、殊に冬などは、明るい内にと云ふわけで、既に四時頃に濟ましてしまふ。

家族生活の處だけではなく、寄宿舍などでも矢張此弊がある、即ち朝食は六時乃至八時、晝食は十二時、晩食既に四時から賄所の戸を開けるといふ風であるから、空腹を覺えて、つい寢る前にも亦何か食べると云ふやうになる。始めて寄宿舍にはいつた時分には、至極元氣で血色さへよかつた學生が、其卒業に近づく頃には、身體がよわり、顏色も蒼白くなる者が多い、之は一つは過度の勉強の爲であらうが、食事の時刻と運動の時刻とが不適當であつて、胃病を起すと云ふことが主なる原因であらうと思ふ、故に寄宿舍の管理者には十分に注意してもらいたい。



かきつばた

次は滋養物のことである、此問題は追々盛んであつて誰も注意するやうであるが、さて醫者でも素人でも最もよい滋養品と信じて居る食物は、牛乳、「ソップ」、鷄卵などである、無論此等の品は滋養物に違ひないが、米、麥、澤庵、干物類なども之と同じく滋養物である、豆類、豆腐、飯、蓮根などの

滋養價を、牛乳雞卵などの滋養價に較べて見ると決して少くはない、唯牛乳や雞卵などは消化し易いから、弱つた胃に都合がよいと云ふだけである、然るに別に胃が弱つて居ない病氣でも、病氣とさへ云へば、醫者が粥、牛乳、雞卵などばかりを食べさせて、漸々胃の消化の力を弱らせると云ふ弊がある、余は決して牛乳、雞卵などを排斥するわけではないが、消化の出來る以上は、是等の食物にばかり依賴しないで、普通の食物を用ゐんことを望むのである、世間では飯一椀を減らして其換りに牛乳一合飲むと云ふやうなことをして居るが、之は甚だ心得違であつて、實は牛乳一合よりも飯一椀の方が滋養價が多いのである、故に消化さへ出來れば飯でも魚でも、野菜でも、どしどし食べて、牛乳や「ソップ」などは茶とか水とかのかはりに用ゆるがよい、牛乳や「ソップ」さへ飲めば、體が達者になると思ふのは大なる間違であつて、是等の物は唯喉頭の乾きをとめる爲に飲むといふ位に思つて居れば損はないのである、牛乳の二合や三合を飲むからと云つて、他の食物を減らすは實に不都合なことである、

胃の養生法の奥の手は、胃を强固にするにあるのであるから、吾々は決して薄弱な胃を造つてはならない、木でも石でも消化するまで仕上げると云ふ勢でなければならない、胃は如何樣にも習慣の付ものであるから、之に虛弱な習慣をつければ、直に虛弱になつてしまふ、三椀の飯を二椀にして、牛乳を飲むと云ふやうなことをすれば、胃は之に慣れて三椀の飯でも堪えられなくなり、身體は營養の不足の爲に衰弱するやうに立至るのである、之に反して成るべく米だの肉だのを澤山食べる習慣を付けて行くと、前に話した一位以下の胃でも、だん〳〵に導いて一位以上のものにすることが出來る、即弱くするも强くするも唯習慣と鍛錬とにあるのである、歐洲の學者も胃は保護するを要するが、然し又練磨するを要すと云つて居る位であるから、無理をしないやうに氣長によい習慣を付なければならぬ。自分の專門の事をあまり持ち上げ過ぎて、我田引水のやうではあるが、胃は我々の身體の中では、最も大切な機關であつて、之を一國にたとへて言へば財政機關であるから、十分其健全をはからなければならない、他の身體の機關の病氣に罹るを防にも、第一胃を丈夫にして、身體の營養を盛んにすることが最も必要である。

西哲が健康なる精神は健康なる身體に宿と云たが、余は精神の健康は胃の健康に依と云てもよいと思ふ。

生花十二ヶ月（五月の花）

糸柳の活方は糸を長く埀れるものなれば、茶席等の掛け花に活け、或は船ばた等にも活けるものなり。柳は木質柔かにしてため直し安きものなれども、其の節の所は極めて脆きもの故撓め直す事は出來ず、又其の細き糸の所は中々撓め直しの出來ざるものなれば、始めより其の糸の埀れ方に注意して切り給ふべし、「眞」「添」に二本三本用ゐて、「體」には他の花を用ゆ、而して其糸の長短は圖と見合せて程よく挾み體よくすべし、「體」には杜若或は白玉を用ゆるときは誠に氣高きものなり、白玉の用ゐ方は今迄述べし處を考合して活けらるべし。杜若は葉の物なれば、葉の組み合せ方に定めあり、杜若のみ活けるときは花は三本五本がよけれども、他の花の根〆に用ゆるときは二本三本をよしとす、其の葉の組合せ方は先づ手にて靜かに一枚宛に離し、葉の先きにある爪を葉の裏表てにならぬ樣にして、向ひ合せる樣に組み合せ、葉の長短を程よく整へて用ゆべし、「體」及び「胴」には葉の裏を見せ「眞」には表を見せ、「副」には少し「そり」あるを用ゆ、而して體の葉は必ず三枚にして暑す事は出來ざるなり是れを「前葉」といふ、其の他は圖に就いて考へ合すべし。

●●注意此の花初期の内には花は葉より低く活け、中頃に至りては花は葉より高く活け、晩期に至れば枯れ葉等交ゆるもよし。

又此の種の花は一般に注意せざれば、板、糸、に見ゆるものなれば、斯樣にならぬ樣注意して、少し斜めに活くべし。

板と云ふのは、自分の顔に葉の面が正しく對するのを云ひ、糸と云ふのは板に直角となるをいふなり。

茶室に用ゆるものは餘り規則立ちたるを好まず、只斷り丈けに其の形を取るものにして、活花科には加ふべからず。斯かれば活け方とて別になけれども、先づ糸長き柳を見立て切り、枝の都合によりて、五本七本許りの糸を緩やかに垂れしめ、根〆には白椿一枝位をあしらふべし。

前述の如く、別に規則なければ、「眞」「副」「體」の名を付し難し、強ひて其の名を付けんとせば、長く優に埀れしを「眞」と見、椿を「體」、柳の曲りたる所を「添」とも見るべきか。

娯樂實用 家庭園藝

田中花浪

躑躅に殘んの春を送り、藤花に菖蒲に、迫まれる初夏を迎へて、青葉若葉の趣深き今日此頃、園藝を行ふには、いとぞ好い時候であります。そこで、清新なる家庭遊戯の一として、娯樂半分、庭園の隅なり、脊戸の段畑なり、又は勝手元の空地なりで、お試しなさる、道しるべとして、五月の園藝作物の、栽培法をお話し致しませう。

とは言へ、月こそ同じ五月、作物こそ、同じ園藝作物であるけれど、此五月には、早や充分生育して、興りの色も濃き、花を咲せてゐる作物もあれば、愈々これから初りの、此五月に、種子を播いて、さて日を追うて栽培にとりかゝらふといふ、作物もあります。

で此處には、只本月を以て下種すべき、園藝作物のみを掲げる事に致しました。

▲コスモス

春も闌の四月から、五月つかけて種子を蒔けば、旋て秋風身に泌む十一月頃、日本の名花たる菊の花と色を爭ひ、香を競うて、開花致します。庭に落葉の影寒き折柄、地を抽くこと四五尺、瀟洒の花をつけたる樣は、言ふにいはれぬ、愛らしいものです。コスモスは一名大ハルシヤ菊とも云ひ、菊科に屬する植物で、此中には、夏コスモスとて、炎暑のいとひもなく、夏の眞盛に開花するものもあります。

種子は普通温床へ蒔くのです。而して一寸ばかりに伸びた頃に、一尺を距てゝ、園地に定植すれば好いのです。

温床は學理的に設けますと、中々面倒で厶いますけれど、家庭でお試しになるには、左まで、完全なもので無くてもよろしい。即ち南面に傾斜せる、地面より一段高い床を設けて、東西北の三方と、其上面を、炭俵かなんかで、圍ひして、雨のふる日や寒い日や夜の外、その上の圍ひを取除くやうに心掛ければ、それで結構です。

好く世間では、種子を播く前に、床地に水を注ぎますが、其は眞に好くない事、爲めに氣温の透射を妨げ且つは土壌を固結させて、發芽を害ひます、ですから種子を蒔いて、薄らと、其上へ、砂氣の勝つた土を覆せて、如露か何かで水を注けてやる樣にするのが肝腎です。

園地へ移植した後は、すぐと油粕を水に溶かしたものか、プラントフード(肥料の名)の溶液を與へ、其後時々、花咲く朝、花散る夕、稀薄な肥料(前の)を施せば好いのです。と共に時折、日向水を施す事を、忘れてはなりませぬ。

總て花卉に與へる水は、必ずしも一度日に溫つたものでないと、却つて害を與へます。ですから、園地の傍へ、大きな瓶を据えて、其に一ぱい水を湛えて、日向水を造つて置く必要があります。

園地へ移植した時は、僅か寸許であつたものが、七月頃になりますと、見かはす程に生長致しますから、一二度心を摘みとるのです。すると其摘み取つた跡から、澤山な枝梢を出して、花蕾が澤山のります。コスモスはいと强健なる一年草でありますから、生育が早う厶ります。併し非常に風に弱く、特に花を開かんとする時は又一入、ともすれば風に靡いて、見すぼらしく、倒れ伏しますから、忘れぬ樣に支へ柱を立てゝおやりなさいませ。

さすれば、何の憂もなく、時しり顏に、秋氣を吸うて、直徑二寸ばかりの、白色又は淡紫色の花を付けます。我日本に傳來せるコスモスは以上の二種のみに、限つてゐますけれど、歐洲では絞り等の珍品があるさうです。とはいへども其色の如何を問はず、黃金色を漂はした、蕋を持つて、芳香馥郁として膚に迫り、袂に薫るが、西洋草花中の、逸品であります。

▲金盞花　松菊

雨泥の泥に咲いたり金盞花

左程、土地を好き嫌ひせぬ花で、普通は秋に種を蒔いて、晩春より、初夏へかけて、花を賞するものでありますけれど、それよりかは、却つて春播にして、秋

に花を眺める方が一段趣味が深い。一名長春花といふ程あつて、頗る花期の長いものです。

春とは名ばかりの、未だ風の寒い、二月頃か、三月頃に種子を蒔きますには、是非とも、温床でなくてはなりませぬが其代り夏に花が咲き五月に下種するには十分耕した、普通の土地で結構です。

金盞花は、花壇に植ゑても、鉢に植ゑても、畑に作りて切花とするにも、適當である、重寶な草花でありますから、其目的に從つて、五六葉を出した頃、夫れ夫れの場所へ、移植なさいまし。其時前にお話した、油粕汁かプラントフードを施し、後一度、同樣の肥料を與へますと、奇麗な花をつけます。

花の形は菊のやう、單瓣もあれば、重瓣もあり、草の丈は一二尺であります。花の色は、樺、淡黃の二種が普通です。併し往々、鮮黃色、又は心に近き所は白く、外部は樺色の奇種もあれば、心は暗褐色で、瓣が鮮黃色の珍品もあります。

金盞花は、土地を擇ばない强剛のものであるとはいへど、肥沃の土地に栽培するのに、越した事はありませぬ。

▲鷄冠花

鷄頭やはかなき秋を天窓勝　大祇

菊と共に、秋のあはれを彩る草花で、其莖の頂に鷄の鷄冠に似たる、花梗を出し、其處へ小花を密生させますから、かく鷄冠花と呼ぶのです。高さ二三尺栽培は頗る容易です。

鷄冠花を栽培するには、四五月の頃、能く耕き返した床地に、十分肥料を施して種子を下し、極めて薄く土を被せますと、程なく發芽致します。其處で四五葉をつけた時、圃地へ定植すれば好いのです。一二寸に生長する迄は、發育は遲緩ですけれど、それから後はずん／＼生長致します。

何分にも鷄冠花は、外氣に對して抵抗力の強いものですから、播種すれば、土を被ふた儘、濕り氣を絶さないやうに、心掛てさへゐれば、別條ありませぬ。ですけれど更に其上へ切藁を覆うて置くに越した事はあ

りませぬ。其花には、赤、白、黄等の種類があり、又斑のものもありますが、とりわけ、赤色のものは、最も普通品です。

野分のあした、千草の亂れ臥す中に、一入あはれに鷄冠花の、倒れてゐるのは、皆様は常に御覧なすつて被在いませう。眞に此鷄冠花は丈けが長い丈けに、風に弱いものですから、支柱を立てゝやる事を忘れては不可ませぬ。其他別に手入をする必要もありませぬが、一二度肥料をお與りなさい。肥料は油粕汁も適當なものですけれど、惡臭をおいとひなければ、人糞尿の十分腐熟した、稀薄のものを與るが一等です。



金盞花

鷄冠の中には、種々の品種が厶ります。

葉鷄頭美くし過ぎて花もなし　可[illegible]

の如く花のない代りに、葉に紅、黄、綠、紫等の色を染める、高さ三四尺のものを雁來紅と稱へ、圓錐形の花を咲かせるものを播箒鷄冠花、其花が細長くて、房のやうに垂れてゐるものを老槍穀。丈小く五六寸より一尺に充たぬものを壽星鷄冠花。花の球狀なるを玉鷄冠花。花梗の先端が分岐れてゐて、紅色の密花を咲せるものを槍鷄冠花と申します。



えぞ菊

鷄冠花には斯く種々の變りものがありますけれど、其何れを向はず、栽培法はいと容易……前にお話した通りで厶います。……併し其大さに因つて株間を異にせねばなりませぬ。鷄冠花の種子を採收する法は、頗る手易いものです。即ち濃黒色を染めて、光輝を發せる頃に花梗と共に切り取つて、日蔭で干し、後うち落せば好いのです。

▲翠菊

本邦及び歐米にて、珍重さるゝ草花であります。春

に種子を下して夏に花を咲かせるのです。

同じ春ながらも、三月半頃に種子を播くには、透光の可い、北風の吹かぬ、温暖な地を相して、馬糞を床地に布き、極めて完全なる、温床を造りて、其處へ下種せねば、ともすると寒氣に害せられますけれども本月あたり種子を播きますには、那麽ことを爲ないで能く耕した、而して充分肥料を施した畑地に畦を立て、條播にすれば結構です。種子を蒔いた後は水を與へ、又は稀薄なる水肥を與へる事は、定つた事、更に始終濕り氣をそへる爲め、切藁を被せる事が必要です（何れの場合も下種の際に覆ひし切藁は、發芽の時に取除かねばなりません。）

發芽した當時は濕らないやうに、水を灌ぐと共に日中は十分、陽光に當てねばなりません。

これを移植致しますには、巾二尺の畦を立てゝ、畦の底に、堆肥又は人糞尿を施し、一尺又は一尺五寸の株間に、二三本づゝ植ゑ込むのです、すべて甚麽草花を移植するにも、必ず晴天の夕刻か、さなくば曇天の日を選ばなくてはなりません。移植の折には、播種の際と同様、植ゑ了つて水を注ぐのです。

翠菊は上述の如く、畑作りにする外、鉢植として賞観してもよろしい。其何れの場合に拘らず、移植後一二回、水肥又は油粕汁をおやりなさいまし。

▲牽牛花

蘭雄

朝はものゝ朝顔の花も新らしき風薫る露の籬、東天僅に紫立つた頃しも赤く、白く、又紫、柿などの濃淡の色も、生々して、朝顔咲ける庭の風情、げに心地よき事なる哉。

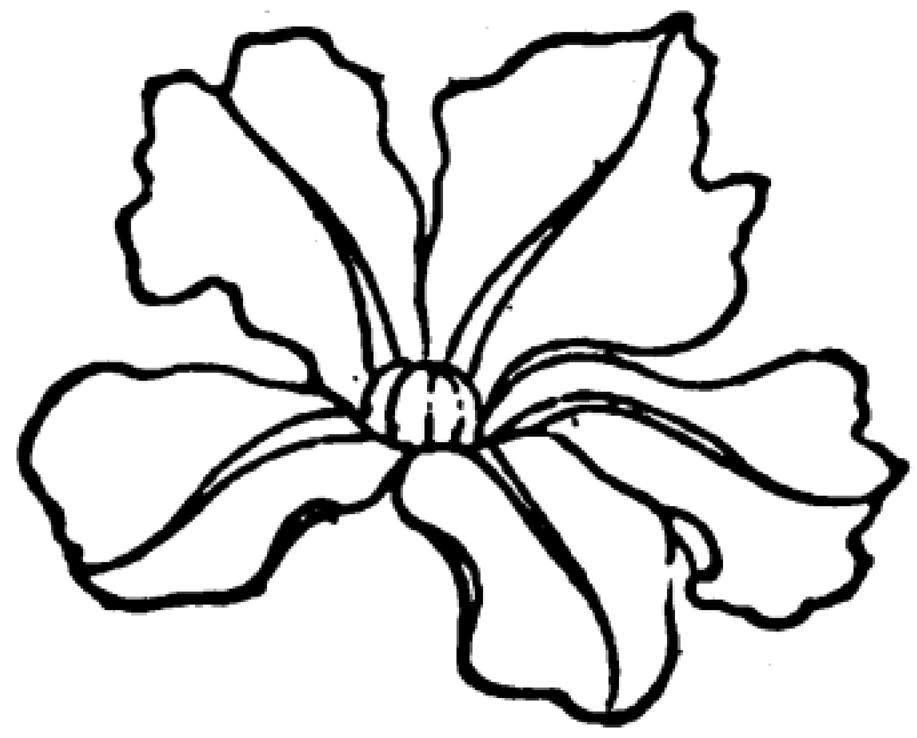
牽牛花は眞に日本的の花であります。人は散りきはの好い、櫻をほめて、何故一朝にして開き、忽ち萎む牽牛花の放豪をほめ賛へないのでせう。況んや、

朝顔の朝な〳〵に咲きかへて
　盛り久しき花にぞありける

との後水尾院の御製にもある通り、青簾をゆする風の涼味に、心神を洗つて樂む頃から、秋なれや、葎に集く虫の音も、葉もなき梢に揺ぐ月光のやうに　澄み

渡るそのくれ迄、花勢の衰へぬ、随分花期の長いものでありますものを。

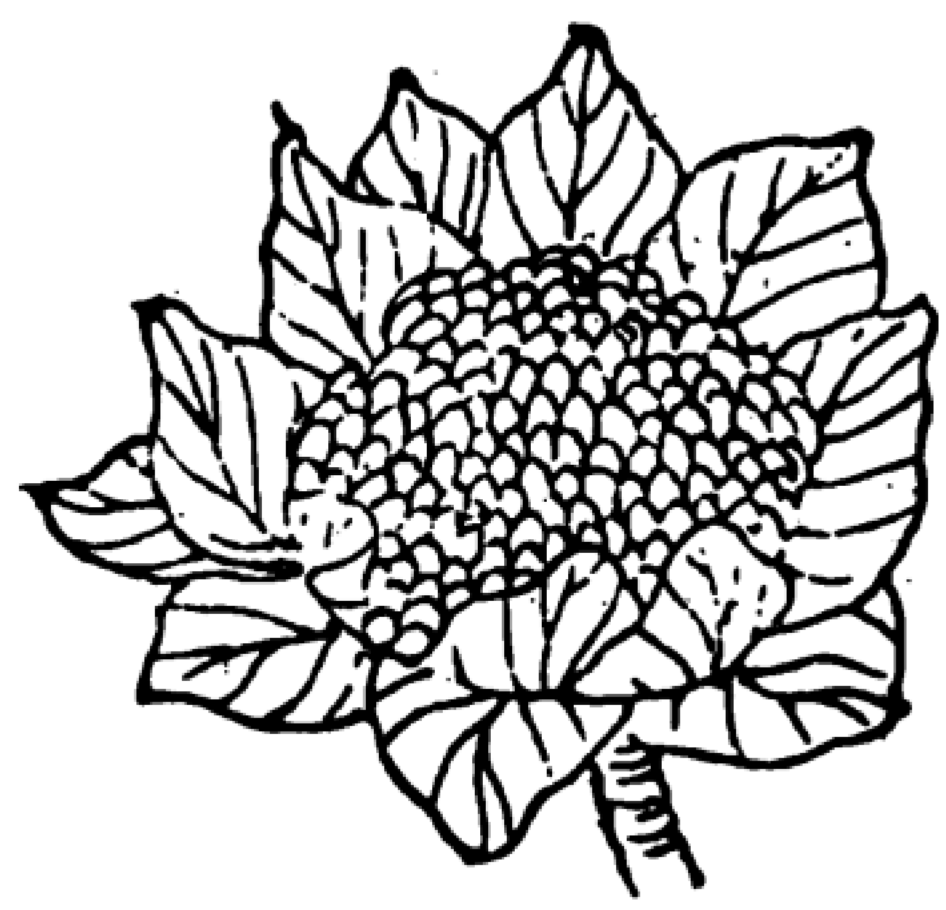
牽牛花を栽培するには、之を床地に蒔く法と、直に鉢蒔にする法との、二種が厶います。併し、其内安全なる法は、床蒔にする方です。さり乍ら、變り物を作るには、鉢蒔にして、肥料を遣らぬやうに爲なくては駄目。


朝顔變り咲

牽牛花を播く好時期は、四月の中から五月の初旬です。而して之を床蒔にするには、温暖にして、日當の好い處を選び、出來る丈け耕破して、更に篩もて表土を篩分けにし、細竹をたわめて匡劃を正し、其處へ種子を下すのです。種子を埋める深さは、成る丈け淺い方が可いし、被土も成る丈け輕い方が好いのです。かく被土了らば、直ちに水を注ぎ、發芽する迄莚の類を被せて置くのです。

やがて、葉が一二枚乃至三枚位、發生した頃に、鉢へ移しかへるのです。鉢の土は元越土が一等で、更に之を丁寧に篩ひ分けしたものでないと不可ませぬ。

移植後は時々プラントフードの溶液を與へ、又毎日毎日温水を注いでやれば、日毎に生長致しますから、透さず支柱を立てゝやるのです。支柱には、帽子作、行燈作、櫓作り等、形に因つて種々の方法がありますけれど、最も普通のものは帽子作りであります。



牽牛花を栽培するには、枝蔓が出るとすぐ、葉際から摘みとり、大花を咲かせやうとする際は、五六葉の本葉を殘して惜氣なく摘みとり、其處から一枝乃至三枝を出さしめ、蔓が三尺程に伸びた時、更に又摘みとつて、蕾も亦、一つ隔りに摘除し、花が萎めば、正午迄に切取らねばなりませぬ。斯様に精を出したとて、花が日毎に小さくなると、肥料をおやりなさいまし。さすれば兩三日中

に、又も勢力を輓回致します。

要するに牽牛花は小葉にして、大花を得るのは、栽培の一大目的でありますから、返す〲も此點に御注意なさいまし。

牽牛花の種子は、固有に色澤を有せる、外觀一定せる、充實のよい、大きいものを選ばねばなりませぬとはいへど、變り種を栽培するには、カジケタ小さな皺の寄つた、遲く採收した、生熟の不充分なるものをお播きなさいまし。牽牛花は苗の幼い頃に、莖の色澤は、花色を撰別する事が出來ます。即ち、莖の赤いものは其花赤く、薄赤は桃色、紅色は紅飛、柿色は濃柿、藤紫は淡紫等で、紺、紫、瑠璃色等は、發芽の前迄、根元にそれ〲固有な色を染めてゐますし、納戸、鳩羽、鼠、栗皮等も、各自莖に固有花色の淡色を表はしてゐます。其他絞りの花は、發芽の當初は、眞白ですけれど、程なく固有の絞りを染めまする。

牽牛花の花には獅子咲、雀咲、牡丹咲、丸咲、孔雀咲、臺咲、桔梗咲等の珍品がムいます外、花を賞せないで、葉のみを賞觀する風流なお方もムいまして、葉にも亦、林風葉とか、渦葉とか、其他雨龍葉、鍬形葉、七五三葉、笹葉、錦葉等の種々變つたものがムいます。此等の事はとても紙面の都合で、一々申上げる事は出來ませぬから、單に此牽牛花の栽培のみに限らない、園藝全般に關して質疑がムいますれば、女學世界編輯局宛、葉書に認めて御質問下さいまし。

(以上草花、以下蔬菜)

▲甘　藍(キャベツ)——又たまな

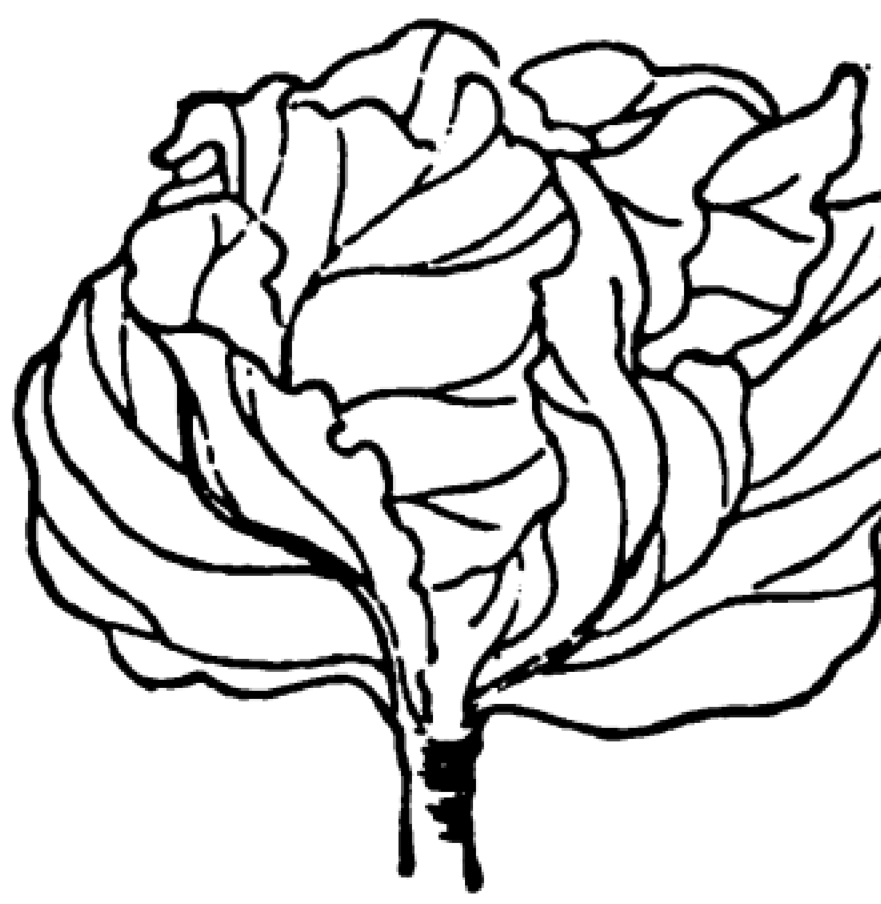
甘藍は蔬菜中でも大王でせう。一種固有の芳香を有し、肉と煮込にして、此上なく美味、外、肉汁に和し、生菜に供し、又は酢漬、鹽漬に致します。甘藍は血液を淸め、體質を養ひ、壞血病を平治致しますけれど座食者は餘り澤山食べると胃を害ひます。

甘藍には球葉甘藍、球花甘藍(花椰菜)球莖甘藍、緑葉甘藍の四種があります。就中、普通、多く栽培されてゐるものは、球葉甘藍中の普通甘藍……これには兒持甘藍といふ一種あり……で、中にもアーリーニュー

ヨーク●アーリーサンマー●オウタムキング等は有名の品種です。

甘藍は左の三期に別つて栽培するのです（1、九月頃下種し翌春四五月採收。2、二三月に下種し六七月頃採取。3五月頃下種し冬期に採收、）けれど最普通なるは、本月に下種して、冬季蔬菜の少い時に收納する法です。

第一及び第二法は、溫床に下種せねばなりませぬけれど、本月に種子を下すものは、十分耕した、肥沃にして溫暖なる露地で澤山です。甘藍は他の蔬菜と異つて、之を本地に定植する迄は、少くとも、二三回假植せねばなりませぬ。即ち之を疎く播いて、二三葉を生ずる頃より、六七寸に生長する頃迄、方三寸又は四寸を距てゝ移植し、莖の太い而して短い、葉の尖端の丸い苗を、作るやうに心掛けるのです。



キャベーツ

後兼て十分耕して、多量の堆肥と人糞を施したる圃場に、二尺又は二尺五寸の畦を立てゝ、之れに一本づつ、二尺の距離に定植するのです。定植後中耕と除草に注意し、一二回施肥すれば澤山です。



豇豆

▲洋　芹——塘蒿

近來日本へ渡來した、優美なる蔬菜です。腦の强壯劑で、神經及神經的消化不良症、又は僂痲質に特能ある蔬菜です。炙て食べる外、味噌をつけて生食致します。洋芹の形は、恰も我邦の野蜀葵に似てゐるが併し野蜀葵の如く單に莖葉のみを食べるのではありません。中には根を食べる種類もありますのです。

今需莖種の栽培法を述べませう。

洋芹は二三月頃から、本月に渡つて、露地に下種する事が出來ます。斯くて二三寸に生長した頃、五

六寸の距りに假植し、後二十日を經て能く耕し能く施肥して本圃へ定植するのです。移植の際は灌水する事を忘れてはなりませぬし、爾後時々灌水する事と、二三回液肥を與へる事は肝腎な事です。

洋芹は甚麽土地にも、能く繁茂致しますけれど、就中、有機物の少なく、深い砂壤土を好みます。

▲菜豆

南米の原産なのでありますが、今では我日本は申すに及ばず、世界各國、至る處に栽培されてゐます。菜豆は煮食し又はキントンを造り、晒餡を製し、豆粉に致します。其新鮮にして嫩なものは、血液を淸新にする効能があります。

菜豆には莢の硬軟なるものと、綠、黃なるものと、莖の矮性なるものと、蔓性なるものとの別があります、內矮性種は促成栽培を行うて早收するに適し、ダッチケース●アリコポーレードジユモンドルは有名の品種で、蔓性種は軟莢採收又は子實採收に適し鶉菜豆、札幌菜豆等は就中有名の品種です。

能く肥えた畑を、十分耕して、四月の末から六月の末に渡りて下種するがよろしい、即ち三尺乃至二尺五寸の畦を立てゝ、一尺の距離に穴を堀り、其處へ二三粒づゝ播下して、一二寸土を被せるのです。旋て蔓が出來た頃、支柱を與へ、株毎に斜立させるのです。而して支柱を與へる前と、後半月を經て、前後二回の耕耘を行ふのです。肥料は堆肥、灰、糠、人糞等を用ゆるのが普通です。菜豆は霜害に罹り易いものですから餘り播種を急いではなりませぬし、嫌地病といふ病を持つて居りますから一度栽培した所へは、四五年種を播いてはなりませぬ。

▲豇豆

豇豆は嫩莢を採收するばかりでなく、子實は飯に交へ、又は餡を製します。これには通常種とて莢を採るものと、紐帶豆、廿六豇豆、畑豇豆といひて、子實を採收するものとの二種があります。之を栽培するには二尺の畦上に八九寸を隔てゝ下種し、少量の燐酸肥料と灰を與り、除草と中耕とに注意すれば八九月頃に採

收出來ます。總て豆類は根瘤の作用で、空中の遊離窒素を吸收しますから、澤山な肥料はいりませぬが灰のみは澤山お與りなさいまし。

此外、大豆、胡麻、越瓜、胡瓜、糸瓜等は本月下種する蔬菜ですが、玆には之を省略しました。

草花園藝

根岸の人

道樂にも種々あれど園藝道樂位罪なくして而して樂多きはあらざるべし夫れも盆栽とか奇石とか所謂凝つた方面に手を出す時は金もかゝり時間をも潰し通常の人には迚もやり切れぬ恐あれど只前栽後庭少しばかりの空地を利用し此處に菜を植ゑたり菊を作つたりする位の事なら費用を要せず手數もかゝらず毎日主人が朝飯前の手入れ細君が晩飯後の運動位にて事足る可く夫れで毎日食卓には新らしき野菜が上され花瓶には四季をりをりの花を斷ざる次第なれば誰がやつても決して損の行く業にはあらざるなり只世間では園藝の趣味と空地の利用法とを知らぬもの多ければこそ折角之を試むべき餘裕を有し乍ら態々緣日から根のなき松や水を揚げぬ牡丹など購め來りて嬉しがり居るなれ米國あたりでは大部此の園藝趣味が發達して居るにより少し庭に空

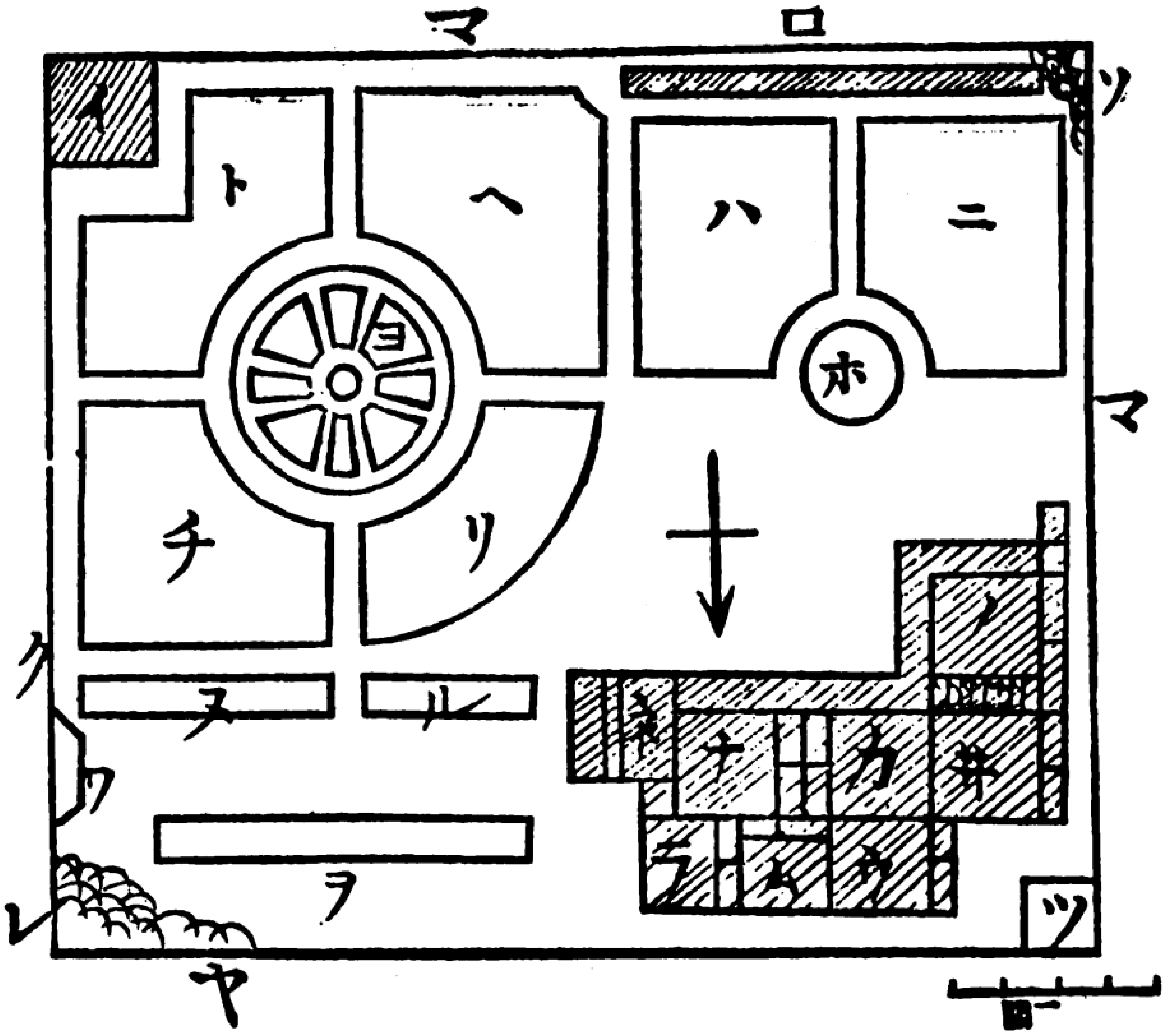


アンツリウム

地のある家では何は措ても先づ菜園を仕立て花圃を作り此處から取り上げたものを以て家庭を飾るの料となし大きな街や繁華な都會で畑を作る事の出來ぬ場合でも日當りさへ善ければ直ぐ路次の壁に沿うて蔦を這はせる臺所の隅に麝香連理草をからませる窓の下には一面の水鉢を置いて睡蓮やチューリップを仕立てるなど機會を利用するの術實に驚く可きものある由日本でも東京あたりの大通りで能く二階の露臺へ花物や實物の鉢植を列べて置く事あれど山ノ手や根岸邊で一寸門構へでもする家にて門より玄關までの地面を空けて置いたり椽側前の日當りの善き場所を扁柏や石燈籠にて塞げて置いたりする事少なからず何とも不經濟千萬の次第にして異に園藝をやつて見やうと云ふ氣なら臺所の前の塵芥捨場、雪隱尻の掃除口だけでも僅に二三種の花物を仕立つる事は出來るなり況んや植物には日向を好むものもあれば日影を好むものもあり土の濕りたるを好むものもあれば土の乾きたるを好むものもあり其性質に應じて種を下し苗を伏せる時は邸中何んな處でも園藝に適せぬはなきに於てをや其れを又主人の氣轉と意匠により巧みに剪栽する時は破屋一變して花の宮居となり追て一寸した溫室でも拵へる樣になれば正月瓜を進め寒中牡丹を咲かすも決して難きにはあらざるべし。

日本の造庭術は自然を寫すを其極致とし、大仕掛の庭園となれば必らず各地の名所勝景を形取るを例とす、小石川の後樂園に大堰川を模したる處あり。樂翁公の浴恩園に奥の松島を寫したる處あり。廣島の泉山に龍田川を利かせたる處あるが如き是なり、然れば普通士人の後庭なども自然此の風に押されて、少しの餘裕あれば直ちに山を築き池を穿ち、山と水とが無ければ庭の躰裁を備へざるもの丶如く思ひ居れど、斯は餘りに極端に走りたる考なり。成程山と水との布置配合、植込の厚薄、泉石の意匠等は日本造庭術の獨特とする所にして九尺の庭に深山の趣を現はし十畝の園に幽谷の姿を示すなど、他の容易に企て及ぶ能はざる處には相違なけれど、狹き處に無理に造りたる庭に變化

乏しくして直ぐ目に慣るゝの嫌あり、其れよりは寧ろ之を西洋風に造り變へ、春夏秋冬花不斷、絶えず目に爽かならしむるに如かず、西洋風の庭と云へば誰も沒趣味沒風流の如くに思ひなせど、バビロン以來三千年の歴史を經て、亞細亞の風をも參酌すれば、亞刺比亞の意匠をも消化し、今は日本支那の結構まで研究して立派に一個の學問となり居る事ゆゑ、左樣捨てたものでもなし、殊に日本風の庭にては槖駝師の手を要する事多くして、主人主婦の慰みになる領分少なけれど洋風草花の庭園にては、何から何まで家の者の手にて取り賄ふ事を得可ければ、家庭の園藝としては前者よりも寧ろ後者を勝れりとするが如し。



左は先年或人が設計したる和洋折衷の庭園にして、廣くもなく狹くもなく、主人夫婦に下婢一人、書生一人位の家庭には最も格好なるものなれば、試に之によつて委細を說明する事とすべし。邸は南北十七間、東西二十間の廣さにして西北の隅に二階建の住宅あり玄關四疊(ネ)書生部屋四疊半(ラ)表座敷八疊(ナ)細君の部屋八疊(カ)寢室八疊(キ)奥座敷八疊(ノ)食堂六疊(ウ)臺所四疊半(ム)にして二階に八疊と六疊の書齋あり、門より玄關までの距離十間に

して東及び北の二面は道路なり、初め主人が此家に入りし時は、門と玄關との間に松と椿の寄植あり庭は一面の芝生にして東南の隅に芝山を設け、其の後に杉の植込あり中央より椽側へかけて飛石を配置し、處々に多行松を植ゑ、西南の隅には梅、松、櫻等を植込み、石燈籠の据え方面白く其間に薔薇、牡丹等を點綴して極めて快濶なる庭園なりしが、主人は是等凡てを掘り起し、松や梅も大半抜き棄てて新に左の如き庭を造りたり、前に此の邸に住み居りし主人の友人幷に時々庭の手入れに雇はれ來りし橐駝師などは、扨々殺風景の事をするものかな、此の



オレンザツム　ツロイナツム

芝だけでも大變の値あり、之では庭が泣きますなど〻頻りに此の改革を惜みしが越えて一年、庭の形ち略體裁をなし、次で二年凡ての設計、其の通りに成就されて、庭には花を絕ちたる事なく、然かも其の有樣亦一種の趣を存して、閑雅幽邃の姿こそ無けれ、人の目を悅ばしむるには十分なりしにぞ、先に嘲りたる友人も竊に之を眞似て其の後園に花壇を作り、橐駝師までが御世辭をいふに至れり、然かのみならず是れまでは垂れ込め勝にて常に胃を患ひ其癖遊ぶには必らず食物を伴はざれば承知せざりし主人が、此頃は朝

出勤の前、夕方食事の後など自ら鋤を取つて庭に下り立ち、運動も十分なれば食事も進み、胃病も根を絶つに至りしは全く園藝の德と云はざるべからず。

圖中(ワ)は有振れたる冠木門なれど(ク)に枝振り面白き松あり、其の葉恰も門の屋根を掩ひ、松には又蔦を纏はせたれば秋より冬へかけての眺一入なり、松の根方は黒土にて盛り上げ熊笹と紫金牛を交植にす(レ)も亦松の幹稍古きものにして相並んで薄色大輪の吉野櫻あり枝は態と道路に向つて伸ばしたれば、落花の晨、門前時ならぬ雪を降らす風情あり、此處の根方には熊笹の丈長きを植ゑ、之に續きたる(ヤ)には款冬及び芹を植ゆ、折々は主人晩餐の料にも摘まるゝなり。(ヌ)(ル)(ヲ)は何れも高さ四尺幅四尺ばかりの籠形の垣にして(ヌ)には千生瓢簞、太苦瓜、金唐瓜をからませ(ル)には夏の內朝顏と夜會草を植ゑ何れも秋來れば垣を取外して菊畑となす仕組なれど唯(ヲ)のみは初より雪白一重大々輪の垣根薔薇を仕立て、年中花を絕たず、垣根の下も能く掃き淸めて、塵一本殘さゞるを主人の自慢とす。



プリムラオブコニカ

園藝を嗜むに是非無くて叶はぬは溫室の設備なり、然し溫室と云へば大隈伯の溫室、酒井伯の溫室など、金

のかゝりたるものゝみ見慣れたる目には、一寸素人の眞似し難き樣にも思はれ、主人も暫くは之を斷念し居りしが其後不圖南品川の妙華園に赴きたる節、崖と日當りとを利用し別段蒸氣を要せざる温室を見、之より思付きて造りたるが●(イ)の輕便温室なり廣さは二間四方にして框を七寸割板にて作り硝子戸はペンチ塗、框は澁塗とし費用二十圓を要したり、園内最も日當り善き地を撰み後には塀ありて之を擁し、硝子面の傾斜は稍強度に仕立てたるを以て大概の冬にも負ける事なく、御蔭を以て寒中躑躅が咲いたり天竺牡丹が咲いたり、今年は又試に胡瓜の促成をなせしに二月既に之を献ずるに至り、友人をして之は魔法使の仕業だなど〻驚嘆せしむるに至りぬ、少しは金がかゝつても園藝家の是非用意せざるべからざるは此温室なり。


アンツリウムデヤルザリ

●(ロ)は極めて平凡なる花壇にして、支柱の下に土管を伏せて水を湛え、蟻の登るを防ぎたる外、別に新らしき趣向とてもなく只夏日の炎天には上へ葭簾の日除けを設くるのみ、板も柱も荒板のまゝにして之を三段に分ち専ら鉢植の草花を載すに用ゆ、牡丹あり、ベゴニアあり、シクラメンあり、ヒヤシントあり、夏の朝顏(獅子咲、牡丹咲)は其の主

たるものなり。

（ハ）（ニ）は重に日本在來の草花を仕立つるに用ゐ、（ニ）は又更らに秋草の爲めに割愛せらる、秋草の植込方は凡て菊塢の流を酌みたるものにして、萩には夏萩、白萩、筑波萩あり、雁來紅には黃金錦、重葉錦あり、之に交ゆるに糸薄、白薄、まいすほの薄を以てし、葛、瞿麥は態と省きたれど、唐人豆とて其花の眞紅なるもの、染分瓢箪とて上部黃色を呈し下部綠色を呈せるものあり、其他芙蓉、桔梗、蜀葵、紫苑、女郎花等植ゑ込む。

（ホ）は人造石にて叩き上げたる池にして、中に睡蓮、河骨、海芋及太藺を植ゑ、金魚二三匹を放つ、水は時時バケツにて替へ込むなり、（ヘ）は後の方に五尺ばかりの垣を造りて之に鐵線、風車、風船かづらを、纏はせ畑には花百合、天笠牡丹、の各種類を植う、殊に天笠牡丹は舶來新種のカクタス咲なれば艷麗云はん方なし（チ）は鈴木充美氏より讓受けたるカンナを主とし之に北海道より取寄せたるグラヂオラスを配し、アマリリスをも交ゆ、共に當今頻りに流行り出したる切花の王にして人の目を引く事甚だ多し、（リ）は重に秋蒔の球根類を仕立つる處にして、チューリツプを初めと



マノレツ

して、アヂモチ、シリラメン、ヒヤミント、ラナンキユール、等の各種あり、昨年はベゴニアをも此處にて仕立てゝ見たれど此は成績面白からざりしにより、單に鉢植として花壇に飾る事とせり（ヨ）は圓の內部を八區に區劃し、一區に一種宛の草花を仕立てたるものにして中央をカーネーションの領域とし、周圍に黃水仙、美女櫻、三色菫、美人草、雛菊、櫻草等を植ゑ、時に應じ季によつて其の拔き差しを自由にす、而して此等凡ての草花は或ひは直接畑に種を下し、苗となるを待つて適宜に之をおろ拔く事としたれども、種類によつては然か爲し難きものあり、是等のため別に（ト）の苗床を設け此處にて苗を仕立て長ずるを待てそれ〳〵畑に移植する事となしたり、此方が場所をふさぐ事も少なく、空しく畑を開けて置く事もなく、便利なり。

（マ）は小笹の生垣にして之には金蓮花、唐人豆、烏瓜、スウヰートピース等を纏はらせ一つは以て汚きを隱し、一つは以て花を樂むの用となす。外に（ソ）の垣根の隅に金木犀一本あり、近頃枝葉繁茂して花壇の邪魔となる事少なからざれど馨香容易に捨て難く、切る切ると稱して未だに切り棄てられざるは園內第一の果報者と謂ふ可し。

手輕西洋料理

井上智慧子

△鷄卵の部

（一）ポーチド、エッグス

淺き鍋に水を七分通りと鹽を小匙に一杯入れて煮え立たせ鷄卵を一つ一つ別の茶椀にてつぶして靜かに鍋に落す可し、鍋の湯は鷄卵を蓋ふ程に十分にすべし、斯くて白身が固まりて黃身の上に薄皮の出來たる時之をくづさぬ樣氣を付けて一個宛「バター」を引きたる燒パンの上に載せて食するなり、鹽加減は食する人の勝手にまかすべく、鷄卵を湯より取り出すには穴の澤山

ある大匙を用ゆるがよし。

（二）　スクラムブルド、エッグス

鶏卵三個に牛乳大匙三杯、塩小匙に半分、胡椒一振を丼に入れて、二三度攪拌し、別に揚鍋に「バター」小匙に一杯入れて其溶けたる所へ入れて、かき混せながら煮るべし、斯くて熱き内に「トースト」(焼パン)と共に食するなり。

（三）　ベーコン、アンド、エッグス

塩豚肉を薄く切り揚鍋の冷たき時より入れ置きて揚ぐべし、鍋には脂肪をひく可からず、斯くて肉が縮まりて狐色になりたる時、肉刺にて肉を鍋の隅に片よせ、其あとの脂肪の煮え立ち居る所へ鶏卵を三個溶して白味の固まりたる時皿に盛り「トースト」と共に出す。

（四）　エッグ、オムレッ(鶏卵のオムレッ)

鶏卵三個を皿に入れて劇しくかき混せ、小匙に一杯の「バター」を平たき滑かなる揚鍋に入れて鍋を揺りながら「バター」を溶かし、之に卵を入れて固まるまで鍋を穏かに揺り動かし鶏卵の上に塩を少し振掛けて巻き熱き皿に盛りて出す。

（五）　ミート、オムレッ(肉のオムレッ)

これは「オムレッ」と同様の仕方にてこしらへ得るものなるが其異なる點は鶏卵の固まりかけし時料理したる肉を細かく刻みて大匙に三杯位をその上に載せ「オムレッ」を巻きて熱き内に食するなり、少量の葱と胡椒を肉に加ふるを良しとす。

（六）　パン、オムレッ

鶏卵三個の黄身と白身とを取り別け、黄身を能く攪拌し之に牛乳五勺、パン粉五勺、塩少量胡椒一振りを加へ、又白身をよく攪拌して黄身の上へ入れて軽く混せ合はせ、揚鍋に「バター」を小匙に一杯入れて其溶て未だ色の付かぬ内右の混せたる物を穏かに流しこみ、焦さぬ様にし、半分に折り重ねて出す。

（七）　ポーリガード、エッグス

鶏卵四個を煮立ち居る湯の中にて二十分間茹で、冷水に浸して殻をむき半分に切りて黄身を出して白身を

細かく切り置き、揚鍋に「バター」を大匙一杯、小麥粉大匙一杯を入れて能くかきませ、之れに牛乳一合と水一合とを少し宛加へ、塊のなくなるまで能くかきまはし、其煮立ちたる時、細かく切りたる白身と鹽を小匙に半分、胡椒二振を加ふべし、之れを四切の「トースト」の上にかけ、又とり置きたる黄身を裏漉に掛けながら其上にふりかけ熱き内に供するなり。

（八）ランチエッグス（辨當鷄卵）

鷄卵四個を二十分間ゆでゝ冷水に二、三分間浸して殼をむき半分に切りて白身と黄身とを別々に皿に分け黄身を能くつぶして鹽を小匙に半分と芥子を小匙に四分の一と胡椒を少し加へて能く混せ合はせ、又之れに酢を小匙に四杯入れて滑らかになるまで攪拌し、「ナイフ」又は匙にて此黄身の混せ合はせ物を半分に切りある白身につめ込むなり、斯く料理したる鷄卵は冷たき辨當にそえて食すれば味よく又魚と共に食して風味特によろし。

（九）エッグ、ライス（鷄卵飯）

鷄卵四個を固ゆでにして殼を去り、半分に切りて白身と黄身とを別々にして白身のみを細かに刻み置き、深き鉢に御飯を一側にならべ、其上に「クリーム、ソース」をかけ、又其上に先に刻み置きたる鷄卵の白身を半分振りまき、又其上に黄身を篩にかけながら二個分丈かけ、次に鹽と胡椒をふりかけ今度は御飯を一層次に「クリーム、ソース」白身、黄身、鹽、胡椒と前の通りにしき、次に又御飯を一層ならべて二十分間火の強き「オブン」に入れ置き鉢のまゝ出して熱き内食すべし。

△魚類の部

（一）ボイルド、フキッシユ、イン、クリーム（牛乳かけたる煮魚）

魚を深鍋に入れて煮え立ちたる湯を、魚の被るまで注ぎ入れ、又鹽を小匙に一杯入れて、二三十分間魚の軟らかくなるまで煮後湯をこぼして魚を温めたる皿に盛り山葵をおろして小匙に一杯位の「クリーム、ソー

ス」に混せて魚の上にかけ供するなり。

（二）フライド、フヰッシユ（揚げた魚）

先づ魚の鱗を去り、きれいによく水にて洗ひ、清潔なる布巾の上に載せて乾かし、魚の小さき時は全體、又大なる時は一寸より一寸五分位の厚さにきり、揚ぐべし、揚げ法は始めに魚に鹽と「メリケン粉」をふりかけ、鷄卵一個をよくかけまぜて其内に今の魚を浸し、之れを「パン粉」の内にまるめ込み、揚鍋に脂肪を半分位入れて脂肪の煮え立ちたる時魚を入れ、一方が狐色になりたる時他の一方を返して狐色になるまで揚ぐるものにて、皿を温めて盛りて供すべし。

（三）ベークド、フヰッシユ（蒸燒魚）

大きな魚をきれいに洗ひ、鹽をふりかけて塡物を腹に詰め、燒鍋の底に脂肪を敷きて魚を入れ、魚の上に「メリケン粉」を塗り付け、煮え湯を一合程鍋に注ぎて「オブン」に入れ、十分間毎に鍋の湯をすくひて魚にかけ、凡そ二斤の魚は三十分間三斤の魚は四十分間程燒く可し、斯くて温めたる皿に氣を付けて移し供すべし。

塡物には「パン粉」二合と鹽を小匙に半分と胡椒を一振と洋芹の刻みたるを小匙に一杯と、溶けたる「バター」を大匙に一杯とを鉢に入れてよく混せ合したるものを用ゆべし。

（四）クリームド、サルト、サルモン
（牛乳をかけたる鹽鮭）

鹽鮭を四片程皮を取り骨を去りて細かに切り冷水を盛りたる鉢に入れて一時間程鹽出をなし水をこぼして熱湯を注ぎ、後鮭を湯より出して鹽水を壓し去り、魚を「クーリムソース」の内に入れて其煮え立つまで攪拌し胡椒を一振入れ温かき内に馬鈴薯又は「トースト」に載せて食すべし「鹽ダラ」も此方法に由りて料由して可なり。

「クリーム、ソース」を作るには「バター」を大匙に一杯と「メリケン粉」を大匙に一杯とを揚鍋に入れて滑かになるまで混せ合せ之れに牛乳を一合半又は水と牛乳を合せて同量丈そろ〳〵入れて煮え立つ迄絶えず

かきまはせば、二三分間の後には出來上るなり。

（五）　エスカロプト、オイスタース

鉢の底に牡蠣を一層ならべ、其上にパン粉を五分程の厚さに置き、又其上に「バター」を細く刻みて撒布し又鹽と胡椒とを振りかけ、次に又牡蠣パン粉、バター、鹽、胡椒と順々に鉢が一杯になるまで重ね入れ、一番上に「パン粉」を置きて、上からそろ〳〵牛乳（一合）と牡蠣の汁（一合）とを注ぎて三十分間其まゝになし置き、後火の強き「オブン」に入れて三十分間狐色になるまで蒸し燒にし、鉢のまゝ膳に上す可し。

（六）　フライド、オイスター（揚げたる牡蠣）

大きな牡蠣を撰びて鹽と胡椒とを振り掛け、「メリケン粉」の、内にころがし、よくかき混たる鷄卵の中に浸し、次に「パン粉」の中に再びころがし、脂肪の澤山ある鍋にて揚ぐるなり。

たぐひなき花のかをりにゑへるらし
とまれる蝶のみうごきもせぬ
岸上はる子

陣中料理

廣田星橋

先頃、出征軍人某氏の爲め、其の親族の奥さん達が送別會を催ほされた、その時の御馳走は盡く糧餉部から供給された食料品を撰ばれたので來會のお客さんは大喝采でした。殊に主賓たる某少佐は戰地に行つてやがて之れを應用すべき實益を得らるゝとのことで、大層喜ばれました、さてその料理は極簡易な折衷の抓料理で素人にも出來るものでした、その取合はまづかうです。

材料は精米―割麥―砂糖―鮭鑵詰―福神漬―鰹節―鰹鑵詰―切干大根―若布―薤漬―食鹽―粉味噌（干餡の如き干した漉味噌）―醬油エッキス（煮詰めた醬油）―煉味噌（擂り味噌、水飴、鹽、砂糖の混合物、本所綠町玉川工場の新製に係る）―干狗脊―黑豆―干鱈―干甘藷――割菜―生醬油―牛肉鑵詰―味付鰯―煎雜

魚―小魚鑵詰―壓搾茶―干馬鈴薯―干鰤―玉葱―生馬鈴薯―鯣烏賊―鶉豆―海老―梅干―大根―味噌漬大根―靑葱―玉菜―百合根―干牛蒡―切昆布―鹽鯛―干飛魚―鷄卵―麵包―道明寺糒―等である。

當日席上の模樣は、二十疊敷の廣間の眞中へ大食卓を据え、卓上には大花瓶に松竹梅を生け、柱毎に元龜天正頃の英雄豪傑の着色書の額を掲げ、席の隅々に籠の釜うてある晋院火鉢を置き、炭火が盛んにいかつてゐる。でまづその調理法は、

▲牛肉汁　ロース肉を一寸茹き、程好く切り、胡蘿蔔を纖に打ちて右の煠で湯にて煠で、又之れにて粉味噌を溶き、共に入れ、攪拌て二三回煮立せたものに粉胡椒を撒布けたもの。

▲鹽鮭のライスカレー　鹽鮭の肉片を炙き、極細にむしり、一寸茹き、これに皮を剝きたる馬鈴薯の賽の目に切りたるもの幷に大根の千六本に食鹽少許を加へて、右鮭肉と共に暫時煮たるを、焚立の米飯にかけ、粉胡椒を撒布けたるもの。

▲玉子とじ　茹たる菜を細に剉み、鰹節の煮汁に入れ醬油エッキスを應分に投れて煮立せ、之れに板昆布の短冊に切りたるを加へ、生玉子を別の器に攪交せ、汁に流し込み、一分間程火にかけ置たるもの。

▲福神漬のアチャラ　福神漬を澤山の熱湯に投じ、暫時煮て程好く鹹味を去り、水氣を絞り、別の器に酢と砂糖を調味し、粉蕃椒を少許加へて攪交せ、其の中へ右福神漬を入れ二三時間程經たるもの。

▲牛肉の昆布かけ　牛肉を程好く切り、茹で肉の温まりたる位にて引上げ、溶たる西洋芥子で之れを和へ、其の上より熱湯かけしトロヽ昆布をかけたるもの。

▲乾鱈燒　乾鱈を程好く切り、熱湯の中に浸し、鹽氣を充分に脱き軟かになし、水氣を拭去り、細小に庖丁目を入れ置き、別に炒り胡麻を能く擂り潰し、これへ砂糖と酒を加減して加へ、能く攪交せて右の鱈を浸し火にかけ焦げぬやうに炙きたるもの。

▲烏賊の芥子和へ　烏賊を輪切りにして、ザット煠で

粉味噌を鍋に入れ、砂糖少許を加へ、湯を注し、能く攪拌して煉り、火にかけ、西洋芥子を水にて溶き、味噌の冷たる時に之れを入れて攪交せ、烏賊を入れて和へたるもの。

▲若布の三杯酢　若布を短冊に切り、熱湯に投れ、箸にて攪拌し引上げ、醤油に砂糖を加減して酢を加へ、若布を之れに入れ攪交せて、罐詰牛肉の細かに刻みたるを撒布けしもの。

▲梅干の吸物　椀の中へ梅干の肉のみを少許入れ、道明寺糒を少量に鍋にて狐色程に炒りしを一と撮み程右の中へ加へて直ちに熱湯を注ぎたるもの。

▲馬鈴薯の田樂　馬鈴薯を程好く煠で、水氣を拭去り輪切りにし、竹串に刺して焦目の付く位に炙き、煉味噌を塗り、西洋芥子の溶きたるを一寸添へたるもの。

▲甘藷の煮付け　靑葱を長めに切り、鍋底に敷き、煉味噌を其の中へ入れて火にかけ、皮を剝きて輪切りにせし甘藷を入れ共に煮たるもの。

▲牛蒡の味噌和へ　牛蒡を輪切りにしたるに粉味噌を入れ、程好く湯を注し、淡味き加減に爲して右の牛蒡を入れ、暫時煮て煮汁の染込みたる時に火より下し、能く汁氣を斷り置き、また煉味噌を加へ、粉蕃椒を少許撒りて充分に攪拌し、それより火にかけ、トロ〱に煉り、右の牛蒡を攪交せたるもの。

▲胡蘿蔔の芥子漬　胡蘿蔔の皮を剝き、小口より薄く刻み、熱湯と共に鍋に入れ、ザット茹で、直ぐに湯を去り能く水氣を絞り、水にて極軟く溶きし西洋芥子に少量の酢を加へ、砂糖を成べく甘き加減に入れて能く攪拌し、之れに右の胡蘿蔔を入れて再び攪交る。

▲豚肉の甘煮　肉を賽の目に切り、充分に煮、右の汁にて狗脊と黒豆を能く煮上げ、右三品共に一緒にして煮たるもの、鹽加減は鹹目。

▲鶉豆の甘露煮　鶉豆を能く煠で、別に玉葱を縦に薄く切り、空煮をして軟かになりたる時火より下し、鶉豆と共に煮る、之は鍋に砂糖を多量に入れ湯を注し火に架けて能く煮溶し、暫くして煮立たる時、少量の鹽を混せ、後に右二品を入れ、充分に煮たるもの。

▲刺身の山かけ　これは鮪の肉を大きく賽の目に切り薯蕷汁をかけたので、副品は紫蘇の穂と擦し大根。

▲玉子飯　これは鍋中にて玉子を破り、能く箸にて攪拌し、醤油エッキスと薄く削りたる鰹節を混せ、更に能く攪交せて味の加減を試み、火にかけて少しく湯を注し、能く攪拌し半熟の度を伺ひ直ぐに鍋を下し、精米八分、割麥二分の割合に炊上げたる飯を椀に盛り、右の玉子をかけたるもの（玉子の煮加減は成べく煮汁を少量にする）。

食事了ると壓搾茶（番茶を焙じ、焦して型に詰めて干上げたるもの）を出し、ビスケット、干葡萄、蜜柑の類を大皿に堆く盛上げたるを卓上に出し、それより來客は廣庭で銘々得意の戸外遊戯を始め、劍舞、相撲と充分の歡を盡した。當日の斡旋は諸事奥さん方で、あとは皆十四五の女兒が改良服での働きです。

赤十字社の救護員

理事	六人
醫員	三百五十七人
書記	百七十三人
看護婦長	二百四十七人
看護長	三人
看護人	六百二十一人
藥劑長	十六人
調劑員	百七十四人
調劑員補	四人
看護人長	百四人
看護婦	千九百八十六人
輸送人	百三十八人

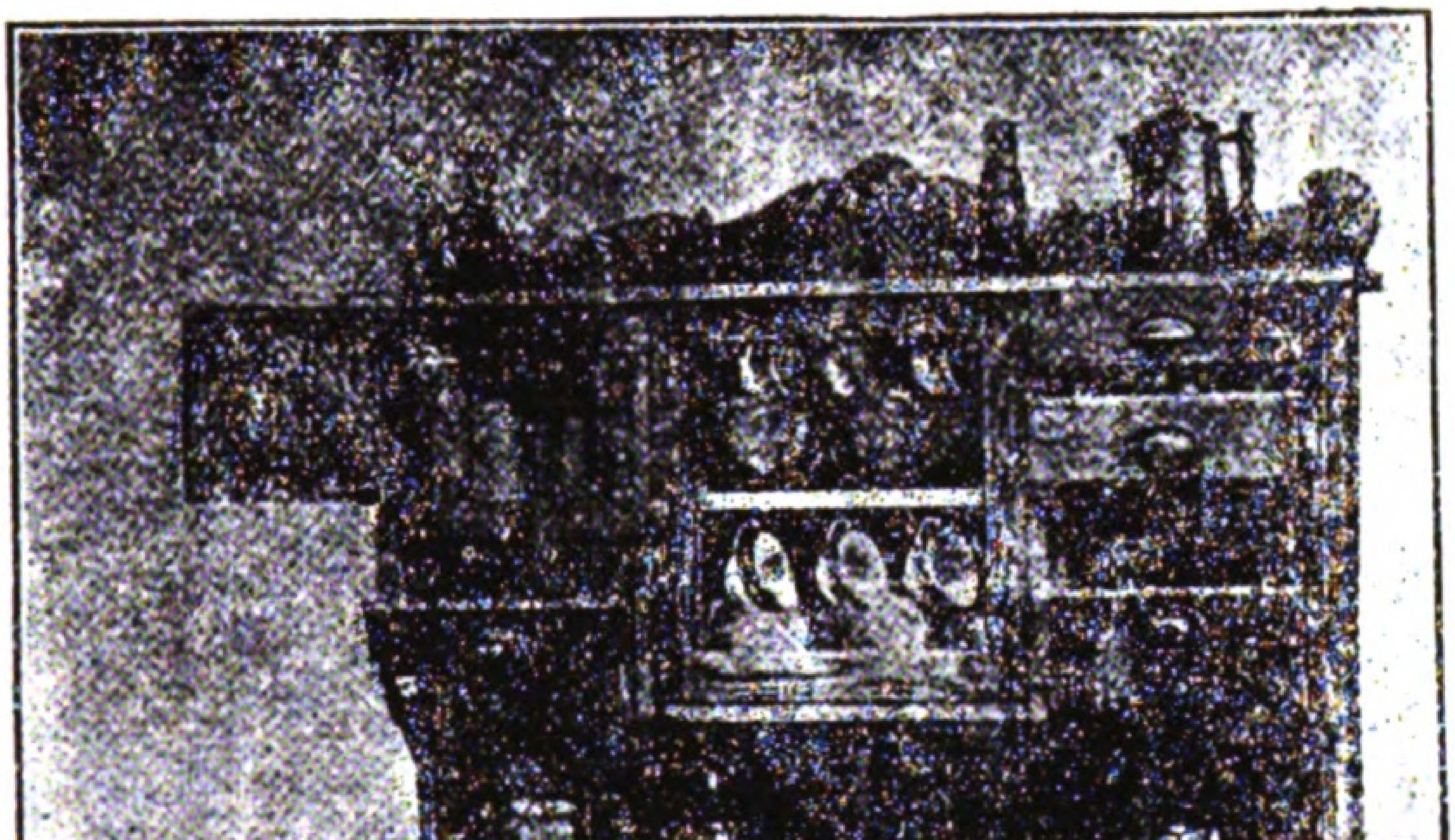
夏の家庭

▲清潔法の施行

追々暑氣に向ひて種々なる流行病の襲ひ來る時節となりぬ、凡て家婦たるものは一家の健康を保護し病魔の入り込まぬ様注意すべき責任あれば其豫防法を心得居ることこそ肝要なれ殊に赤痢、虎列拉、腸胃加答兒の如きは一度發生するや忽ち猖獗を極め老人或は體質の虚弱なるものは往々是が爲めに生命を失ふことありされば人々日常の衣食住に注意を加へこの大敵を防禦するの方法を講せざるべからず今聊か其豫防を記し併せて若し不幸にして一朝此の災に罹りし時の法を記さん。

第一家内及び其周圍近邊をなるべく清潔ならしむべし暑氣に向ふ頃に至らば必らず一度家の大掃除をなし一點の塵芥不潔物も殘り居らぬ樣隅々まで拂ふべし、又家の周圍庭園等にて腐朽ちたる木片、木葉等は悉く掻き集め火にて燒盡すべし或る黴菌學者の說によれば

古き板塀等は最も多く病毒の潜伏し居る場所なりと云へば能く洗ひ潔めて塗りかえる事肝要なり。又田舎家にては家禽小屋家畜小舍の掃除をなし、壁を塗りかえ彼の堆く積れる塵芥溜の如きは取り盡して火に燒きその燃えざる部分は地中に埋沒すべし、又井戸換を爲し、天水桶、溜水等は灑注し捨て溝の掃除をして汚水汚物の溜り居らぬ樣にする事肝要なり彼の人口稠密なる都會にて傳染病流行の際は地方に逃げ往かば安全なりと思考する人も多けれど地方は都會の如く清潔法、衛生法等に注意行き屆かぬ勝ちなれば却つて病毒の製造場となりて危險なるとあり。然らば地方に住居する主婦等は殊更に衛生法を研究し又是を實行しておのれ先づ其近隣の人々に好模範を示し、それより次第に其一村迄にも及ぼし、其村內をして清潔健康なる場合とならしめ以て都會に傳染病流行の際には



洋風食器簞笥

安んじて生活するやう且つ市氏の安全なる避難所とならしむる樣盡力すべきなり。

まづそれに就ては盥水桶等の如き木造の器物は日々洗ひ潔めて數時間日光に曝らし且つこれを用ゐる時は可成常に乾し置くやうにすべし。彼の種々の廢物を捨つる塵芥溜の如きは夏の暑き日光を受くるや忽ち腐敗して近傍の空氣を不潔ならしめ恐るべき病氣の原因となる事間々あれば芥塵溜には蓋あるものを用ゐ其中の廢物は可成度々取去らしめ、溜め置かぬ樣注意し、又時々は其中を洗ふ事も肝要なり。食料品を入れ置鼠入らず戸棚は毎日拭き潔むことを怠るべからず、又常に石灰を求め置きて下水、塵芥溜、其他不潔の憂ひある場所には斷へず散布する樣にすべし。

醫家の說に傳染病の豫防法は手を第一に注意すれば傳染病とて恐るゝに足らず、譬へば患者を介抱したりとて千倍の昇汞水に同等の石炭酸を加へてよく洗へば決して心配なし、傳染病のみならず平素食事の前に當り一度手を洗ふて食するやうにすれば甚だよし、若し昇汞水なくば石鹼にてもよし又食鹽にてもよし鹽は殺菌力を多く含むものなれば鹽分の多く含みたるものを食すれば安心なりといふ。



笑顏（一）

夏の飲食物

次に主婦の注意すべきものは飮食物なり、飮水は必ず漉したるものか或は一度煮沸したるものを要す、田舍の水は都會の水に比すれば冷やかにして且つ清ければ生水を其儘用ゆるも差支なし、されど其は湧泉或は清冽なる清水に限れり、普通の井戸若くは川水等は決して然らず何とな

れば田舍の井戸或は溜水の周圍には大抵草木或は野菜類の繁茂し居りて動もすれば其枯葉、腐敗物の落入り居るものなればそれが爲め却つて危險多しと知るべし。溜水を沸騰せしむることに付て一言せんに、水を釜或は藥罐にてあまり長く煮て其儘數時間置く時は再び其中に動物性のもの發生し、生水よりも却て有害なる事あり、故に水一度沸騰せば直ちに卸ろして瀨戸物の器に移し冷るを待ちて壜に入れ成べく風透しのよき處に置くべし、沸騰したる水と雖も異樣の臭氣ありて味の惡しきは最早腐敗したるなれば決して飮むべからず、沸騰後十二時間を經たる水は生水に毫も異ることなきなり、牛乳に至つては腐敗の力一層に速かなれば決して時を經たるものを飮用すべからず。



笑顏（二）

食物に制限を置き惡食不消化物を避くべきは勿論なれど、又あまりに撰擇に過ぎ、此も惡し、彼も害あり、食ふべからずとて排斥する時は每日同樣なるものゝみを食する事となるを以て倦厭を生じ、食慾を減じ、却つて健康を害することあるべし且つ人の身體を組織するには種種なる營養素を要するが故に、食物には種々取交せたるをよしとす又肉類は滋養分多ければとて日常其れのみを取りては不經濟なるのみならず、却て健康に益なし野菜類の如きも料理法よろしきを得ば衛生上大に有益なるものと知るべし故に食料には成るべく種々なる品を取り交せて用ゐ、以て一には膳部を美味ならしめ、食慾を增進せしむるの助けとなし、又一には身體を組織すべき要素を充分に供給し得る樣意を用ゆべし、たゞ新鮮の

ものを撰び且つ料理法に注意する事肝要なり。
次は衣類の事なり、流行病の傳染を防ぐ最良法は血液の循環をよくするにあれば、常に暖衣を纒ひて身體を冷さぬ樣にし、暑中と雖も薄きフランネルの肌着を常に着し、且つフランネルの腹卷を爲して腹部を掩ひ、以て感冒、腸加兒答等を防ぐべし、衣服は殊に注意して洗濯し、夜具はなるべく、毎日日光に曝らして濕氣を去るをよしとす、彼の朝起して直ちに其の夜具を疊むが如きは甚だよろしからず。
以上は流行病豫防の概畧なれども、萬一不幸にして一度病毒の家内に侵入し來らんか、主婦たるもの一段注意の力を要す、若し看病の心得なく、醫の來る迄施すべき手當を知らざるが爲め、狼狽して策の出づる處を知らざるが如きは素養ある一家の細君といふべからず。


笑顔（三）

▲應急療法

又山間僻地にして醫師の許まで駈けつけんも一里二里遠きは四五里も行かざるべからざる田舍家にては、殊に臨機の處置法を取らざるべからず、これには先づ數個の湯たんぽと芥子の一壜と、葡萄酒或はブランデー並に繃帶にすべき布を準備し置きて、如何なる火急の際にも直ちに見出し得べき場所に仕舞ひ置くべし、而して虎列拉病に罹りしものあらば先づ葡萄酒三十「グラム」かブランデー「十五グラム」かを與へ或は樟腦精と云ふ興奮劑あらば此中に五六滴加ふるもよし、次に芥子湯にて脚浴をなさしめ、充分あたゝまりたるを見て、靜かに床に臥

さしめ、湯たんぽを身體の周圍にあてゝ身體をあたゝむべし、又血液の循環衰へたる樣子あらば、芥子を湯にて搔き晒布に伸ばして兩足の裏兩方の手首と腹部及び襟首に貼るべし。

以上の手當を醫師の來る迄爲し置かば病勢の增加を防ぎ且つ其治療を施すに當り一方ならぬ便宜を與ふるものなり。

▲病氣に勝つ工風

或時疫病の神一都府に舞ひ下りて其住民の三分の一を殺戮して曰く「吾手づからこれだけ殺さば充分なり恐怖は餘りの三分の二を殺すべしと」這は或國の昔物語なるが實に病氣に驚き怖れ神經を起す程病勢を增加し或は病氣の傳染を助長するものはあらず、主婦たるもの心弱くして不慮の災難に出遇ふ時は忽ちあはてふためき爲す所を知らざるが爲めに小難も大難となり救ひ得べき患ひも救ひ得べからざるに至る事は珍らしからぬ事なれば如何なる危急の塲合にも取亂す事なく、怖れず憶せず、泰然として是が救助の方法を考へ得べき程の雄々しき氣性を養ふべきなり。

猶夏季の衞生に就て簡單に其の方便をいへば、第一は空氣の清朗なる事、第二は節食を力むる事、第三は衣服の淸潔なり、空氣の清朗を欲せば樹木の多き田園の生活最も願ふべきなれども、人各々其の生活上の都合あれば夏季三ヶ月家族を擧げて田舍の住居もむづかしければこれにはなるべく家の周圍に樹木を植ゑて空氣を新鮮にすると同時に家の周圍を淸潔にするこそ第一の捷徑なれ、第二は詳しくいふまでもなく淡泊なる食物を腹八分目に食し、第三は衣服の洗濯夜具の乾燥と身體の冷浴、若くは温浴を務むべき事と知るべし。

應救看護法

こゝに記する看護の方法は疾病負傷に際して急に醫師を得ざる山間僻地の人々の爲めにする應救の方便にして元より醫藥の便利ある都會には大なる必要なかる

べしとおもへど一般の人の心得にまで記さん。

さて藥劑は、成るべく服用せざるを良とす、さしたる病氣にもあらざるに服藥をするは、反つて衛生の法に背くものなり。彼の下劑の如きは、往々世人の用ゆるところなれど、願はくは便通に一定の時を定め、藥品に據らずして、自然に通下する習慣を養ふべし。

人若し疾病に罹りたる如き感覺あるときは、直ちに其の注意と攝生を爲すを要す、よしや輕微なる病患と雖も決して是れを等閑に附すべからず、特に熱病の如きは、最も其初めを注意せざるべからず。されば、平常に反して身體の工合よろしからず且つ疲勢を覺え、食慾減退、睡眠不安、便通不整、頭痛、惡寒を感ずる時は、熱病の初期として、速かに治療乞をふべし。既に疾病の兆候を生じかるときは第一に食慾に注意謹愼するべし、何となれば食物は養分の基礎なると同時に、又疾病の門戸なればなり。蓋し疾病の時に、消化機關の活動極めて遲鈍なるを以て、通常の如く飲食を貪る時は、之れが爲めに發熱を盛んにし、大いに病勢を助くるものなれば、成るべく食を愼み、身體を安靜になすべし。西洋の或る長壽者の實驗によれば身體に、異狀を感ずる時は、直ちに一切の食物を廢し、唯牛乳と水とを以て、健康を恢復したりといふ。

應救の藥品は、成るべく家毎に貯蓄するをよしとす然らざれば一朝急病あるに際して大いに狼狽するものなり。就中旅行者の如きは、適當の藥品を携帶するを安全とす。即ち左に應救の藥品幷に其用法の概略を示さん。

△砂糖　これは一種の清涼劑にして熱病、加答兒、眩暈、嘔吐等の際にはよき藥品なり。右の場合に凡八匁の砂糖を、コップ一杯の水に溶解して用ゆれば大に効あるものなり、元來砂糖は、體内の粘液を溶解するの効有るものにて其初めは、砂糖の爲めに粘液を生ずるものなれども、遂には胃液と混和して、反對の作用を生ずるものなり。故に加答兒、咳嗽、喀痰を治し、又胃腸を清淨にし、爲めに消化を助くるを以て、菜肉の調理には有用の品なり。

△酢　これは中毒の場合に必要なるものなり、即ち阿片、蒼鉛、ヒヨス等の毒に中りたるとき冷水と共に多量の酢を嚥下する時は毒を解すものなり、又外部より頭及び胃の部分を酢にて冷すべし。又氣絶したる場合には、氣付として顔面手足を酢にて洗ふべし。其他室内の有害瓦斯を消めんには、酢を撒布し、發熱の場合には、之れを清水に混じて服用するときは、大いに効能あるものなり。

△石鹼　これは滷汁鹽に依て、中毒症を治することを得べし。故に石鹼水は、砒石の中毒、蒸發毒及び硫酸の中毒に際して飲用すれば奏効を見る事あり、又疥癬等の皮膚病者の外用藥として効あり。灰汁も亦石鹼と同樣の効能あるものなり。

△乳皮(牛乳の上皮)　新鮮なる乳皮及び牛酪は、種々の効用を有するものなり第一この物は皮膚の固着を柔らぐに効あり刺傷の疼痛を治し、藥用軟膏の代用として、火傷の場合など大に効あり。又油は、中毒の場合に、嘔吐劑として用ゆべし。殊に、蜂虻の如き虫類に螫されたるときに、十四五分間油を塗りて、局所を靜かに摩擦すべし而して最も有益なるは、蝮に咬れたるとき、直ちに其局所と、全身の關節とに少しく溫めたる油を摩擦するときは、蛇毒を防ぐことを得べし。又蟇の油は寒中凍傷を治するに大効あるものなり。

次に少しく用法の心得を述べん。

△灌腸　これは内臓を害せざる最良の緩和療法なり、其藥劑には種々あれども、大麥の煮汁に、二食匙の麻仁油と、二茶匙の食鹽とを混じたるものを良とす。小兒の灌腸には、食鹽の代りに砂糖を用ゆるをよしとす又冷水は、火傷、創傷、焮衝等の場合には、大いに効能あり、又疼痛、出血を治するには、其部分を水にて冷し、或は水中に挿入するを良とす。次に微溫湯も亦鎮痛劑として、腸胃の痙攣、頭痛、嘔吐等を治するに効あり。殊に脚湯は、頭痛、眩暈、及び感冒、充血等の場合に行ふものにして、其時間は長きに失すべからす、其方法は微溫湯を盥六分目位に汲み入れ、之れに二握の鹽と、八匁の芥子とを投じ、十四五分間溫まり

し後、毛布を以て足を摩し、冷えざる内直ちに寢床に就くをよしとす。

▲麻仁及び麻餅　これは皮膚の疼痛、痙攣等を治するものなり其法は、麻仁を碎いて粉末とし或は之れを煑て餅となし、麻布に延べ、局所に貼布するなり、又麻仁より一種の飮料を製して腎臟の痛む塲合に飮用して効あるものなり。

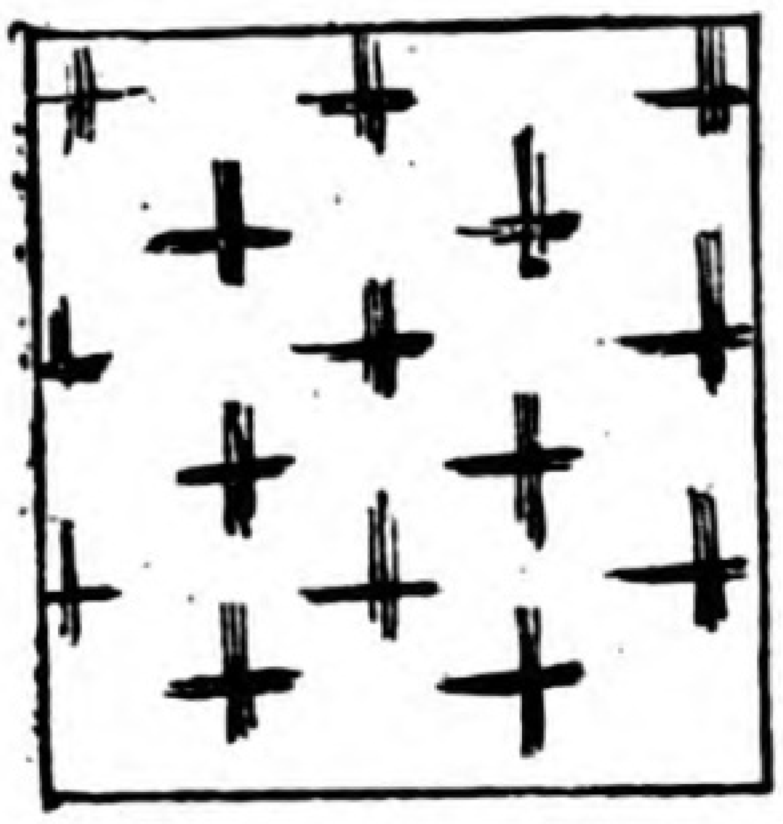
▲芥子、胡椒　芥子は、膏藥として用ゆれば、頭痛、齒痛、眩暈、耳鳴又胸及び胃の痛みし塲合にこれを貼布して鎭痛の効を見ること大なり芥子膏藥は通常水に煉りて麻布に延べ、局所に貼布すれども迅速を要するときは、煉りたるまゝを皮膚に當つるもよし。然れども貼布の時間は、餘り長きはよろしからず、若し膏藥が皮膚を刺戟して、赤色を呈するに至らば、之れを剝ぎ去り、其跡を清潔なる手布にて淸く拭ふべし、若し之れが爲め、非常に刺戟せられて、皮膚に疼痛を感ずるときは、牛乳を塗擦すれば疼痛は止むものなり。

次に胡椒は、消化力を盛んならしむる一種の健胃劑なれどもこれは强壯の人に用ゆるものにて胃弱の人の多量に服するは害ありと知るべし人若し每朝八九粒の胡椒の實を呑むこと、一月の長きに至らば、從來虛弱なりし胃も、大いに健全となり、食慾を增し、消化力を益んならしむるに至らん。

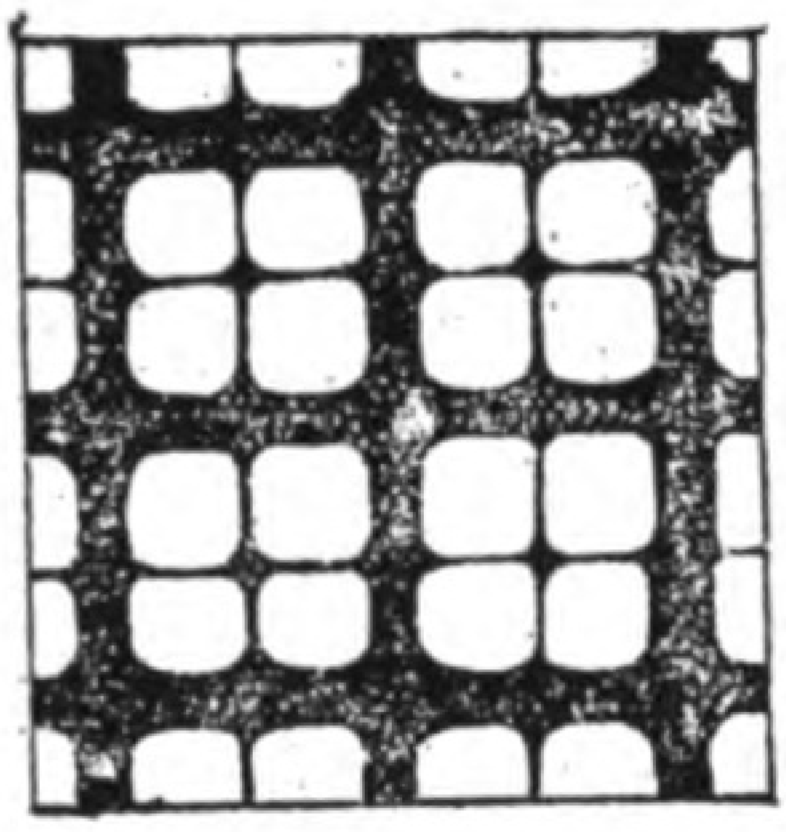
米國少女の風俗



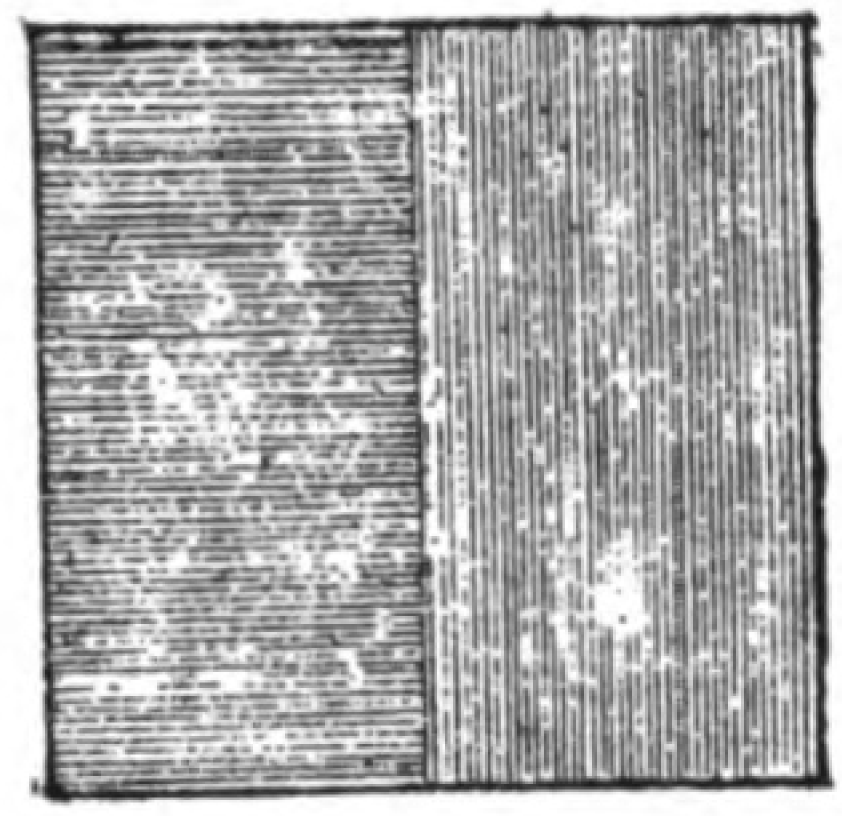
絞ガスリ



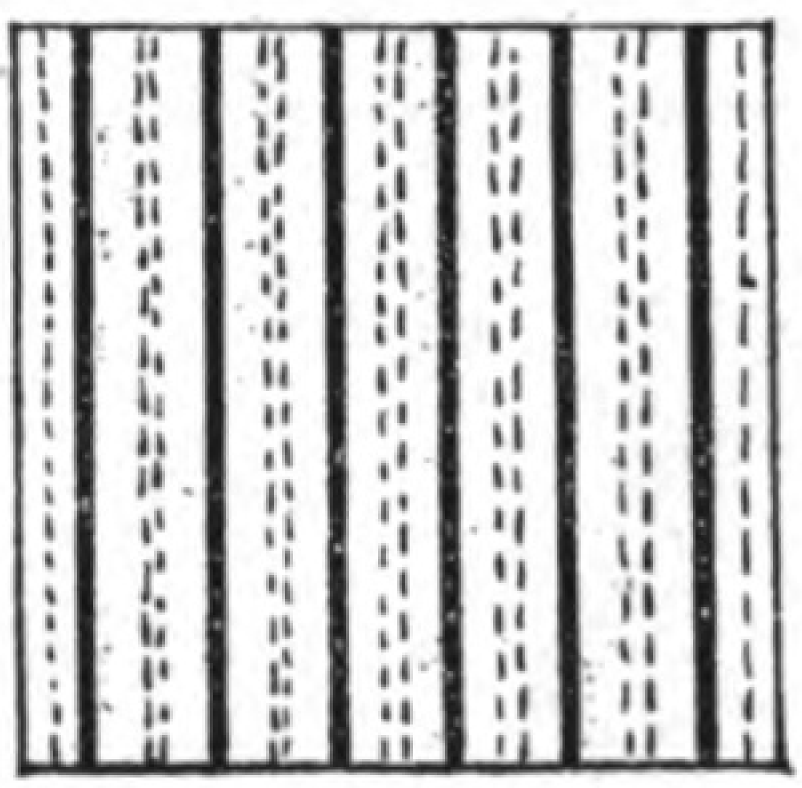
吉野格子



子手柏



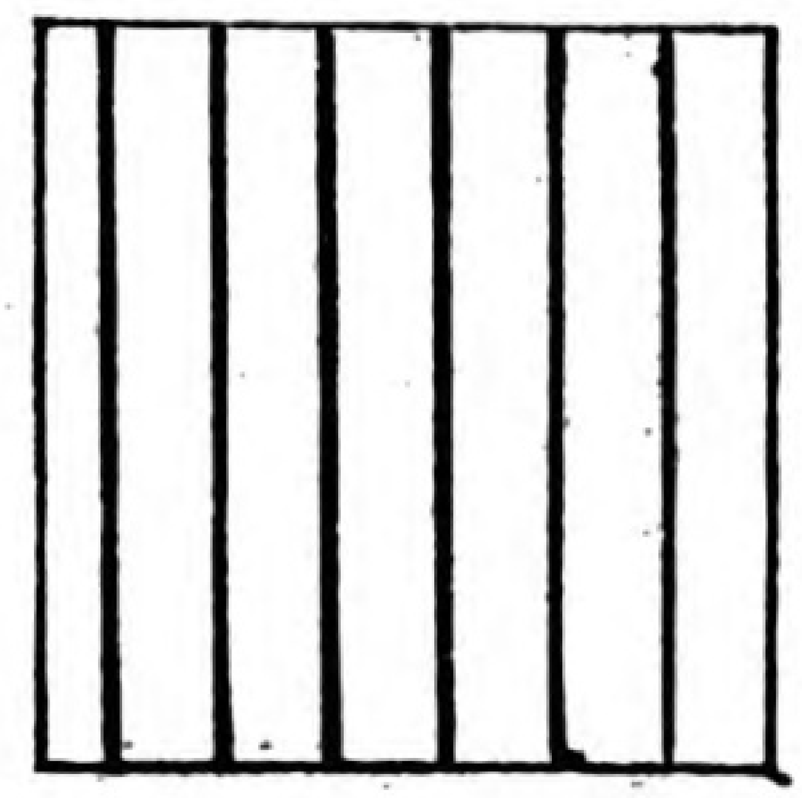
上布縞



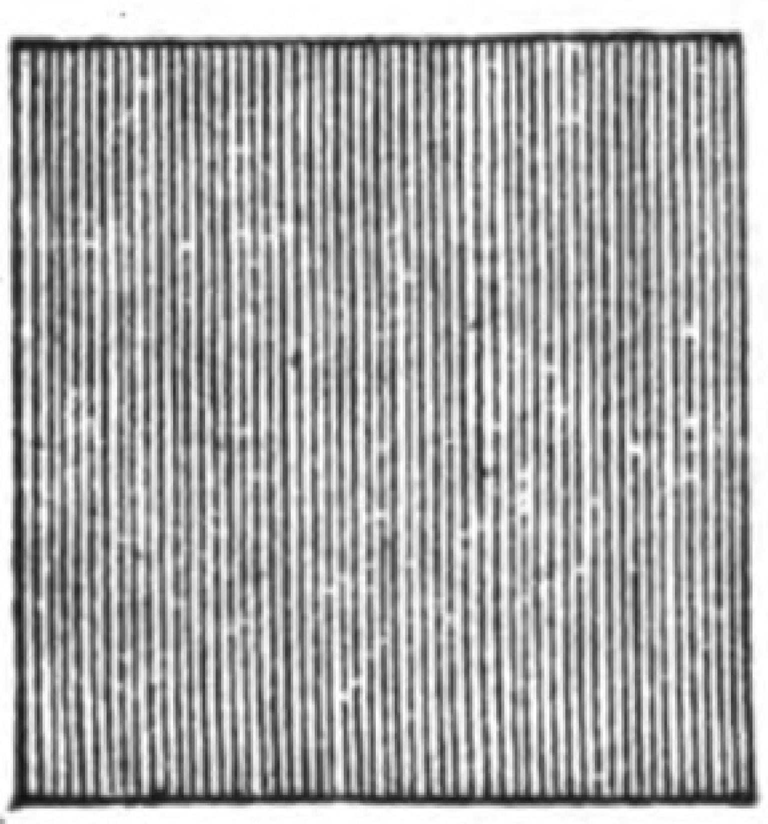
棒縞



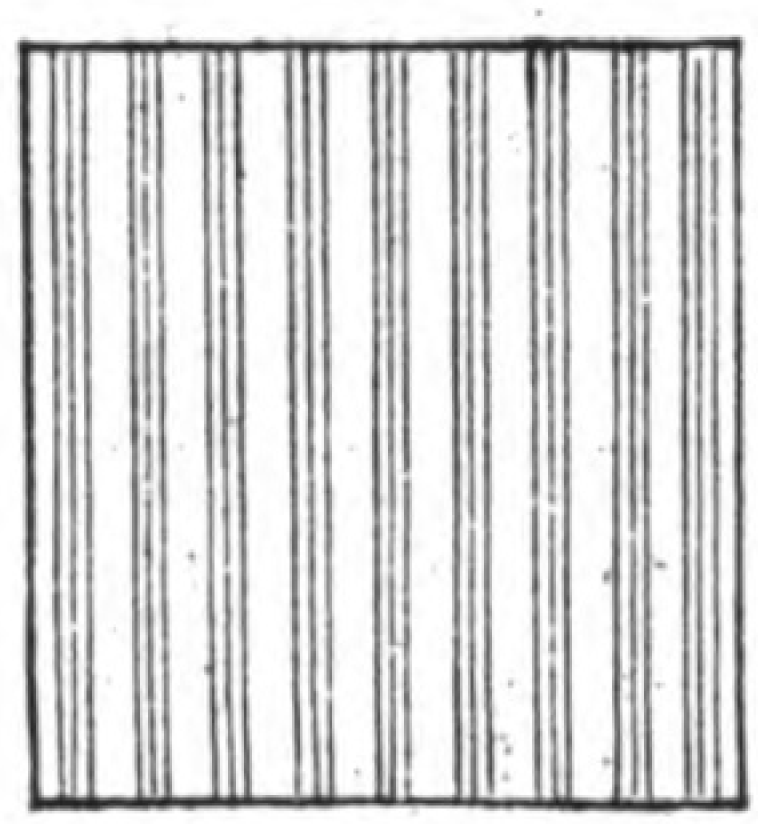
大名縞



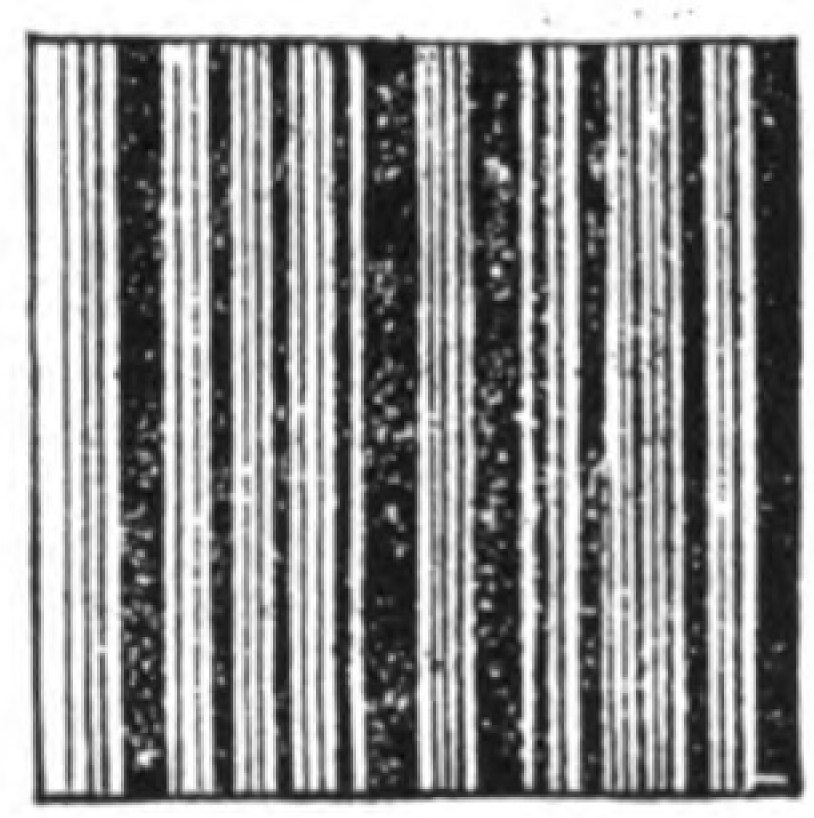
千筋



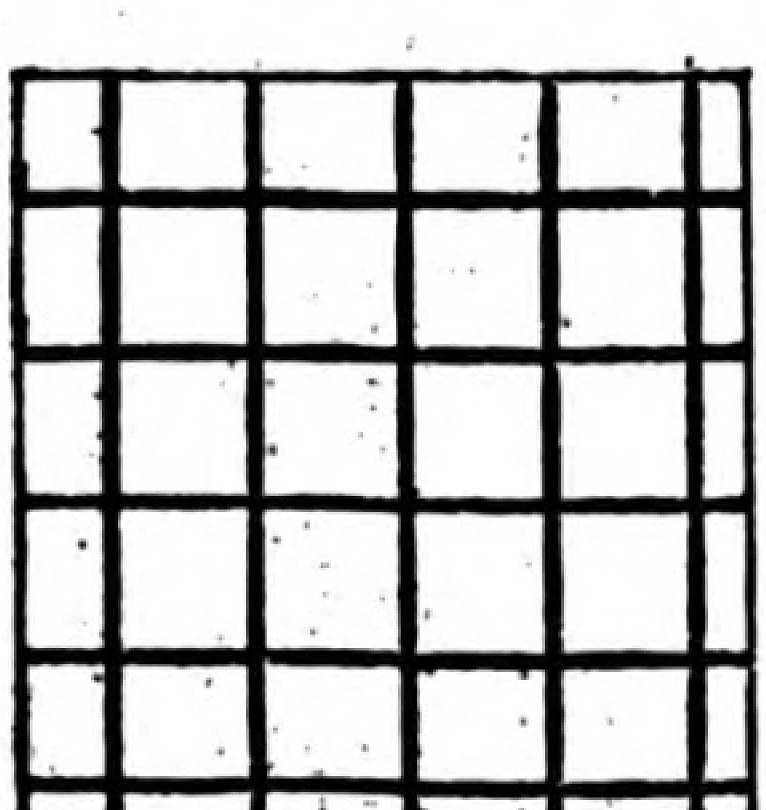
三筋立



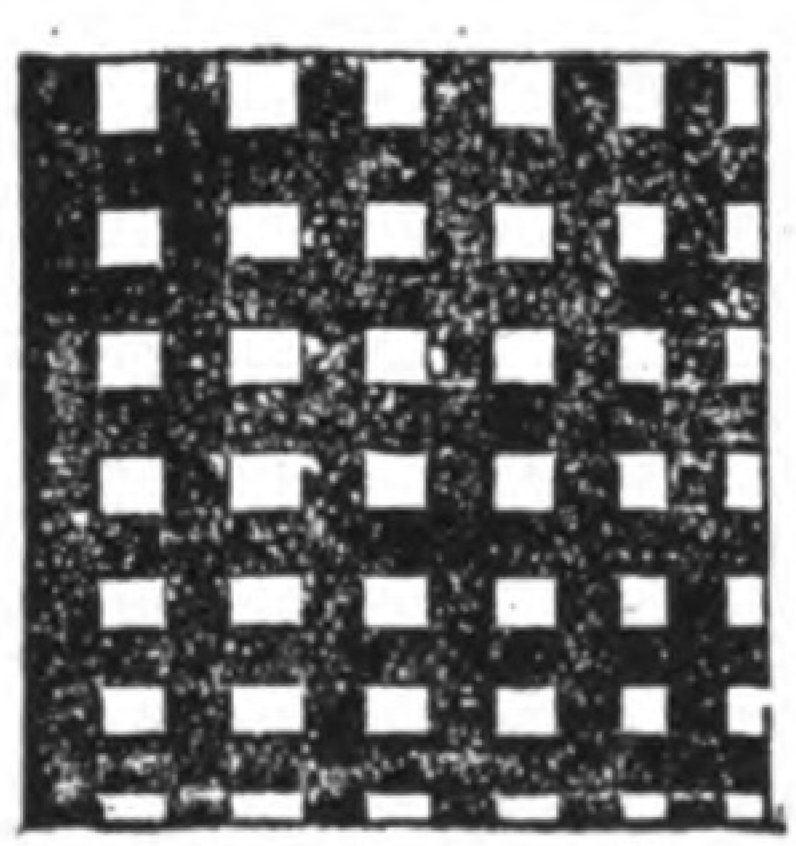
刷毛目縞



変格子縞



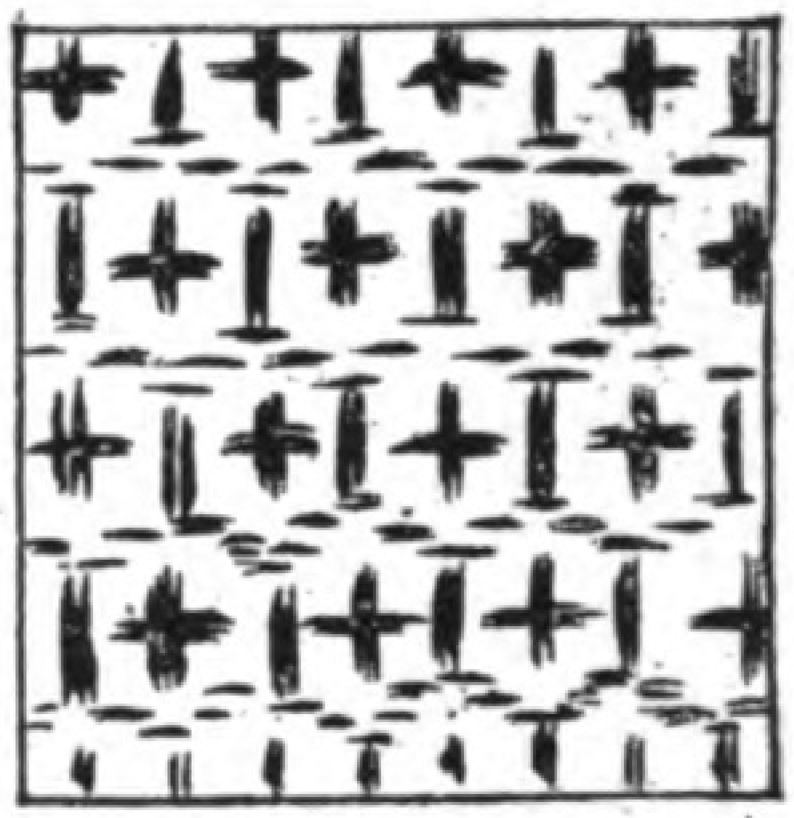
辨慶縞



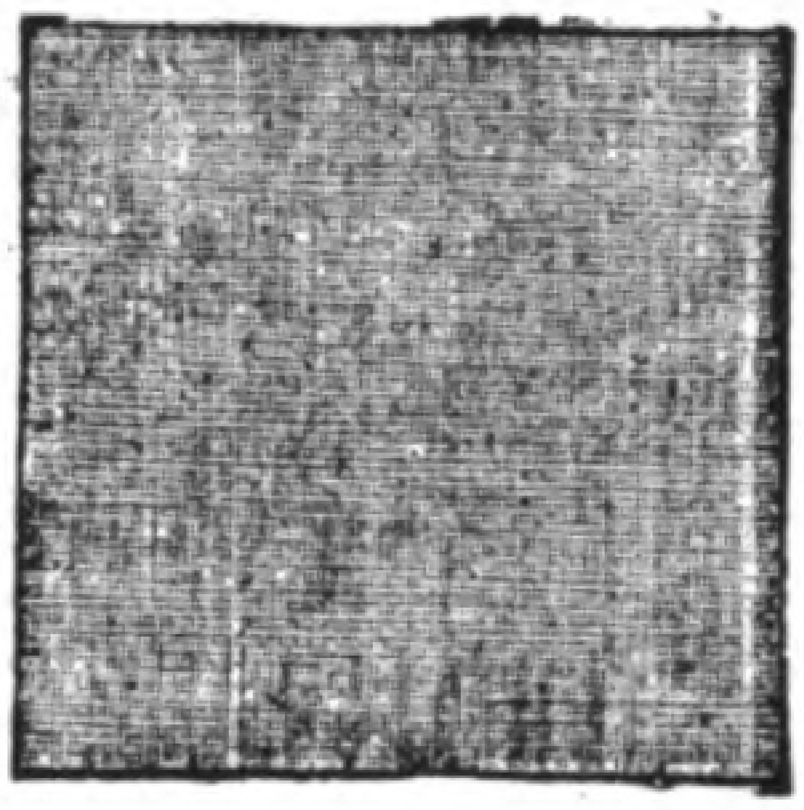
崩し縞



亀甲絣



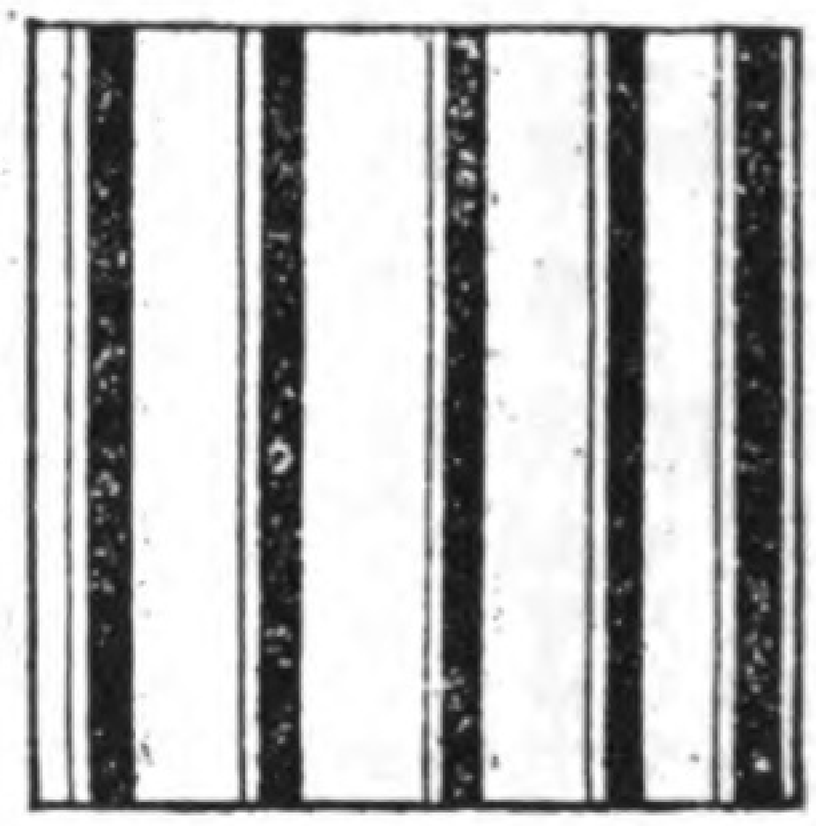
ウナガ



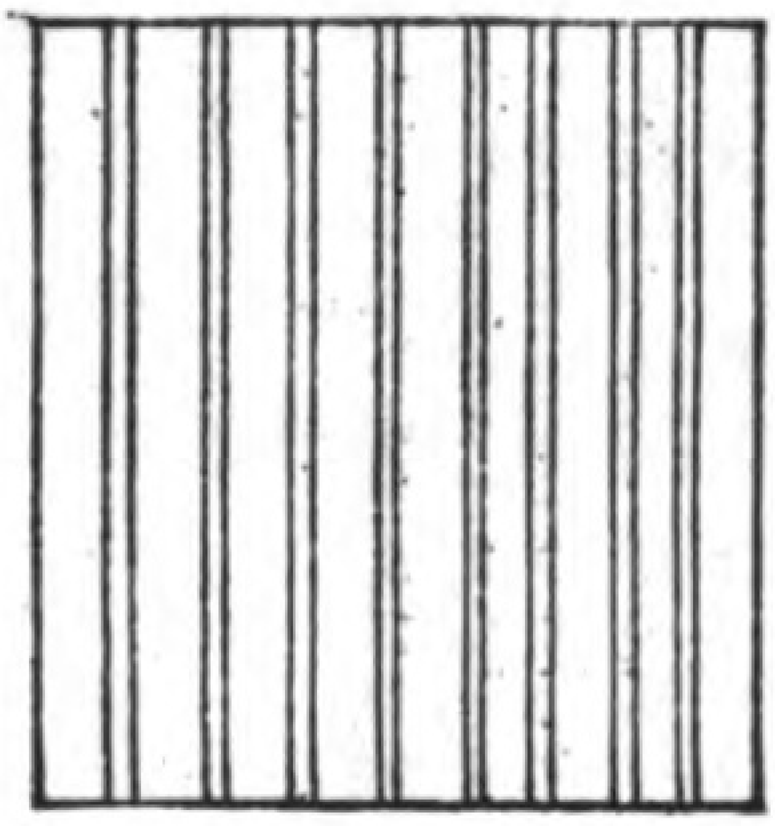
キ絣



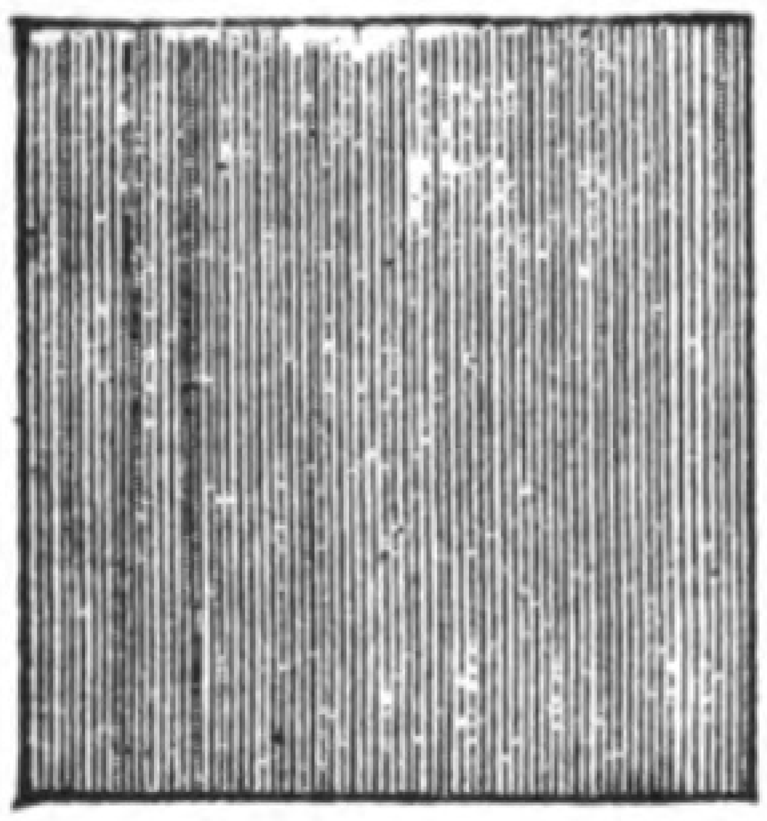
子持筋縞



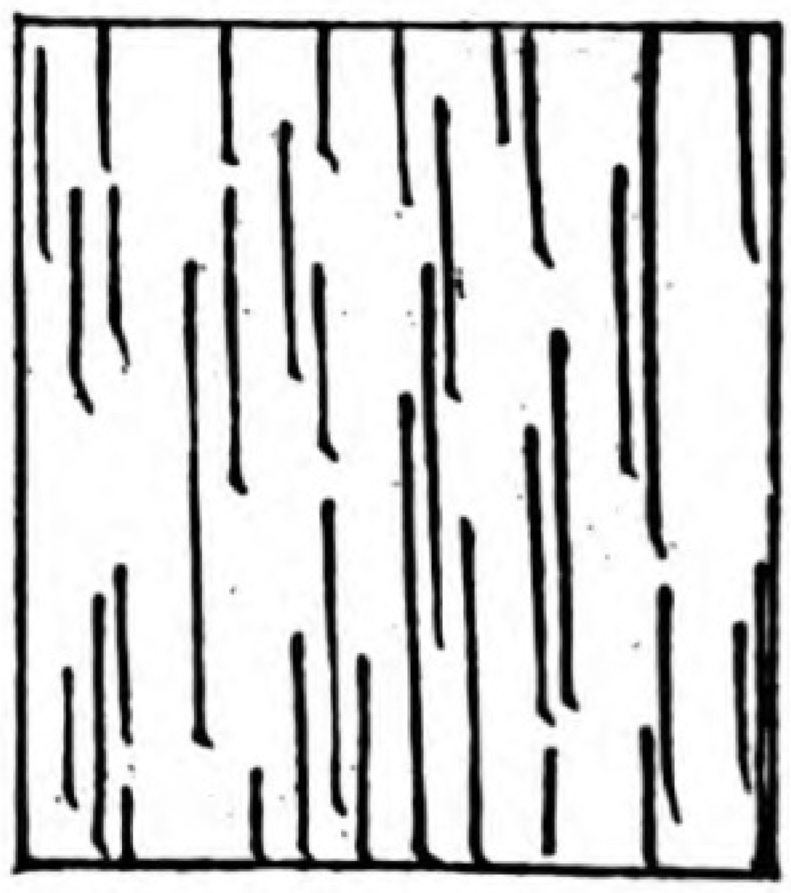
金通縞



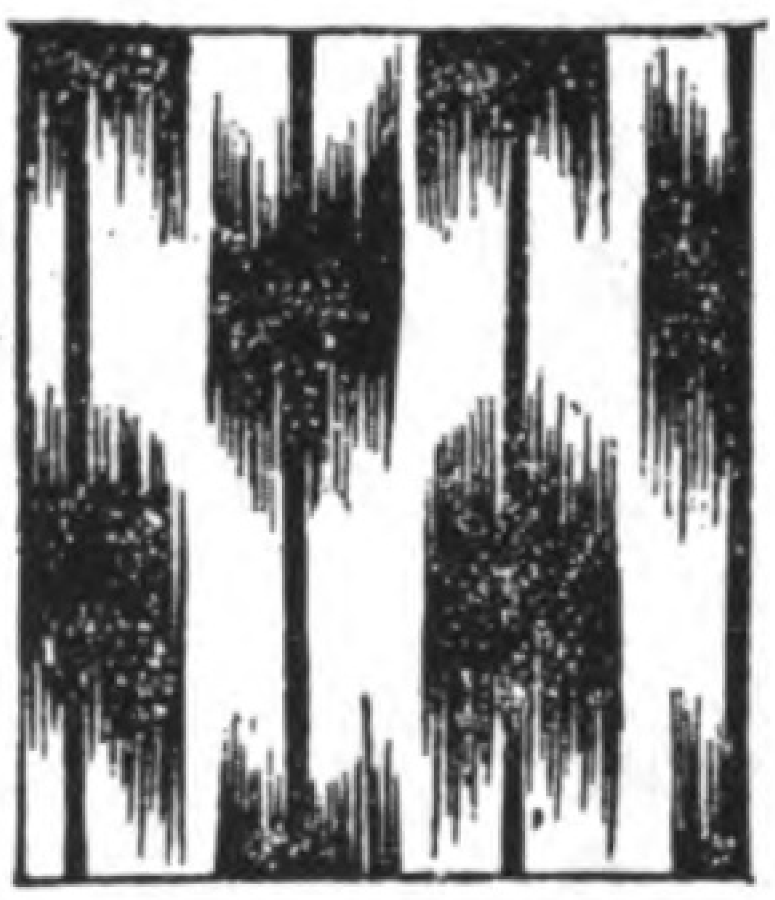
萬筋



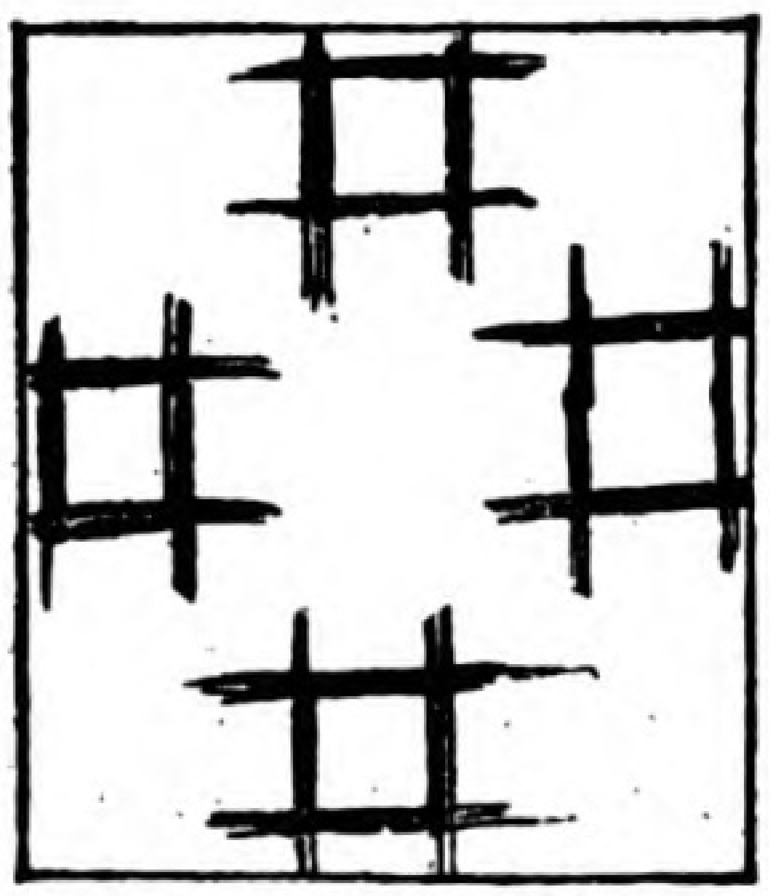
雨ガスリ



矢ガスリ



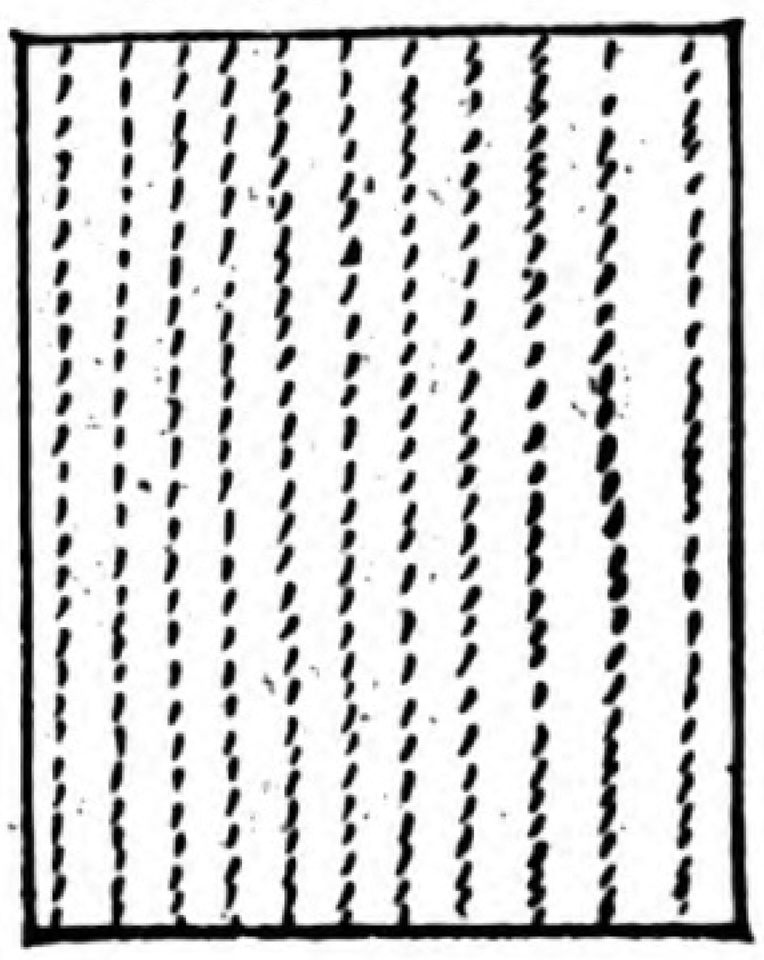
井筒ガスリ



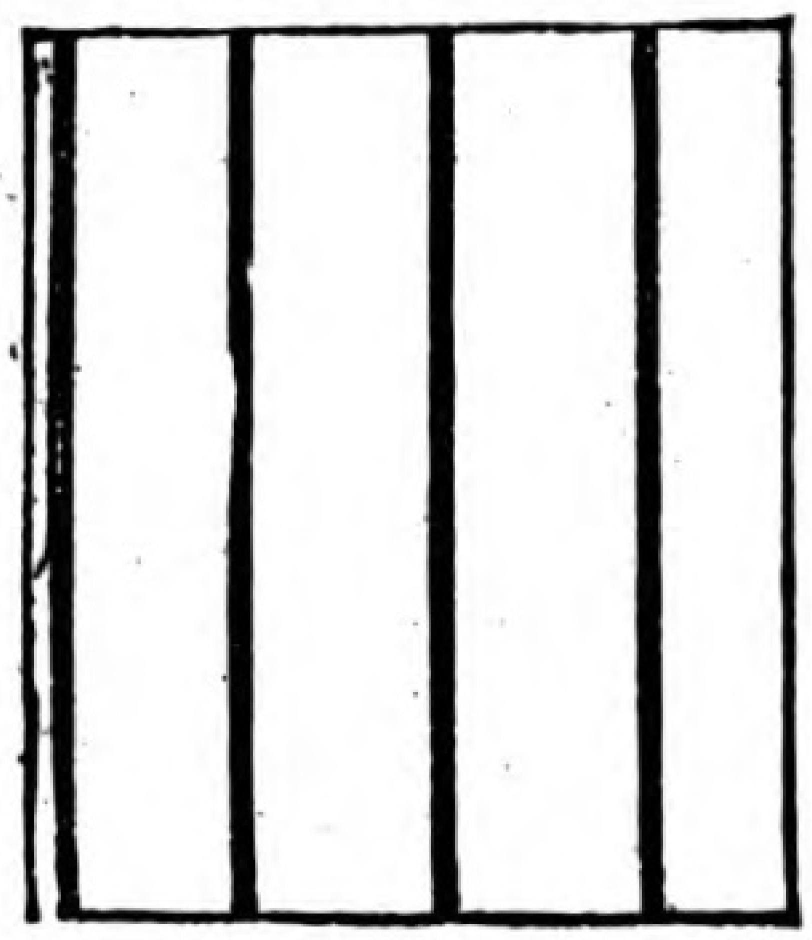
瀧縞



片羽大名



間明大名縞



川柳 （家庭文藝）

題「猫」「鮨」　井上劍花坊撰

○

天

徳島縣小松島港西の口　西野ひさし

此鮨は鶏卵が無いと頑是なさ

評云、いつも小兒を詠み込むと天位に据えるやうに思召しては恐れ入ります、決してさう云ふ次第では御座いません、が「家庭の文藝」として、「女性の川柳」として、滑稽で品のよいところをと心掛けますと、どうしても頑是の無い、罪の無いところから限り無く溢ぼれて出る愛嬌が、至上の滑稽と爲つて顯はれるやうに感ぜられますので、此度も此句を天位に推したので御座います。どうでございます、おツ母さんや姉さんが生まのお肴の有る鮨は毒だと、巻鮨なれば玉子焼な、押鮨や五目なれば鶏卵の有るところをくれるもんですから、坊ツちやんは、お鮨と云ふものは玉〳〵が這入つて居る者ときめて居る、其處へ玉〳〵の無いお鮨が出たから、坊ツちやん甚だ不思議に考へて居らツしやる、且つ聊か不平が有る、則ち物平を得ざれば則ち鳴るで、此滑稽十七字詩と爲つたのでございます、チヨイと見れば平凡なやうでございますが、其處にいふにいはれぬ味がございます、何處のお鮨を喰べたらこんなにおいしいでせうか。

地

仙臺市米ヶ袋上町三二　荒つる子

腹が空くと猫眼を正午にし

評云、すこしく趣け過ぎたやうにも見えますが、兎に角奇想天外より落つて、實に人をして眼玉をテングリがへらしむる所が御座います、其滑稽の才想ひやられます、猫の眼が正午を示したのは、多分腹がすいたのだらう位では只だ洒落丈けで、別に賞める値が有りませんが、猫の方から考へて腹の空いたのを人間に示すべく眼を正午にして見せるといふから、こゝが活きて來るので御座います、人間の腹が空いた時は、猫が眼を正午にするとも解釋は出來ますが、それよりは猫の意志にした方が可笑しいやうです、多少間釈になる句でございます。

人

横濱市宮崎町三十五小島内　小峰園子

いぢめると直ぐ鍋島を乳母話し

評云、どうもこんな乳母やには困ります坊ツちやんが猫をいぢめて居るのをとめるのはよいが、動物虐待論を説いても解らないと思つたか、鍋島猫騒動の話で坊ちやんを脅し、罪のない小兒の頭へ不知不識の間迷信の種を蒔き込むのです、よく有る事です、作者が此處を生け捕つて材料にしたのは働きです、猫の字を云はずして十分猫と云ふ事が聞こえて居ります。

秀逸之部

オツでげすオホンと鮨の指を嘗め　牛込　下山岐陽子

女の布袋鮨屋へ秋波なり　牛込　下山岐陽子
にやア納言鮑貝で飯を食ひ　同　同
其昔釣瓶で鮨を冷やしたか　徳島　西野ひさし
猫曰く三めおいらのせえにした　同　同
猫の足小言云ひ〱拭いてやり　深川　小宮ふみ子
竹の子の返禮鄰へ五目ずし　同　同
戀猫に紅で眉毛を書いてやり　三河　鈴木環子
お魚のとれたお鮨を母はたべ　横濱　小峰園子
彌助でもなどと奥様迺を云ひ　同　同
田舍鮨きつう御飯に酢を利かせ　同　同
仕附糸まろめて猫に投げつける　大阪　菊地しづ子
毛を燒いた竈へ猫は又這入り　同　同
猫の眼と時計の針を見くらべる　京橋　太田秀子
ソレお客よと坐蒲團の猫を追ひ　同　同
濡た猫無沙汰で床にもぐり込み　小石川　須原秋子
奥様は鮨から生れたまひしか　鷹木　盆田むき子
椽側に蒲團を出せば玉が敷き　長門　飯田はる
父さんが引つかゝた猫つてどんな猫　日本橋　濱口とし子
お母ちやん猫はいくたり子を産の　同　同
手少なで客來に鮨をとり　桑名　杉上やほ子
客膳に向つて猫は喰ふなり　鳥取　太田靜子

留守番を猫にたのんで摘菜に出　鳥取　太田靜子
妾宅の猫本宅に引き移り　靜岡　多賀きく子
守女ねん〱猫ともぢり出し　青森　八戸とよ
世が世ならなどゝ猫にも愚痴を云　横須賀　鹿岡逢子
嬢様の猫には下女も困つて居　麹町　行田はる子
ウヌちう兵衛逃がすものかと猫　富山　綾子女史
猫ニャン〱犬ワン〱と敎て居　南葛飾　淺岡きく子
小猫修行二十日鼠から取り覺へ　越後　梅花子
蓋取れば花でお鮨を漬けたやう　磐城　吉田つる
まねき猫菓子番のやうな田舍茶屋　小石川　淺井琴
畜生め又來たといはれニャオン也　同　同
猫にまで嫁氣を兼ねるつらい事　麹町　安田やす
伊勢屋では泥棒猫を飼つて置き　埼玉　山下芳子
理想の家庭耆はお鮨ときめて置き　麹町　小島濱子
愛猫を高價で買れと三味屋が來　松山　山脇幸子
猫の鼻風を引いたで乾いて居　小倉　林春子
圍者猫の蒲團も備へて居　大阪　岡野つゆ
ひとりものエ丶面倒と鮨を買ひ　三河　藤井辰子
弱い猫鼻を鼠に喰ひつかれ　日本橋　古谷はま子
猫のハイカラリボンの首輪なり　同　同
喰かけておすもじ鳥渡紙でうけ　駒込　窪田つな子

山葵卷たべて兩手を顔にあて　駒込　窪田つな子

佳句之部

するかけた鮨を隣へ分けてやり　松山　山脇幸子
魚奪つて歸つた猫を撫でゝ居り　同
白い鮨おゝ奇麗だと冷やかされ　北海道　德田阿都子
九尾の孤に負ず七化ヶの猫と成り　同
鮨で氣焔世界中のを喰べたやう　牛込　下山岐陽子
お上手な自轉車猫ちや〱なり　同
猫塚の供養には藝妓が來　日本橋　古谷はま子
居候猫の鰹節をぬすみ食ひ　同
煎餅の袋を猫はあぶながり　京橋　太田秀子
手鞠つく度に小猫は追ひやられ　深川　小宮ふみ子
嬢さんの寢床小猫が占領し　同
御持たせと持參のすしを馳走され　同
醫學生醋酸の這入た鮨を食ひ　德島　西野ひさし
太郎の使いつもお鮨が不足なり　麹町　行田はる子
すしの章魚金の入歯へすひつかれ　同
チウ助の警察行を猫嘆じ　兵庫　藤井濤子
叔母が家の節句の鮨は食へぬなり　同

田舍ずし一つで虫が得心し　三河　藤井辰子
其妾豈男猫のみならんや　同
猫よ猫我汝を愛すはきつい事　麹町　小島濱子
飼主が來るとニャー〱媚るなり　南葛飾　淺岡さく子
五六間逃げた處でニャーと啼き　同
人の子であるに猫とはむごい評　横須賀　鹿岡達子
山出しのおさん猫にも馬鹿にされ　同
前通り一ツ五厘を車夫はたべ　横濱　小峯園子
アラ嫌だ妾猫ぢやなくつてよ　千葉　長田夏子
割烹會今日はおすしの練習よ　秋田　浦井まつ子
雑巾で猫追ひ廻すいそがしさ　大阪　岡野つゆ
お勝手で猫とおさんの立廻り　同
新道にこんど出來たよ細工鮨　秋田　浦井まつ子
寫生した猫は妙技一等賞　同
我椀で猫におまんま喰はして居　大阪　垂柳女史
口程にないのは猫の喧嘩なり　備後　黒木德子
花嫁が鮨卷く手附き覺束な　同
弱い猫主人のそばでうなつて居　淺草　長濱かな
鮨は大道に限りやすと通を云ひ　同
大皿の眞ン中に鮨はすまして居　同
紙袋猫にかぶせて可笑がり　小石川　淺井翠

どら猫が以來泉水の番につき　小石川　淺井琴
犬と猫不倶戴天のかたきなり　同　同
飼猫が炬燵へもぐり火傷なり　同　同
玉を捨(すて)るッてゐたし泣(なく)からいゝわ　日本橋　濱口とし子
飼主の手だけ小猫はやわり嚙み　同　同
内出來の鮨にかぎると世辭を云ひ　同　同
屋根の戀天井の鼠におどかされ　神田　今井とみ
招き猫招きそこねて損をさせ　同　同
神棚で猫と狐が招き合ひ　同　同
遠足のいつち荷物はお鮨なり　巣鴨　佐藤露子
西洋の猫はと聞かれ姉困り　同　同
肉少し殘せと猫は顔で云ひ　同　同
彌助でも取(とり)ましやうかとさい足し　駒込　窪田つな子
玉子燒だけを坊やははいで行き　同　同
取り上げつ食はれた數を鼻でよみ　同　同
三毛猫を長い烟管でじやらして居　蠣殼町　藤田こう
蝶と鞠とがあるで猫に見えるなり　同　同
あまり旨かつたので鮎鮨夢に見る　常陸　松浦りう子
ペスト菌持つた親玉猫が取り　京都　濱部愛子
捨てた猫歸つて見ればお待どう　能登　杉下ふみを
極の馬鹿鮨の海苔をむしつて居　同　同

孃樣の御手傳ひ珍らしい鮨が出來　大阪　藤井紫子
二階居士鄰の鮨の匂ひきゝ　同　同
鮨屋の娘料理屋へ嫁入し　美濃　田中久代
猫の夜目靑光りするすごい事　福島　佐久間みどり
驚いて命婦のおもと自衛なり　美作　紫川
小猫二疋親の尻尾にじやれて居る　神戸　赤堀つる
猫に袖ひかれて孃は泣き出だし　三河　鈴木環子

撰者吟

猫おもへらく鰹節(かつ)をかいてるな
かまどから出た猫面(つら)を氣にして居
お鮨を頬張つて周公御挨拶
酔つた人お鮨の折をぶら〳〵

次回の川柳課題

『ビール』『珈琲』『鼠』『袴』

謎々

『捕虜』『卒業式』『國庫債劵』とかけて

第一等

▲國　播州加古郡別府港　西田つま

風雅人の催し」と解く

心は「詩會(四回)もあり碁會(五回)もある

評云、どうも無度ながら謎々は振はぬやうです、川柳の朝日の昇る勢に引きかへて、甚だ心細い感が致します、もつとも駄洒落杯は追々下火になるといふ時勢の進歩を證するのかも知れませぬが、ヤハリ謎々は謎々で、面白く遊んで貰ひたいです。此解方も例の皆葉の落の方で、撰者の好む所ではありませんが、他と競べると先づ無事な方で。チヨイと可笑しく當て込んで御座いますから採つたのであります。時に序ながら申して置きます、謎々に當込をやるのは差閊御座いませんが、それが目的ではない、やはり高尚な可笑味が第一義でありますから、其邊は心得て戴きたいです。

第二等

▲播　京都小川一條上ル　濱部愛子

桶の中の泥鰌」と解く

心は「時々外へ飛び出す

評云、何となく可笑いところがあります、此呼吸が今一歩進んで來ると、面白い謎々が出來るだらうと思ひます。

第三等

▲播　丹後國加佐郡高野村龜井新太郎方　龜井懋子

出來上つた寫眞」と解く

心は「モー光線(交戰)に關係しない

評云、光線と交戰のモヂリ、多少の無理あるりますが、モーの語に非常の力がある所を取られればなりませぬ。

以下秀逸

▲播　大阪市西區三軒家上の町　垂柳女史

吝嗇家の金」と解く

心は「殖える一方

▲卒　大阪府北河内郡交野村字私部　井月せい

娘の嫁入前」と解く

心は「恥かしいやら嬉しいやら

▲卒　南多摩郡八王子八日町　比企もと子

波羅的艦隊」と解く

心は「ピク／＼東航(登校)する

▲國　磐城小野新町　吉田つる

勉强家」と解く

心は「いつも／＼成績がよろしい

▲卒　相州横須賀中里一六八　高橋つね子

借金の返濟」と解く

心は「證書を貰ふ

▲卒　神田今川小路一丁目一番地鈴木方　やゑ子

秋の百花園」と解く

心は「紫苑(師恩)いや高く目に立つ

△卒　駿河國沼津町上土町二五〇　石本みどり

クリスマス」と解く
心は「聖徒(生徒)が待つて居て樂む

△捕　淺草茅町二ノ二十四　長濱花

朝鮮政府」と解く
心は「財源(際限)が無い

△卒　淺草區小島町十九水澤方　田村たき子

大佐の戰功」と解く
心は「今に少將(證書)が貰へる

△捕　大阪西區京町堀上通二長州内　柳原榮子

珍物の獲應」と解く
心は「御蔭で命が延びる

△國　福岡縣嘉穂郡笠松村鉱田炭坑　檜村千代子

ボートの競漕」と解く
心は「勇んで櫂取る(買取る)

△捕　淡路國福良町羽賀方　ゆき子

假紳士の娘」と解く
心は「氣儘で困る

△捕　能登ノ輪島町字河井　杉下ふみを

一二三四五六七八十」と解く
心は「九(苦)が無い

△捕　横濱市富士見町二丁目十一山崎方　益子貞子

借金の利子」と解く
心は「返せん(開戰)からます〱殖える

△卒　兵庫縣明石二番町　橘あい子

息子の名譽の戰死」と解く
心は「親が喜んで泣く

△國　羽前新庄町　松井柳子

愛國婦人會」と解く
心は「縱々申込が有る

△國　日本橋龜島町一ノ十五　齋福藤

駄菓子屋の當テ物」と解く
心は「外づれるが多い

次回の課題

〆切五月十八日

『滿洲の未來』とかけて

『庇髪(ひさしがみ)』とかけて　『貯蓄債券』とかけて

細君低語

巖谷小波

其の一　好人物(?)

私の良人と申す男は世間で云ふマア好人物で御座いませう。連れ添うてからもう十年、其間只に一度の半分も、私に對して小言を申した事が御座いません。が、小言を申さぬからと云つて、それで本人は決して滿足して居るのではありません、小言は云ひ度いのですが、云はないのです、否、寧ろ云へない方なのでせう。

長く連添つて居りますから、よし口に出して云はれずとも、顏色や素振で、機嫌の善惡の解らぬ事はありませんが、場合に依つては見損つて、却つてその意に逆ふ樣な仕向けを、心ならずも爲なければ成らない事がありますが、良人は何とも云はれぬ顏をして、其癖一言も云はず、やがて書齋へ立て籠つてしまひます。

あゝ惡かつたと思へば氣の毒で、……氣にすれば氣に成つてたまりませんが、氣にした所で又仕方が無いと思つて、——初は隨分機嫌取に出かけましたが——後にはわざと放棄つておきますと、今度は先方が氣の毒に思ふと見えまして、はる〳〵自分から書齋を出て何の彼のと話しかけて、切りに此方の機嫌を取り初めるので御座いますよ。此邊を思ひませば、如何も好人物で御座いますが、然しかうして連れ添ふ身に成つて見ますと、なまじ小言を云はれ無い丈、何が好きなのやら、何が厭なのやら、怒つて居るのやら、喜んで居るのやら、それが何うも解り兼ねますので、矢張り機嫌が取りにくう御座います。

大きな聲では申されませんが、男なら男らしく、もうちつとさつぱりして呉れますと、ほんとによいので御座いますがねエ！

其の二　程の好い(?)

所夫はほんとに氣むづかしいので御座いますよ。い

いエ貴君！　あの程の好いのは、皆他人樣に許り……宅の者に向ひますと、まるで大反對のやかましやで、ほんとに別人の樣で御座います。

それに潔癖の方で御座いましてね、夜具の襟が少し汚れましても、それこそ喧しく叱られるんで御座いますが、それほどのやかましやが、他所へ出ますと何うで御座いませう⁉ 先頃も函嶺へ一所に參りました所尤も大層込んで居つた故では御座いますが、夜具も粗末な許りで無く、お茶碗などは洗ひが惡いので、よく見ると何だか着いて居るので御座いますよ、それでも貴君！　所夫は何とも申さずに、平氣で寐んだり、食べたりして居るので御座います。私はあんまりで御座いますから、女中を捕へて文句を申さうと致せば、『まアさう云つてやるな！忙しいのだから勘辨してやれ』ッて、所夫は却つて止めるんで御座いますもの……

萬事が此通りで、他の者には至つて寛大で、否、宅の書生や女中に對しましても、まことに程が好いので御座いますが、私に許りは、何故か大層嚴しう御座いますので……

何でも他所で我慢する丈、家内で、餘計に喧ましく申すんで御座いませう。それでは私が一番損で御座いますから、時には思ひ切つて不平も申して見ますと、所夫の申し樣がよいでは御座いませんか、『お前を他人と思はなけりやアこそ、何でも遠慮無しに小言を云ふんだ』ッて……。

かう云はれて見れば、萬更腹も立てられませんが、何しろ他人に爲る斟酌の、半分の四半分でもよいからちと私にも爲てくれるといゝんですが……。

其の三　やかまし屋

宅のはほんとに短氣で、隨分小言を申します、いゝエ、小言でも追付きませんと、手を揚げる事もあるんで御座います　、それでも機嫌の宜しい時は、いかにも滿足致して居る樣で、まるで子供の樣に嬉しがりますので、氣心さへ解つてしまひますと、ほんとに仕好いので御座います。

その代り女中達は、まゝお叱りで、またお小言だと云つて、ビク／＼致して居りますから、何もそんなに恐い方ぢや無いからつて、私が間で始終執り成して居る位で御座います。

で、少し馴れて參りますと、ソレ又初まつたと云ふんで、別に驚きも致しませんが、新參の者などは、他人の云はれて居る小言まで、自分の頭に響きますので肝を潰して逃げてしまひますから、何うも私が骨が折れて成りません。

その癖隨分大ざつぱいな方で、時々家内の者が疎匆致しましても、氣が付かずに濟んでしまふ事も御座いますの、さうして又さう云ふ時にやア、程經つてから知れましても、何だか氣が拔けると見えまして、別段何も申しませんから、ほんとに可笑しいので御座いますよ。

ですから、何でも目の前で許り疎匆しなければ、家内安全なので御座います。私もこうその呼吸を呑み込んでしまひましたから、此頃は宅の小言を除けますのにすつかり上手に成りました。度々戰塲へ出ますと、自ら彈丸にも中らなく成りますツてね、丁度其通りで御座いますワ、ホヽヽヽ。

其の四　內證の內證

夫と申しながら、宿の主人位、ほんとに水臭いのは御座いますまい。

夫婦に成つた以上は、何事も隔無く、一心同體で參り度いぢや御座いませんか、それに主人は、何かにつけて妻たる者に、隱し立てを致して困ります。

殊に金錢にかけましては、尙更秘密が多う御座いますので、私が參つてから三年に成りまするが、まだ月給が何程だか、委しく申した事も御座いません、先日もをかしいでは御座いませんか、役所の方の等級が昇つた時なども、當人も何とも申しませんから、私は少しも存じませんで居りますと、やがてお友達からお賀びが參りまして、それが而も奇麗な繪葉書で御座いましたので、何の氣も無く私が見まして、初めて承知致

した位なのです。

かう云ふ風で御座いますから、其他臨時に入りますお金などは、何れ丈あるのやら少しも解らず、凡て隠し込んで、内證で使つて居るので御座います。

人情と云ふものは妙なもので、先方が先方なら此方も此方といつて水臭い氣が出るものでねエ、夫が何事も内證に致しますから、私も負けない氣に成り、實はあのかう月々の計算なども、少し宛掛値を付けておいて、内々預金に致しておきますが、それにはまだ氣が付かないと見えまして、未だに何とも申しません。

それもさうで御座いませう、その預金帳と云ふものは、見られちや大變と思ひますから、私の帯揚の中へ入れて始終背負て居りますものを。

其の五　酒の嫌に成る法

あれで酒さへ飲んでくれませんと、ほんとに好いので御座いますが、どうも無くて七癖とやらで、所天の酒好きにも弱つてしまひます。

親には孝行、私には親切、子供もよく可愛がり、その上仕事にも精を出して、友達の義理も欠かず、世間受けも悪い方では無いんで御座いますが、只、只酒と云ふ悪い魔物と、どうも仲が好過ぎますので……。

尤も酒が好きだと申して、それで何も亂暴をしたり他人様に御迷惑をかけると云ふんぢやありませんが、酔ふと只氣が大きく成りまして、まるで前後が解らなく成るんで御座いますから、ほんとに仕様が御座りません。

で、時計を掏られましたり、紙入を抜かれましたりひどい時にやア羽織まで落して歸りますので、あんまりで御座いますから『ちつとはたしなんで下さいませんか……何も御酒をお飲みなさるなぢやありませんが、そんなに酔はずともいゝぢやありませんか』ッて申しますと『どうも面目無い〳〵、今度から屹度愼むよ』ッて、ひどく恐入るんで御座いますが、その口が乾くか乾かない中に、直ぐその晩から酔つて歸つて、家を間ちがへてお隣へ入つて、土間でグウ〳〵寝て居

るんで御座います……。

もうほんとに、あの人の御酒にやア、私はクサ〲してしまひましたから、何うかしてお酒の嫌ひに成る法は無いかと、それ許り私は考へて居ります。

其の六　早歸り

ホヽヽヽ、私は廢しませう。申すと何だか惚話見たいで、皆さんが御笑ひに成りますもの。

何でも云へッて？　……アラ、ぢやアたつた一言申しませう。

私はあの……夫に對しまして、何も不滿足な事は御座いませんが、只一事！　若しか夫が私を、もう少し麁末にしてくれたら、さぞ幸福だらうと存じます。

その譯で御座いますか……少しお待ち下さいまし……オヤもう三時で御座いますか。ではもう參らなければ成りません。只今歸つて居りませんと、又迎へが參りまして、歸りましてから、又どんなに申されます事やら。

それも小言ならよいので御座いますが、何だか皮肉に、忌味たつぷり……！　それが何よりつらう御座いますから……

無論男の方の居らつしやらない、皆さん許りの所ですから、決して心配にやア及ばないんで御座いますがそれでも男と申しますものは、氣の廻はる者と見えまして、ネ、……自分も早く歸つて參ります代りには、私の歸宅がちとおくれでも致しますと、ホヽ、大層心配致すので御座います。それが罪で御座りますから、まア歸つてやりませうよ、では皆さん、失禮！　お先へ！

覗き眼鏡

食及道人

◎紳士の體面

日本の紳士の體面ほど、薄弱な心細いものはあるまい抱えの人力車がなくては體面が保たれぬと謂ふので下宿屋の番頭を通して、近所の宿車に談判の結果、車

の背後に羽織同様の定紋が付くと、サア何々の御前と謂はれる人さへある。

追々暖氣相催し候時節となると、インヴアネスケープがないと、亦紳士の體面に關する、それで體から面から脂汗をダク／＼流しながらも、後生大事に之を衣て歩いて居る、是が當今紳士の體面である。

◎議員の體面

國會議員も亦紳士である、即ち體面を所有するの必要がある、然るに舊の歳費八百圓では體面を保たれぬといふので、歳費二千圓に騰つた、從つて體面も夫れ丈上ッた筈であるが、果して何樣？。

◎電車内の女權

日本は男尊女卑であるといふが、電車の中ばかりは左樣でないと思ふ。兩側の腰掛が滿員であつても、ワタシは年寄の婆さんでございと謂ふ風で、無理に割込んで腰をかける、甚しいのは他の膝の上にでも腰を卸す、此は塲所がない時、婦人には必ず席を讓るといふ慈善紳士が往々あるので、斯る風を養成した者と見えるが、中にはヨボ／＼した年寄には構はず、妙齢の美人に對してのみの慈善家もあるさうである。

◎電車紳士

電車には猶いろ／＼面白い事が多い、上野又は新橋から乘つて來る紳士、即ち奧羽或は關西から汽車で上京した人であらう、先づ車に乘込むと直に、丁寧に毛布を擴げて、鞄を置いて切符を帽子に挾んで其傍に坐る、矢張長時間汽車に乘る格で居るのだ、處が車掌がどうか鞄を膝の上にと請求する、澁々これに應ずる、氣の毒の感なきにしも非ずだ。斯る人を電紳といふのであらう。

◎電車と喫煙

電車内で煙草を喫ませぬ事に就ても彼此の議論があるやうである。「ハイカラ」は曰く、西洋では婦人の前で、無斷で喫煙はせぬ、是が禮式で即ち文明流であるといふ、即ち禁煙贊成論者で、誠におめでたい見識である。反對論者には種々あるが中に、某新聞記者で社會文學論者(？)である所の某氏は、毎日幾多の電車乘

客に喫煙を禁ずる時は、煙草專賣を以て財源の一として居る政府の收入を減ずる理窟だと論じた、是も罪のない財政論であると同時に苦しい反對論である。

◎其　二

元來煙草を喫む、茶を飲む、菓子を喰ふなどの事は規則で制限すべき者であるか、又常識のある人間で制限されるを待つべき者であるか、本人が時と場合とを見たら分りさうな筈である。汽車に喫煙の禁がないにもせよ、多人數込合つた中で、フカ〳〵やられては、煙草の好な者でも辟易する、まして嫌ひな人をやだ。電車でも他に乘合のない時には、煙草を喫んでも好い理窟である。つまり公德問題であるのだ。

◎短所を知る

人は自から短所を知る動物である、其證據には陰險な人は磊落らしく裝ふ、無學の人は識つた振をする、惡事醜行のある者は道德家らしく振舞ふ、自分の短所を他に見出されまいと思ふから、力めて之を秘さうとするのである。

◎戰爭と文學

戰爭は文學を萎微せしめると謂ふが、我邦の實例は多く左樣でない、征淸戰爭の當時、隨分くだらぬ書物や雜誌が澤山出來たが、今回もさうである。併しくだらぬ物が出來るばかりでない、立派な者は依然賣れて居る、くだらぬ物だけが戰爭の副產物と見ても好からう。

◎戰爭と歷史

啻に近世のみではない、天武天皇の壬申の亂は、我邦內亂の最大なる者であるが、此戰爭の後に日本書紀が出來た。即ち六國史中の最古のものである。それから源平戰爭の結果で、源平盛衰記平家物語が出來たが此も戰史中の傑出したものであり、南北戰爭の結果太平記が出來た、戰記もの丶中最も古い所の將門記は將門の亂の後幾ばくならずして出來たとの說である。足利十五代二百餘年は、殆んど戰爭のみであつたが、その副產物として、種々の有益な戰記や史料が遺された。

◎其　二

戰爭の結果で大著述、殊に大歷史の出來たのは、支那でも同樣である。浩澣なる二十四史の多くは、後の朝廷が前代の事を書いたもので、譬へば唐の歷史を宋で書き、宋の歷史を元で書くといふ風であるから、矢張戰爭の賜物と謂つて宜しい。要するに從來の歷史の多くは、戰爭の段落が付いて、稍秩序の整頓した頃に出來た物である。

◎其三

何故戰爭のあつた爲に歷史が出來るかと謂ふと、一寸不思議の樣でもあるが、實は當然の事なので、或は功業があれば、それを後世に傳へやうとするとか、或は寃を雪がうとするとか、或は敗北者の慘憺たる有樣に同情して之を吊ふためとか、或は戰勝を利用して自分の都合の好い說を立てるとか、原因は種々あるけれども、其書物と成つて現れるのは一樣である。

◎武士道

近來武士道といふ事が、段々人の口にも上り、研究もされるやうであるが、如何にも結構な譯である、併し武士道は武士即ち軍人のみの守るべき道で、他の者は用がないと謂ふやうに考へられては甚だ違ふ、武士道と軍人氣質とは自から別物であつて、武士道とはつまり廉恥、節義などを重んずる心懸を謂ふのであるから、婦人にも小兒にも、百姓にも商人にも缺くべからざる德義である、それでは武士道は實踐道德といふと同じであるかと謂へば、歸する所は大差はないが、全然同一とも謂へない、日本の武士道と謂ふものは、歷史敎育の結果であると謂つて宜しい。先祖に濟まない家名を傷つけるに忍びないといふ、商人ならば暖簾にかゝはるといふ根性で、歷史的廉耻心とも謂ふべき者である。

◎歷史的廉恥心

今度の戰爭に付て、百戰百勝の名譽を維持して行くのも、矢張歷史的廉恥心のお庇である、日本は萬世一系の天子を戴いて居る、又開闢以來外國と戰つて一度も負けた事がないといふ感念は、上司令官から下兵卒馬丁に至るまで有つて居る、そこで先祖以來國體を辱

かしめないで來たのに、自分達に成て負ける事が出來るものかと謂ふ事になる。是は出征軍人は勿論、所謂擧國の一致する所であるから、戰ふ者はいよ〳〵強く殘つて居る者は十分に後援する、此が抑も連勝の原因である。されば日本の如き國柄に於ては、歴史教育は特に必要であるのだ。

◎歴史教育

支那は何様である、朝鮮は何様であるといふに、氣の毒ながら斯様いふ立派な歴史を有つて居ない、從つて自國の歴史を重んずるといふ感念がない、勿論歴史教育も普及して居ないが、普及させた所で、經驗し得る所は何であるか、萬世一系の天子もなければ、朝たに李氏に仕へ、夕べに趙氏に從ひ、何時も長い物に捲かれたといふ迹ばかりである、魯西亞が強ければ魯西亞に付くし、日本が豪ければ日本に付くといふ、事大根性になるのも珍らしからぬ譯である。先祖以來左様いふ風であるから、それで濟むも濟まぬもないのである。

東洋女學校

澤柳博士等の顧問たる村上文學博士の東洋女學校は校舍新築落成せるを以て去月十六日午後一時より開校式を擧行せり女生徒の君ヶ代二唱を以て式を始め、村上校長の開校の辭に次で、岡田治衞武氏の挨拶あり、それより大隈伯は、教育は時代の精神と合せざるべからず日本には日本の時代精神あり亞米利加の時代精神を以て直に日本の女子教育に應用せば大なる誤を生ぜん、本校の趣旨即ち此に在りと雖予は開校の式に臨で殊更に教職員の注意を促すとの簡短なる祝辭演説を述べ、次に久我侯爵の祝辭朗讀あり、終に菊地男爵は女子教育は目下の大問題なり、日本の女子教育問題はやがて日本の女子問題なり元來女子をして良妻賢母たらしむるを以て足れりとするか、之を以て足れりとせず、男子と共に交際場裡に雄飛すべきものとするか之の解釋によつて從て女子教育の方針は異ならざるべからず、本日の某新聞に「婦人と交際」と題して「女子教育といふものは常に餘裕がある樣にしなければなりませぬ、餘りに引き詰めて、これを狹いものにして了ひますれば、要之唯賢母良妻を養へば足るといふ風になつて了うですから」云々といふことを記載せり、驚くべき議論といふべし、余は全く之に反して「唯賢母良妻を養へば足る」といふことに斷定したし、否斷定せざるべからざるものと信ず、世の女子の父兄は女子教育といへば皆良妻賢母を養ふと思へども、實際か丶る議論のある世の中なれば大に注意すべきことなり、本校は全く予の主義と合致すれば、世間子女の爲に幸福といふべしとの聊か氣色ばみたる演説を以て祝辭に代へ、之にて式を終りたり。同校は交通不便の小石川丸山町に在りと雖も市街と離れたれば妙齡婦女子の修學には最も好適せるものなるべし。



國歌に現はれたる
奈良朝の婦人

金子元臣

青丹吉奈良の都、白銀の目貫の太刀をさげ佩きて練るは、そも、誰が子ぞや。春日野の飛火の野邊、白妙の袖振りはへて行くは、そも、誰が家の女ぞや。春の風緩く動きて、七代りの御世、塵を揚げず。秋の月高く照りて、百年の九重の空、立つ雲だにも無かりけるは、如何に、その世の人心、長閑けかりけむな。佐保の柳、佐紀山の櫻、高圓の萩、三笠の雪に、あるは思ふ事ある折節毎に、男も女も、詠みあへりけむ歌よ。げに、床しくなつかしきものゝ限ならし。殊に、それら數多の、黄金や玉やの、光あるめでたき言の葉のうへに、現れ來れる輪廓をたどりて、當時の婦人等が面目を搔捜りみむは、如何に、興ある業ならむ。いでや嘗て、おのれが試みたりし、この興味ある研究の一斑を物語らむ。聞き給へや。

（一）容儀

長、短、方、圓、大、小、中高、中凹、下脹れ、奈良時代には、如何なる輪廓の面貌が、最も多くの人に悅ばれしか。その髮だにも搔きは梳らず、履をだに穿かずあるけど、錦綾の中にくゝめる齋ひ兒も及かず、とぞいふなる、葛飾の眞間の手古奈の美貌を形容して、

望月の足れる面わに、花の如笑みて立てれば、

と詠めり、望月は滿月なり。滿月の如くに、滿ち足らひたる面貌は、即ち、所謂、丸顏なるべし。しかも、巧笑の倩たる花の愛嬌を、こよなく美しき者と、めではやしたりき。

顏の色合は、如何なるを好いたりしか。鉛粉は、持

統天皇の御世に、觀成といふ僧の、始めて、製りて奉りければ、即ち、用ゐ給ひしこと、物に見えたれば猶、白きをや、第一としたりけむ。只、歌に見えざるのみ、臉は、支那にては、桃の花、芙蓉の花もて擬へ、白き色の底に、透き徹りたる薔薇の紅、今の世人も、捨て難くせり。昔も、

秋山の下知る妹
丹の穗なす面
吾が戀ふる丹の穗の面わ

など歌ひて、秋の山の木々の紅葉、或は、丹色を以て、臉の色の譬喩に用ゐたるは、婢子、雛の顏の如く純一に、白きのみにては、匂なくて、愛なきものなればならむ。吳の孫和が夫人鄧氏の頰の瘢癒えて、其の痕赤く附きけるが、優りて美しく見えければ、國中の婦人、その顰に倣ひて、紅を頰に點したりし、皆同じ趣の好みなり。

「不レ看レ眉、只看レ月」といひし月稜眉、初月の匂ひ出でたるが如きを、優れたる眉つきとは、したりけむ。歌に曰く。

振放けて三日月見れば一目見し妹が眉引おもほゆるかも

一顧國を傾くる目は、其の體の賦せられたるものなければ、星の眸か、鳳の眼か、鈴を張りしか、糸を張りしか、當時の風尙は、歌のうへのみにては、更に、認むべからず。耳や、鼻や、口やは、況して、額附きも。

胸は、廣らかに、平らかに、腰は細きを上としたりき。上總の周淮の郡の珠名娘子を形容して、

梓弓末の珠名は、胸別のひろき吾妹、腰細の須輕娘子の、その顏のきら〳〵しきに、花の如笑みて立てれば、

と歌へり。狹くて高き鳩胸を嫌ひしは、歐米風と反對なるもをかしく、須輕といふ土蜂の腰附きに似たるをめでしは、楚王が好みし、楊柳の腰に、一致したるも妙なり。

毛髮は、金をいはず、茶褐をいはず、必ず、東洋流

の漆黒を以て、上とせしことは、
蜷の腸か黒き髪
烏羽玉の黒髪
など續けたるに徴すべし。さて、子生れて三四歳の頃はじめて、搔垂らせる髪の末を揃へて剪る、これを「深そぎ」といへり。延び行くに從ひて、肩のあたりにて剪るを、「はなり」とも、「振分髪」とも云へり。八歳よりは、剪らずて、延ばして後、髪上するまでを「童」と云へり。髪をわらゝかしてあればなりとぞ。「うなゐ」は、弘く、剪る剪らぬに關らず、垂髪を指していへる、稱なるが如し。



しかれこそ歳を八歳を、切る髪の吾が肩を過ぎ、
とあれば、八歳までは、剪りたりし證なり。
橘の寺の長屋にわが率宿しうなゐはなりは髪上げつらむか
とあるは、髪上の以前に、早く男したりしものと見し。さて、この髪上は、男の元服と同じく女になる儀式にて、髪に鬘を添へ、飾を懸け、簪をふくだませなどして、いともく嚴かなりしさまに見ゆ。たゞ垂れたる髪を搔上ぐるのみを、髪上とはいはざりき。

（二）服飾

今様のガラス鏡の、いと手輕きには似ず、眞澄鏡、新鏡、八つ花形の鏡、いと大事と秘め持たれ、ゴールの腕輪に對へては、玉釧を手節に纏きて、手纏の稱あり。其の他、手に手玉、足に足玉の粧飾を着く。

釵着くたふしの崎
足玉も手玉もゆらに織る機
海神の手纏の玉を家產に

と詠める、是れなり。

童女の年頃になれるは、頭髪に、葉根鬘、玉鬘、あるは、彩色したる鬘を飾として纏ひたりき。

葉根鬘今せす君をうら若み
紫の彩色の鬘花やかに

とある、是れなり。葉根鬘は、如何なる製か、知れ難し。源平盛衰記に、「さる程に、島の住人と覺しくて、木の皮をはねかづらとして、額に卷き、」と見ゆれば、その時代までは、其の製も傳はりしものなるべくや。今の「はね元結」も、この語の殘れるにて、其の遺製の變化したる物ならむ。又、木綿をも鬘きしものと見えて、

蜷の腸かぐろき髮は、眞木綿もてあざさ結ひ垂れ
白髮つく木綿は花物

など詠めり。又、造花、造枝の類をも、飾とせしにや。

大夫の伏居なげきて造りたるしだり柳ぞかづらけ吾妹

と歌へり。

差櫛を用ゐたりし事は、「櫛笥」、「玉櫛笥筥」など云へる詞の、散見したるにて、知られぬべく、材は、多く、黄楊の樹なりしならむ。

君無くばなぞ身粧はむ櫛笥なる黄楊の小梳もとらむと思はず
日本の黄楊の小櫛を、おそへ刺す敷妙の子は、

など見えたり。

帶は、組紐をも用ひたりしが、古代織の倭文布の巾ある、或は、巾狹きをも結び垂れたりき。

いにしへの倭文旗帶、狹織の帶、

とある、是れなり。殊に、舶來の高麗錦を、一重廻り

の帶とせるは、莫大なる奢の沙汰なりしならむ。
　衣服は、肩衣あり。袖付衣あり。一重衣、袷衣あり。場合によれば、男女、そを通用して着あひしとあり。これらの證は、殆ど、枚擧に遑あらず。地質には、貴重なる羅綾の袖、錦繡の衣ありてまゝ、內國製のもあれど、多くは外國よりの輸入品なりき。粗造なるものには、藤衣、麻衣、葛布の衣あり。

　荒栲の藤江の浦
　眞袖もて着せてむとかも夏葛引くも
　わが機物の白麻衣



の類、是れなり。
　すべて、衣服の制は、衣と裳との二つより成り、裳は上下の別ありて、概ね、赤色を用ゐたりしが如く、

　孃嬬等が赤裳の裾に沙滿つらむか
　處女等が赤裳
　裾引き

など詠めり。しかも、そを長やかに打曳きて、楚々として步くを、女の見得とせしにや、

　玉の兒の裾ひく坊に
　紅の襴ひく道を中におきて
　赤帛の純裏の衣長く欲り

と歌へり。緋絹に、同色の裏附けたるを、裾長に曳きたらむ花やかさ、西洋の女服の、地を拂うて長きにも

似たるかな。女の情は、洋の東西なきもをかし。裳の紐は、高麗錦、或は、紫絹もて製れるもありき。

外出の時の扮装を述べむに、都の年弱き中流社會の婦人は、山藍摺の衣を着、紅絹の裳を穿ち、田舍あたりの貧少女は、青衿着けたる麻衣に、麁き麻布を裳として、髪振亂して、履物をだに穿かざるものありき。歌に曰く。

級照る足羽河の、左丹塗の大橋のうへよ、紅の赤裳裾引き、山藍もち摺れる衣着て、只一人伊渡らす兒は、若草の夫かあるらむ、

又、曰く。

勝牡鹿の眞間の手兒奈が、麻衣は青衿着け、ひたさ麻を裳には織り着て、髪だにも掻きは梳らず、履をだに穿かず歩行けど、

以て、當時の風俗を察すべし。又、笠をも冠りしことは、

吾妹子が笠のかり手のわさ見野に

とあるにて、明らかなり。

（三）女紅

養蠶は、千早振る神代の昔より、もはら、女の手業と習ひ傳へて、一家の主婦ともある者は、大方、これをいそしまぬは無かりき。故に、

たらちねの母が飼ふ蠶の眉籠りて、

と詠めり。しかのみならず、葛や、麻やの植物の纖維を裂きて、糸にして、これを紡ぎ、これを績みたりき曰く。

をとめ等が績麻のたゝり打麻かけ
太刀の後鞘に入野に葛引く吾妹

さて、麻を績むに、「たゝり」と云へる、臺の如き物を立つることは、歌に見えたるが如し。

染色は、暈繝色を染め出して、位一級を進められし者あり、海外の新法により、巧に、紫、茜、蘇芳、橡などを染め、又、鹿子絞、たゝみ絞、きさご絞の纐纈類、臈纈、板締の二重染、三重染等、人目を驚かすに足る者を製出せしと雖も、それ等は、特別の精技に屬

し、普通は、いと、簡單なりしもの丶如し。染料には草の花、草の葉、草の根あり。木の花、木の皮あり。黄土あり。汁には、絞汁あり。煎汁あり。方法には、摺り付くると、染め付くるとの別あり。曰く。

引馬野に生ふる紫衣染め

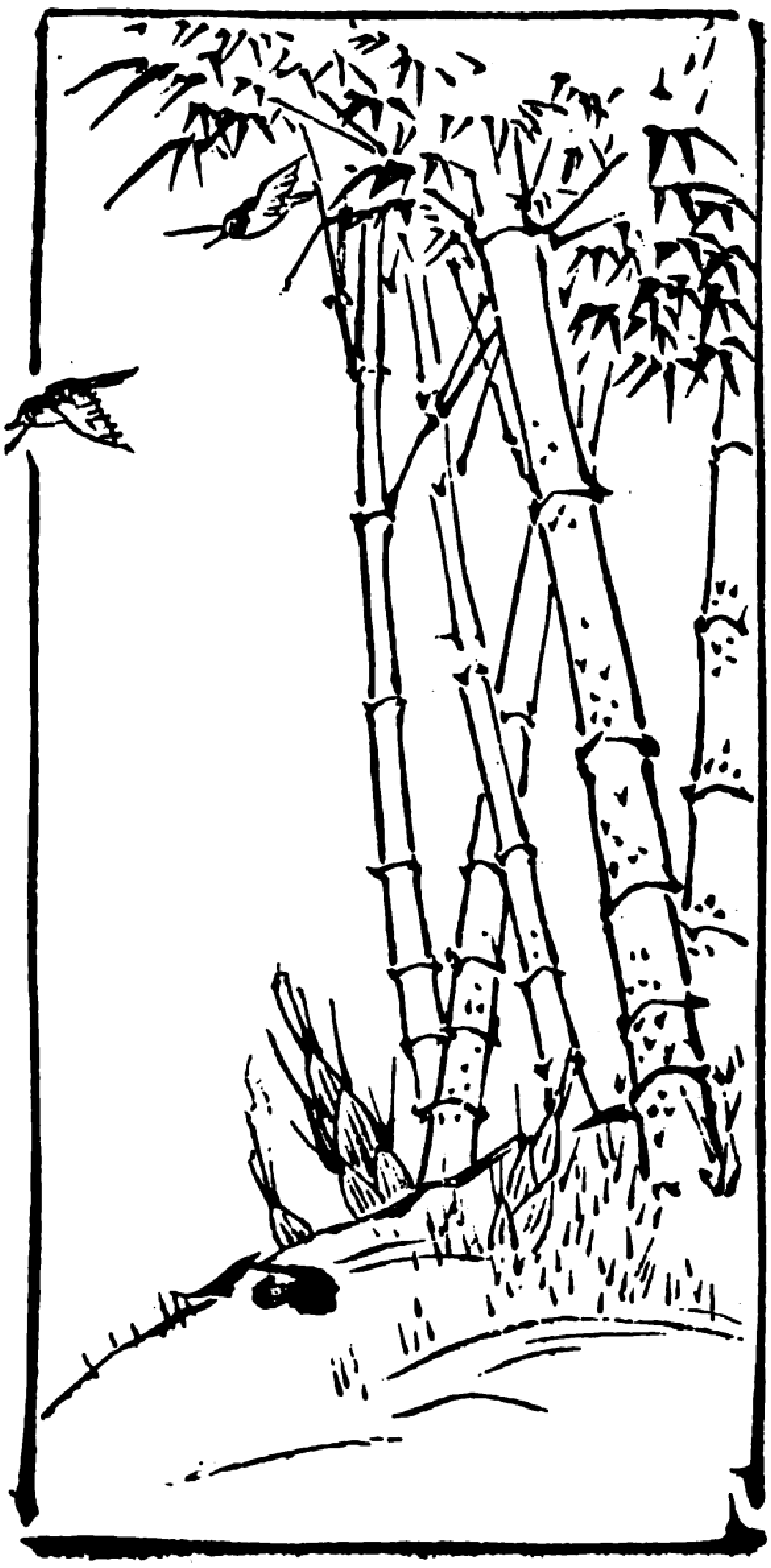
引馬野に匂ふ榛原入亂れ衣匂はせ

住吉の岸の黄土粉匂ひて行かな

宇陀の眞赤土左丹著かは

鴨跖草に摺れる衣

土針に摺る



杜若衣に摺り附け

萩に摺る衣

あるが中に、鴨跖草、即ち、螢草の花を摺りたるは、其の色褪め易ければ、「月草の移ろひ易し」と、打歎きしもあり。又、おなじ紅色にも淺深ありて、

紅の濃染の衣

紅の薄染衣

桃染のあさらの衣

の差別あり。原料を紅花にとるが故に、

紅の末摘花

の語あり。青色には、藍を用ゐるが故に、

わが蒔きし韓藍の花

の語あり。紫色には、椿の灰汁を必用とするが故に、

紫は灰さす物ぞ海石榴市の
の語なり。しかして、「河内女の手染の糸」は、殊に、物柄のたしかなる、染糸なりけむ。
機杼の技も、忌機殿の昔よりして、婦女の專務とせられ、

足玉も手玉もゆらに織る機を君がみけしに縫ひあへむかも

あるは、

君が爲手力つかれ織りたる衣をいかなる色に摺りてばよけむ

など、みづから、織上げたるうへに、染色裁縫の方をまで、夫の爲には、千々に、心を碎きしぞ、殊勝なる。
機を立つるに、其の機糸を調ふる爲には、櫛を以て掻き上げ、揚し上げなどしたりき。曰く。

未通女等が織る機の上を眞櫛もちからげたく島波の上ゆ見ゆ

又、みづから、針線を持ちて裁縫せしことは、

今年行く新防人が麻衣の肩のまよひを誰かとり見む

夏陰の閨の下に衣裁つ吾妹うら設けて吾が爲裁たばやゝ大に裁て

とあるにて知られ、男は、時に、着尺の注文に、我儘を云へりしもしるし。
又、やむごとなきあたりの人、富める人などは、もとより、針妙の工女を雇ひて、縫はしめもしたりけむことは、

住吉の波豆麻君が馬乘衣さにづらふ漢女を座せて縫へる衣ぞ

とあるにても明らかなり。歌の意は、こは、大方の衣ならず、愛しき漢女を招待して縫へる衣ぞと、衣を仕立てゝ人に贈るとて、戯に詠みて遣れるなるべく、漢女は漢土の婦人の義にて、雄略天皇御紀に、『十四年春正月、身狹村主青等、共呉國使、將呉所献手末才伎漢織呉織、及衣縫兄媛弟媛等、泊檜住吉津』とある如く、裁縫の伎に精しき、兄媛弟媛の流を汲める、さる外國婦人を指せるものならむ、當時、支那朝鮮の工藝は、わが國に比ぶれば、遙に、進歩したる、精緻

の狀態にありければ、それらの技藝をいひ立てにして、上流社會に入立ちし、外國婦人も、尠からぬものと見えたり。

麻の如き纖維の物は、糸の儘にても晒し、或は織立てたる布にても晒す。されど、水利に不便なる所などにては、據なく、下着の類の、人目につかぬ衣は、色合の潔淨ならざるをも忍びて、其の儘にて、仕立つることもあり。故に、

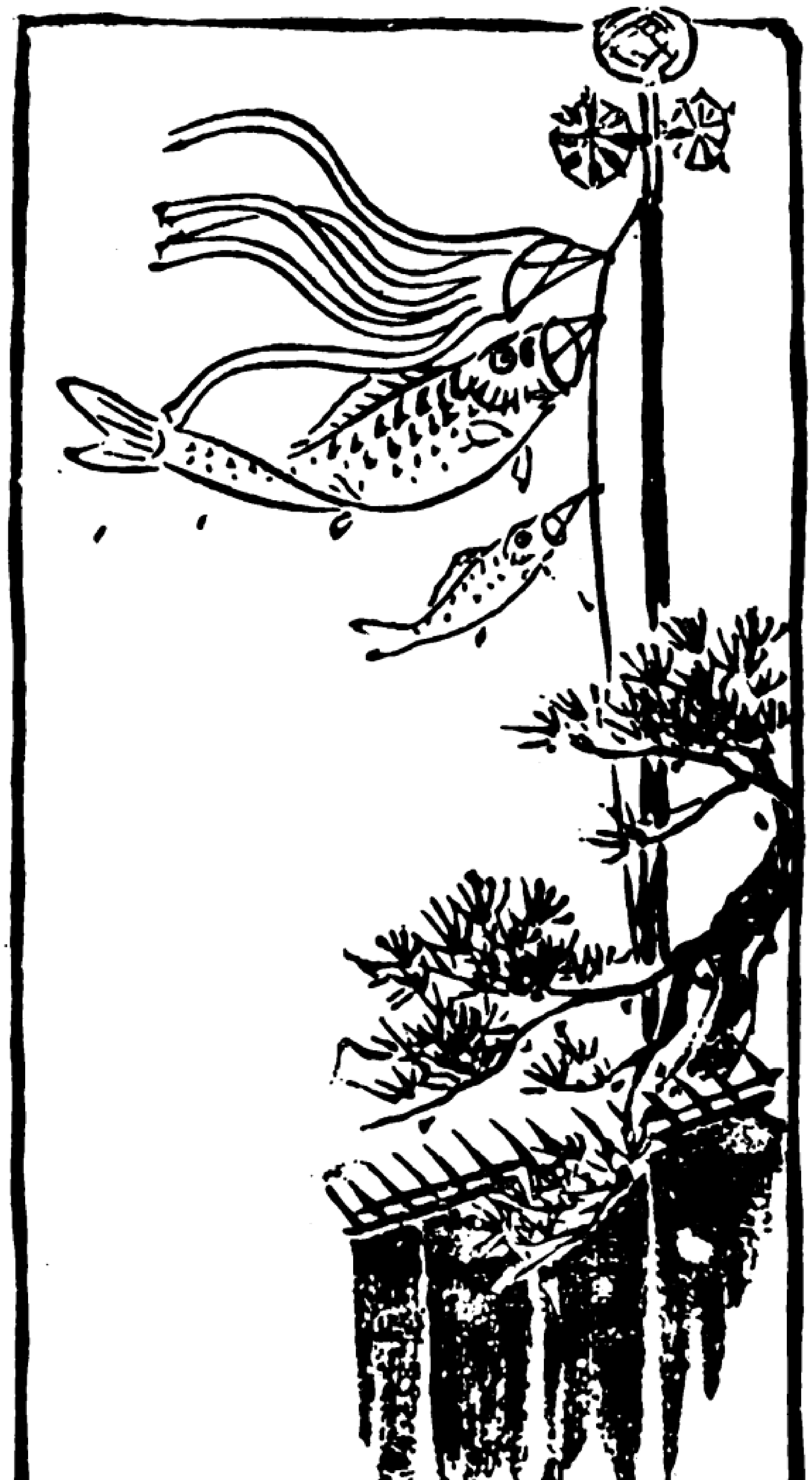
川淀みさらさず縫ひし下衣

と詠めり。さて、着馴らしたる舊衣は、幾回も解きほぐして、洗濯して、仕立直しては着たりけむことは、

解衣の思ひ亂れ

橡の解き洗ひ衣

などあるに徵して知られぬべし。



(四) 生活

生活といふ不粹なる問題に對して、女子が、直接なる責任のもとに、運動を要することは、特殊の場合を除く外は、殆ど無かるべくして、あるべからざるものゝ如し。但し、これは、專ら、上中層社會に於ける顯象なり。下流の婦人に至りては、夫耕し婦耘る共稼ぎ、その日の烟を立つるに忙しき

ことは、勿論なり。

されば、當時の婦人も、下ざまの者は、上に云へる如く、人の爲に縫織の技にいそしむ漢女あり、染色の業に從ふ河内女あり、又、乳汁ある者は、乳母として、良家に雇はれもしたりき。曰く。

緑兒しすもり乳母はもとむちふ乳飮めや君が乳母もとむらむ

悔しくも老いにけるかもわが背子が求むる乳母に行かましものを

又、剌櫛を挽きなどするは、婦人の職工の獨占の業なりけむ。曰く。

からたちのうばら刈りそけ寺立てむ屎遠くまれ櫛造る刀自

猶、さる侘しき工女どもが、定まりたる厠寶の設だに無き家に起臥して、時に、屋外の空地や、荆蕀の叢蔭などにて、大小の用を便せしことも見るべく、從ひて、極めて不潔の狀態を以て生活せしものなることも、推し測られぬべし。

農婦は、「植女」の稱さへありて、五月雨の水田に下り立ちて、早苗をとることは勿論、收穫の際には、鋭鎌を腰にして、秋田に下り立ちき。曰く。

そとめども行合の早稻を刈る時に

と云へり。

殊に、漁村の婦女等が精勵なる勞働の、常に、男子を凌ぐものあるは、一般の慣習なるが、當時に於ても、しかはありけむ。

海士をとめ棚無小舟漕ぎ出らし

網の浦の海士をとめ等が燒く鹽の

朝凪に玉藻刈りつゝ、夕凪に藻鹽燒きつゝ

海未通女ありとは聞けど

など見え、又、大伴旅人卿が、松浦河に逍遙して詠める歌の序に、

逍遙聊臨二玉島之潭一遊覽、忽値二釣魚女子一、

とあるをも、併せ想ふに、か細き腕に櫓櫂を操りて、鰹釣り、鯛釣り誇るべく、風波のおそれを物ともせず、礒邊に下立ちては、荒布、若布を刈上げ、或は、藻草を

掻集めて、塩釜の畑を揚ぐるに忙しくして、

志賀の海人は布刈り塩焼きいとまなみ櫛笥の小櫛と
りも見なくに

の蓬頭亂髪、汐風に黒み、塩屋の畑に煤けて人か鬼かとまで辿られしは、女心には、流石に、佗しうも情なうも、思ひわたりたりけむかし。



（五）性行

よく喋舌り、よく泣き、よく笑ふ、譯も無きことに、動もすれば、渾身の血を湧かすは、婦人の通性なり。持統天皇が、志斐嫗に賜はせらる御歌に、

いなと云へど強ふる志斐のが強ひがたりこの頃聞かずに我れ戀ひにけり

人だに見れば咄しかけて、相手の迷惑などは、一向、頓着なき喋舌家、たま〳〵事ありて里居の日を經たれば、大風の吹きたる跡の如く、餘に、静まり返りて、物寂しく覺されしより、却りて、其の強語り戀ひしと、宣はせしこそかしけれ、流石に、嫗は、

否といへど語れ〳〵と宣らせこそ志斐伊は申せ強言と宣る

餘なる仰言かなと、喋舌家の本性違はぬ減らず口、

曲亭氏に評せしめば、必ず、名詮自稱とや言はまし。

滑稽洒落の狂想調戯、その大なるものこそ無けれ、よく對手を飜弄して、顔色無からしむるに足る、伎倆を具へ持ちたりき。新田部親王が、勝間田の池の蓮の花のめでたさを、餘に、褒め過ぎて物語り給ひし時、其の座に侍りける一婦人が、

勝間田の池はわれ知る蓮なししかいふ君が鬚無きが如

と鬚の中より目ばかり光れるいかめしき親王、知太政官事の尊大窮り無き親王を捉へて、殿下のお鬚の無きが如く、彼の池に、蓮の花はありませぬと、裏返りて冷かし奉りたる、又、葛城王が、陸奥に使せし時、國司のあへしらひの緩怠なるを怒りて、折角の饗膳に箸をも採り給はざりければ、郡司の女にて、其の盃盤に周旋せる、前の采女なりける娘子、左手に觴を捧げ、右の手に水を持ちて、王の膝に打潑ぎつゝ、

安積山影さへ見ゆる山の井の淺くは人をわが思はなくに

と歌ひ上げけるに、王の怒、忽に解けて、終日、宴飮し給ひきと言へる、そさく〳〵、今日の賣笑婦輩、巧言令色に讓らず。又、廣河女王が、

戀草を力車に七車積みて戀ふらくわがこゝろから

の滑稽は、穗積親王が、「戀の奴のつかみかゝりて」の狂想に拮抗すべし。

飮伯酔公、女流にまた尠からず。「酒甕になりにてしがも」と歌へる、酒仙旅人卿が、吉備の旨酒を、丹生女王に贈りけるに、

ふりにし人のたばせる吉備の酒病めばすべなし貫簀たばらむ

頂戴の御酒の旨さに、飮み過ぎて、嘔吐く恐れあれば、御親切序に、貫簀をも贈り給はれと、調戯たる同好の樂み、饞喰はぬ人にはいはじ饞汁の妙諦、この間に存するものあらむ。

物を人に贈るに、歌を詠み添ふることは、當時、一般の習慣にて、情人に、嚢や、包物やを贈り、或は、狩場の獲物を上りなどするに、歌詠めりし例、いと多

かり。さて、それに返歌して、折節の興を見過さぬが情ある人の振舞なりけむ。

身邊に屬する、手輕き物を打振りて合圖するは、遠距離の人に、或意思を表し、或情味を告ぐる、簡單なる手段なれば、歐米人も、訣別の際に、帽子手巾等を打振るなり。當時は、遠方の人を呼び招ぐに、衣袂を擧げて打振り、女は、殊に、襟飾として項に纏ける、領巾をも打振りければ、

遠つ人松浦佐用媛領巾振りし
吾妹子が袖振る見むと我れぞ手折りし



など詠めり。

やむごとなき華族の婦人等は、時によりては、みづから、主人公となりて遊宴を催し、近親遠族のさりぬべき人々を招請して、懇親を固うし、一夕の歡を盡すことありき。當時の名門たりし、大伴坂上郎女が、親族を宴して、

かくしつゝ遊びのみこそ草木すら春は咲きつゝ秋は散りぬる

と詠めるが如き、是れなり。又、時によりては、遊山の田舍廻り、磯傳ひに、相坂山、淡海の海、鴫の川原猪名の笹原、瀬戸の海邊は、其の赤裳の裾の、曳き覆ふところとなりき。

歌に、

木綿疊手向の山をけふ越えていづれの野邊に庵せむ我れ

夫妻同道の遊行には、

吾妻兒に猪名野は見せつ名すぎ山角の松原いつかしめさむ

の詠あり。

後世、所在の都市村落に於て、男女手を携へて、一夜を躍り狂ひし盆踊の前身は、當時の所謂、歌垣にて東國にては、嬥歌會といひき。昔は、時として、行はれける、一つの戯場と見えたるに、この頃は、毎年月日定まりて、集ひたりしと覺しく、幾旬にありては、大和の海榴市の歌垣、東國にありては、常陸の筑波山の賀我比、その尤なるものなりき。筑波の嬥歌會を詠める歌に、

未通女壯士の、往集ひかゝふ嬥歌に、他妻に吾も交はむ、吾が妻に人も言問へ、この山をうしはく神の禁めぬ業ぞ、今日のみは目ぐしも勿見そ、事も咎むな、

人妻も、吾が妻も差別なく、相抱擁してたはれたりけむ、淫蕩の風、醜惡の俗、見るに堪へず、聞くに堪へざるものを、言を神の禁めぬ道といふに借りて、恬として羞ぢざりしこそあいなけれ。

海石榴市の八十のちまたに立平し結びし紐を解かまく惜しも

と身分ある高貴の人も、市に出でゝ妻問ひしける事は、掛卷も畏こかれども、武烈天皇の、鮪臣と影媛を爭はれしにても著く、大和物語に、「中頃は、よき人々市にいきてなむ、色好む業しける。」とあるも、この歌垣の類なるべし。されば、娘一人に婿八人、おのづから、かゝる場裏の主人公とも、立物ともなりて、心猛く思へりし婦人等も、多かりしならむ。

(六) 迷信

人と別るゝ折、未逐に、中絕え給ふなど、神けて誓言する時、衣の紐、草木の枝などを結ぶを「戀結び」

といひて、男も女もする事なりき。夫婦の中らひは、その情、殊に深ければ、下裳の紐を、相互に結び合ひて、又逢ふまでは解かじ、と誓ひき。故に、その下紐の、おのづからに解くるを以て、人に戀ひられたる證とし、又、眉根の皮の痒く感ずる、鼻放て嚔をするなども、さる證と、信ぜられたりき。曰く。

月立ちてたゞ三日月の眉根搔き氣長く戀ひし君に逢へるかも

眉根搔き鼻放紐解け待てりやも何時かも見むと戀ひ來し我を

しかも、眉根の痒きをいふは、左の眉に限ることにて

珍しき君を見むとこそ左手の弓執るかたの眉根搔きつれ

と歌へり。又、髮の毛の、おのづからに濡るゝも、戀ひられたる徵とせられ

歎きつゝ益荒夫の戀亂れこそわが元結のひぢて濡れけれ

と歌へり。その他、石占、橋占、足占、夕卦など、占問ひしことは、一般の風習にて、引證を要するまでも無し。要するに、未開時代に近ければ近き程、迷信の念深く、又、男子よりも女子は、迷信深きが常なれば、當時の婦人達の、迷信の程度の、大方ならずして、

燃ゆる火もとりて包みて袋には入るといはずやも知ると言はなくも

と、役優婆塞小角が流の幻術を、實に思ひ取りたりし、極めて、正直なる、幼稚なる人間なりしことを記臆せば、足りなむか。神佛の信仰に至りては、言長ければ茲には贅せず。

（七）結婚

令には、男子は十五歲以上、女子は十三歲以上、尊屬の允許を得、媒を待ち、婚主を定めて爲すべく定められ、其の他、瑣細の法令、附帶したり。就中、記臆すべきは、婚前の和奸、嫁して後暴れしものは、官令によりて、離婚せらるゝことなり。かくの如く、奸淫の禁嚴なりしかども、男女の間は、熱情の迸發する所

にかゝり、制壓しあへざりけらし〻人知れず、男を設けて、

百積の船漕ぎ入るゝ八占さし母は問ふともその名は告らじ

たらちねの母に申さば公もあれも逢ふとはなしに年ぞ經ぬべき

玉簾のをすのすけきに入通ひ來ねたらちねの母が問はさば風と申さむ

など專ら、母親の手前を憚りしは、さる方の情事には、男親よりは母親の干渉甚しかりけむものと覺し。尤も、母親は、女の爲に然るべき夫を撰みなど、後見するは、常の習ひなればならむ。大伴坂上郎女が、駿河麿を坂上の二孃の婿とせし折、早く、汝の物と占めよ、他人の手に渡り行かば、悔ゆとも益あらじとて、

橘を宿に植ゑおほせ立ちて居て後に悔ゆともしるしあらめやも

と、駿河麿をそゝのかし立てし例もありて、何時の世の親心も、更に、變りなきものと見えたり。又、わが夫と定めたる人ならでは、おのが名をだに知らせず、其の人ならでは、肩過ぎし振分髮を上げしめざりしことは、この時代の前後に亙れる習慣なりしならむ。左の二首を見よ。

かの岡に菜摘ます兒、家聞かな名乘らさね……我こそは背とし告らめ、家をも名をも。

競べ來し振分髮も肩過ぎぬ君ならずして誰れか上ぐべき

猶、一歩を進めたる、男女の間の情交に關しては、更に、篇をあらためて、論はむ。

主婦としての ヴヰクトリア女皇

百島冷泉

我が同盟國なる英國には理想的、模範的婦人として無冠の女皇と呼ばるゝ、ウキラード孃あり、このウキラ

ード女史にも優さつて大なる人物は先帝ヴキクトリア女皇である。ヴキクトリヤ女皇が世人から尊敬せられ追慕せられるのは、その女皇として、ではなく、たゞの婦人としての所にあつた、ヴキクトリヤ女皇は、女皇でなく唯の一平民としても優に後世に傳へ得べき人物である。今女皇の家庭に於る私生涯の三四を述べて見ませう。

（第一）妻としての女皇　女皇は大英國の主權者である故に若し結婚し給ふに於ては、その皇婿たるべき人は女皇に臣事すべき誓を立てなくてはならぬ、で、その結婚の準備が漸く整つた時、カンタベリーの大僧正は女皇に拜謁して若しも陛下が希望し給ふに於ては儀式の執行順序の中に、「服從の宣誓」といふ項目を入れませうかと申上げた。すると女皇は、自分に世の一般の婦人と等しく、英國諸敎會の例規に從がつて結婚したい、女皇としてゞはなく一個の婦人として致したい、から儀式禮典もそのつもりで爲なくてはならぬと答へられた。この謙遜柔順を以て始まつた女皇の家庭は、睦とに圓滿に發達して居るのである、また女皇はその趣味好尙も、常に皇婿に同化せられんことを勉められた。或夏のこと、女皇は皇婿と暑をバッキンガム宮殿からウキンゾルの宮殿に避けられたが、その秋風吹き初むる頃、女皇は皇婿に向はれて、自分は一人で夏を此地に銷した時分には、倫敦に還へるを待ち遠しく思ひましたが、今は夏過ぎ秋となつても、田舍を去つて都に行く氣はなくなりましたと言れました、これは皇婿が幼時から田舍の景色を愛し給ふのを知つて、同心されたものである、また女皇は、皇婿が遠くその故國を去つておのれの半身を犧牲にされたのを氣毒に思はせ、常に皇婿を慰さめるのに全力を盡されて居たとの事である。

（第二）主婦としての女皇　女皇は以上夫に對して柔順であつたが、また主婦としても、その公職が繁忙であるの理由とて、等閑に附れるなどゝいふことはなかつた、でその周到なる注意は、衣服飲食のことから家事全般に渉つて、大膳職で取扱かふパンの屑の處置にま

で立到りました、けれどもまた一方には非常に大様で、臣下のものをして慈母の如くに懷つき順がはしめられた。今その一例を述べて置きませう、蘇格蘭の或る寺僧の娘で、皇子の媬姆として宮仕へした女が居ました、一年も經過たぬうちに、その母が病氣危篤であるとの報知に接し、歸省せる爲め休暇を願はふかと思ひましたが、餘り畏れ多い事であるからいつそ解雇を頂かうかと其旨を願ひ出ると女皇は之を許し給はないで、温言をもつて慰さめ、早く母の許に馳せゆき、必要の間奉侍して歸つて來るが可い、その間は何日なりとも皇子の課業は皇婿と二人で擔當るからとて十分に暇を與へられた、そこでその媬姆は母の病を看護し、死後の喪に服して歸つて來ることが出來たのである、かくて一年を過ぎて、その命日になると、女皇は此日の紀念にと豫じめ製作つて置れた、紀念品を媬姆に與へ給はつて、その母を紀念せしめたとの事であります。かゝる例は女皇の一生涯には、誠に算へきれない位です。

(第三)母としての女皇　女皇はまた母としても有數の母である。その子女教育の意見は、出來るだけ家事の務から導き、また能ふ丈その兩親に倣はしめ、何事にかゝはらず、その信仰の基礎を兩親の上におかなくてはならぬと思はれたから、躬自から身を愼しみ、諸皇兒をして之に倣はしめ、また家事の務は、細大となく學び熟する樣に希望せられて居る、で、オスボルン宮殿にあるスウキス小舍には、諸皇兒等の科學の實驗に供せんため、また勞作的校舍に充つるため、花園あり暖室あり、温室あり、また工作場がある。そこで諸皇兒は日々一定の時間に此處に來て其業に就かれるのである、時としては皇婿にならつて工作に從がひ玉ひ、花園を飾り、植物に培ひ、皆園丁大工と同樣になつてやられる、又その小舍の傍らには、自然界の諸物を收容すべき博物館があつて、自ら採集した物等を飾らせてある、然もその飾るにも他人の助力をかる事を許されなかつたから、その內容は皇兒の智識の長ずるに比例して、整頓されて行きました。また別に割烹場の設けがある、諸皇子をして或は麥粉を搗ねさせ、麵麭を

燒せ、肉を煮させ、また皿を洗はしむる等の事まで從事せて、婢僕の事務を練習せしめられたのである、而してその出來上つた多くの品物は近在の貧民に惠與へて、慈善事業の一端を示されました。

(第四)は寡婦としての女皇、皇婿アルベルト親王は千八百六十一年十二月四日女皇及び皇子に左の讃美歌を歌はせて薨去された。

「神よわれ今靈魂を爾に歸す、
愛もて我を世の鎖より切り放ちたまふ主よ、
われはたゞ爾の嗣業のためにのみ生く、
死は今われを勝利の首たらしむ、
われはたゞ爾によりて生き爾によりて死す、
われは何時も近きに在し給ふ爾によりて心安けき。」

セント、ポール寺院の大鐘は鳴り響いて、親王の薨去を報じ、越てその肉體は地下に葬むられて了つたのであるが、諸嬢達よ女皇の愛も此時に矢張葬むられて了つたのであります、それからと云ふものは女皇は交際場裡を退いて、公けの儀式の外には決して歡樂を盡されなかつたのである。で、終生淋しい空閨を守られたのである。

左の言葉は、如何に女皇が親王を愛し給ひ、またこれに對して操を守られたかを知る事が出來やう。

「愛人(皇婿)の口から出た、あの「ヴヰクトリヤ」といふ言葉が、眞實に懷かしく想はれる」

「人間は一度寡婦となつたなら、終生寡婦である方が可い、過去の記憶をくりかへせば樂みは盡きない」

かくて女皇は終生誠の愛を味はひつゝ寡婦を守られたが、その天性的なる博愛慈善の心は、此時から一層高くなつて、全心を擧げて、人の憂を分つ事に務められたのである。左の話はその好適例である、

オスボルンの一人の僧侶が、廢兵の一人を慰さめやうと、其家に這入つて見ると、一人の貴婦人が椅子に倚りながら、深い同情傷心の面色して、聖書を讀み聞して居られた、其處で僧侶は歸つて行かうとするのを、その貴婦人は制めて、

「私は僧侶がその本務を(病人を慰めることを)舉な

いで去かれるのを殘念におもひます」と云つて、その貴婦人は出て行かれました、この貴婦人こそヴヰクトリヤ女皇であつた、この樣に大英國の主權者は、恰も一平民の婦人の如く、廢兵の住居を訪ねて、慰さめて居られたのである。

實に女皇は博愛家の隊長ウヰラード孃と共に、種々なる好模範を人類に殘された實に尊むべく、優美なる人物であつた。

革命歌人の歌（承前）

佐々木信綱

時は慶應元年十一月十四日の事である。この年若いたる女丈夫は、憂國の心から、罪ならぬ罪をえて、絶海の孤島姫島の牢獄に送りやらるゝのである。午後の七時頃、むかひの乘物は來た。ためらはず乘り移らうとしたが、さすがに堪えかねて、一首の歌を殘した。

遂にゆく道はさりとも老らくの
　いきの別はなき世ともがな

草か江の堤を傳ひゆくに、十四日の冬の月の光さむくきら〳〵と照らしたのを、乘物の簾の中より見て、

霜嵐月にたぐひて流れ行く
　身をさすばかりさゆる夜半かな

草か江に今宵流るゝ月影は
　また明日の夜もめぐり歸らむ

いきの松原を行くとて、

甲斐もなく世に長らへて流れゆく
　我目につらきいきのまつ原

他の志士は多く斬殺せられしに、一人生殘れるを歎じたのである。さて姫島についた。島人等こゝかしこに集つて見るもはしたなく思はれる。牢獄に至れば、海面を遥く見渡して景色よき所なれど、ふさはしからぬ瓦屋荒々しき松の樹の荒格子の中に押込められた。入る儘に眞暗なる牢の内、只岩に打よする荒波の音、山も崩るゝ如くに聞え來る。

すみそむる獄の枕うちつけに
　さけぶばかりの浪の聲かな

雄壯の詞、沈痛の響、婦女子の作とは思はれぬ。

獄だにのがれ出なばそかしとも
　みつゝ過さむ島の月かげ

顯基朝臣が罪なくて配所の月を見たいといふた詞と相對して、一層あはれがふかい。假のはげしくふる夜、

さよ嵐ふる里人も夜もすがら
こなたや思ふ思ひこそやれ

下の句の首ざま、よくその情の切なるを致してゐる。またある夜、眠にたへず起出でゝ座禪をくみたれど。

元よりも色も香もなき身ながらも
さすが石にも木にもなられず

夜深く鷄の鳴くをまちえて、

くらき夜は猶くらけれど庭鳥の
鳴けば心ぞまづ明けにける

世中の眠は未だ覺めざれども、有志の士が國に盡すを見れば、革命の起るも程なからむといへる心を、下にこめたのである。

流れこしうき身忘れて迎へてむ
いづこもみ代の春ぞと思へば

人を恨みず世を恨みぬ尼の心根が思ひやられる。流れ木の卷の次はうぐひすの卷である。二の卷には殊に秀逸が多いが、今はそのうちの僅かをかゝげる。

家人のむかふる樣もほの〴〵と
心ににほふとしのあけがた

獄のうちに新年をむかへたのである。

松柱こゝしきひまをもりきても
かげやはらげる春の夜の月

松の木の柱の荒々しき獄舍のひまにさし入りても、春の夜の朧月の光の優しき事をいふたので、いかにも意味のふかい歌。

我とわが心をいさめ慰めつ
春めかせても春ならぬ春

たへがたき心中の煩悶、實に切にいひあらはされてゐる。なほその幽囚中、同志の人の寃所を悲しび、供養の爲にわが血汐を絞りて般若心經を血書し、各自の家族へおくつた。その經文の奥に此歌が記してある。

おくれゐて書くもかひなし法の文
よみがへりこむつてならなくに

かく我血もて經文を書けど、失せにし有志の志士が蘇生すべき便にもならぬ故に、あとに殘りゐて書くも甲斐なく思ふの意である。
その後望東尼は、高杉晋作の爲に救はれて、獄を脱した。その頃の歌に、

こぞことし彼方此方にまどひつゝ
いたづらにのみすぐす春かな

といふのがある。境遇を思ひやれば感極りない。高杉氏病に臥した時、望東尼はつれにその枕頭にあつて病苦を慰めた。一日二人の唱和したうたに、

おもしろき事もなき世に面白く
すみなすものは心なりけり

上の句は高杉氏、下の句は望東尼である。國家の爲正義の爲に千辛萬苦

をなめつくして、或は病み、或は老いたる身の、靜かに來し方を回想して詠んだこの歌に、悠然として自ら超脫の態ある、けだしその意味する所淺からぬのである。やがて高杉氏は世を去つた。生き殘りたる望東尼は、長藩の諸名士に優待せられて晩年をおくつた。ある時『まことに田のもの屋に物して、思もかけぬさなへの植をみるさへ夢の心地になむ。こその此頃はうき島のひとやにて、田も見られず、たゞ思ひやり侍りしを』とて、

嬉しきも悲しき時も夢なれば
さむる時しもあらじとぞ思ふ

さる程に天下の大勢益々革新に向ひ、高杉氏なしといへども有志大に集まりて、薩長の聯合愈々熟し來つた。この頃の望東尼の日記を防州日記といふ。そのうちの歌の秀逸を紹介して終りとしやう。

事迫りて長防の軍愈々討幕の途に上るに臨み、馬のはなむけにとて、揖取素彥氏に、

いつしかと我がまちわびしたづむらの
ころをくもゐにあぐる時きぬ

うちに鬱勃たる英氣の漲りわたつた歌である。また山田市之亟、即ち故顯義伯に、

月と日の雲きり拂ひゆく秋の
風に靡かぬ草も木もなし

想も調も堂々たる趣がある。また片野十郎といふ人におくつたのに、

ちる事を何かいとはむ櫻木の
紅葉は花のはじめなりけり

花散つて後に紅葉あり。花のちるは紅葉の錦をそめなす始であるといふ心にたとへて、正義の士の死するは王政復古の大業を實現する所以であるといふ意をよんだものである。

かくて病をえてまたたつべからず。その病床にて、

よい〳〵に曉をまつくち柴の
思のほかにきえぬしらつゆ

空しくなりし日の朝、藩士武田氏につかはすとて、

思ひおく事もなければ今はたゞ
すゞしき道にいそがせ給へ

絶世の女丈夫が、數十年辛苦の生涯をへて、安らけき永眠につくに當てのこす言ばのいかに凉しきか。その夜つひに望東尼は死んだのである。しかもその後天下の形勢益々急になり、薩長の軍は京師に入り、翌年正月伏見の一戰を以て王政復古の鴻業を開くにいたつた。即ち望東尼が心つくしもそのしるしあらはれてかれが素望も達せられたてのである。かくの如くにして、悲壯なる望東尼の一生は意味あるものであり、その歌は光あるものである。

なほ望東尼が家集向陵集は、近きに貴族なる大阪市長鶴原氏夫人によりて公けにせらるゝはずである。從つてこの女丈夫の面目の廣く社會に認めらるゝ期も近い。自分は殊にこのわが國未曾有の大戰役の際において、この女丈夫の歌集が公刊の日の一日も早きを望むのである。(終)

文藝

古言手引

本居宣長著
伊藤乘輿解

源氏物語補手枕

前坊と聞えしはうへの御はらからにおはしましゝぞ、御世のはじめより坊にゐ給ひて、

前坊とは桐壺帝の皇太子なれども實は御實弟にましますなり御立生の時より皇太子に備はり給ひて

大かたの御おぼえはさる物にて、うちゝゝの御ありさまはたいとあはれに、やんごとなくおもほしかはし給ひ、

表面立たる御感じは申すに及ばず內向きし御取扱ひも亦大切に尊く御親子の間に思ほしあひ給ひしなり

世の人もいとかしこきまうけの君と、たのみ所に仰ぎ聞えさせつゝ、行末めでたく飽かぬ事なき御身を、いかなる御心にか物し給ひけん、

世間の人も最優れ給へる皇太子なりと賴み奉るなりかく前後の御身に御不足なきを何故にかましましけん

世をあぢきなきものにおもほしとりて、常はいかでかう苦しく所せき身ならで、生ける世の限心やすくのどやかに思ふ事遺さず心のゆくわざして、あかしくらすわざもがなとのみ思ほしわたりける程に、

世を無味なるやうに思ひなり給ひて平常かく窮屈なる身でなくて生涯安氣に存分なる事をして月日を送りたしと思ひ給ひて

つひに御本意のごと春宮をも辭し聞えさせ給ひて、六條京極わたりになん住み給ひける。

遂に思召の如く皇太子をも辭退し給ひて京都六條京極邊に居給ひしなり

おほかた宮の作りざまはさらにもいはず、せんざいなど心ばへあるさまには深くうゑわたし、池のこゝろ廣く水深くやりなすなど、

大體宮殿の作り方は云ふ迄もなく庭の植込みなど趣向ある樣に奥深く植ゑ附け池の水溜りの所廣く水を深く通し

よろづ心にくゝさる方にをかしく、今めかしき宮のありさまになんありける。

爲事興ゆかしく夫々尤らしう面白う富貴めきし宮の御有様なり

坊におはしまいし時、其頃の大臣のむかひ腹に、いと似なくかしづき立て給ひし御むすめほいありてまゐり給ひける。

皇太子の御時の大臣の嫡妻の腹に生れ給ひて比類なく大切に育て給ひし御女を初より此の皇太子の妃にせんと云ふ御議定ありて參り給へり

御心ざし淺からずあはれなる御なからひにて、一筋にまめやかなる御契深かりし程に、いときよらにうつくしげなる女宮をなんうみ奉り給ひける。

互に御情合深き御夫婦中にて一筋に眞實ある御契なりし程に最上品に愛らしき姫宮を生み給へり、後に秋好中宮と申す御方なり

ふたところ限なくあはれなる者に聞えさせ給ひつゝ、明暮の御かしづきぐさにて、月日を過し給ひける程に、

御兩親非常に寵愛し給ひて日々の御玩び者にて月日を經給ひし中に

この宮の四つに成り給ひし年の秋、はかなき御心地のやうにて父宮俄にかくれさせ給ひぬ。

姫君四歳の御時父君一寸したる御病氣にて俄に薨去し給ふ

まだ盛の御齢にてかう俄にあへなき御事を、おほやけにもいみじうあたらしうおぼしめし歎き、世の中の人も惜み聞えさせぬなし。

まだ御若年なりしにかう俄に云ひがひなく身まかり給ひし事を朝廷にも甚しう惜み歎かせ給ひ世間の下々の人も惜み奉らぬはなし

まいて御息所の御心まどひたゞ何事も思ほしめされず、きし方行く先かきくれて、あさましうおぼし惑ふもことわりなり。

況や御息所の御心は御歎きの爲前後錯亂し給ひて既往も未來も暗闇の如くあきれる迄に思ひ惑ひ給ふも御道理なり

年頃ふたつなき御契を、かたみにまたなくたのみかはし給ひつゝ、かた時にてもおくれ奉りては、世にあらんものともおぼさざりしかど、

年來御夫婦中を二世と契かひ給ひて互に別れては半時も此世に在るまじと思ひ給ひけれど

限ある道は御心にも叶はぬわざにて、え慕ひきこえさせ給はぬぞ、口をしういふかひなきや、

死別は詮方なき事なれば從ひても得行き給はぬぞ云ふも甲斐なき事よ

いはけなき人は何心もなく、されありき給ふを見給ふにも、いとゞしき御心のもよほしにて、中々のしの

ぷ草なめり。

御幼稚なる姫宮は何の御分別もなく戯れ遊び給ふを御息所の見給ふに付けても只管御心の哀を引きおこして却りて此の姫宮が昔を思ひ出し給ふべき種子どならるゝやうに見ゆるとなり

およすげもておはする月日にそへても、ひるよなくおぼし歎く程に、うちつゞき父おとゞさへうせ給ひぬれば、いとぞたづきなく物心ぼそくのみおぼすにも、

姫君のおとなしく智慧附て來給ふにつけても涙の乾く間なく思ひ歎き給ふ中に加ふるに父の大臣も引續き薨去し給ひければ愈便り所なう氣細く思召すにも

我御身一つは今はとてもかくてもありなん、惜しげなき姿をやつして、世放れたる山里に行き隱れてもおのづからあり經なんとおぼしとるにも、

我一身は今は如何やうになりても苦しからず惜しくもない姿は出家入道して世間放れし所に隱遁してなりとも自然歲月を經なんものと覺悟し給ひても

たゞ此若宮の御行末うしろめたう、かく賴もしき人人におくれ聞えさせ給ひて、はか〴〵しき御うしろ見などなかなるに、

唯此姫宮の將來が案じられて此の頭り依賴すべき人々にかけ放れ奉りて確乎たる御後見人なども無くあるなるに

われさへ見奉り棄なば、いかにしてかは人並みにもおひ出給はんとすらんと、いみじう心ぐるしき御ほだしにて、すか〴〵しくも得おぼしたゝれず、

其上我身も亦見放しなばどうしてか常人の如く生長するを得べきか得難からんと甚しく心懸りなる手足纒ひて早速にも得思ひ立給はず

見ゆづる人なくて、殘し留め奉らん事をのみ、いみじうおもほしたゆたひつゝ、歲月もかさなり行くに、

委托すべき人なくて後に殘し置かん事をのみ甚しく思ひ泥み給ひて歲月も重なり行くに

ある限の女房たちなども、此御心ばへの有難くあはれなるにかけ留められ奉りて、をさ〳〵まかで散るもなく、

素より在りし丈けの婦人たちなども御息所の御心用ゐの御殊勝に御憐れなるに引留められ申していかう退出し散る者もなく

大かたの有樣は昔に替はる事もなけれど、おのづから事にふれては心細くよるべなき心地し給ひて、あはれなる事も多かりけり。

宮の内大體の御形容は昔に替はる事もなけれども自然に物事に當りては氣細く賴み所なき心地し給ひて物憐れなる事も多くあり

折ふしの花紅葉を見給ふにつけても、色をも香をも

同じ心に見はやし給ひし、昔の事のみつきせずおぼし出らるゝにも、

時節々々の花紅葉を賞し給ふにも故宮と共に愛翫し給ひし昔日の事のみ思ほし出らるゝにも

姫宮の御さま形のなのめに飽かぬ事なく、うつくしうあらまほしう成りまさり給ふぞ、うき世の御慰めにて明かし暮らさせ給ふ、

姫宮の御形容の不整な氣に足らぬやうの所なく愛らしく誰もかくありたきやうに生立まさり給ふを憂き世の中の一つの御慰めにて月日を送り給ふ

御心に入れて御手習せさせ奉り、御琴教へ聞え給ひなどしつゝ、いかで何事もいふかひなからず教へ立ててんと、心特に思ほしおきて給へれば、侍ふ人々も心遣ひいたくしてよろづ心にくき宮の内なりけり。

御息所は御心に掛けて姫君に手習や琴など教へ給ひて何事も不足なきやうに教育せんと心中特別に決定しつゝ居給へれば御側の女房達も厚く注意して萬事奥床しき宮の内の御有様なり

内にも故宮の御事を忘れさせ給はず、憐れに思召し出つゝ、折々の御訪らひ絶えずぞありける。

禁裏帝にも故太子の御事を忘れさせ給はず御早世なりし事を物に觸れては思し出られて時々絶えず訪問せしめ給ひしとなり

源氏の君にも、前坊の御息所のあはれにながめ給ふらんぞ、折々はとぶらひ物せよかしなどの給ひつけしかば、

帝の源氏の君へも仰せらるゝに故太子の御息所の幽鬱に暮し居給ふならんを汝も折々は訪問せよと申し附け給ひしにより

げに心にくゝよしある人と、聞置給ひしあたりの事なれば、かつはゆかしくおぼされて、一日内よりまかで給ふとて夕つけておはしたり。

源氏の君も彼の御息所は誠に奥床しく一風采ある御方なりと聞て居居給ひし御事なれば哀れにも又一方には慕はしくも思はされて一日禁中より退出し給ふ場合に夕方かけて六條京極の宮に尋ね參り給ひけり

程遠ければ暮れはてゝぞおはしつきぬる、御門のもとに御車たてさせて、御隨身入れておとないせさせ給ふほど、すこしさし出でゝ見いれ給へば、

彼宮は禁裏よりは路程遠ければ暮れて後に參り着給ふ御門の邊に御車留めさせて御供の者を以て音なはせ給ふ間に少し御顔を車より差出して奥の方を差し覗き見給ふに

木立いと物ふりてこぐらく見えわたり、けはひしめやかに心にくゝ思ひやられ給ふに、そのことども聞き

わかれぬほどの物のね、松風に響きあひてたえ〱聞えくるも、あはれになまめかしく、なみ〱ならぬつま音と聞なし給ふにも、

植木の有様皆古木となりて小闇く見え氣色閑靜にして殿内も奥床しく擬侯せらるゝに何の曲とも聞分かれぬ琴の音の庭の松風に響き合ひて斷續して聞え來るも物憐れに上品にて通常ならぬ爪音と聞取り給ふにも

御心ときめきして、何事も世に名高く物し給へば、達ふべくもあらぬ御息所の御琴のねと御耳留めて聞おはします、

御胸とき〳〵して思ひ給ふに、何事に依らず彼の御息所は世間に御上手に御座せば間違ひなき御息所の御琴の音と源氏の君は御耳を留めて聞居給ふ

内には俄なるほどの御訪らひに、人々そゝやとあわてつゝ、さゝめき騷ぐほどに、御琴はひきさし給ひつ、中々なる程をと君は口惜しくおぼす、

殿内には彼の御訪問に仕ふる人々等そは大變と周章してさゝやき騷げば御琴は彈き止め給ひつ御音なひのために御息所の琴を止め給ひしは其御心違ひが源氏の御爲には却て殘念に思ひ給ひし也

隨身出ぬればおり給ひて、いたう心げさうしつゝ引つくろひ打ふるまひて、歩み入り給ふ御さま、似るものなくめでたく、あてになまめかしうにはひみちたるに、

御供人が出で來れば源氏は御車よりおり給ひて最も取繕ひの心持をして體裁取りて入り給へる御形容の貴く上品に御立派さの滿ち足りたるに

いとかゞやかしう耻かしくて、とみに出くる人もなければ、はしのもとにたゝずみて、打ながめおはさうず、

誰もまばゆう耻かしき心地すれば早速に出會ひ奉る人もなきを源氏は階の元に彷徨して四方を見遣りて御座なさるゝ樣子なり

いと久しくして中將の君といふいできて、思ひ給へかけぬ程の御訪らひにて、何事もいとかたはらいたくかたじけなきわざになん、とておん篩さしいづるさまなどいとうなれたり、

暫時を移して中將の君と云ふ女房が出で來て御挨拶を申して存じ寄らぬ御訪問なれば萬事不都合勝にて恐れ多い事のみなりと云ひて御敷物などさし出したる體上品に物馴れたる有樣なり

いでやさき〳〵も參りはべりて、御有樣もうけ給はらまほしう思ひ給へ立ながら、よろづ思ひたまへつゝみてなん、心ざしのほどぞも今まで得御らんせさせ侍

らざりし、

疾くより参りて御有様をも伺ひたく思ひ居たれども萬事差控へて本意を待申し上げざりし

うへも常に故宮のおん事をのみ、明け暮れ忘れさせ給はず、この御有様の心苦しう哀れなる事との給ひ出つゝ、姫宮のいかにうつくしう生ひ出給ひぬらんなど、御心ざし淺からぬさまなど、おほかたの御とぶらひいとこまやかにて、かく参り初侍りぬれば又のどかにをとて、其夜はすくよかにて出給ひぬ。

桐壺帝にも先太子の御事を常に御忘れなく御息所の御不幸なる御事を不便なる事と詔給ひて姫君は如何計り愛らしく生ひ立給ひぬらんなど御深切なる御形容なりと御物語ありて表面だちたる御尋問最も綿密にして此の如く伺ひ初めたれば又緩々後日に伺ひ申さんとて其夜は嚴肅なる有様にて出給ひけり

かくふりはへわたらせ給ふ御志をいかゞはあさくおぼしめされん、かくて後は折々の御消息たえず、又御みづからも詣で給ひなどする程に、よろづ見まさりのみせられて、あくまでゆゑ〳〵しうおもりかによしある御けはひに、いとゞ御心のみとまりて、年頃餘所に思ひやりつゝ聞えで過ぎぬる事さへ悔しくぞおぼされける。

かく態々の御訪問を御息所もいかで淺くは思し召さんやこれより後は時々の御文通も絶えず又御自身にも御訪問あるに見る毎に御風采のまさりて飽くまでも由ありて重々しき御有様に甚御氣が留りて此まで御疎遠にて過ごし給ひし事さへ後悔に思ほし給ひけり

をり〳〵はをかしきなほざりごとなどうちいでざればみ、御ふみにもけしきばましき事もうちまじり行くに、

折々は御戯言も出でじやれたる事もありて御手紙にも氣もちを見せたるやうの所も打交りたるを

あはれなる御志のほどは、うれしくおぼさるゝ物から、かうるさき御心のそひぬる事を、いと心づきなくうとましくおぼされて、御かへりもをさ〳〵なきに、

御息所は源氏の御深切なる御心はうれしく思召ながらかく色情めきたる御心の添ひぬる事を氣に喰はずいやらしく思召して御返事もなきに

いよ〳〵御心いられて御せうそこ打しきり、維光などおりたちまゐり通ひつゝ、まめやかなるさまにも御心よせつかうまつり給ふ事、二とせばかりにもなりぬれば、

御心いられて頻繁に御手紙あり御隨身の維光など時々御伺をして眞實に氣を注けて深切を盡し給ふ事二年にもなりければ

女君の御心にもさこそいへ、やう〳〵によろづ思ひしられ給ひつゝ、いとけうとげにはあらず、をりふしのあはればかりはすぐさず、なつかしきさまにきこえ通ひ給ふ。

御息所の御心にもさは云ふものゝやう〳〵に互の情の思ひ知られつゝ餘りにうとましげにはあらず時々の哀れの情のみは塲合過さず申し送らせ給へり

なげの御筆づかひ言の葉もいひしらずなまめかしう、御手などあてに氣高く見どころありてかき流し給へるを、まれ〳〵見給ふにも有がたくうち置がたくおぼされつゝ、はかなき木草につけても、哀れと御心とまりぬべきをりを過さず、心深きさまを見え聞え給へど、

一寸としたる御筆遣ひも言ひやうもなきまで品やかに御手跡も貴く上品に見所あるやうに書き給へるを適〳〵御覽になるにも珍らしく捨置難く思されつゝ一寸とした四時の折々の草木に付けても御息所の御感じのあるべき塲合を見すまし深切なる御心を見せ奉り給へど

女君はなつかしからむなさけもいとゞあいなくおぼされて、人づての御いらへはしたなからぬほどにてやみなん、とおぼしとりつる御心はさらにゆるぐべうもあらざりけり。

御息所は夏かしき情を見せんも打つけにては餘り遠慮なきやうに思はれて只人をして不都合ならぬ丈けの事にして置かんと思ひ定められつる御心は一向に動くべくも見えざりけり

年かへりて春立つ風にも、人の御心はうちとけがたくつれなさのみまさりゆく。

年は改まりて彼の貫之主の云へる如く結びし氷は春立つ今日の風に融くれども御息所の御心は打解けずどうよくな御心のみ増り行く

人の御ほとをおぼすにも、いとかたじけなくいとほしくて、えしひても聞えおもむけ給はず、とさまかうさまにおもほし亂れつゝ、いとゞ此頃はおほい殿にもよがれのみおきつゝ騒がれ給ふ。

御息所の御身柄をおぼゝすにもいと勿體なく御氣の毒に思はれて無理に我心に從ひ給へとも得强ひ給はずとやかくと思ひ亂れ給ひて最此頃は大殿の方にも御無沙汰のみにて心騒々しく居給ふ

内わたりのどやかなる春のつれ〳〵に、雨さへふりくらして日もいと長きに、いとゞ思ひわび給ひては、

春の物とてなどうちうめかれて、

うき人に見せばや袖の涙川けふのながめにまさる深さを。

内裡の極閑靜なる春日の徒然に加へて雨まで降り暮らして日も永きに思ひ屈し給ひては彼の業平朝臣の春の物とてながめ暮らしつなどの句も沈吟せられて

われに心つらき人に見せたいものぢや袖に溜る涙の川の今日の永雨に増さる水の深さをと詠じ給ふ

雜錄

英國の皇室

天溪生

▲誕生の祝宴費二十萬磅

吾が帝國と最も親密なる交際を結べる英國の現皇帝エドワード七世陛下が御誕生に成つた時、皇室の御悦びは言ふも愚かのこと、全英國の臣民は、歡喜の聲を放つて躍つた。最には内親王が御誕生になつたので、ヴヰクトリア女皇はじめ臣民も、此の度も内親王かと窃かに心配して居つた所に、玉の如き皇子御誕生といふのであるから、全國民の狂喜したのも當然である。御降誕になつたのが千八百四十一年十一月九日、(天保十二年に當る。此の年家齊薨ず)で、エールス公と稱し申した。

千八百四十二年正月二十五日、ウインゾルの聖ジョージ寺院で、莊嚴なる命名式が執行され、その時名付親として立たれたのが、普魯西のフリードリヒ、ウイルヘルム四世であつた。日沒することなき大英國の皇太子として生れ給へるエドワード陛下は、黃金の洗禮盤で、洗禮を受けられたさうだ。偖て儀式が終ると共に、ウインゾルの壯麗なる宮殿で、盛大なる祝宴が開かれ、その費用は二十萬磅であつたと聞いては、いかに盛宴であつたかは、我々の到底想像し得る所ではない。

▲幼時のエドワード陛下

陛下の幼時は、單純、幸福、愛の三つで蔽ふことが出來る。七歲の時、お守役に上つたのがグラッドストン

夫人の妹のリツトルトン夫人であつた。八歳の時から學業を始められ、その時、師として擧げられた人はビルチ氏で、父君のアルベルト公が、御郷里のコベルグ宮に贈られた親翰の中には、此のビルチ氏は温順な立派な敎師である、かゝる善行の人を皇子の師として得たのは甚だ滿足に思ふとの意味を述べてある。されば皇子も忽ちビルチ氏に懷かれて、三年の後、氏が宮殿を去る時には、愛らしき皇子の御眼には、御誕生以來始めて、悲しみの涙が溢れたといふこと。

幼時には御外出は甚だ稀であつた。これは女皇も父君も、幼年の頃から餘り多く宮殿外に出すは、宜しくないとのお考からであつたので、五歳の時、露帝と共に觀兵式場に赴かれ、十歳の時大博覽會開場式に赴かれた外には、絶えて御外出はなかつた。その翌年ウエリントン公の葬儀には、泣きつゝポール寺院に行かれた皇子を見受けられた。ワートルローの野に、稀世の英雄ナポレオンを挫いた老將は、晩年膝に、皇子を抱いて、汗みづくになつて苦勞したのである。國民全般の涙よりも、皇子の灑がれた一滴の涙は、鐵の如き老將軍の靈に永久の平安を與へたであらう。

▲大工仕事と庭造

英國の家庭は總じて嚴重である。佛獨のやうな自由放任主義ではなくして、恰も我が國の武士道的家庭に類して居る。例の戀愛小說の如きは、子女ある家庭では決して入れぬ。この嚴肅といふことが、アングロ、サクソンの特色で、これ有ればこそ英國强大の今日を見ることが出來るのである。而して其の家庭を代表する者は、實に英國皇室である。ヴヰクトリア女皇もアルベルト公も皇子皇女等に對しては、頗る嚴格なる敎育を施されたので、玩弄物などは、甚だしく僅少であつた。エドワード皇子なども、皇太子といふ無上の位地に在りながら、其の持ち給ふ玩弄物と言へば、實に僅小であつて、是れが大英國の皇太子の室内かと思はるゝ程であつたが、其の代りに活動と言ふことは、朝夕に奬勵された。

自分の力で働き且つ生存せねばならぬ、人としては

依賴心を起してはならぬ、飽く迄も獨立獨行の生活をせねばならぬと言ふのが英國皇室の主義であつた。これがためには、オスボルンに農舍のやうな陋屋が建てられ、玆に皇子皇女等が毎日數時間、勞働するやうに躾られたのである。現皇帝陛下も毎日此の小屋に行かれて、姉君や、皇弟と共に、大工仕事や、園丁の仕事をして暮された。これには職工長が居て、やかましく監督したので、皇子皇女諸殿下も、爲に下民の情を察する知識を得られたのである。エドワード皇子はじめ、諸皇子皇女は皆な此の仕事に趣味を覺えられて、一生懸命で働かれ、その事情は職工長から日々女皇へ報告せられた。

アルベルト公は斯くの如く皇子等を敎育せらるゝと共に、旅行をも企てゝ、皇子等の見聞を廣うせられたのである。エールス公が最初の旅行と云ふのは、父君と共に、愛蘭に赴かれたので、此時皇子は鹿狩を催され、これが基となつて、皇帝は今日でも、非常に鹿狩を好ませられるさうだ。

皇帝が十四歲の時にクリミヤの大戰爭が始つた。エールス公は女皇と共に、貴族院に臨ませられて、英露兩國交際斷絕の宣言に立ち合はされたのである。其の後、愛國基金募集のために、繪畫展覽會が開設され、皇室の御方々は皆なそれ〴〵の繪を出品され、エールス公も油繪を出品され、その繪は日本の金で五百六十圓で賣られたさうだ。

▲始めての海外旅行

ヴヰクトリア女皇とアルベルト公とは、エールス公が十六歲の時、第一皇女と皇太子とを連れて、佛國巴里に遊ばれた。ヘンリー六世以來、英國皇帝で、巴里に遊ばれた方は無いので、當時の歡迎は、筆舌の及ぶ所ではなかつた。所で皇女と皇子とは、巴里の風物が餘程御氣に召したものと見えて、御兩人内所で、時の佛國皇后ユーゼーヌ陛下に、兩人とも、もう少し巴里に殘つて居られるやう父君母君に賴んでくれろと懇願されたが、女皇はユーゼーヌ皇后の志を謝し、兩皇子を連れて歸國された。蓋し華奢の巴里風に皇子の感染

せられむことを懼れられたからであらう。

佛國に御滯在中、ナポレオン第一世の墓に參詣された、女皇は無言で、しばし古英雄の墳墓を眺められ、やがて皇子を顧みて、「大ナポレオンの墳墓の前に跪け」と仰られた。エールス公は命に從つて英雄の墳墓を拜されたさうだ。女皇の敎訓が、實に立派であつたとは此の一事を見ても推知することが出來る。

▲皇太子に立てらる

歸國後は復愛蘭を巡行された。此の時御相手として隨行したのはパレトルルト伯の長子、エヂカムベ伯、故ワンチーチ卿の三人であつた。愛蘭人は槪して英國に對して惡感情を懷いて居たのであるが、仁惠に富み給ふ皇子エールス公が二度までも巡回せられて、民情を視察された爲に、漸く皇室の恩惠を悟ることが出來たのである。

十八歲の時、公然皇太子の位に立たせられた。此の時女皇が、皇太子に向つて、爾後獨立の生活をなせ、自ら善惡正邪の判斷を定めよとの親翰を贈られたが、これは古今の名文であるさうだ。

皇太子に立たせらるゝと共にエヂンバラ大學に入學された。敎官は皆な皇太子の熱心と善意とに驚嘆したさうだ。プレーフエヤー氏は化學を講じ、且つ折々諸種製造會社に御案內申上げて、化學の實驗的方面を御覽に入れた。シユミツド氏は羅馬史、フヒツシヤー氏は法律及び歷史を講じ、此の他伊、獨佛の敎授はそれぞれに講義を申し上げた。此の頃より陛下は小說を愛讀せられ、殊にスコツトの作は常にお傍に置かれた。

エヂンバラからオツクスフオード大學に轉學されて、大に學業を硏究せられた。此の頃女皇の御望みで、有名なる小說家チヤールス、キングスレー氏が、文學に就いて、數回の講義を申上げた。

▲加奈陀巡行

學業を終へられ、且つ其の間に軍事上の訓練を受けられたエールス公は、千八百六十年を以つて加奈陀を巡行された。これはクリミア戰爭の際、加奈陀住民が本國のため忠誠を盡した勞に酬ひらるゝ爲であつた。

お出で先の歡迎は今更言ふまでも無く盛であつた。

▲エールス公妃殿下

加奈陀から御歸國になり、その後はヴヰクトリア女皇を助けて内外の國事に盡力された。千八百六十二年九月には、丁抹王女アレキサンドラ内親王との御結婚の約が成立し、翌年三月十日には、ウインゾル宮殿で、盛大壯麗なる大婚の式が擧られた。この妃殿下こそ今日の皇后陛下で、故ヴヰクトリア女皇の薫陶を受けさせられ、婦德の圓滿なると國民の模範とする所である。

仝六十五年を以つて皇孫が御誕生になつた。現皇太子エールス公が此の御方で、後年濠洲自治制度の組織せられた時に、仝洲を巡行せられたのである。

▲海外漫遊

御大婚後皇太子及び妃殿下は、佛國、獨逸、墺太利、伊太利、希臘、露西亞、土耳古、埃及の諸邦を巡られ、或は山川、或は古戰場、或は遺蹟等を訪はれて千八百六十九年に歸國せられた。諸邦の人々は威嚴あるエールス公と淑德高き妃殿下に感動されたさうだ。

御歸國後幾許もなく、熱病に罹られて一時は御危篤といふ程で、故女皇をはじめ皇族皆な傷心し、國民は天帝の加護を願ふた。幸にして全快せられ、元の健全なる御體となられた。かくて後印度に漫遊された。

此御旅行こそ、印度に於ける英國勢力の振立には與つて力あつたのである。

▲事業と嗜好

エールス公の嗜好は極めて質素である。故女皇の嚴重なる薫陶を受けさせられたからでもあらうが、御平常は極めて簡單に、また平民的である、儀式の外には決して皇太子とか皇帝とか、威嚴を示すが如き服は召されず、單純なる姿をして居られる。今日流行するフロックコートなる者は、エールス公が發明せられた形で、陛下は多くの場合は、此の服で萬事を濟されるのである。皇后陛下も亦華美驕奢を忌み給うて、常には非常に質素の服を召して居られる。なほ皇后陛下は、家政と皇子等の教育を專一の事業として居られて、例の交際的の事は好ませられぬ。この點は、ひとり英人

のみならず、世界の婦女が手本とすべき點であらう。
エールス公即ち今の皇帝が、貧民救助とか、養育院とかの事業を援け給ふたとは、數ふるに遑なしと言ふ程であるが、此の他重なる事業を擧れば、漁業奬勵展覽會、衛生會、勸業博覽會、殖民地及び印度展覽會等で、此れ等は陛下御自身が先に立つて開かれたものである。また音樂を好ませらるゝ所から、ゼームス宮殿で、音樂學校設立の急務といふ有名なる大演說をなされ、これが爲に今日の國立音樂學校が開かれたのである。此の他農業及び實業に關しては、常に注意せられ、從つて各種實業學校の設立を促されたとは、前後十數回である。兩陛下とも箇樣の御性質であるから、皇子皇女等の敎育にも、料理法、裁縫、家政、看護法等を加へられ、オスボルンに假離宮を建てゝ此れ等の事を學ばされる。

陛下の最も好ませ給ふとは、狩獵である。前記した鹿狩りは每年催され、また旅行中には鰐魚狩、虎狩、象狩等の冒險的狩獵も試みられた。此の他競馬、ヨットも常に試み給ふ遊戲である。

▲即位

英領は佛の五十三倍、獨の五十二倍、米國の三倍半歐洲の三倍といふ廣大なる土地で、皇室の收入は二億二千五百萬磅の多額である。此の大帝國の相續者として、故ヴヰクトリア女皇の後を受け給へるは千九百一年正月である。即位式の當日、皇帝は、國民に向つて、故女皇の跡を履まんとを宣言し給ふた。

▲皇室の榮

英皇室の榮えを一々書き立てたならば、只繁雜になる許りであるから、一目瞭然の表として示すとにしやう。（十印は結婚）

現皇帝エドワード七世 ＋ アレキサンドラ皇后（丁抹王の女一八四四年生）
- 現皇太子（一八六五年生）
- ルイズ内親王（一八六七年） ＋ ファイフ公
- ヴヰクトリア内親王（一八六八年）
- モード内親王 ＋ 丁抹のカール皇子

ヘレナ内親王（一八四六年生） ＋ 獨逸聯邦シュレスヰヒ公
- ジョン
- ヴヰクトリア
- ルイズ

ルイズ内親王（一八四八年生） ＋ アルキール公

- ヴヰクトリア女皇 + アルバート公
  - コンノート公（一八五〇年生） + 普魯西ルイズ公女
    - マーガレット
    - アーサー
    - ヴヰクトリア
  - ビートリース內親王（一八五七年生） + ヘッセのハイーンクヒ侯（獨逸聯邦）
    - 某す
  - 故ヴヰクトリア內親王 + 獨帝故フリードリヒ
    - 現獨帝ウイルヘルム二世 ●●●●●●●●●●
  - 故アリース內親王 + 故ヘッセ侯
    - 現ヘッセ侯 ●●●●
    - アリース（露皇后）
  - 故コブルグ侯 + 露のマリー侯（現露帝の伯母）
    - マリー（ルーマニア皇太子妃）
    - ビートリース
  - 故アルバニー侯 + ヘルナ公女
    - チャールス
- 現皇太子エールス公 + ヴヰクトリア、メリー（テック公女、一八九三年七月立皇太子妃）
  - アルバート（一八九四年）
  - フレデリフラ（一八九五年）
  - アレキサンドラ內親王（一八九七年）
  - ウイリアム（一九〇〇年）

アメリカ土產

佳水生

私が見て來た北米合衆國、其處に我が同胞姉妹は如何に暮されてお居でるかと、云ふことから少しばかり其お土產話を致しませう。

▲看護婦

として其職に從事して居らるゝお方は、僅々數名であつて、それも別に何等の素養も無い方々であるから、甚だ心細いです。併し人が少ないだけに、日本の看護婦にあるやうな醜聞を耳にしないのは、誠に喜ばしい次第です。既に日本人の手で、病院をさへ二三經營されて居るのですから、看護婦は是非とも必要であるのですけれども、何しろ日本の婦女の少ない爲と、其渡航の手續きが莫迦に六ケ敷い爲とで、今日では甚だ拂底して居ます。それに彼地にある同胞姉妹と云へば、大概に醜業婦であるのです。假令醜業行ないにしても何も辛氣臭く看護婦などを爲なくつても、他に立派な

適當した、賃銀も多く取れる仕事が何程もあるので、如何しても看護婦に成るものが少ないやうに見受けられます、併し、前にも云つた通り、相當の資格のある看護婦が、是非とも無ければならない今日の趨勢ですから、今に報酬も從つて十分になつて來るでせう、そしたら又た志願者も增して來るでせう。

▲產婆

には、日本の內務省の免許を受けた、立派な資格を持つて居るものが二人ほどありますが、なか〳〵二人や三人で足りやう筈が御座いません、看護婦より猶一層需用があるのですから、資格を持つた方々はドシ〳〵行つて、金儲なさるが可いです。

▲吳服店

と云つても、彼地には別に日本流の衣服を纏つて居るものも、着て步くものもありませんから、贅澤品が主で、即ち外人を相手とする貴重な織物ばかりです。それも多くは資本が不十分なので、品數が無く、寧ろ吳服太物の見本店と云つた方が適當であるやうに思はれます。特別の需用に對しては、一々日本から取寄せるまでの時日の猶豫を華客に乞はねば、之に供給することが出來ない、或る吳服店などは、客から注文品の手附けを受けなければ取寄せることが出來ないと云つたやうな有樣で、一軒たりとも成功して居る店はありません。

▲仕立屋

既に日本服の必要が無いのですから、仕立屋は猶且洋服裁縫業者であるのですが、之は餘程見込みのある職業だとのこと、夫婦共稼ぎで小さく營んで居るものもあれば、四五人の職人を傭つて、盛んに內外人の需用を充たして居るものもありますが、實は仕立屋でなくつて、仕立直し屋と云つた方が適當のやうな店ばかりです。之は未だ、彼地に於ける我が同胞姉妹の現今の地位の上から致し方がないので、十分の資本を投じて、大仕掛けに新調物の仕立を爲るてふことは、まだまだ、まだ何年かの後に初めて望まれることなのです。けれども我々同胞姉妹の手藝に堪能なることは、

既に弘く一般外人に認められて居るので、仕立屋其人の心掛けに依つては、隨分行末見込みのある職業であるから、精々奮ひ勵む必要があるです。

▲洗濯職

米國では洗濯職人の多くは女で、それが又た佛蘭西人に極まつて居るのは不思議です。支那人も此頃は盛んに此洗濯商賣を營んで居ます。元來歐米人の洗濯癖と云つたら、それは非常なもので、如何なる家でも一週間に二弗三弗の洗濯賃を拂はないことは無い、屢々入浴しない代りに、肌に觸れる處の床敷布、襯衣、股下、手拭等を屢々洗濯に遣つて、殆んど洗ひ切るかと思はれる位に屢々洗濯する、であるから洗濯職人としては餘り見込みは無いが、洗濯屋としては隨分に儲かるので、同胞姉妹が其夫と共に此業を營んで居るものが數多あるのです。

桑港に於ける洗濯業者の多數は、支那人でなければ佛蘭西人と云ふ有様でしたが、此節では世界に潔癖國民の稱ある我が同胞の手にも之が營まれるやうになつて、而も甚だ外人間の評判が好く、其處にも此處にも、恰も春芽の萠出るやうに、日本人の洗濯屋が開業さるので、例の白人同業者間に徐々と嫉妬問題が起つて來かけた時に、折惡しく日没洗濯所が其規模を擴張して、蒸氣機關をさへ据えつけんとしましたので、忽ちにして彼等に宜い口實を與へたやうな理屈になつて、所謂彼の日没洗濯所事件、詳しく云へば、對桑港市參事會、對市長、對火事局、對巡回裁判所、對高等法院、對白人同業者――日没洗濯所。此問題は一時北米太平洋沿岸に於ける我が同胞を激動させ、日本人協議會、桑港駐剳帝國領事、乃至公使高平氏などを介して、屢々華盛頓政府を煩はしたが、それでも對外權利の解決は出來ませんでした、其日没洗濯所を初めとして其他にも一二軒、電氣機關などを据え付けて、盛んに營業して居るものが、今ではありますが、之を見ても洗濯業の見込みのあることが分るではありませんか。

序ですから、洗濯職人として傭はれるもの丶お話を

致しますが、賃銀は雇主の方で食事も寢室も持つて呉れて一ヶ月十二弗位が相場で、それで一日十二三時間は働かねばならない、尤も之は無經驗のものゝ話で眞に一人前の洗濯職人で、當り前に火鐵も使へるやうになれば、一日に一弗五十仙も取れるやうになるのです。併し斯樣なると部屋も自分で持ち、食事も自分で仕なければなりません、普通の家でも洗濯職人を抱えますが、其樣な家は社會の位置も高く、有福な、大きな家で、洗濯屋などに奉公するに比べては、何程樂だか分らない、第一給金が好くつて、それに左樣忙しくも無く、部屋も奇麗で、食事も上等！　斯樣いふ譯で誰も彼も渴望するけれども、さてなか〱此口が開いて來ません、好く爲たものです。

▲日　本　食

渡米したての、まだ洋食に馴れない、日本食を戀しがる姉妹諸嬢を客種として、否な、日本食の仕度いものを客種として、朝晝晩の其時刻々々に日本食を喰べさせる家があります。之は例の、俗稱を十仙飯の洋食屋の向ふを張つたもので、至極實用的に出來て居るものです。ですから酒などは注文するものも無ければ、假令注文しても、特別の事情がある時の外は決して出しません。此商賣は北米太平洋沿岸に、我が同胞姉妹の營めるものゝ中では、收入も多分にあり、失敗の憂ひが無く、至極見込みのあるものではあるけれども、何分にも其創業に、少しく多分の資本を要するので、何人にも出來ると云ふ譯には行かないと云ふことです。桑港にある日本食屋の例を見ても分りますが、漸く三四軒位しか無いのは全く其故だらうと思はれます。で、之を開業するものゝ多くは、旅宿では貸しになる恐れがあり、さて日本食屋ならばと思ひ立つて取掛る譯なのでありますから、其一切が何れも現金です。一食が十仙！　日本の貨幣にして二十錢。勿論客は日本人ばかりですけれども、時には好奇な外人が飛び込んで來ることもあります。

▲餅　菓　子

外國の菓子には御承知の通り餅菓子と云つたやうな

ものはありません。萬を以つて數ふる我々同胞姉妹が居るのですから、日本流の菓子は隨分と需用がある。乃ち餅菓子屋なからざるべからずとの思ひ立ちで、今では四五軒の菓子屋があります。日本の菓子は、改善の方法に據つては、外人の嗜好に投ずるやうなものが出來ないとも限らないのですから、此處は一番研究を要することゝ思ひます。同胞をのみ華客として居ないで、外人をも己が華客に取込むやう、此業を勵み營まなければなるまい。現に桑港にある菓子屋では、龜屋、大阪屋、此等の店はなか〳〵に勉强して居るので、改善の實は乾度結ばれるだらうとの評判です。其芽は既に或は出て居はせぬかと思はれる程、其處の菓子は甘いです。

下等の菓子屋に至つては、日本人の止つて居る宿屋を持つて廻つて賣つて居るものもあります。之は主に桑港其他太平洋沿岸の各都市に、我が同胞の出稼ぎ勞働者の足を止めて居る處に行はれる商賣で、其手にして居る箱の中には、餅菓子、大福餅、蜜柑、鮨などで、之でも一寸した夫婦暮しの一家位は、樂に經營して行かれるとは、今更ながら北米に於ける同胞の活計の豊かなのには、驚き呆れざるを得ないではありませんか。

▲喫茶店

は桑港の金門公園にありますので、之は以前此處に萬國大博覽會の時の遺物で、ツイ二三年前まで猶且其當時在つた處で營まれて居つて、如何物食ひの、剣つ返へりの米國の女小供に、日本流の茶菓が頗る氣に入つたと見えて、毎週土曜日から日曜日に懸けて、盛んに贅を行る習慣になつて居る米國の子女の、之に一皿一椀の茶菓を翫味珍重するもの非常に多く、仕舞には最早其建物でも手狹まを感ずる程に繁昌して、其規模を擴張しなければならなくなつた其矢先に、何としたことか、市役所から立退きを命せられ……たとか、併し、それを機會に、此處が奮發の仕所と、同店の主人は其公園の廓外に莫大の敷地を買ひ受け、在來の建物を此處に移し、猶は增築などをして、今では我が

同胞姉妹の會合用の堂になつて居ます。それで、娯樂の道具なども備へつけてあり、種々の日本の草花を栽培し、鶴、鷲、野獸に至るまで飼つてありますから、宛然たる小植物園、小動物園、人氣を招くやうになつたのは、實に嬉しく感じます。

▲部屋貸

は其止宿者から受取つた部屋賃でもつて、家主に其家賃を支拂ひ、其間に利益を得て、そして生活して居る職業なので、我が同胞姉妹の此業を營んで居るものが甚だ多いです。部屋を借りに來るお客は何れも日本人で、學生、勞働者、職工などの市中に稼いで居るものか、それでなければ、田舍働きの骨休めに都會へ出て來るものなどです。部屋代は一週間毎の勘定で、一弗二十五仙から二弗五十仙位までが先づ止りでありますが、中には如何かすると五十仙から一弗位までの安い部屋が無いでもないです。それでもつて其部屋には、寢床、洗面器、鏡、櫛、石鹸、手拭、燈火、小便壺等、一切の必要品が備へ付けてあつて、毎朝ボーイが來て、奇麗に掃除して呉れますから、考へて見ると安いものです。

▲湯屋

も亦た我が同胞姉妹が營む業としては誠に見込みのあるもので、外人のお客を取らない譯ではないけれども、彼等外人の癖として、湯には容易に入らなく、大概一ケ月に二回も入浴するやうな外人は、能々の湯好きであつて、其多數は一ケ月に一回位のものですから、お客は主に我々同胞日本人！湯代は餘程以前から一浴十五仙と云ふ定りで、中には十仙の家も無いではありませんが、非常に不潔で、汚なくつて、なか〳〵五仙位のことには換へられませんから、寧ろ五仙をはずんで、十五仙出しても清潔な湯屋へ行つた方が心持ちが好い、左樣な理由からして何時も十五仙湯の方が繁盛して居るやうです。桑港では永本、竹中、片山、紀和湯など、何れも勉强して居るので、評判になつて居ます。

僅か一浴が十仙、十五仙日本の貨幣にすれば二十錢、

三十錢、斯樣いふと彼地の事情を知らない人の耳には、如何にも高價いやうに聞えもしませうが、實際入浴つて見ると、今度は又た安價いやうな心持ちがするです。男女の混浴は、現今では日本には絕えたやうですが、布哇に於ては見られるが、米國では男同士でさへ一所には入浴らない。何處の湯屋に行つても、一箇の部屋に、加之も錠の確とおりるやうになつて居る部屋に、一箇の湯槽が、加之も女の肌よりも眞白な瀨戶敷きの湯槽が備へ付けられてあつて、浴客の更る每に、湯水は新らしく淸められるのですから、つまり浴賃も張る譯なのです。湯錢が高いと云つても、十仙や十五仙ならまだ〳〵安い中なので、日本人の營んで居る湯屋ですから、之で濟むのですが、外人の湯屋などへ行くと、一回一弗以上を取られます。尤もそれには高價い理由があるので、お客が入浴して居る其間に、カラー、カフス、ホワイトシャーツ、肌着、履下、何から何まで無料でもつて洗濯して吳れる、上衣や袴にはちやんと火伸を掛けて置いて吳れて、直ぐに其心持ちの好いのを着られるやうになつて居て、靴まで磨いてあるのですから、實に到れり盡せりで、流石は文明國だと感心したくなるです。

湯槽は今云つた通り、一人一箇、一室持切りでありますけれど、また、二人一箇一室持切りに造られて居るのもあります。之は夫婦連立つて來たお客に供給するので、之が又たなか〳〵に流行るです。

▲竹細工

少し日本好きの外人の家に行きますと、それは〳〵何から何まで、室內に竹細工を見ないことは無い位、竹細工氣違ひの家があります。彼地の令孃は一體に腕力の强い爲かして、身分のある立派な奧樣方でも、一向平氣で大きやかなる手荷物を片手にぶら下げて步いて居ます。それが又た面白いことには多くは竹行李で、銀金具などの付いた奇麗な革箱よりも、我が淸洒なる竹行李をひけらかして持つて步く風があるのであります。尤も之は竹は彼地に產しない點から來つた嗜好でもありませうが、兎に角日本人などの眼には、可笑い位に珍重されて居るのは、遠く異境に來つた身に、聊か心丈夫なやうな氣がして、つまらんことでも非常に嬉しく感ずるものです。

婦人と少年文學

高信峽水

婦人は果して文學者として適當なものでせうか、これは、よほど前からの問題ですが、未だに解決されずに遺されてゐます然し、是までの論者も大抵は、「成功し得べし。」といふ方に一定してゐるやうです。

近來に至つて、「婦人研究」といふ事が眞面目にやられるやうになつたが、今までは、まるで不可解なもの、若くは「女子と小人は養ひ難し。」といふやうな東洋風の解釋をのみして、毫も眞面目な研究の步を進めなかつた、從つて婦人と文學といふやうな事も等閑に附せられてゐましたけれど、今日に於いてはさうでない、婦人研究も大分やられるし、又文學が婦人と離るべからざる關係を持つに至つた、されば、此の事に就いても多少考へてみればなりません。



平安時代の文學ー日本文學の花と稱せられるものは全く婦人の織手に成つたもので、有髯男子をして殆んど後に瞠若たらしめたのであるが、降つて明治に至つても、閨秀作家は續々輩出して、時ならぬ文學の花を咲せた、其主なものは、私の記憶する處で

樋口一葉　小金井喜美子
田澤稻舟　梶田薄水
若松賤子　三宅花圃

鈴木 秋子　與謝野晶子　大塚楠緒子
瀬沼 夏葉

位なものでせう。

茲に面白い事は、平安時代の閨秀作家は紫式部、淸少納言等二三の人々を除いては大抵歌人として有名なものであつたが、明治のはさうでなく、右擧げた諸作家の中で、晶子女史を措いての外は皆小說家として成功した人々である。

之は文學史家の看過すべからざる現象ですが、それは兎に角、婦人の性格は、如何にも同情の深い、感情の濃かな、センチメンタルなもので、男子のやうに理性に富んだ、意志の強いものとは全く反對である、されば、婦人の手に成る文學も感情の濃かな、センチメンタルなものである事は疑ふべくもない。



小說とか詩とか、純文學の方面で成功しやうには、よほどの天才を俟たねばならぬけれど、然し、年若い婦人などは、何うも此方面に筆をつけたがるやうである、それば大それた心得違で、寧ろ婦人の天職に反いたものと云はればならぬ、小さい功名心のために一生を誤つてしまはうも知れません。

それよりは、實な方ではあるが、私は文學志願の婦人に對つて、少年文學——お伽噺の方面に筆をつけられむ事を勸告したい、日本に於ては巖谷小波氏の成功、それは全く、かう申しては失禮であるが、氏の性格は何方かといへば女性的で、もの優しいところに歸因するのではあるまいか、氏は實に好く少年を知り、少年と

倶に樂しむ事を好む人である、それから彼の有名なアン、デル、セン、まるで女のやうな優しい人であつたればこそ、あの位な成功もできたのである。諸孃は之を何うお思ひでせう。

女性的の性格を持つた人が、少年文學の方面に於て大なる效益を擧げつゝあるならば、婦人が若し此事に當られるならば何うであらうか、その成功は期して待つべきである、兒童敎育といふと大きいが、兒童の感情を美しくし、思想の鍛錬をするのに、お伽噺の類がいかに功果あるかは、今更論ずる必要もあるまい、既に、お伽噺は兒童に有益であると共に、兒童は又之を聽く事を好むものである、然らば、お伽噺の著作はますゝゝ盛んにやられねばならぬのであるが、今日のお伽噺にはいかにも感心のできぬものが多い、といふのは、その作家は多く男子で、殊に、

一、少年を知らず。二、金儲のために作る。

やうなのが極めて多いから、何うしてもかういふ事に成るのでせう。

實に是れ、婦人の起つべき秋ではないか。

之を一家庭に見ても、兒童は父よりも母の方に親み易い、であるから、母にして父よりは好く兒童を知つてゐる、從つてその噺も父のよりは面白く、又上手であるに違ない、天性その事に適したる婦人が、猶ほ進んで研究せられるならば、その成功は期して俟つべきでせう。

然し、之は割合に勞力に對する報酬が尠い、金の方もさうであるが、名譽――それは純文學の方では充分に獲得されやうけれど、この方面には決して滿足を與へられるといふ譯には行かぬ、それがため功名心の激しい若き人々などは、些と思案するかも知れぬが、全體、事業をやるには、多少犧牲の觀念を持つてやらればならぬものであるから少しく質ではあるけれど、純文學の方面よりも社會を益するとは却つて多いかと思ふ故、爛漫たる才華を抱ける若い婦人は、暫し藝術――嚴格な意味の藝術を放れて、少年文學の方面に力を致されたい。

是れ實に、筆を執る婦人の責任である。

女子大學卒業式

女子大學にては去月廿日第四回創立紀念式を兼れ大學部及附屬高等女學校の卒業式を擧行せり、先づ卒業生に關する報告ありて後ち成瀨校長より卒業證書の授與ありたり。右終つて成瀨校長は同校の來歷を説き且つ卒業生一同に對して訓諭する所あり右に對し高等女學校卒業生總代吉田きよ子及び大學部卒業生總代大岡蔦枝子は謝辭を朗讀し次に來賓にして同校財務委員たる澁澤男爵はローズベルト氏の家庭談を引きて日本の女子は優美嫻雅勤勉柔順及び貞節の諸德を備ふる外殊に權利を重んずるよりも寧ろ義務を尊重す可しとのことを説き次に來賓大隈伯は學問を以て家庭の事を解釋せんとするは現代の通弊なり故に諸姉は宜しく此點に注意し家庭に於ては飽くまで嫉妬心及虛榮心を去ることに勤め彼のスミス博士一派の唱道する女子高等敎育の批難説に對し十分に反對の例證を提供せられん事を望むと説けり右終つて卒業生一同は卒業式の歌を唱ひて式を終れり之と同時に敎育學部校舍及圖書館の定礎式を同校東南側なる敷地內に於て擧行し全く解散したるは四時過なりし因に本年卒業の各部人員左の如し

大學部卒業生百二十名（內、家政學部七十三名、國文學部四十五名、英文學部十四名）
附屬高等女學校卒業生、八十六名。

人事暦

五月

日曜日　七日、十四日、廿一日、廿八日

▲一日（舊暦三月廿七日かのえね）。▲二日――八十八夜、立春より八十八日目に當る、農家の重要季節。▲五日（舊暦四月一日）――端午の節句、男子ある家にては冑人形、坐敷幟を飾り、屋外には鯉吹流し、武者繪の大幟などを樹つ、又た粽、柏葉餅を製して食す、市中の湯屋にては此日菖蒲湯を沸かす。▲六日――靖國神社祭、戰死者の忠魂を弔ふ、相撲、能樂、花火の奉納あり。▲十四日――神宮神御衣祭、出雲大社祭。▲十五日――山城賀茂の祭。▲十九日――滿月。▲廿一日――庚申、川崎大師。▲廿五日――甲子。▲廿八日――地久節。

季節――六日「立夏」、廿二日「小滿」。日暖かにして萬物生々の氣をあらはし、新綠目に鮮にして天地の新たなるを覺ゆ、郊外は麥稍や色づきて告天子中天に自然の音樂を奏す、最も快適の候。

遊覽――目に青葉の心地よき候なれば郊外散策を試むる最も可。當月の觀物は藤もよく牡丹もよく、躑躅芍藥其他色々あるべし、藤は龜井戸、芝公園、大阪野田影藤。牡丹は本所四ツ目植文、目黑、大阪吉助牡丹、攝津池田。躑躅は大久保、日暮里、日比谷、染井。又た釣魚の好季節なれば水邊の清遊興深し「はぜつりや水村山郭酒旗の風」（嵐雪）。

農事――八十八夜以後は農家一般に活動し來り、農作に、茶摘に、養蠶に漸く繁忙を加ふ。粟、胡麻、大豆、蜀黍、胡蘿蔔、刀豆の播種。茄子、瓜、煙草、甘蔗の移植。菠薐草、芥菜、蠶豆、苺の收穫。

食品――根鯛のてりやき、干かれい、鯽なべ、蜆汁、鰻の蒲燒、蠶豆のきんとん。摘み菜のひたし、筍めし、年魚、ぜんまい。



塚越停春撰

(天) 雨

伊豆國田方郡上狩野村市山　古見彩子

白駒の塋は雲にかくろひて
　シナイのみ岳雨たそかゝる

宛として横山大觀君の畫を觀る如き趣あり。多少の不自然なる所なきに非ざれども、崇高幽玄の致、他人の學び得て到り難きものあり又一種の鬼才を有するものなるなからむや。

(地) 牡丹

香川縣丸龜市通町百三十四　吉田登子

のどかなる朝日の光あびながら
　露にきらめく緋牡丹の花

朝日の光をあびると云ひ、露にきらめくと云ふ、牡丹富盛の状、言外に躍如たり。眞に牡丹を歌うて調意の十二分を悉したるもの歟。

(人) 雨

愛知縣岡崎町六供　金子伊登子

春ふけて花なき野邊に飛ぶ蝶の
　影うちけぶり夕雨の降る

春晩蕭寂の景睹るが如く、餘韻裊々として、春風限りなきの恨を蔵く。「影うちけぶり」の一語殊に妙。

秀逸

○○雨

京都寺の内大宮西　三の宮つゆ子

矢さけびの聲もをやみていつしかと
　雨に暮れ行く西比利亞の原

戰後の雨の暮の淋しさ、物凄さ、知るべし。之に對して、誰か千萬無量の感なきことを得むや。

○○○牡丹

東京下谷御徒士町一ノ六二　齋藤秀子

花今宵女めされて鞍馬しげき
　揚家の門の色ふかみ草

三十一字の中、限りなき悲哀あり。限りなき世態人情あり。

○○牡丹

新潟縣中蒲原郡島屋野村女池達坂例治方　小菅まさ子

緋の袴めしたる人の椽にたちて
　白き牡丹をみそなはすなり

○○牡丹　豐後臼杵町右田秋骨方　露野花子

扉に凭りて王者の夢を繰返す
夕日の庭よ牡丹くづるゝ

以上二首、共に牡丹を歌うて得易からざるの句。

、○雨　豐前　榮子

引舟の追分いとゞかすかにて
春雨けふる淀の川づら

ↄ○菖蒲　神戸市神戸女學院内　脇屋登美

菖蒲滋る乙女は遠くなりにけり
五月雨のふる川添の道

ↄ○雨　伊豆　古見彩子

被はむに袂小さき提灯や
葉櫻くらききりさめ月夜

「袂小さき」の一語を以て、詩中の人を想像し得べし。此の人にして、此夜に此の淋しき道を行く。人をして一掬の涙あらしむるに足る。

、○菖蒲　島根縣邇摩郡靜間村　宮内登美子

乙女子が蛇の目さす手にさかさまに
一束添えし花菖蒲かな

實景。

ↄ○雨　長野更級郡上山田村　小出春江

一しきり花の吹雪の散る見えて
雨となり行く久保寺の里

想調共に妙。

ↄ○菖蒲　大分縣四日市町　元重とき子

そのむかしふり分け髪の君落ちし
山の井淺みあやめ咲きけり

奇想奇調。

、○雨　越後長岡新町東洋女學校内　土田ちゑ子

王者逝きこゝに二千の春暮れて
夕雨細しバビロンの城

雄渾甚し。

○○牡丹　越前三國町　藤野常女

咲く花のくさぐ\あれどおよびなく
色香も深きふかみ艸かな

○○牡丹　周防國大島郡小松開作村　矢田部芳子

おほかたの花におくれて匂へども
色もかをりも深みぐさかな

○○牡丹　能登　ふみを

いひしらぬ色香なりけり大方の
花散る頃の春ふかみ草

以上三首、殆ど同じ趣味を歌ひて、同じく巧みなるもの。

○牡丹　丸龜市東町　香川藤枝

夏姫の御手にふれけん此夕
牡丹くづれて春や暮れぬる

、〇雨
春のせて散りゆく花に何となう
　思ぞせまる雨の夕暮
岡山市西中山下五二　橋本芳子

〇〇雨
須摩寺の甍の讀經の音たえて
　青葉若葉に雨靜かなり
豊後臼杵町田町右田方　花守薫子

〇〇牡丹
蝶追ひし猫も眠りて牡丹咲く
　花屋が庭の午靜かなり
安藝竹原町　松阪梅子

以上二首、異曲同巧。

、〇〇雨
雁去りて燕は見えず人は來ず
　蝴蝶は訪はず雨に暮行く
大和宇智郡北宇智村近内　藤岡さゆり子

、〇〇雨
小夜ふけて庭の小笹の上風に
　あはれをそふる雨の音かな
播磨市蓬萊町三ノ三七加藤方　三島洋子

〇〇雨
花見むとあすを契りて寢し夜半を
　心にかゝる雨の音かな
名古屋白壁町二丁目　山村榮子

、〇牡丹
夕風に牡丹の一片花散りて
　ねむりし蝴蝶の夢やすからじ
長崎市　古賀秀子

〇〇雨
行く春の哀もいとゞ身にしみて
　都大路の雨に暮行く
東京麹町區三番町六八　行田はる子

、〇雨
小やみなくふりしく雨にそぼちつゝ
　櫻散るなり春の夕暮
豊前豊津　柳瀨倭文子

〇〇牡丹
咲きぬればかめに折りさしめでなまし
　廿日とかぎる花のあはれを
和歌山市湊北町一丁目　谷井清子

下句ありて、初めて凡ならず。

、〇〇雨
窓のうちに戀のさゝやき低うなりて
　軒にもつるゝ春雨の絲
東京芝區四國寺町六〇　白木菊子

、〇雨
濡れぬれて菖蒲賣る子の哀れさに
　そとよび入れぬ雨細き門
河内北河内郡川越村　岡市喜志子

、〇雨
はれまなく降る五月雨におとづれも
　たえて日をふる頃にもあるかな
和歌山市丸ノ内十三番町七　湯川倭文子

定家卿の歌より翻し來る。

〇〇雨　　下野下都賀郡富山村下皆川　椎名きく子

いつのまに雨とやなりし宵の間は花の木の間に月を見てしが

、〇雨　　岡山縣津山町山下　安藤錦子

すぎし夜のさびしき雨に聴きし歌またこの里の雨に誦して見る

佳調

● 島根・宮内登美子

脱捨し花染衣洗はんとたてる野川に菖蒲花咲く

● 島根　杉村露子

新葉の屋根に餌あさる小雀の翼重げに春の雨ふる

● 姫路　船戸ゆき子

あしの間に紫濃くも水あさき小沼のほとり菖蒲咲くなり

● 名古屋　伊藤はま

廣庭の牡丹くづれて小雨ふるおとゝのやかた靜かなり

● 京都　西澤まつ子

雨二日續きて晴れし夕風にあはれ牡丹の花崩れたり

● 伊勢　日汀女史

戰立ちて若者あらず五月の村唄も聞えず春雨の降る

● 牛込　田上小金

濃緑の芝生さながら錦地にて散りし牡丹の花模様かな

● 伊豆　古見彩子

打ちあきて鼓枕の睡眠の宵小雨ながらの月朧ろなり

● 伊豆　錢　綾

訪ふ人もなき賤が家にゆかしくも匂ひ出てたる色深見草

● 上毛　上原きよ子

何ごとを思ふともなく夕庭にたゝずみ居れば小雨ふりきぬ

● 大阪　小山ふく子

年毎に引けどつきせぬ花菖蒲千代をこめてや根さすなるらん

● 河内　小野敬子

色に香にゆかしき花の二十日草あかぬながめをたれに分たん

● 市ケ谷　杉浦富士子

あさからぬ淺香の沼のあやめ草千代のためしと人の引くらむ

● 和歌山　湯川倭文子

つゆふかみ名におふ花の咲き出でゝしつかかきねも色そはえゆく

● 伊勢　藤堂しげ

高樓の琴のしなべよしめやかに雨にくれゆく春の夕かな

● 島根　宮内登美

たらちねの我が爲にとて藥にる窓しめやかに春雨のふる

● 上野　萩原ゆう子

亡き母が愛でし牡丹の花咲ておもひで多き夕まぐれかな

● 越前　辻のぶ

なまめける窓にさゝてふる雨になやめるいろのくさもありけり

● 岐阜　鹽谷秀子

讀經やみて鳥なき絶えてたそがれて春雨寒し山寺の庭

● 神戸　竹馬とし子

春もやゝ暮方近き庭の面にひとり時める緋牡丹の花

●　山梨　小林つれじ
いかめしき門入り行けば奥庭に未亡人見えて牡丹花さく
●　下野　新井琴子
情調の影ほのめきし朝明や御苑に燃ゆる緋牡丹の花
●　牛込　よれ子
春雨のめぐみの露に野も山もはるのみどりぞ色まさりける
●　廣島　渦坂つぎ子
背の君をけふむかふべくたゝずめる岸邊につよく春雨の降る
●　常陸　佐野清子
霧雲の綿とも見まかふとほさとのあめにけふれる夕けしきかな
●　栃木　小林ちい子
父は如何に我せこいかに様々に思出おそふ春の夜の雨
●　赤阪　高瀬白蓮
亡き母のめで給ひにし牡丹咲きてこの夕暮の思出多き
●　兵庫　柳田のぶ子
朝風に露ほろ〳〵と白牡丹くづれて高く蝴蝶舞ひたつ
●　大阪　田中しめ子
尼寺の鐘ひくうなりて海棠に小雨ふるなり春のゆふぐれ
●　東京　白ゆり女
たれこめしまどに小琴の音低くいとゞ淋しき春の夜の雨
●　福島　遠藤清子
高殿の軒端もにほふ楽さくらに玉とくたけて夕雨のふる
●　和歌山　木本歌子
法の聲かすみにきゆる尼寺の軒の芭蕉に春雨のふる
●　名古屋　見田蓮子

高殿に琴の音低く聞えつゝみ庭の牡丹花おもげなり
●　赤阪　米子
亡き君がかたみの手はこ取出て忍ふ夕へを小雨そほふる
●　兵庫　柳田春枝
法の聲あはれにさえて尼寺の牡丹の花に雨靜かなり
●　群馬　川島龍子
ふかみくさちりしひとひらふみにこめて雲にふすてふ人に贈らん
●　大坂　森千代
軽舟に桃の一花乗せて行く花の小川を雨細う降る
●　田端　田中千賀子
紅の牡丹に白き蝶ねむり花守見えず靈靜なり
●　相州　若松露子
白牡丹そと口にせし人若し春雨かなる黄昏のまど
●　熊本　安田文子
小初瀬やあまた日をふる春雨にうちしめりたる入相のかね
●　兵庫　柳田のぶ子
空くらく風はいかりて浪ほえて支那海上は雨になり行く
●　和歌山　田中正子
敵味方つかれて休む陣の夕高粱百里たゞ雨の音
●　東京　伊東秋子
春の床に春を讃する緋牡丹は王者とよぶにふさはしき花
●　同　同人
愁おほき春を夕の窓に見れば墓標をたゝく五月雨の音
●　津市　松尾花子
高殿の琴のしらべに夜は更けてのきばしづかに春雨のふる

● 東京　荻野雅子

雲の影湖面に這ひて夕くれの鐘横淡く雨になり行く

● 京都　喜多村朝子

山里の旅の館に春くれて軒の菖蒲に不如歸啼く

● 名古屋　伊東はま

ひろかへる五月の鯉のかけ見えて池の菖蒲は今さかりなり

● 能登　杉下いち子

花椿雨にしほれて里寺の卒塔婆さびしき春の夕ぐれ

● 香川　前田喜美子

かたみそと植ゑていてませし兄君の牡丹の花の風なきにちる

● 安藝　寳面幸

はつか草色香に富める花なればさかりの程も久しかりけり

● 相州　内野すゞ子

園守のかり捨て置きし池じりに今を盛りと花あやめさく

● 神奈川　岩橋青葉

琴の音をたよりて行けば垣間より見ゆる牡丹の花さかりなり

● 長崎　吉田ふみ

櫻花ちりやはてんと思ひづゝやすいせられぬ夜半の雨かな

● 山梨　小林まつ子

うらわかきひじりの一人經をよむ御堂の簷に雨しつかなり

● 越後　水澤みか

宮人の奥庭孔雀あゆみ居て白き牡丹の香ゆかしも

● 岡山　桑田政子

神垣のふりしみ七五三に蝸牛這ひゆくみえて雨靜かなり

● 赤坂　高瀬嶺子

三年經し母が御墓に花立てゝ歸る野道を雨横にふる

● 京橋　新井かつ子

櫻花ちりて淋しき我庭に春ふかみ草咲そめにけり

● 能登　杉下ふみを子

電線に燕二三羽さゝやきて麥の畑に雨しづかなり

● 京都　ゆふ月

けふもまた病ませる父をなぐさむるわびしきまどに春のあめふる

● 麴町　迫田菊子

春雨の音こまかくも身にしみて獨りぬる夜の夢ちぎれ〳〵

● 熊本　六花

淋しさと思ふ雨夜も小女子のむかし話に時は過けり

● 前橋　黑崎とく子

白鷺の小魚をあさる澤の邊にゆかりの色のあやめ花さく

● 越後　坪井わか子

さびしさに地圖を繙く雨のまど床の牡丹のふとくづれぬる

● 松山　山崎匡子

とり〳〵に千草もゝくさ咲きわけし春野の十里あめになりゆく

● 下野　岩原貞子

甚五郎がのみの香かすむ東照宮朱欄の牡丹に蝶戯むれぬ

● 栃木　大橋しの

門付の町の彼方を流し行く絲もはかなき春の夜の雨

● 牛込　瀨藤ちよ子

たえまなく降る五月雨に綠なす苔の花さく庭のをもかな

● 岩代　菅野ひろ子

路ほろ〳〵萩ほら〳〵姫立ちて御苑のはしにあやめ剪り給ふ

夢さめて君やいかにと忍ぶ夜を庭の芭蕉に小雨そぼ降る　仙臺　渡部光子

旅衣かたしく袖の夢さめて窓につめたき小雨そぼふる　前橋　宮内りき子

賤の女のときあらひぎぬ名のみしてほすひまもなしさみだれの空　山形　引橋ます子

みほとけのあかしさながら夢に似て泣くにいとよき窓の細雨　本郷　村田章子

三年振り病癒の母の御手取りてほゝ笑み見たり牡丹さく庭　伊勢　太田榮子

長き日を鶯鳴唄はず雨止まず瓶の牡丹の花くづれたり　山梨　岡久代子

はつかくさ青葉のにはにさきいでゝ白髮のおきなけふもたゝずむ　東京　たつみ

人はみな花もろともにちりはてゝつゝみの上ぞ雨あしゝげき　同　同人

丸窓に琴の音洩れていやましにゆかしさましぬ牡丹咲く宿　山口　鐵井松子

天地の眠り吹きさます朝風に庭の牡丹の花くづれけり　長門　梅田糸子

梅ちりひもゝ紅梅皆散りて春のかたみのにはの牡丹花　香川　溪子

薄刀手に皆したゆたふ乙女子の袖にも添ひて咲く花あやめ　大阪　八重子

あれはてし庭にも色香のふかみ草咲きてけだかく見ゆる宿かな　岡山　小山松枝

月暗く雨に音なき尼寺や若き讀經の聲は冴えたり　麹町　梅野ともゑ

なき母の柩送りし夕暮に小雨そぼふりほとゝぎすなく　群馬　厚木しげ子

世はなべて青葉盛りとなりにしをひとり時めく花菖蒲かな　長崎　朝野登美子

たち並ぶ軒の菖蒲もくれそめて五日の月の淡くのぼれる　石見　青柳秀子

朝ぎよめはてたる庭につゆのまゝあけに匂へる深見草かな　長野　上石小夜子

小夜ふけて詩集ひもどく我窓に音しめやかに春雨のふる　鹿兒島　こと子

案内乞へば沙彌の出て來るまひる時牡丹こぼるゝ山寺の庭　石見　青柳秀子

池殿にやさしき人の聲洩れてあやめの花にあさ露おほき　攝津　大野滋子

傘を侍女にさゝせてひめ君の菖蒲をります池の板橋　攝津　山川松枝

思ひあまりすろゝおりたつ庭の面に白き牡丹の花くづれけり　三重　中谷加代子

書とぢて現ともなくつく／＼と芭蕉にそゝぐ雨の音きく　愛知　梶田愛子

今いくか／＼と首延ておよひ折り待ちしけふしも雨降り出ぬ　同　同人

● 神田 植田喜代子
釣垂るゝ淀川尻の雨の日や帆のなき船の岸に眠れる
● 能登 池野いさみ子
靈前にあやめ咲く夜を灯ともして傳來の太刀拔いて見るかな
● 青森 吉村ちゑ子
みだれにし花やこぼるゝしら露も色うつくしき春雨のあと
● 岩代 井上多根子
濡れて來る乙女は今朝の雨空を花曇りとや思ひたがへし
● 千葉 長田夏子
雨晴れて色香も高き鉢植の牡丹の花をてらす夕月
● 群馬 吉田きみ子
里の子がいくさごとする聲たえて雨になりゆく畑の中みち
● 牛込 すみれ
かまだあたりたづれてそみむまかれちのたよりさへよきその菖蒲園
● 秋田 追野草子
音もなく降るさみだれの淋しきに小田の蛙も聲哀れなり
● 京都 大久保淺子
川上はしけくふりしか加茂川の水かさましてかはらも見えず
● 淺草 田村たき子
明日こよとうたげに招ぐ友の文に結び添へたる菖蒲花束
● 熊本 金田むさ子
破れたる傘さして袖濡れてとなりの與作どこへ行くらん
● 淺草 長濱はな子
雨の夜を如何にすごさせ給ふやと戰の庭の君をしぞ思ふ
● 名古屋 まさ子

川上のきしの牡丹やくずれけん一ひらうかぶ水のながれに
● 徳島 久保串子
早苗とる少女の歌もくもるかな五月雨くらき小山田の里
● 神奈川 吉川常子
椿さくら散りてさびしき我宿のほたんに蝶のとはぬ日もなし
● 大阪 松井たづ子
御讀經の聲もしめりて山寺の枝垂れざくらに雨細う降る
● 三河 村越みゆき
さしのべて手折る少女の白き手に白き菖蒲の露散りかゝる
● 八王子 宮崎杜月
病む母のみとりつかれてうたゝねの夢おどろかす夜半の雨かな
● 横濱 寺田光子
小雨ふる岸の夕べを二人づれ菖蒲片手に傘さしかくる
● 和歌山 谷井清子
おくつゆの色深み草見る君のあけのはかまに朝日さすなり
● 京都 濱部愛子
讀經の聲はたやみし山寺の牡丹咲く庭雨靜なり
● 牛込 峯崎京子
行く船のおとたに見えすかすみけり三保の松原けふる春雨
● 越後 荻野てる子
あへぎ〳〵やう〳〵つきし峠茶屋軒のぼたんの咲きくづれたる
● 埼玉 上下芳葉
雨の夜をそゞろ故郷忍び居ればあたり寂として時鳥なく
● 陸前 山田はな
一騎二騎騎兵うすれゆく曠野夕日の入る方を雨になりゆく

狂歌

（天）餅　歩兵第七聯隊補充大隊　山田正年

柏もち軍曹様へもすゝめけり
　偽でもどりし子をおもふ母

評　田舍の老婆が慈愛の情味よめてうまい哉（采香評）

（地）夜梅　埼玉縣寶珠花局內沼　伊東仲子

障子まで蹴やぶる如く槍梅の
　かをりは鼻をつきのよの窓

評　強勢なる梅の夜襲敵われも參加せまほしく思ふ

（人）題しらず　大和國北葛城郡高田公園內　三宅わき子

こぬ人をうらむらさきの藤の花
　まつに懸つた思ひねの床

評　くねり屈曲たるさま老練の手くだなる哉謎はゞ口舌に擬られて藤紫の痕やつかむ（采香）

秀逸

松　神戸　水越照子

四方山に鶴の衣のけさかけて

經やよむらむ谷のうぐひす

蛙　京都　西澤松子

色紙がた短冊がたの苗代に
　かはづは聲をよみかはすなり

商人　名古屋　永田康子

朝早く起てはたらくあき人は
　金も寐させておかぬなりけり

電話　德島　美馬いし子

稻妻に邪魔せられたる艶話
　うらむもをかしおなし電氣に

海邊　牛込　小林冬子

ほろ酔の月おぼろげの小謠や
　さゝ波よする磯千鳥あし

同　高知　山川小波

烟ともまた霞ともわかの浦
　何ともよめぬ春の景色は

失題　伊豫　渡邊梅子

うかれめは諸行無じやうに金欲く
　是生滅法のうそをつく也

佳調

捕虜　越後　坪井わか
蛇喰と聞くおそロシヤのとらはれも娑を戀ては捕虜〳〵と泣く

旅順　廣島　高橋なを
スタルクが逃げてマカロフ死んだ跡とうと旅順を棄ッセル敍

劫子　佐倉　岩淵文子
碗も箸もそこら〳〵あげて劫子のちやわんと膳の上に座はれり

柳　石見　千代廷靜枝
まつかき柳の糸の洗ひ髮さして淋しき三日月のかげ

時局　羽後　大澤しん子
大山の麓にしげる黒木乃木奥ゆかしくも年はきにけり

春日　石見　神山靜子
おのづから富士も心や浮島が腹をかゝへて笑ふ春の日

春の神　中田和深子
春の神よ世にも目出度き御子長者梯子櫻子桃子李子

朧月　山形　岡田千代子
あれが夜の花曇りかと我とへば空はおぼろに嘘を月かな

議員　越後　坪井わか
せちがらき世のさまなれや爨で腹肥す議員もありとこそきけ

霞　仙臺　鶴の子
春の日も早や入相をつくし溺綱引く頃を霞引くなり

殺　陸前　山本松子
長かれと契りし甲斐もあら串の割ればならぬ中ぞうたてき

時局　羽後　石岡綱子
大山の奥の黒木に巣をくひし黒鳩逃ぐ見ゆ滿洲の野づらに

艦隊　甲府　黒柳三子
艦隊百度參の功德にや佛の國のあつき加護あり

青柳　名古屋　那賀多女史
束の間も眠れば揺る春風に五月蠅きふりも見せぬ青柳

●

百年も友に白髮の九十九里磯邊に濱の打よするまで　大阪　杉山はる

春風　姬路　神戸せい子
暖かき園にテニスの競べせる少女がリかン奪ふ春風

時局　美濃　山田愛子
逆鷄を沙河に破りて大山の兒玉にひゞくかちどきの聲

●

初けいこ風といふ字に苦しみて聲も出ませぬ歎も出ませぬ　備前　高矢露

雛　靜岡　古見百合子
金屛に夕日うつろひ桃ちりて内裡の雛の冠ゆがめり

鶯　栃木　高橋華山
鶯のなくや山路の法華寺朝寐しながら聞くも妙法

艦隊　近江　青山せい子
ゴムつきの波艦隊故のびすぎて切れざるうちに逆戻りする

●

田舍式部白粉三寸ぬりつけてよくッてよをやたら云ふなり　千葉　長田夏子

春の夜に夢ばかりなる式部あり兄さんもなく試驗落第

時局　大和　眞田敎子
マカロフと苦勞鳩公とステッセル名詮自稱の敗將にして

俳句

翠庵松花選

日傘、粽、金魚

（天）日傘さす女ものうき草履かな　神田區錦町三丁目二十番地 濱谷方　今井登美子

日傘さして如何にも懶げに尻切れ草履を引きずり行く女のさま見るが如し。

（地）日傘して錬りの太夫や八文字　和歌山市臺所町竹中方　貴志緑

元祿時代の風俗畫。

（人）給日傘や寢て居る犬に廻り道　神戸市永澤町二丁目　水越照子

朝顏に釣瓶とられて云々は不自然の嫌あり此句に至つては少女の腰狗をだも恐るゝ狀を寫して眞に逼る。

日盛りを戻る寺子の日傘哉　仙臺　佐藤日吉子
寺を出て戻る道見の日傘哉　同
御田植の神事果てたる日傘哉　同

給日傘やお杉お玉の寺參り　臺仙　左藤日吉子
給日傘や舞を習ひに女の子　大阪　柳はつ子
紋のついた日傘さしたるお染哉　同
近在へ繭買ひに行く日傘かな　同
學校は放課になりて日傘哉　岩代　本多せつ子
給日傘のお供揃や宮參り　同
黃昏を日傘つぼめて歸りけり　同
持なれて籐の柄古りたる日傘哉　和歌山　貴志緑
給日傘の兒が遊ぶや森の宮　同
見返れば日傘傾け見返りぬ　同
街道や暮れなんとして日傘行く　三河　關戸樂子
善き金魚善き丼にえり分けし　同
粽結ふや妹兄を凌ぎつゝ　同
花嫁の日傘傾げて出たりけり　下谷　志浦初美
二つ三つ日傘見ゆるや渡し舟　同
美くしき日傘ならぶや東山　同
姉妹姿やさしき日傘かな　橫須賀　高橋忻子
水更へて床に据えたる金魚哉　同
緣日の灯うつるや金魚鉢　同
日傘さして甘酒賣を呼びにけり　秋田　菅生定子
たそがれし渡頭の舟の日傘哉　同

金魚賣の晝寢して居る茶店哉　秋田　菅生定子
噴水の仕掛うれしき金魚哉　羽後　菅生綠史
絵日傘に暮色迫りし磯邊哉　同
學校の門を出でたる日傘かな　同
踏切に立ち止まりし日傘かな　羽後　菊地龍子
絵日傘や在郷者の連れ立ちて　同
絵日傘を見せに來に兒乳母が家　京都　那々とり
學校の門出る小さき日傘かな　同
歌ひつゝ歸る我子の日傘かな　同
田植する側で見て居る日傘かな　岩代　紺野はる
旅人の道きいて居る日傘哉　同
日傘みな師匠の家に這入りけり　和歌山　釘貫
追ひ付いて三つ並び行く日傘哉　同
金魚にもあきて久しき病かな　同
觀音へ雛妓詣づる日傘哉　岩代　中島ふくよ
斬して背の子眠る日傘かな　同
炎天に異人騎し行く日傘かな　同
午時を村に入りたる日傘かな　神田　今井登美子
先越せし日傘の人や白き襯衣　同
生垣を透して通る日傘かな　靜岡　美奈志子
門口でそとたゝみたる日傘哉　同

金魚賣卯の花垣を覗きけり　越後　かんこう
仁和寺へお歌使の日傘かな　同
鹵簿を待つ日傘や道の右左　名古屋　舟橋雪
絵日傘や京の女の美しき　同
唐の子が絵日傘赤き車上哉　牛込　柏野敏子
岡に立つ日傘の人や海見ゆる　同
夕日さす伽藍の前や金魚賣　同
絵日傘や顔に日影の赤くさす　信州　太田きぬゑ
洋傘の中に交りて日傘かな　同
水替へて金魚眺むる机かな　同
封もせぬ添狀かをる粽かな　越前　竹内清子
手を拍てば尾を振てよる金魚哉　同
子守する日傘美し宮の前　阿波　西野ひさし
久作が門を訪ふ日傘かな　京橋　太田秀子
さゝ粽ほどけば蘆の葉風哉　同
金魚鉢の水を替ゆれば微風哉　名古屋　篠田浪子
水替へた金魚の池に夕立す　同
日傘さす西京極や京女　麹町　追田きく
絵日傘や手を引いて行く橋の上　小樽　梶水仙子
病床に玉の金魚を仰ぎ見る　大阪　柳はつ子
草の戸に二夏經ぬる金魚哉　同

水かへて水に揺らるゝ金魚哉　大阪　柳　はつ子
水させば鉢の金魚の横さまに　岩代　本多せつ子
晒井の曾て放ちし金魚哉　同
さま／＼の金魚興ある尾ぶり哉　同
水餅の店涼しきに金魚哉　和歌山　貴志　緑
風鈴の影ゆらめくや金魚鉢　同
石菖に放つ金魚や淺き鉢　同
金魚賣の水かへ居るや晝時分　岩代　紺野　はる
金魚賣元は我家の下男なり　同
常磐津を敎ゆる家や金魚飼ふ　同
番兵に物とひよりし日傘かな　埼玉　伊東れう子
畦道に花嫁送る日傘かな　同
二人とも紅屋へはいる日傘哉　駿河　井上　歴子
麩に近く揃うて浮ぶ金魚哉　下野　久保あつし
緣日や淋しきあたり金魚賣　名古屋　網野たけ子
筏行く利根の川邊に日傘哉　牛込　星野　松子
梅雨晴れて藻草をくゞる金魚哉　同
石階を登つてたゝむ日傘哉　本所　山下みの子
吹井戸や水かへて居る金魚賣　同
月出でゝ浪にきらめく金魚哉　長門　杉山きくの
花桐の下でたゝみし日傘哉　同

雲に入る繪日傘一つ瀧の音　三河　鈴木　環子
噴水や金魚涼しく遊びけり　同
大角力の肩に小さき日傘哉　名古屋　小　鈴
校門を泣き／＼出づる日傘哉　同
隱すほど顔覗きたき日傘哉　能登　杉下ふみを
憂き人にそむけて通る日傘哉　同
根上りの松に掛けたる日傘哉　上州　小川ひで子
坂口や日傘たゝめば松涼し　同
傾けた裡やゆかしき日傘哉　淺草　田村たき子
眞心をはる／＼乳母の粽かな　同
塗盃や粽に添へし妹が文　越後　筒井　花子
吹出しの水ちよろ／＼と金魚哉　同
年取つて聾の自慢や金魚賣　大阪　藤井　芳子
粽くばる隣四軒の小村かな　同
繪日傘や乳母の添手に渡る橋　山形　加藤　盛子
吹きおろす野風にたゝむ日本哉　同
噴水のしぶきに集ふ金魚哉　名古屋　堀馬きん子
尾を掉て藻をくゞり行く金魚哉　同
相去りて振りかへしぬる日傘哉　名古屋　み　ど　り
繪日傘や養ひ君の里詣り　同
繪日傘や麥畑に沿ふ細き道　靜岡市　佐藤　秋子

泳ぐ子を岸に見る子の日傘哉　伊勢　間宮稜子
金魚屋の金魚數ふる日和哉　越中　清水はつ子
小さ子のひよろ〳〵として日傘哉　淺草　長濱花子
幼子の横にさし行く日傘哉　新潟　牧　乙藏
砂道を埃に白き日傘かな　大阪　垂柳女史
背の子の手を添えて行く日傘哉　越後　藤野常子
藤浪の影をあやどる金魚哉　同
小走りに醉漢避ける日傘哉　越後　小菅まさ子
すれ〳〵に繪日傘二つ橋を行く　同
橋際に金魚屋並ぶ祭り哉　同
妹に菖蒲切らする日傘哉　山形　岡田千代子
繪日傘の赤き鳥居をくゞり兒　同
雲井坂登り行く子の日傘哉　奈良　福井愛子
夕榮の橋に雛妓のの日傘哉　同
金魚賣來るや書寮の祇園町　能登　山西きく子
隣から手すさみ呉るゝ粽かな　同
踏切に汽車を見て居る日傘哉　上州　荻原かなへ
橋の上に友まつて居る日傘哉　同
日盛りや日陰に憩ふ金魚賣　四谷　酒井秀子
藻がくれは金魚追ひ行く金魚哉　豐後　甲斐ふい子
妻も來て椽にくつろぐ金魚哉　大阪　中谷謙之亮

招魂祭暑くなりたる日傘哉　大阪　兼子ゑん子
麥畑の果てを一つの日傘哉　室町　行田はる子
足音に尾を掉り沈む金魚哉　岡山　澤井秀子
日傘さす少女の顔の白き哉　駿河　すみれ
繪日傘のうしろ姿や祇園町　松山　落　延女
いぬころに日傘さしやる子供哉　名古屋　木村　直
口笛に浮び出でたる金魚哉　周防　倉本三輪
ほゝゑみて外國人の日傘哉　美濃　川越せい子
繪日傘や橋へ來て止む子守唄　京都　西澤まつ子
手を引いて繪日傘行くや幼稚園　同
湯熨斗屋の風呂敷抱いて日傘哉　同
公園に赤き日傘の女かな　尾去澤　浦井松子
汽車おりて日傘さし行く野路哉　同
麥畑に見えつ隱れつ日傘哉　岐阜　山住芳子
行過ぎてふり返りたる日傘哉　同
渡し舟日傘にうける西日哉　名古屋　堀場きん子
三百の石塀登る日傘かな　同

病中都の友へ　札幌　浮青

松風浪の音けふも例の如き日にて候此頃の 日永を徒然になやまるゝ身をばあはれ思ひやらせ給へなさても物學びに忙しくおはす 君達のれたさにえ堪へで强て机に 打向へば直ちに腦の狂はしくなやむにぞいとぞ我身怨めしく存候せめて折々は御文だに賜はり度待暮し居候也。

端書文

（天）　姉の出産をまちて遣す文

芝區高輪車町廿八伊藤家内　大久保　榮

ねー様まだ？　随分まち遠でございます電話でとの御約束ゆゑ外(よそ)からでもチリン〳〵といふと胸がどきついて何だか樂みなやうな、心配なやうな赤ちやまのに造つたせまもりの五猿もみんな待つてをります。

こんな御手紙を見ると姉様のお産がやす〳〵と出來なさるやうに思はれます

（地）　菫を贈る

靜岡市東鷹匠町廿四阿部方　伊藤　美奈志子

西の國に生立つと聞く其大きなるに比ぶべくもあらねど紫の露滴る花片は乙女が悶えの胸を聴くとなんいとも優しき心をめでゝ御許に贈る此菫の花あはれ淸う受給ひて切なる君が思ひの丈を妻ばぬ中に告げ給へかし。

なよ〳〵と優しく菫を贈るにふさはしき文章なり

（人）　淸い水

山形市香澄町木ノ實小路　岡田千代子

遠い〳〵奥山の細谷川をちよろ〳〵と流れ出てそして今私の足元を喜ぶやうに笑ふやうに又水の神が小鈴でも振るやうに涼しい音たてゝ流れ去りつゝある淸い水せまき岩間にせかれては別れ別れては又合うてくる内には春の名殘の花びらを此里に誘うてさてそれから何處に送るであらうあゝ此淸い水！私は我知らず兩手にむすんだのである。

淸く優しき處女の心情を寫したるにも似たり

別れにし親しき友へ

名古屋　玉村多歌子

あゝ今更分袂の折を思ひ出でしあふは別れのはじめとしいへば別れはあふの基なる事いはむも更なり唯夢のごとく來り夢の如く去りたる君を偲しめる我心のみは獨り夢のごと淡きはかなきものならざるをこそ記臆し給はりれ。

多情の人は主觀的なり煩悶多きに隨て慰藉も亦多し此世界を我と情人若くは友人のみの世界と思へる故に。

親しき友の許に

長崎　吉田しげの

さぞ御嬉しいでしやう御國元から御ゆるしが出て明日から兄(にい)さんと御自炊なさるよしさぞ〳〵御樂みの事と思ひますとニコ〳〵したお顔が目の先にちらつきますいづれ近日伺つて御祝ひ申上げますが御兄さま否御良人様によろしく。

多少羨ましいと云ふ氣味あり一歩を進めば妬ましい氣味と爲り給に「どうせ永くは持つまい」などゝ陰口(かげぐち)。

名殘の寫眞

岩代　本多せつ子

朝な夕な妾に碁くつかへた數子の中に、今年十四になる女の兒があつた、今度都合で一年間の住居を去るに當り、「先生永々大きに………」と眞實無垢の涙を見せられて、さすがにほろりとしました。で獨居の机上に

當時の寫眞を取り出して、せめてもの心遣りと繰返して見ました。

斯の如き教師に兒女を托するは眞に幸福なり。

結婚を祝ひくれし人への返し　長門　飯田はる子

妾の結婚につきての御祝詞恐れ入候不日夏人も出征致すべければ田舍へ参り舅姑の手傳ひ致すべく候。

簡潔冷靜の極なり這般境遇に在りては自ら這般文辭を成さゝるを得ず。

菫に添えて兄様へ　長崎　塘野金子

紫の色こき菫一二輪謡作らさし上げます、どうぞ暖かいキッスを頂戴よ、この花こそは兄さんにつぐ私の最愛の友ですよ、きれいでせう、なにもかもこの花に申して置きましたから澤山きいて下さいませ、さよなら。

都の友へ　信州　高木雅子

春の水ゆるうゆく蘆濱の畔に塵を放れて山靈水神と語る、如何に爽しうは覺さずや。今も猶花の上野は百鬼窓ゆく様の候や、思ひ出るさへ仲々身の毛もよだつばかりに候。

君子さんの許へ返し　伯州　松本多嘉子

麗子ちゃんの御寫眞有難う、本當に貴孃にそツくりですわ、二ツとお笑ひ遊ばした口元に何ともいへぬ愛嬌が溢れるばかりで、餘りに可愛らしさに、私つい知らず〳〵接吻しましたの、私にも一度抱かせて頂戴な。

兵士　駿河　すみれ

いと大なる櫻の今をさかりと咲ける下に、大砲すえそが上にもたれかゝりて、物を思ふか、疲れたろか、身ゆるぎだもせぬ兵士一人。春風一陣、花しきりにふりて美しや一面の櫻色、あはれ兵士も大砲も。

妹の許に　大分　山中千年

花ちやんお目出たう姉さん嬉しくつてならないよ、善く一番で及第したねー是れからもねー何時も〳〵一番に成る様勉強せぬといけないよ、來年は姉さんも優等で卒業する積りだから、花ちやんが一番に成るか姉さんが優等になるか、勉強競べをしましようねー、忘れてはいけませんよ。

落花に寄して　赤坂　川村米子

都の花は夕べの嵐と散り終りぬ實に冷たきは人の世の人心戲盛りの中こそ中々に愛づれ散りての後は見返る者だになきぞうたてやあゝ行末長き乙女の身よ同じさだめにな泣き給ひそ。

都の友へ　磐城　吉田つる

都の花は散り果てしとこそ聞け深山里は今ぞ盛りの色香床しうこそよろづ時勢に後れ勝ちなる田家の様は封じこめし花の運命に等しと思召ますずや姉上憫み給へ草深く埋もるゝ我身を。

初幟に舊友を招く文　甲府　小川みな

女は三界に家なしの恐怖時代にも、男の子舉ぐれば此日許りは疊中帖我物との御思與ありしと申す端午の節句、共和政治の此下にては、家中分根太を拔くとも皆なき者の明日一日、弟君伴ひ給ひて必ず。

御姉上樣へ　埼玉　赤坂まさ子

喜んで下さい此頃は片言まじりで父ちん滿洲母ちん白い御べゝ衣て東京よなどゝ人様に話しを致します體は丈夫で御座いますから姉さん何卒御心配なく爲國に御つくし御つとめ遊せよ。

奉天占領の際都の姉へ　能登　池野いさみ子

這麼田舍でも祝賀だツて樣々眞似をしてよ中でも一番思付きが可いツて評判だのは狐の嫁取そして其嫁は内の花ちやん！姉さんのお出郷の折は三歳ですだが今ぢや六歳にも成ッたから、も非常に可愛くなツてよ。

貝漁に誘ふ文　靜岡　高瀬みつえ

足首までお濡らしになれば、貝は自分から、思ふ程、籠の中へ入つて參りますと、大森の留守居姿が參つての話を、妹がスッカリ眞にして、貴孃も是非御一緒にと、モウちやんと獨極め致して來ん日曜日を樂んで居

るのですのよ、何も要りません、お體だけで、ね。

親しき友へ　阿波　西野ひさし

今朝の風に櫻花枝に少なく相成り候。部屋の掃除の節掛額下し候にはらりと落ちし卷紙。開き見候所水莖の跡美しう趣味多き和歌二首あらはれ候。こは先頃來給ひし時のおすさびに候や。その時見せ給はざりしは心にくき限りにこそ。がしこ

新茶に添へて　福井市　槇並やす子

露さん、此れは妾が生れてから初めて作つて見た茶なのよ、これでも妾は一かどの甘い茶を作つたつもりで一ふくろ差し上げますから、何卒皆さまの御評判をれ……、何れお菓子は後より。

東都の姉に墓參を報す　沼津　石本みどり

今朝父さんの御伴をして母ちやんの御墓を御見舞致しました。何時ものお爺さんが奇麗に掃除して居りましたから塵一つありません。お花を手向けて清水で標を洗はうとしました時に、お墓の陰で愛らしい菫を二輪目付けました。其の色の濃く母ちやんが生前の御心の様な氣がしましたから押して置きました。次便で御送り致します。

墓詣でを妹に報ずる文　大阪　川上久

今日、蔵ゆかしき白樺の下に立てる邦雄様の新墓へ姉さんと同伴に詣でました、姉さんは身と抱いたるあの可愛い太郞さんに頬ずりして「今日からは坊とお二人よ」つて言てゝよ、白樺一輪風無しに散りました。

兄の戰死を弔ひをこせたる友へ　牛込　文子

昨日は御親切なる御手紙ありがたう拜見いたしました私も軍人の妹もとより覺悟はして居りますが父のかほも知らぬ弟の去年は母に別れ今度またたつた一人の兄にとり殘されたのも知らずに兄樣はいつお歸り〳〵と厭になつて歸る兄を待ちかれて居るのを見ては思はず涙にむせぶので………。

東京の姉へ　栃木　岸よし子

これは今朝野邊から採つて來た草花です。赤いのが撫子、紫のが桔梗、黄なのが女郞花。繪が下手ですから、さう見えますまいれ、これでも露がついて居た時は、隨分奇麗でしたよ。左樣なら。

東京の友へ　伊藤なでしこ

とし子樣いつ御歸り？おそいのれ。上野、向島、いゝでせう!!オ十薫が墓の鉄で、春はのどかれ。道後の花も咲いてよ、土筆も出てよ、堀江の貝ひろひ……ア丶おなつかしわ、早く歸つて頂戴な。今日髮洗つてよ。

男の子もうけし友へ　松本　高木雅子

玉の御稱の丈夫もうけさせ給ひしと聞く、花のごと美しき月のごと清きいづ方へ似通ひても如何に愛らしうや候はん、とくうつし繪贈りて給べ。

故郷の母君へ　横濱　寺田光子

入學試驗には合格しました、で東京にもなれました、叔母樣の事を時々母樣と呼んでは笑はれます、夕方になると西の空を眺めてゐます母樣も東の空を眺めて入らつしやるでせうか。

不具の女より友へ　岩代　菅野ひろ

君樣事明日嫁ぎ行くべしとや。まばゆき銀の燭臺に照れて、眼くらまんばかり思ひたる新嫁の姿、まのあたり看る如し。さゝげし玉の盃、あゝ悅びの顏のうつらでやは。せめて我涙の一滴を味ひたまひてよ。

靈の種をたのむ　神戸　鍋島とら子

昨年面白半分に養ひ候靈意外に好成績故種とりおき候へ共御存知の通都會は所肾の食物に乏しくさりとていとしのこを晴より晴にはと困し居候就ては甚乍勝手此孤兒哀と思召し此世の光見せしめ給はらばいと幸とれぎ上候。

春の川邊　館前　憩靈靈子

妾は川邊に朝早く行きて少時逍遙するを常とせり山の端よりきら〳〵とうつくしき日のみ神の光りを放ち頓がて雲雀の高く囀るあり又何處の谷か幽かに鶯の聲ありあゝ朝の淸新なる此空氣と眺とは人をして忍

を知らざる自然にかへらしむ何ぞ天然の清き美しきこと斯の如きぞや。

東京の兄へ　美作　溝口とし子

今年の夏休暇には、御歸省遊さるゝとの御噂、若此事信實ならば、妾は何んとせん、あれもこれもと兄上樣の御目に入れ度もの、御話し申したき事、積んで山程も候を、父上母上樣の指折り日數へて待ち給へるものを、あなかしこ。

友の繪葉書へのかへし　牛込　すみれ

什麼も美しい事、一寸澄ぅ立つてる婦人のスタイルと云つたら……ホホ憎らしい微ーかなローズの香氣、あら／＼蝶々が、何處からか、まぎれ込んで、御葉書の上に止まつたは……ハイカラがつてさホヽ。

都に近き友のもとに　高輪　なみ江

春の光りのどかにかゞやき、吉野櫻美くしく咲ひ亂れたる上野公園に、和洋の繪畫展覽會いくつとなく開かれ、いづれも趣向とり／＼に氣なかしく候、みやびの御心にとませ給ふ君よ、一日都への御出遊如何にや。

新婚旅行先の姉上に　讃岐　大内まさ子

今頃は嘸お樂しみでしようれ……お兄さんは大變お優しい方だから姉樣はお幸福よ御兩親も此頃はニコ／＼と笑うてばかりゐらつしやいます私れ指をりかぞへてお歸りの日を樂しう待つて居ますのよ。

櫻　駿河　栄崎てつ女

白妙の雲かほりて寒からぬ雪散りかふ櫻の木蔭に立ち寄りては長き日あかず詠め暮らして一夜をこゝに明さまほしき心地さへせらるゝぞかし。

友への返し　函館　木原常子

島國は御親切にも都のけしき御知せ被下且櫻の花びら封じ越し給へば一しほ御うらやましさ增り候こなたよりも御返禮としてさし上たくは候へども雪國のかなしさ、さりとて雪も封じこめられればせめていと梅ヶ枝に積れる雪を溶かして認め候になん。

▲和歌　「新竹」「螢」「鏡」

▲狂歌

▲俳句　「蚊帳」「田植」「團扇」

▲新體詩

▲謎々　「梅雨」「貯蓄債券」

▲端書文　（はがき一枚四行限）

▲川柳　「珈琲」「鼠」「婆艦隊」

◎賞品　天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

◎投稿締切　五月十八日限

◎新體詩を除くの外投稿はすべて端書に限る

投書は博文館編輯局女學世界と宛らるべし



小説

散浮く花

上

思案外史

勝負は時の運といひながら、あれほど鍛へに鍛へて置いた上手の手から水が漏れて、去年醫科に決勝點間際で僅か半艇身を拔かれたばかりに、五年間續いて法科の誇りとして居た優勝旗を奪ひ去られた鬱憤焔と燃え、今年の競漕會には是非に會稽の恥を隅田の流で雪がなければ同科生に合はす面目がないと、筑波颪が面に砭刺すをも物の數とせず、選手の七名は日に〳〵二里の道程を遠しとも思はず艇庫へ出張して、珠なす滿身の汗に冬の深いのも忘るゝほど、競漕の練習に餘念なきこと、既に三週間に及ぶ。

今日も晝飯を終るが早いか、向島へ驅附けの敗けず劣らず、懸命に櫂を操つて居たが、第四番の早川は矢庭に後方の第二番を回顧いて、

『オイ牛島！　君のやうに左う早く漕いでは前方に居るもんが耐らん。先刻から見てるのに些とも速度が揃やア爲ないぢやないか、練習の時でさへ、左う急ぐやうぢやア、愈〻競漕の日が想ひ遣られる！　急いては事を爲損ずるぢや、些と氣を注けて漕いで貰ひたいのだッ。』

窘めると、牛島は却々默つて居ない。

『何、僕の漕ぎ方が早いといふのか。能く目を開けて見るが可い！　僕の漕ぎ方が早いんぢやアない、君の方が遲いんだ。先刻から僕が見てると、君の櫂は些とも整調と揃つて居らんぢやアないか。他の漕ぎ方を云爲いふより前に、宜しく先づ自分の漕ぎ方に關いて研究的態度を取るべしぢや。アハヽヽヽ。』

大口開いて、舟も覆へらんばかりに笑ふ。躍起となつた早川は、赤く染めた顏を紅にして、

『生意氣な事をいふな！　君のが一つ揃はんばかりに舟の進行が惡いんだッ。諸君！　何方の見解が其の當を得てるのか、一番此所で公判廷を開いてくれ給へ！』

兩人の櫂は何時しか停つて、折しも退潮に逆つて漕いで居た端艇は、倏ち其の速力を弱めて、咄嗟其の舳を言問の岸に向けんとした。兩手に綱を操つて居た舵手は、其の膨切れんばかりに肥えて居る頰に微笑を浮べつゝ、此の時蹶然と立上つて、

『早川君も牛嶋君も今ッから左う喧嘩を爲るやうしぢやア困る！　僕が事新らしげに說明するまでもなく、競漕は他の一騎打の勝負とは違つて、七人が七人氣を揃へて、それこそ舉舟一致で遣らんけりやア、到底勝てるもんぢやアない　だから、恁うやつて同じ科の諸君から選擧されて、是非共今年は優勝旗を醫科から取戻さんければならぬ重大の責任を双肩に……イヤ十四肩に負うて居るんで、何所までも協力同心して遣らんけりやア、法科が勇名を擧げる事は出來やせんぢやないかッ。』

凜乎とした艇長の言語は河水に響くかと疑はれた程で、口角に泡を飛ばして論爭つて居た兩人も、思はず口を噤むで等しく灰色に染つて居る空を仰いで居るので、舟は益〻其の方向を廻轉しさうになつて、他の漕手は尠からず呆氣に取られたのか、口々に、

『オイ〳〵喧嘩を止めるのも可いが、一所に漕ぐ方をも止めては舟が傾いで困るぢやアないか。』

笑ふもの、罵るもの、憤るものもあつたが、舵手は裁判長の資格で、片頰に微笑を浮べながら、

『左う傍聴席に居る人々までが騒ぎ立つては、法廷の神聖を保つ爲に職權を以て退場を命じなければならぬ……が、水の上では退場させる譯にも行かぬから、何所までも靜肅にして居て貰つて、改めて茲に判決を下すが、原被兩造とも重罪公判に移して可らしと思ふ。原告の早川濟が被告の牛嶋捨雄に對して不服があるのなら、先づ當裁判所に告訴すべきであるのに、其の手續を蹈まずと直ちに捨雄を論難する、否、罵詈するのは決して其の當を得て居るものではない。また被告の捨雄も原告の濟が不服に對して、慰諭する事は爲ずと罵詈に代ゆるに罵詈を以てするのは、斷じて紳士の資格に於て缺くる所があるだらうと思ふ。』

　此の時ヒヤ〳〵と叫ぶものがあるかと思ふと、ノウと打消すものも出て來て、申し合せたやうに櫂の手が止つて了つたので、舵手は一聲高く、

『アハヽヽヽ、左う皆なが揃つて漕ぐのを止めて了つては、裁判長は辭職爲るより他に爲方がないが、這麼事を言つてゝ貴重な時間を徒費するのは、餘りに下らん事たから、早く漕いでくれ給へ！　僕も其の積で精一杯巧く舵を操るから。』

『左うだ！　大分潮が滿して來かやうだから、此の滿潮に對つて強漕を試みやうぢやあないか。』

　一人が發議する言語に、待構へて居た面々は、何條異存を唱ふべき。

『此の機會を取外して了つては大變だ！　早川對牛嶋の下らん訴訟で潮の爲に艇を流されて了つたから、是れから大いに漕ぐと爲やうぢやアないか。』

　口々に叫びながら、六名の漕手は關節立つた腕に力を籠めて漕ぎ出したので、疾風の木の葉を捲くが如くに、艇が波を蹴立てゝ進む心地好さ！　舵手の峰尾も思はず釣込まれて、衣袋から取出して手帕を打振り〳〵、一二ッの掛聲も勇ましい。

　暫しが程は夢中になつて漕いで居たが、今まで大川の中流に在つた端艇は、何時の間にか言問の岸近くへ其の進路を向けて來た。

方向の變つたのも知らずと、襯衣を汗に濕しながら

漕いで居た六名は、全身の力を櫂の端に移して、舵の變つたのにも氣が注かなかつた。

　岸近く艇を寄せた峰尾は、何事を思ひ起したのか、驀直に艇の舳を隅田堤に向けたので、六名は等しく驚愕の目を睜つて、

「峰尾！　ど、ど、何所へ艇を行る積なんだ、是れぢやア堤へ衝突つて了ふぢやアないかッ。」

訝り問ふ友人等の言語を耳にも掛けず、峰尾の目は怪しく光つて來て、

「僕は鳥渡上陸して……大變な事を忘れて來たから……。」

「何、大變な事を忘れて來たからつて、一體甚麽事を忘れて來たんだ？」

　一同が目を圓くして尋ねる間に答を與へやうも爲ぬ峰尾は、それこそ足下から鳥の起つ程に急き込んで、

「諸君失敬だが鳥渡僕を上陸させてくれ給へ！」

言ふ内に艇は竹屋の渡しの上流に着いた。着いたかと思ふと、飄乎と立ち上つた峰尾は、足下に脱ぎ捨てて置いた外套を取るより早く、殆ど友人等を跨がぬばかりにして、飛鳥の如く、岸へ駈上つた。

　艇に取殘された六名は、等しく呆氣に取れて少時は出すべき言語さへなかつたが、

「一體峰尾は甚麽したんだ　？　彼の狼狽て方といふものは……。」

と一人が訝かるのを、一人が打消して、

「何か……何所かへ忘れ物でも爲て來て、それを思ひ出したんだらうよ。」

「それにしては、餘り騷ぎ方が甚かつたやうだが……。」

　他の一人は幾度か領いて、

「左うだ、全く左うだ。只忘れ物を思ひ出したに爲ちやア、少しく樣子が變だつたね。」

甲論じ乙評するのを早川は制して、

「左う斯う爲て居る内には直に歸つて來るだらうから其の間僕達は丁ど幸ひ些と骨休みを爲やうぢやアないか。」

言ひ終らぬ内に拍手するものさへあつて、
『ヒヤ〳〵、些と休むと爲やう。先刻から漕ぎ通しなんで、大分草臥れて來たから、此の間に充分英氣を養ふと爲やう！』
手帕で額の汗を拭ふものもあつて、旋てお定りの教授の品評に論戰の花を咲かすものさへあつた。
十分經つても峰尾の姿は再び岸に現はれず、二十分……三十分經つても、其の影さへ見えぬので、一同不審の眉根を寄せて、
『峰尾は一體甚麼したんだらう？　最う歸つて來なければならんが……。』
『舵手たる重大の責任を帶びて居ながら、僕達を艇へ置いてきぼりにするのは不埒千萬ぢやアないか。』
果ては不平を洩らす友人も出來て來た中には、
『一番僕が上陸して探して連れて來やう。』
と言つたものもあつたが、
『探してる内に峰尾が行違ひに歸つて來ると不可ない又君を探しに行くやうになると、益〻貴重な時間を徒費爲るやうになるから。』
と止めるものもあつて、舟中の六名は首を長くして待つて居たが、一時間を過ぎた後までも、肥大な峰尾の體軀は、遂に此の端艇の中に見られなかつた。
自己の責任を重んずるので、同科生から多大の信用と敬愛とを博して居た峰尾亭は、果して何事を忘れて來たのであらう？　否、六名の親友を殘して、果して何所へ行つたのであらう？
堤上の櫻花も蕾尚固く、何事をも語るまいと爲て居る。
風が強くなつたので、大川の波も暴くなつて來た！

中

『やッ、どうもお待たせ爲て濟まんでした、生憎來客があつたので……。』
徐かに傍への襖を啓けて立ち現はれた五十前後の、見るから温厚の紳士らしい主人は、既に備へてあつた褥を引寄せながら、

『私も失禮して布團を敷くぢやて、君も……。そして洋服で危坐つて居ては耐らん、遠慮せずと安坐を組いてくれ給へ。』

溢るゝばかりの愛敬を挨拶に代へて、桐の丸火鉢を中に相對して其の席に就くのを見て、今まで一番下の金釦を氣に爲て、頻りに弄つて居た學生は輕く頷いた頭を少しく擡げ、

『僕は法科大學生の峰尾亨と申すものですが、どうぞ以來お心易く願ひます。』

再び辭儀すると、主人も丁寧な禮を返して、

『はゝ、法科をお學りですか、法科なら私も萬更縁の無い事もない、同じ畑といつても可いので、どうぞ私こそ以來お心易く願ひたいので。さ、左う遠く火鉢を離れておいでゝはお寒からう、もつと傍へ進み給へ。』

飽くまで愛想好く火箸を執つて火態を直しながら、

『さ、遠慮せずに當つてくれ給へ。』

と火鉢を少しく前に突出して、

『而して一體甚麽御用があつておいでなすつたのか？先刻取次の書生の口上に、何か私に折入つて頼みたい事があると被仰つたさうぢやが、先づ其の御用から伺ふと爲やうぢやアないか。』

主人が白髪混りの疎髯を撫しつゝ嬰兒も懐くべき目に凝乎と視られて、豪放自ら喜ぶ學生も思はず口籠りの、窮屈さうに坐つた膝頭に兩手を置いたが、旋て舵と心を取直したらしく、

『實は……紹介もなく突然參邸して甚だ失敬でしたが折入つて貴君に願ひたい事がございまして……。』

淺黒い學生の面には紅を潮して來て、延びて居る顋の髪の端は少しく顫つて居るかのやうにも見えた。

『甚麽なお話しだか知らんが、私の力の及ぶ事なら御承諾しても可いので、さ、早く話して見てくれ給へ。』

急かれる程學生の口は訥して、言語は容易に出て來なかつたが、少時して、

『ぢや、御遠慮なく殘らず申上げて了ひますが、只今向島の方からお歸りになつた令孃は、貴君のお娘子でいらつしやいますか？』

學生が意外の間に、主人も少しく驚いたらしく、

『向島の方から……左うぢや梅若に居る親戚へ無沙汰晴しに行つて今し方戻つて來たのは、私の娘ぢやが、それが甚麼か爲たとでもおいひのか？』

狼狽てゝ主人の言語を打消すべく、學生は思はず知らず少しく膝を進めた。

『否、甚麼なすつたと申す譯ではございませんが、彼の御婦人が貴君の令孃なら、何所へか嫁にお遣しになる事が出來るのですか？ 其れとも最早何所か御約束の口でもあるのですか？』

常日頃能辯を以て同科生中に鳴る峰尾も、口殆ど吃して言ふ能はざるばかり、話の筋も取次に亂れて來る主人は哄笑一番して、

『アハヽヽヽ、何事かと思ふたら孃の事をお尋ねにおいでたのか。私は彼の下に一人の伜を有つて居るし、妹もある事だし、何所か適當の口があるなら、嫁に遣したいと思うて居た所だ。』

卒業試驗に滿點を得たらむが如くにも喜び勇んだ峰尾は、

『左うですか、では何所へでも……適當の所へお遣しになるのですか？』

益々膝の進むを覺えなかつた。

主人は片頰に微笑を浮べて、

『で、何所か適當の口を貴君がお世話下さらうと思うて、態々おいで下すつたのか？』

凝乎と凝視められて、亨は其の面をまた深く垂れて了つて、少時く二の句を繼ぐ勇氣も失せたが、

『恥をお話しせんければならんですが、實は去年の音樂學校の秋季演奏會で令孃へお目に掛つて……初めて御面會した貴君の前で這麼事を申上げてはお笑ひになるかも知れませんが、僕も一度は終生を倶にする妻を貰はんければならんので、我が妻とする婦人は、令孃の外にはないと深くも思ひ込んだのでしたが、其の時は何所の……何人の令孃かも素より知りやうもなかつたですが、今日向島へ端艇の練習に參つて、艇の上から圖らずも令孃の姿を認めたので、艇も……友人も其

の儘打棄ての、此所まで二里餘りの道程を、見え隠れに附いて來ますと、令孃が此所へお入りになつたので先づ其のお住宅だけは突き止めたので、何れ後から其れ〳〵傳手を求めて令孃へ結婚を申込まうと思はないではなかつたですが、僕の性質として那麽まどろッこしい事は出來んので、推して貴君に御面會を求めたのですが、若し僕のやうなものでも令孃の夫――貴君の婿として御不足がないとお思ひになつたならば、どうぞ僕の申込に承諾を與へては下さいませんか？　實に亂暴といはふか、輕卒といはふか、失敬の段は謝するに言語もないですが、僕がのめ〳〵と鐵面皮にも、是れまで見ず知らずの貴君に對して、這麽事を申上る勇氣と熱心とを買つて戴きたいのです。男兒須らく意氣を愛すで、若し僕に於て取る所があるならば、否か應か貴君の御意見を聞かせて下さい！」

　其の始めや處女の如かりし學生の態度も、何時しか心の底に燃ゆる戀の焔に燬き盡されたのか、今や脫兎のそれよりも疾き勢ひで濤し蒐けられて、主人の吉見直衞が好奇に驅られて居た念ひも、漸く學生の熱誠に動かされて來た。

「ハッ、それで貴君が態々來訪されたのぢやな……。」

　學生は幾度か無意識に領いて、

「左うです、若し他に御約束がないのなら、强ひても令孃を申受けたいので、僕も此の七月には學士の稱號を得ますし、兩親には十二歲の時に別れて了ひ、他に兄弟もなし、只一人の叔父のお蔭で、今年大學を卒業するまでになつたのですから、若し貴君が僕の申込を承諾して下すつたならば、直ぐにも手紙を出して僕の恩人をも喜ばせてやりたいのです。叔父は鄕里に相當の資產を有して居ますし、亡父に受けた恩誼を報ゆる爲に、是非僕を一人前の人間に爲なければならぬといつて居るので、僕が卒業の曉に金錢を以て其の恩に報ゆる義務はないのですから、夫婦二人の口ぐらゐは如何にしても過して行かれるだらうと信じて居りますから、其の點は御安心を願ひたいのです。卒業後活社會に立つて如何に飛躍するかに關いては、僕も既に聊か

成算があるのですから、其の邊はまた重ねて貴君の御賛同を得る時機もあるでせう！』

學生が飾りなき言語の中には、燃ゆるばかりの熱心が輝いて居るのを、最前から耳に聞き目に見た主人は尠らず感激して、

『貴君の被仰る事は能く解つたぢや。貴君が其れ程までに不束な私の娘と終生を倶に爲やうとする熱心は、私も此上なく難有く思ふので、私に於ては毛頭異存はない、何一つ他に勝れた取柄のない娘でも、貴君が女房に爲て下さるといふのなら、喜んで娘を献じたいのであるが、結婚ばかりは親の一了簡にも行かぬので、一應娘にも篤と貴君の意志を通じて、改めて私の方から御返事を申す事に爲やうから、どうぞ其れまで待つて下さい。』

『左うですか……。』と勢ひ能く頷いた學生は、『實に貴君の被仰る通り、結婚は一生の大事で、是ればかりは親の壓制すべき事では、斷じて無いのですから、御本人の意志を確める必要もあるのです。が、貴君は貴君の令嬢を僕の妻に下さるに關いては、御異存はないのですな？』

主人は又もや疎髯を捻りつゝ快げに微笑して、

『私は貴君の氣象に惚込んだで、私は異存のない事は承知して置いて貰ひたい。』

『其れを伺つて僕は非常の愉快を感じたのです。では貴君から令嬢の御意見をお尋ね下すつて、諾否の御返事を下さい。』

『二三日の中には必ず御返事を爲やうから、其れまで待つて下さい！　斯ふいふ事は今日是れから直ぐといふ譯にも行かぬから……。』

『御道理です、では貴君からの吉左右をお待ち申して居ります。』と丁寧に辭儀を爲た學生は、『では是れで御暇を致します、どうも是れは初めて推參して飛んだ御邪魔を致しました。』

辭し去らんとする學生の樣子に、主人は暫しと押し止め、

『まあいゝぢやアないか、も少し話して行つては何う

ぢやな。』

『否、左うぐづ〳〵しては居られません、是れから下宿へ歸つて、今日置いてけぼりに爲た友人達にも、謝罪しなければなりませんから……。』

早や立上るのを見て、

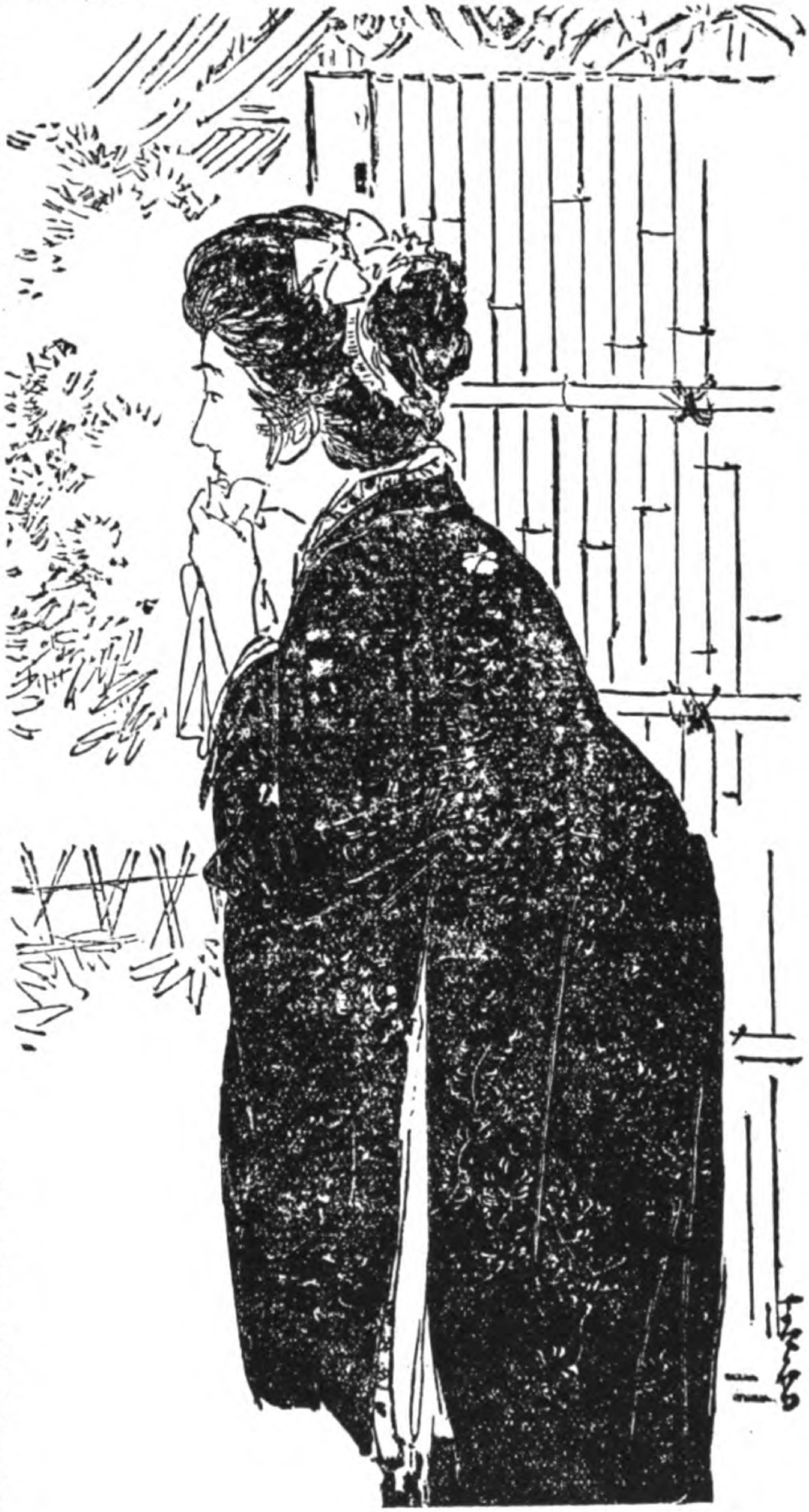
『アハヽヽヽ、其れも左うぢや、では今日は是でお別れ爲やう。』

立上つた主人は學生を玄關に送り出さうとして、

『峰尾君肝腎の事を忘れて居つたが、貴君のお住居は何所ぢやな？』

回顧つた學生も亦微笑を禁じ得ず、

『僕も全然忘れて居ましたが、僕の下宿は本郷追分町



の青雲館です。』

『は、青雲館といふに下宿して居られるのだな。』

『左うです。』

玄關に向はんと襖を啓けた時、走るが如くに次の間に逃げ出した何人かの後影を認めたが、旋て主人に別れを告げて、門を出やうとした學生は、何者にか後髪を引かれるやうな思ひがして回顧くと、勝手を仕切つた建仁寺垣の傍に佇んだ婦人と礑と面を見合した。吾妻コートを脫いだ令嬢の姿は、殊に美しく學生の眼に映じたのであらう。否、嫣然一笑して輕く頭を下げ、我が好意に感謝するが如くにも見えたのであらう。



下

麹町の吉見邸を辭してから越えて三日の朝、親展と脇附した一封の書翰を直衞から受取つた峰尾は、手紙取る手も顫へて居たが、疾く〳〵其の文を讀んで見ると、本人に於ても異存なく、何れ御卒業の後合卺の禮を擧げたいが、其れまでには未だ時日もあるから、詳しき事は御面談の上御協議したく只此上は不束な娘で甚だ御不滿足ではあらうが、末長く面倒を見て貰ひたいとの意を細々と記して、前學年

にも倍して拔群の好成績を今年の卒業試驗に得られん事を祈ると止めてあつたが、先方では逸早く我が學業の成績まで調査したのも解つて、亨の心の底から沸き起る嬉しさは！　遙に想像の圏外に逸したので、實に輝くばかりの希望を以て、層一層學事に精勵したのである。

見るもの聞くもの、皆悉く我に好意を表するが如くに思はれた亨は、四月第一日曜に開かれた大學の競漕會に、法科を代表する選手競漕に舵手となつて、是れ亦首尾好く優勝旗を捧ぐる光榮を擔ひ、友人から胴上げにされたが、許嫁の吉見俊子が來觀者中に混つて居て、法科の端艇が決勝點間際で、是れまで後になり前になつて居た醫科の其れを全艇身以上拔いた時に、自己を忘れて烈しく手帕を振つて居たのを、友人の一人が認めたといふので、其の爲め更に最う一回胴上げにされて、澁面作つたのも可笑かつた。

一旦愆くと約束を番へた上は、結婚の期を急ぐべきではない。第一此の名ばかり由々しげに聞えて、其の實むさ苦しさ限りなき下宿へ、愛すべき妻を迎へるのは殘酷であるから、卒業後社會に相當の地位を占め得て、一軒の家の主人となつてから、結婚其の他の協議を開始するのも未だ遲きに非ずと信じて、直衞から再三迎ひの書翰を受けたが、亨は卒業試驗の準備に寸閑なしと斷つて、再び吉見方の閾を跨がなかつたので、俊子は素より其の兩親までが、峰尾の竹を割つたやうな淡泊りした氣象に、全然惚れ込んで了つた。

試驗も滯りなく終を告げ、今は只卒業式に列する日を待つて居る七月の或る朝、例の如く新聞紙を手にした亨は、其の雜報の一項を讀んで、殆ど我と我が目を疑ふまでに驚き呆れて、幾度か其の短い記事を讀み直して、旋て其の新紙を疊に投げ附けたのである。果して何事を記してあつたであらうか？

曰く、控訴院判事吉見直衞氏の令孃俊子は今回良緣ありて〇學博士〇〇〇〇氏と結婚の約成り、來る十一日の佳辰を卜して、帝國ホテルに盛大なる華燭の典を擧げらるゝ由。

〇〇〇博士は先年其の糟糠の妻を亡つたが、今年十五歳を首らに二人の令孃と一人の令息とを有つて居らるゝので、豈敢に後妻を迎へられやうとは、世人の多くも思はなかつたであらう。否、否、其の年齡を以て比べても、殆ど親子としても適當な俊子を娶られやう

とは思はなかつたであらう。其れにしても彼程固く約束して置いたのを反古にして、否、一應の挨拶もなく他へ縁附ける吉見直衛の不埒さは言語道斷！　後ともいはず是れから直ぐに其の邸へ押掛けて行つて嚴談に及ばうかとまでに、峰尾亭は人知れず悲憤の腕を扼したのであるが、恁くまでに性根の腐つた人畜類共とは最早席を同うして語るだに汚はし、假し其の違約を面責して直衛が半白の頭を下げしめた所で、我が初戀に受けた重傷を癒やす事も出來ず、寧ろ男子の本領を發揮して渠等を愧死せしめるに加かずと思ひ返した亭は俊子が今回の婚儀に關いて、滿幅の祝意を表した一書を、吉見判事に郵送した。

知名の博士が令夫人として仰がれるのと、無名の學士に妻として册くのとは、滔々たる此の俗社會に於ける、表面にのみ現はれた幸不幸は素より比較にならぬが、僅か二三箇月で恁までに豹變する美人の心根の賴まれぬのには、有繫の峰尾亭も一驚を喫したのである。

婦人の美貌は何時まで保たれるであらう？　殊に妻としての美貌は、果して何時まで保たれるであらう？美人を妻として學友に誇らんとした過失を熟々自覺した峰尾は、法學士の稱號を得ると程なく、某女學校の敎諭たる知人を尋ねて、今年卒業した學生中で、最も體格の完備した一婦人を探し出し、其れ〳〵內偵の上帝都から程遠からぬ地方の農家の娘なのを知り得て、結婚を申込み旋て双方合意の上、秋風漸く肌に寒き頃野上千代子は其の姓を峰尾と改める事となつて、亭は其の妻の實家へ樂しい新婚旅行を試むる事となつた。

＊　＊　＊　＊　＊

博士の二字に眩みて其の誠意誠心を捧げて自分を戀ひ慕つた峰尾を袖に爲た俊子は、一面世にも無類と囃さるゝに機嫌の取り憎い姑に苦しめられ、一面其の當座こそ二なきものゝ如くに愛された夫に、僅か半年經つか經たぬ內に、既に隱し妻ある事を知つて不覺の泪に嗚咽むだ果が、嫁入つてから三年になる夏の夕、急病で夫に死別れ、三人の異腹の子と我が娘とを殘され、齢若き身も其の夫の名の餘りに廣く世に知られて居る爲め再縁もならず、侘しき月日を泪に明し暮して居る。

神は如何なる所にも其の目を開き給ふ。博士の未亡人も僕の妻となつて居たならば、恁くまでの不幸に苦しめられは爲なかつたらうに？　とは、峰尾法學士が醉餘に目を屢叩きつゝ反復す有神論である。（完）

葉ざくら

米光關月

一

村の人家を出外れると、小さな山の神の祠があつて其處からは晝も猶薄暗い程な、植附木の杉の森が長く續き、凡そ三町許りもあらうかと思はれるだら／＼坂を下ると、忽ち谷川の音はゆるやかに響いて、この岩山の狹間には珍らしい、廣々とした川原へ出る。

小谷から出る流れも此處に合して、村では三叉河原と呼んで居るのであるが、氣も伸々とするやうな快活な眺め、胸突くやうな岩山の、屏風を立てたやうな中に生活して居る山家の人も、有繋にこの景色には何時も胸を打れて、山仕事の還りには必ず其處で、煙草一服の腰休めをするのが定りとなつて居る。

時も恰度五月の末、里ではもう所によつて單衣物になる時候であるが、この山里では漸く山の樹どもが蒼味を持つた所で、崖の櫻がつい四五日前散つた位な仕末、何所ともなく奥の森の方から響いて來る杣の斧の音が、長閑に谷の寂寞を破ると、一聲けたゝましく何鳥かの啼いて、飛んで、其跡は又一段と閑に、唯さらさらと流れの小石に鳴る音許り。うらゝかな日影は萬物を眠りに誘ひ顔、空では白象のやうな雲が悠然と雪の殘つて居る峯を離れて、動くともなく動いて居る。

河原に架けられた橋、それは四五本丸太を並べて、藤蔓で確とゆわへた丸木橋を、馴れたものとて重い荷を脊負ひ乍ら、今しも漸く渡り切つた一人の女、ホツと息を吐いて、丸木橋の側へ脊の荷を卸すと、頭に冠つた手拭を脱つて、額の汗を拭いたが、不思空を見上げて、動くともなく動いて行く雲の形を、物珍らし氣に見た。

年齡は二十四五か、目鼻立の揃つた、山家の勞働者には不似合な色白、油氣こそ拔けたれ、勝れて濃い髮の毛を、ぐる／＼卷にして一本の簪で留め、身には筒袖の縞物、裾短かな袷を着て居る。

「ア、暖くなつた。」
と獨言を云ひ乍ら、腰を下して、足許を流れる谷川の水に手拭を濕して靜に首筋手足を拭ひ、心地可さゝうな面持で、崖に散り殘つた櫻に目を遣つたが、其晴れやかであつた面は僅かの間で、次第〱に曇りを帶びて來ると、何時しか面は俯向いて、深い〱溜息さへ洩らすやうになつた。
「考へて見りやア、つまらないわ。」
不思溜息と共に出た獨言の、聊か聲高であつたに驚いて、フト面を上げて四邊を見廻したが、だら〱坂の登り口、杉の森の方へ目鞘の走ると、何物を見附けたのか見る〱面の色は變つて、今迄曇を帶びて居たのが俄に以前の晴やかな、面地にかはつた。
「アラ、あんな所に立つて……。」
莞爾笑を含み乍ら猶も其方を見て居ると、軈て杉の森の出口を離れ、同じ流れの分れに懸けられた、丸木の橋を渡つて、河原の砂の上を靜に歩み乍ら、近寄つて來た一人の男。

「やア、お絹さんか。」
女を見ると忽ち聲を掛けて、これも莞爾兩頰に笑を見せた。
年齡は三十許、顏は蒼味を帶び、長い頭髮は波を打つて些し癖のある方、鼻下に一寸生へかゝりの髭を見せた鹽梅、羽織兵古帶と云ふ扮裝の、一見山家の者とは思れぬ風俗。
女は丁寧に頭を下げて、
「先生、今日も此所等を御歩きで厶いましたか。」
果然、渠は先生と呼れる人物。この山里の小さな小學校の分敎場を受持つて、敎鞭を採つて居る男である。
「イヤ、いよ〱發足事になるとなんだか山の景色に引張られるやうな心地で、今日もこの河原へぶら〱來たです。」
「まあ、そんなに這麼山の中が御氣に入つたので厶いますかね。」
「ハヽヽヽ、山の神樣に見込れたのかも知れませんよ。」

高く笑ひ乍ら、遙かに見える峰の頂を振り仰いだ。白象のやうな雲は、此時もう何所へか消えて終つて空は増々長閑に蒼く、杣の斧の音が又聞え出した。

二

今から二年許り前の事であつた、山は皆裸體になつて終つて、木枯續く毎日毎夜、此先は雪の唯一ト降りで、この山中の一小村落は、全く靜かな眠りに就くの外は無い、其頃其折、飄然里村からこの山中へ這入つて來た一人の旅畫師があつた。

それが圖らずも永の病氣に掛つて、年が明けてもこの村を出る事が出來ず、全快後も猶依然村を去らずに頻りと山林を跋渉して居たのであるが、追々村人に馴れるにつれて、其温和しやかな性質も釋つて來た所から、或夜村寄合の席上、あの人をと誰れ云ひ出したか分教場の敎員に雇ひ入れる議が起つて、忽ち一同の賛成の下に、二十名内外の兒童を預る身となつたのが、即ちこれ姓を奈良原、雅號を雄山と呼んで、村人の目にもなんとなく其の繪は上手らしく見られ、且つ温和しい性質が、至極兒童等の氣に入つて、村一同恰好の先生を得たと喜んで居た。

すると二年經つての今日此頃になつて、突然渠はこの馴味の地を捨て、都會の街に所謂成功の人とならうと奮發したので、其事を言出した際には、兒童よりも先づ村一同が驚いて、是非今一年許りをと頻りに留めて見たのであるが、堅く決心した所のあると見えて、なんと爲ても應ずる狀は無く、四五日中にはいよ〳〵山の中を去ると云ふので、今は唯老も若きも、一同惜しい〳〵を口に爲乍ら、せめては其行を盛んにして送らうと、それ許りに氣を寄せて居るのである。

奈良原は靜に側の石へ腰を下し眞面目にお絹の顏を見乍ら、

『時に何うですな、お絹さんは先日話した、東京行の話は定りましたかね。』

熟と俯向勝になつて居たお絹は、一寸目を上げて、直ぐと又俯向き乍ら、

「イエ、未だ兄さんがなんとも申ませんので、何うも定め兼て居るのでムいます。」

「ハア、然うですか。成程一寸には決しないでせうな、併し私も彼方に行けば、必ず貴方の身の振方は附けて上げる積りですから、都合さへ可くば上京しなさい。」

「何うか然うなりましたら、是非宜しく御願ひ申ます。」

「何、貴方の上に就いては私も非常に同情して居ますから、必ずなんとか御心配致しませう。それに都會は又都會の風が吹く、思つたよりも可い運に出會すものですよ。」

お絹は淋し氣に笑つて、

「何うでムいますか……、私のやうな不幸なものは、矢張り山の中の方が可いかも知れません。」

斯う云ひ乍ら又靜に上げた顏は、なんとも云へぬ憂ひの雲に閉されて居た。

「イヤ、然う物は投げたものではない、氣さへ大丈夫なら必ず何か出來るです。」

奈良原は快活に云つて、一寸相手の面を見たが、これも其憂ひに引附けられたやう、不思眉を顰めたのである。

お絹は村一番の美人であつた。恐らく里村にも類の無いと云ふ程の評判で、それこそ村自慢の一ツ。

されどこの花は遂に散るべき時節が來たのであつたそれはこの山里を流るゝ川下の、八里許り離れた小都會で、某と云ふ資産家に、器量好みを以つて懇望され村人は其の自慢の花を他に移し乍らも、猶其幸福を自慢にして、誰一人蔭口を利く者さへ無つた仕末、お絹は始めて山の中の光を、里村迄も輝かしたのである。

噫！　かくてこの光りは、永遠其輝きを持續したのであらうか、天は何時もかゝる幸福に、物好きな一ッの試驗問題を出すのが癖で、お絹も同じく最も困難な試驗問題を解釋する身分とはなつた。

それは嫁すると間も無く一子を儲け、所謂目出度づくの、夢を見るやうな最中、突然夫の宅の破産に續い

て、これも亦夢を見るやうな其の夫の病死と云ふ不仕合せ。

お絹はアット驚いて倒れる處を、引起されて裕餘も無く「どうする、早く云へ！」とわめかれたやうなもので、かゝる場合なんの分別が浮ぶ、恥も外聞も考へて居る暇は無い、何う歸つたとも知らぬ間に孤兒を懐き乍ら、この山中の兄の家へ歸つたのである。

然うなると偖て小さな村中の評判は、其全盛であつた當時よりも又盛んになつて、随分聞くに絶えざる蔭口さへ傳る。お絹は玆處に始めて醉つたやうな中から覺めた世間と云ふものを見る眼が出來たのである。

でも幸に時の暴風雨は、全く其容顔の美を吹散らさ無つた爲め、忽ち二三の懇望者が出來たのであるが、最初の航海に殘酷極る難波船の狀を見たお絹には、二度の航海は決して容易な事では無つたので、一も二も無く斷然拒絶したのであつた。

而してそれを喜んだのは、唯一人の貪着な兄であつて、

「お絹も何うやら、山の中の人間になれさうで厶います。」

逢ふ人毎に笑を含んで然う云つて居た。

併しそれはお絹にとつて、甚だ面白からぬ誤解で、渠はこの村中の蔭口を耳にする度、以前よりも猶一種僻見の交つた野心が胸の中に燃えて居たので、折がなあれば廣い都會の風に吹れて、一度は目覺めるやうな華やかな狀を、この山間の村人に見せて遣り度いと云ふ念願なので、其處へ幸い學校の先生の上京は、恰も頼る手蔓の待受けたものが出來たやう、お絹は其話を耳にすると人知れぬ波を胸に打たし乍ら、恥も外聞も忘れて、身の振方を奈良原へ窃に相談したのであつた。

知らぬ人には恐らく戀かとも見えたであらう。

三

山家作りの伽藍とした大家、蜻蛉口を這入つた圍爐裡邊斗りでも、疊數凡十二三枚は敷れやうと云ふ掛



り、柱、板の間、障子などの、燃木の烟に煤氣てこそ居るが、昔はさぞと思れる住居。村でも東の宅と云へば誰一人呼捨にせぬ家柄、お絹はこの零落した大伽藍の宅に、一人兒を抱き乍ら、兄の卯助と生活して居る爐邊に置れた小さな洋燈を中央に、左と右の差向ひお絹は縫さしの袷の針の手を止めて、兄の箸割り仕事の手附を見るとも無く見て居ると、軈て大割小割が濟んで、木屑を圍爐裡にパット投げ込み、不思お絹と顏を見合した。

「何うした。何を考へてる。」

莞爾笑つた其顏は、如何にも罪の無さゝうな、年齢三十四五の丈夫作り、赭ら面で、眼附に兄妹爭はれぬ似た處のある、先づ山家相應の分別はあるらしい容子。

「又恐にもつかぬ事を考へてるぢやないか。」

パット又投込んだ木屑に、ドット燃え立つ圍爐裡の明り、お絹は眉を顰めて、顏を反向け乍ら、

「イヽエ、然うぢやありません。」

「然うで無けりやア可いが、當事も無い馬鹿な考へ許りして、體軀を痛めるのが一番つまらないだ。」

「考へ事は爲ませんけれど、なんだか折々淋しくなつて……、兄さん、何うしたものでせう。」

「それが猶且つまら無い考へと云ふものだ。」

兄は手刻みの辛さうな煙草を吹し始めて、お絹の憂に包れた顏を心から氣の毒さうに見入る狀であつたが、

「お前なんだな、未だ都會の風に吹れて見度い氣があるのだな。」

「ハイ……、何、然うでもムいませんけれど、なんだか此儘他に左や右云れて、這麽處で朽ちるのも殘念です。」

「フム、大方其處等だらうと思つて居た。」

と、卯助は待設けて居たやうに、

「不可んなア、未だ那樣了簡持つて居るのかよ、尠し考へて見な、女の盛りはどれ程のものだと思つて居る何時迄もそんな事を當にして末は甚麽になつて終ふ了簡だ。廢しな、廢しな、ふつゝりともう忘れて終ひな

お前のは何時迄も其惡い夢を、負惜みでもつて取還さうと許り掛つて居るのだ。』

『イヱ、兄さん、然う思つては困ります、私は何も、昔の縣りが仕度いと云ふので、それを考へてるのではありません、唯、這麼狹い村の中で、何時迄も〳〵蔭口を利れるのが、悔しう厶います。』

『それはもう可く知つて居るよ。知つて居るがな、其處が考へものだ、成程この村は這麼狹い處で、隨分と他の口は煩い、私もそれで、お前のさぞ時折りは悔しくなつて、當も無しに飛出し度なる事もあるだらうとは思つて居るがな、何もこれ考へ直して見れば、他の口に一々蓋をするに及ば無い理、殊にお前のは、別段惡い失策をして還つたと云ふのでも無いのだ、云はゞお前なんぢやアないか、時の運……、然うさ、時の運で出戻りになつたのだから、當り前から云やアちッとも恥る處は無い道理だが。實の處、この俺も世間の蔭口を利いて全くの處、泣いた事さへあるだ。』

折からしと〳〵と降り出した春の雨、この山間の一小村落は、殆んど眞夜中の樣に寂然となつたが、遙か隔つた森の彼方の一軒家で、靜かに臼挽く音の聽える。

卯助はそつと面を上げて妹を見ると、もう其眼には充分露を帶びて、怪しくキラ〳〵と光つて居る。

其以前……、四年許り前の事である。思ひ掛け無い緣談を里村から申込れて、村全體に羨しがられた、これが妹のお絹であるかと思へば、今更のやう口では這麼事を云つて居るやうなもの丶、誘れ氣味に悲しくなる。

理屈は理屈、情は情、兄の身で意見はするやうなもの丶、當人は中々容易ならぬ胸の中。噫、紅を潮して居た頰の肉も落ちた、美しかつた綠の髮もそゝけ次第肩も細つた、手足も荒れた。壁に映る姿の心無しか震へて居るやうで、影もなんとなく薄い樣だ。

人間何事によらず最初の運命を捉む時が大事と聞いたが、別けて女……、其女の運命を極樂へ導くのも地獄へ導くのも、皆結婚一つ 怪しい運命、お絹も分を守つて、山家相應の處へ嫁して居たなら、これ程村人

の冷笑を買ふ事も無つたであらう。ア、其美しい糸に引張り寄せられたのは、皆妹の不心得ではあつたが、これも山家に珍らしい美しさと云ふ一點が起因になつて居るのだ。それを思ふと、さら〳〵渠には罪の無い理。不憫にもある、情無くもなる。

さてこの土地に自分が手綱を控へた處で徒爾か知らむ。都會の風に吹れて來たいと云ふのも尤だが危險、しかし考へて見りやア不憫にもなる、この事許りであはれや渠の胸は一日だつて靜かな事は無いのだ。

有繋に兄の分別も、妹のやつれた狀には、親身の情の曇りとなつて、不思眼を上げ其顏を見ると、兩人は又云合した樣に、目と目を見合はしたのである。

『お絹……。』と、兄の突然呼ぶ聲に、

『ハイ……。』と云つたが、お絹は兄に見詰められて、何か又理屈がましい事でも云れるかと、聊か躊躇の體で、段々兄の視線から逃るやうにする、其顏を卯助は又追ふやうにして、

『お前、都會に出るも可いだらうが、何か當でもあるのかへ。』

此間は卯助の日頃に似合はずと、お絹は意外に思つたのである。

『なんと有仰いますね。』と、お絹は我と我耳を疑つた。

『イヤ、お前の都會行きに、私が贊成したとなりやア何を當にして出て行く心算か、私はそれをお前に聞くのだ。』

『ア、其事ですか、其事ならばね、私にも又心算があるの。』

『フム、何うしやうと云ふ心算かへ。』

『仕合せな事にね、兄さん、學校の先生が連れて行つてやらうと仰有るの。』

『ア、奈良原さんが……。』と云つたが、これも意外に打れた樣子で、

『お前何時の間に、先生へお賴み申たのだ。』

『それはね、未だ兄さんにも話も爲ませんし、お許しになるものだか、無いものだか、其處の邊も猶更ら譯りませんなんだか、私はもう一圖に思立つて居たもので

すからね、ヅッと以前……、一月許も前から、御頼み申て居たんです。」

「ア、、那様にお前、内々で心算立てを爲て居たのかへ。」

「兄さん、怒つてぢやアありますまいね。」

お絹は思ふ儘を、始めて兄に打明けたのであるが、聊か恐れも抱いて居るのだ。

「何、怒りやア爲無い、先様は奈良原の先生だ、俺にした處があの人へ頼む許りだ。」

「それぢやア、兄さん、私の都會行きを聞いて下さるんですか。」

「何、未だ然う云ふのでは無いが、それにしてもお前が手筈を運んで居たかと思へば、私も頑固は云へんての……。」

溜息と共に、首を俛倒れたが、

「光坊の仕末に困るての。」

「それは兄さん、里子へやる考です。」

「里子……、フム、それも世間にある習ひで、里子にやるのも可いだらうが、考へて見りやアそれも不憫ぢやてのう。」

此時迄冴えた調子であつたお絹も、良心の責めと、恩愛とに、聲も顫へて來た。

「私もあの兒の事許り、氣になつて仕様が無いのですが、それと云つて、何時迄も山の中を出ずに居ては、出る機會が無くなつて終ひます。それを思ふと、不憫は何時になつても全じですから、思ひ切つて今別れた方が双方の爲めだらうかと思つて居ます。」

「フム、無理の無い話だ。」

「それに今ならば可うムいますが、も些し先になつて御覽んなさい、物心は附くし、人顔は可く見分けます……、里子にやるにしても困るですよ。」

「イヤ、それは大きに違ひ無い。」

「ですから、あれに別れるのも、ちやんと覺悟は爲て居るのですから、兄さんさへ聞いて下さるなら、今がこの土地を離れるに可い時節かと思ひますの。」

「然うさ、其處だてな。」

「其上、願つなり、叶つたりの、學校の先生は、あんな御人物で、私の爲めに、道連れになつてやらうし、出てからの身仕末も着けてやらうと仰有るのだし、這麼人に今離れて終へば、もう二度とこの村へ、あんな方は參られは爲ませんよ。」

「イヤ、それは全くだての、あんな深切な人は、もう茲處等へ二度とは來無いて、」

「それ御覧んなさい、兄さんだつて、然う思つて御居でゝしやう。そんなら頑固な事はもう云無いで、私の了簡一つに、世の中を渡らして下さいませんか。今日此頃つく〴〵この村の可厭になつた事、私は兄さん、口へこそ出しませんが、もう〳〵悔しくて〳〵、陰口を聞いて泣か無い日はありませんよ。」

お絹は話す中にも悔しさを思ひ出して、ひたと顔を袖で蔽ふのであつた。

『困るなア……。』と、卯助は其いじらしさと、自分の決し兼ねたる心の迷ひとに、殆んど當惑の腕組をする許り。

「困るなア……。」と、又大きく云つて、ホツト溜息。淋しい〳〵大伽藍に、兄妹二人はかくして夜を徒らに更すのであつた。

雨はしと〳〵と、小歇み無く降るのであるが、遙かの一軒家では臼挽く音も止んだ。油も盡きたか、圍爐邊の燈は心細氣に顫へて居るのだ。

四

お絹の思ひ詰めて居た一つの念願は、或夜兄の心を動して、七八分迄は達せられるやうになつた。

兄も有繁に肉身の妹が、毎日〳〵鬱ぎ行くのを目前に見ては、然う〳〵自分一人の考へで、都會の風に吹れる事を留めて許りも居られず、次第〳〵に其强固であつた渠の持說も、何時しか「何うかならう」の弱い說になつて終つて、或日遂に妹の山を出る事を許すやうになつた。

「兄さん、本統に私の願ひを肯いて下さるの。」

お絹は夢かと許り喜んだのである。

「仕方が無い、病氣でも出たら取還しがつかん。まあま、今度丈けはもう一度、お前の了簡通りにさして見やう……。』

と、卯助も澁々乍ら、斯う口を切つた。

而してお絹は、其事あると共に、直ぐと學校に奈良原を訪ねて、委細殘らず打開けて話すと、渠も心から喜んでくれて、

「それは可い、非常に好都合ですな、宜しい、出てから先の貴方の身の振方については、私 充分盡力します。』

お絹はこの快諾にいよ〳〵勇みをなして、くれ〴〵も宜しく頼み置いて、さて急ぎ學校の門を出たが、恰度其時は日暮前、學校の側にあるこの村唯一の清水井戸で、多勢女子供の水仕事をして居る處であつたが、何時もかゝる場合、かゝる處を通るのは、お絹にとつて一種の苦痛であつたのだが、其日は如何にも高い處から、此等の人を瞰下すやうな氣がして、

『今日は……。』と、挨拶をして通る聲も、自然と調子が冴えて居た。

而して、なんとも云れぬ頬笑みが、肚の底から湧き上るやうで、折からの夕日影に、さつと紅を潮し乍ら、些し眩しさうに片手を額にかざし、廣い〳〵胸になつて、我家の長屋門迄還つたのである。

すると俄に、今迄ゆつたりとして、廣々となつて居た胸が、なんだか急に押へられる樣な心地がして、なんとなく胸騷ぎがし出したので、

「オヤ……。』と、お絹は怪しみ乍ら、山家の事とて、春の日の永いとは云へ、屛風のやうな險しい山のある土地、日は何時の間にか其山の端に入つて、蜻蛉口の腰障子を開けて宅へ這入ると、もうすつかり薄暗くなつて終つて、突然這入つて來たものには全然夜の樣だ。

「お絹か……、待つて居た。』

と云ふのは兄の聲であるが、心なしかなんとなく調子が變つて居るやう、

「ハイ……、漸く今還りましたよ。』と、勝手の方から上つて爐邊に行くと、兄の卯助は光坊を半纏に包んでしかとそれを懐に入れて抱へて居るのだ。

「オヤ、坊が何うかしましたか。」
「お前、まあ一寸茲處へ觸つて見な。」
と卯助はお絹の手を持添へ乍ら、光坊の額へ其手を措くのであつた。
丶丶どきりと胸にこたへ乍ら、お絹は光坊の額に手をやつて見ると、全然火の樣に燃えてゐるのである。
「まあ、兄さん、何うしたのでせう。」
「酷い熱だ。」と、兄も當惑らしい樣子で、同時に幼兒は、悲鳴を上げて泣き出した。
　お絹は早やおろ〳〵爲乍ら、
「先刻迄甚麽もありませんでしたにね。まあ酷い熱、これぢやアさぞ不在の間に泣いたでせうね。」
「全然お前、火の附く樣な泣き方さ、それに驚いて守の手から取ると、イヤ驚くまい事かこの熱だ。なんでも昨夜咳が出たやうだつたが、あの時風を引いたと見えるよ。」
「それにしても、今朝はなんとも無かつたのでしたがね。」
「イヤ、仕方が無い、猶且魔風に出逢つたものと見える。」
「まあ、あれ丈け毎日八釜しく云つて置きますものをね。本統に子守と云ふものは仕方がありません。」
　お絹は兄の手から光坊を取つて、ヂツト懷に抱へると、泣く聲丈けは漸くにして靜つたが、我身に觸れて、容易ならぬ熱氣がある事を悟つた。
「生憎なものですね。」と、不思悲し氣な聲を出したが、嚙み殺すやうにして二の句は云はず、深い〳〵溜息を洩らすのである。
「それは然うと、お前學校の先生へ話して來たのか。」
卯助の斯う訊ねると、お絹は力無氣な聲で、
「先生はもう何時でも可いから、私の都合さへよければ明日にもと仰有るので　。」
「フム、それは可い鹽梅だつたな。」
「私も然う話が定まつたものですから、四五日中にこの子の仕末をつけて、御一同に參る考へです。」
「然うさな……。」と、兄は不相變生ぬるい返辭。

「併し、坊が這麼大熱になりましてはね。」と、お絹は重々しい調子で、漸く口に出すと、

「其事だ、其事だ。」と、兄は獨りで首肯く、

「でも大した事はありますまい。小兒の事ですから思つたよりも早く癒るでせう。」

障子の外は、未だ暮れ切らぬのであるが、家内は全くの夜になつて、淋しい燈が爐邊に點けられる樣になつた頃、病兒は今迄泣いた疲れの、一時に出たものと見えて、其儘すや〳〵と眠りに入つた。

兄妹は靜に、病兒の爲め踏む足も恐る〳〵、勝手の方で晩飯の仕度に取掛つたが、箸を取る間も待たせず、懷の兒は烈しく熱に浮されて泣き出した。

二人は顏を見合して眉を顰めた。

夜に入つては、聊か靜になるであらうと思つた病兒の、案外にも、更けるに從つて、其泣聲は段々と烈しくなる許り、お絹は懷に抱へた儘で、夜の明ける迄いかいまんちんとも爲得無つた。

其翌日も、其翌晩も、幼兒は更らに熱の減じる狀は無く、其泣聲は次第に衰へて、見る目に瘦せが、すつかり顯れて來たのである。

お絹は我身の處置と、我兒の處置に殆んど當惑したのであつた。

「兄さん、なんと云ふ因果な事でしよう、見る前に私の運の開けさうな出發を控へ乍ら、生憎な光坊の大煩ひ、よく〳〵私は、不仕合せに生れたのでムいますね。」と、妹の愚痴を聞いては兄も亦有繫に不憫にもなつて、

「然うさな、折角の時に困つたものだ。何うだよ、これを機會に、いつそ山の中で生活す氣にはならないか。」と留められて、癇の昂つて居るお絹は、日頃とは打つて變つた烈しい調子になり、

「なんの事です、今になつて、私は可厭です。坊の病氣が癒りさへすりやア、明日が日だつて出て行きます。」

斯う云放つて、兄に二の句は續がせない。

併し一寸と思つた幼兒の病氣は、四日五日と永引いて、十日餘りも看病に手を盡したが、熱は少しも減じ無つた。

有繫學校の奈良原先生は、情を察して、其出發を見

合して居たが、茲所に至つては萬止むを得んので、一先づ先へ發足すると云ふ事をお絹に傳へた。お絹はこれを聞くと、もう自分の運命は定つたものゝ樣に、いたく失望したのであつたが、目の前の大難に、詮方無く先生との同道は見合せる事にした。

其返辭を爲たお絹は、其夜默つた儘、兄とさへ一言も口を利無つた。物憂氣に病兒を抱へ乍ら、壁に向つて何思ふとしも無く、しく／＼と泣いて居る狀を細い燈影が壁に映つて、如何にもあはれに見えたのである、兄の卯助は、其いじらしい狀を見兼ねて、早くから寢床に這入つた。

春の夜はかくて音も無く更け行くのであるが、お絹は依然座つた儘、病兒を抱へて、獨り憂ひに沈んで居ると、不圖病兒の泣き出したので、それを綾す爲め、細い、顫へ聲で、子守唄を悲し氣に謠ひ出したが、それでもむづかるので、頭巾を冠せ、風を防いで、立上つて搖り乍ら、不思椽端近く歩みを運んだ。

而してなんの氣無しに障子を開くと、月が今恰度向山へ登つた所で、柔かな、朧の光りを、椽端一面に投げかけて、何時の間に出たか、山から山へ亙る一ト吹風の、ゴーッと鳴る音が川の瀨を遠くで聞くやう。お絹は其月光を全身に浴びて、憫れな聲で猶も子守唄を續けて居る中、

『坊のお父さんが居ると可いのだけれどね。』

と、不思口を突いて出た獨り言に、我と我聲を疑つたが、はら／＼と頰を傳うて流れる淚。

『這麼不仕合せなら、いつそ山の中で朽ちて終はうか知ら……。』

又獨り言を云ひ乍ら、淚聲で子守唄を續けて居たのである。

月は次第／＼に山の端を離れて、屋の棟の影は何時しか狹くなつた。お絹は内へ這入る事を忘れて、依然椽端に佇んで居た。

其翌日、村一同は、盛んに奈良原を送つて出たのである。お絹も其一行を、病兒を抱へ乍ら見送つたが、何時の樣ではなく、格別殘念さうな顏も爲無つた。

かくて一ト月經ち、二タ月經ち、病兒は全快しての後も、依然この鄕からお絹は出無つたが、見違へる許り其容顏は衰へた。

唯其いたく違つて來た狀を、小首を捻り乍ら始終心配して居るのは、兄の卯助で。崖の櫻も全くの靑葉となつたのである。

（完）

[redacted]

花朝後の四月の中旬、凶風一陣落花に先ちて、巡りに學界に重望ある士の散り失せたる事、返す〲も惋惜痛嘆の極みにぞある、其人を誰とかなす、田口卯吉、島尾得庵、小幡篤次郎、多田親愛の四氏即ち是れ、記者は是等碩學の遺徳を偲ぶの餘り、其の小傳を紹介すべし。

▲田口博士

名は鉉字は子玉鼎軒通稱は卯吉徳川氏の世臣にして徒士に班す三代の祖慣左衛門は儒官佐藤一齋の子にして　君は其孫なり安政二年四月廿九日を以て江戸に生る五歳にして　父を喪ひ家道艱難にして教養訓育一に母氏の手に頼れり　慶應二年幕府九番組の徒士となる明治元年徳川氏大政を奉還するに際し君の一家横濱に移りて商戸に編す　徳川氏靜岡に封ぜらるゝに及び君歸藩し沼津に移り小學に入り後　兵學校試驗に及第す君の志軍醫とならんとするにあり既にして　大藏省翻譯局に學びて此に英語及び經濟學研究の機會を得たり　卒業して大藏省紙幣寮に出仕す然れども　君の宿志は仕官に在らずして獨立の市民たるに在る故を以て明治十一年官を辭す此間日本經濟論を著して　自由貿易の說を唱ふ是れ實に君の處女作也十二年經濟雜誌社を創立し東京經濟雜誌を刊行し　君其社長として主筆を兼ね自由貿易論の中堅となれり　雜誌刊行の傍ら經濟學協會を起して　學理と實地を研究するの機關とし明治十二年以來運轉して今日に至る君又嚶鳴社に入りて自由立憲主義を鼓吹し　自由新聞に執筆して專ら經濟政治の論文を擔任せり　又た實業の方面には兩毛鐵道會社を創立し推されて其社長となり　南島商會を起して遠く南島貿易の先驅となれり　公務の方面には府會區會等の各議員　と　なり又本鄉教育會長となり、其他重要の役員に擧げらる二十七年東京市より選ばれて衆議院議員となり爾後每回當選し　三十二年法學博士の學位を授與せらる三十三年團匪の亂後北淸を視察し露兵の暴狀を觀て　憤慨し歸りて之を同志に報告し同志連署の文を草して　之を列國人に訴へ三十七年六月再び滿洲占領地を視察す　又た學界に於ける君を見るに其經濟雜誌を刊行すると　二十七年其間日本經濟論を初めとして著作頗る多く君の監督によりて雜誌社友の編纂に係る　者に日本人名辭書日本社會事彙あり政治類典等あり國史大系續國史大系群書類從あり　明治三十八年四月十三日午後十一　慢性腎臟炎中耳炎併發の爲めに卒す享年五十有一、頭腦は今の所謂る學者先生の遠く企て及ばざる所にして、博士をして若し學問に專ならしめば、其造詣實し測るべからざるものありしならん。　博士の史眼は又世の知る所、然も博士は未だ之を大成するに至らず遽然白玉樓中の人となるあゝ哀しい哉葬儀は　四月十七日本鄉春木町中央會堂にて行はれ、　會する者八百餘名、　頗る壯嚴なりしと。

▲小幡翁

元の慶應義塾長小幡篤次郎氏は、　溫厚篤實近世稀に見るの君子なり、氏久しく病牀に在り去月十六日夜終に溘焉たり　氏は舊中津藩士小幡篤藏の男、天保十三年六月八日を以て生る、　十六歲にして藩學進修館教導となり尋で館務を掌り又劍道の奧儀を相傳せり、元治元年(二十三歲)笈を江戸に負ひ同鄉の先進たる福澤諭吉に從ひ　專ら英書を學び慶應二年其の塾長を囑せらる、此の年幕府の開成校英學助教に任ず明治元年之を辭し三年更に慶應義塾塾長を辭せり、十二年學士會院會員の選に當り翌年交詢社幹事たり十四年又學士會院會員を辭し　二十三年に至り再び慶應義塾長囑託を受く、義塾の今日ある氏實に其の功力の一半を分たるべ

きなり、同年貴族院議員に任ず、後又貨幣制度調査委員たりき、著す所英氏經濟論、博物新編補遺、宗教元論、其の他尚多し、氏の友人は何れも風雲に乗じ朝野に羽翼を伸したるも、氏は獨り毅然として四十年來未だ曾て三田の門を出でず、而かも其位地たるや超然として高きに居り常に無爲沈默淸貧自ら安んじたる 清節は是實に現代の巨人と仰がるゝ所以なり配安井氏、名はみつ子、二男四女あり、長男高次郎氏家を承く、 氏享年六十四澁谷祥雲寺に葬る。

▲鳥尾子爵

樞密顧問官陸軍中將正二位勳一等子爵鳥尾小彌太郎氏は 病を得て久しく熱海の別莊に療養中なりしが病勢革まり 遂に四月十三日薨去したり惜ましいかな。子爵は弘化四年を以つて生る、 明治四年少將に補せられ、曾來樞要の職務に轉任し、 廿一年樞密顧問官に補せられしが、 其の樞府に在りて、常に保守の議論を唱へ一方に重きを爲し居たるは人の知る所なり今其の逸事を紹介せんに 壯年の際は放縱不羈好んで人と議論を闘はせしが曾て時勢に慨する所ありて 少壯の士を會して共に謀る所あらんとせしに 其事非常に過激なりしかば誰一人として應ずる者はなかりしより子爵は大に怒り自から巨魁となりて 高輪なる毛利公邸に赴き君公に面謁して直々陳述したしとの旨を以て執次を請へり、當時毛利公邸の重役は今の杉孫七郎子なりしが杉子は事を左右に托して 取次の事を承知せざるより、然らば此場にて切腹する故見届け吳れとて杉子の袂を捉ひ離せし事ありしと 又た十年西南戰爭の際子爵は行在所の留守居役として軍事の樞密に參與し京阪の間に往復せり 中島信行男事を以て大阪に會し 互に時事を闘はすこと數時なりしが男より西南の戰爭も非常に長引くが如し今日の形勢を以て見れば 何れの時か定まらん貴意如何と問ひしに子爵はさらば余は上げ鉢卷になり 敵陣に飛び込み只打入るあるのみと 大笑せしことありしと子爵は實に多能多藝の人にして一たび思ひ込みしことは何によらず 專心一意に勉むるの癖あり例へば佛學の如きは殊に造詣深し、一種の禪學を始め印度哲學より考へ、別に統一主義を主張せり、又た一種の奇癖あり幾たびとなく 轉居し丼に書畫骨董などの如きも妙種類のものを蒐集せり 今の關口の邸第も自ら俗塵を離れし特別の構造なるが 總べて子爵の意匠と圖案に成り或時釋迦の供養をせんとて 同好者を案内し所藏の奇畫を陳列し縱覽せしめ自ら說明詳釋の任に當りし如き亦其の仙骨の人たりしを見るべし 其の嗜好は書畫、刀劍、骨董、詩、歌、俳句、揮毫、茶の湯、庭園に涉り頗る多方面なるも、決して順序的に之を辨したることなく、季節に因つて其の一を專攻せり、又子は茶の湯を好むも痛く今日流行する杓子定規的の茶式を排斥し「一ッの茶碗にたてた濃茶を五人の客で飲み廻すが如きは昔は兎も角今日にては不都合千萬なり、衞生上の危險は姑く之を措くも第一キメナシ」とて此の春自ら菊溪流（菊溪とは子が京都東山高臺寺境内の別莊に流るゝ水）の改良茶道箇條書を草し、左の一首を吟ぜられしと、

よしあしも是も非も釜にうち入て
煮たゝらして茶にたゝてのめ

葬儀は四月十八日築地本願寺別院に於て執行、享年六十四。

▲多田親愛翁

假名書の大家として有名なりし 多田親愛翁は昨年來中風症に罹りて治療中の處、藥石効なく去月十八日遂に逝去せり。翁は天保十一年江戸芝に生れ維新前迄は芝神明宮に祠官たりしが 明治三年徵されて神祇官となり同四年大學出仕仰せ付られ 翌年文部省少錄に任じ七年博物館屬

に轉じ二十七年に及び、同年退職後專心臨池の技に心力を注げり、翁元尊圓親王の書風を慕ひ後世尊寺大納言成卿の筆意を承け夙に斯道の衰頽を慨き上代樣の振興を計りて寤寐忘れざりしが、其名終に　畏き邊の御聞に達し明治二十年　皇后陛下の恩召とありて　和歌を色紙二十四枚に謹寫すべき內命を蒙り　同年再び安倍仲麿の詠歌謹寫の內命を賜はれり、後又古歌五十首を謹書し上り、客年九月には堀江物語二卷を淨寫し上りし事ありて假名書に於ては古今獨步と稱へられ、本誌の讀者の如き又た翁の筆蹟に親炙して其の誘導を蒙ること少からざりしに　天此の翁に年を藉さず、遂に不歸の客となり玉ふ、誠に悲しき極にこそ。

新刊紹介

▲割烹新書（上卷）　井上善兵衛 嘉悅孝子 合著　隆文館發行

本書は著者が多年學校に於ける實地敎授の經驗に基き廣く一般の女子と家庭とに、智識を與へんが爲めに著作したるものゝ由にて、行文は平易明瞭を第一とし、材料も日常生活に緊切なる平俗の物のみを撰びあり章を分つて總論、食品及器具、庖丁法及食品使用法、家庭料理（春、夏、秋、冬）の四とし、頗る組織的に編成され、在來の杜撰のものとは全く趣を異にして新機軸を出しあれば、割烹新書の名に背かずと云ふべし。（定價金八十錢）

▲日本漫遊案內（下卷）　坪谷水哉著　博文館發行

由來山水明媚の勝に富むは我國の特色として世界に誇る所なるも、未だ完全なる案內書なく、爲めに不便少からざりしが、先きに坪谷水哉子日本漫遊案內（東半部）を出し、今又た其の（西半部）を著してより、此の欠點は遺憾なく補はれ、東西南北唯だ心の儘に杖を曳き得るに至りしは喜ぶべし、本卷は帝國の西半部なる近畿、中國、四國、九州、臺灣、琉球の各地に於ける漫遊の順路と勝區、舊蹟、山川を案內し、口碑、交通機關、旅館、物產、車馬賃に至るまで細大漏らさず網羅しあり、加ふるに細密なる地圖、寫眞等を挿入しあれば、旅行者には恰好の先達たるを失はず。（定價金壹圓）

▲彈片　博文館發行

空々閑人鹽田東弌君、海軍主計中監を以て軍艦日進に乘組み、砲煙彈雨の間に筆を執つて觀戰中の見聞蓄想を叙ぶ、題して彈片といふ、記する處ろ元より戎軒征塵の事を專らとせるも、軍事に關する小說あり、軍艦內の生活を描ける多趣味なる記事あり就中從僕物語の如きは優に專門家の壘を摩するものありて戰爭文學の白眉といふべし。小波氏の序文にこの作者の人物を紹介して其の文學に素養の深き人なりしを知る。（定價金三十錢）

▲日本魂雄　同文館發行

これは軍國の少年讀本なり　日本魂雄といへる一少年成長して軍人となり、征露の役に從ひ、諸所の激戰に遭遇して歸り其の見聞せし處ろを平素の友人に語り聞かしむるものこれ、この一篇の趣向なり。文章平易にして趣味深く。少年が其の見聞を有の儘に且つ形容をかしく說きて眉目飛動の態見るがごとし、著者は高等師範學校の敎授樋口勘次郎氏なり。（定價金四十錢）

▲はがき新誌　東京便利堂發行

繪葉書が日露の戰爭に伴うて流行界に復活し、戰勝に伴うて一大流行を極めたるは頗る刮目すべき現象といふべし。蓋し一片の繪端書と雖ども是を以て現社會の趨勢を知る好材料となすを得べし。畵家の意匠、社會の趣味名人の好尙、擧げてこの一片の繪葉書中に縮寫されたるものあらざらんや、本鄉婁戀町の便利堂は商機に敏なるものなり。よく社會人心の意向を察しその要求に投じて其の意匠を出すや極めて奇警敏捷なり、今回同店にて發行せる、繪端書「日出國」「フランス土產」の如き前者は高尙優美にして後者は奇拔變化多し、共に坊間流行の卑猥、婬靡の物とは大に其撰を異にせり。又同店の機關はがき新誌は回一回より面目を改め口繪優美記事精妙加ふるに紙質撰頁、專問の美術雜誌をして顏色なからしむ、編者は岩田烏山氏なり。

第五卷第八號記事豫告

六月五日發行

每月五日發行

定價表	
一冊（紙數二百八頁）……金二十錢	
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
內（定刊數……十二冊 増刊四回…一、四、七、十月價格同一）	
郵稅	一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等			割引四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文畧規

(一)本舘發行の圖書は都て前金の外送本せず
(二)御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
(三)郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
(四)總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅八年五月五日發行　第五卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

發兌元＝時局必讀書類＝博文館

法學士 須崎芳三郎君著

現代露西亞

全壹冊洋裝大判
正價四拾錢郵稅八錢
特製本正價五拾五錢郵稅拾錢

緒論
一章 表面の露國
（一）自然的露國
（二）政治的露國
二章 露國の人種
三章 露國の宗敎
四章 社會の組織
五章 政治
六章 革命の氣運
七章 革命黨
八章 中央政界
九章 國際に於ける露國
十章 侵略の國是
十一章 露國の外交
十二章 露國の財政
十三章 露國の陸軍
十四章 露國の海軍
十五章 結論

法學士 須崎芳三郎君著

露國侵略史

全壹冊洋裝大判
正價四拾錢郵稅八錢
特製本正價五拾五錢郵稅拾錢

緒言
第一章 露西亞小史
第二章 西比利亞の掠取
第三章 黑龍地方の横奪
第四章 中央亞細亞の掠取
第五章 波斯の侵略
第六章 土耳其の侵略
巴爾幹問題
第七章 西比利亞鐵道
第八章 滿洲問題
第九章 結論

東京
博文館
發兌

高田早苗博士閱
山本利喜雄君著

露西亞史

全壹冊總クロース大判上製
正價壹圓廿五錢 郵稅拾四錢

本書はラムボード氏の名著を基とし編成したるもの章を分つ事三十五露國建國以來今日に至る盛衰消長其人情風俗宗敎文藝に至る迄博說詳叙漏す所なし今や國を舉げて奮闘しつゝあるの際敵國の事情を講究するは志士最急の要務と謂べし

佛國ボーリュー原君著
日本林毅陸君譯

露西亞帝國

全壹冊背皮上製大判
正價貳圓 小包料拾五錢

本書は露國の政治、社會、宗敎の各正面より其組織及眞相を縦横に解釋評論したるもの原書は觀察鋭利に過ぐるの故を以て露國に於ては禁書として發賣を抑止せられしもの也と云ふ其厖大なる邦土壓制なる政體を以て永く世界の難解國として目せられたる露國も本書に依り明透徹視されたる宛も暗夜に光明を認むるが如し

（後付の一）

發兌元──時局必

文學博士 坪井九馬三君校閲
文學士堀竹雄君文學士竹村昌次君共著

露國の實相

全一冊洋布上製正價七拾錢郵稅拾錢

戰爭に要する第一義は能く己が力量を知ると同時に併せて敵の實狀眞相を審にし一に應急手段を誤らざるにあり世上今や、暗黑面の露國を示すもの多しと雖ども、未だ露國の進步發達せる眞相を語るもの稀なり蓋し露國が今日に至るまで能く覇を歐土列强に成せし所以は必らずや豪壯雄大の素ある事恰かも秦王が六國に對せし概無くんばあらず、躬行會諸氏玆に見る所あり、堀竹村兩文學士に托して攻究數月以て本書を大成せしめ、坪井博士に囑して更に嚴密なる校訂を加へしめらる其價値ある以て知るべきなり苟も濟世愛國の士は必らず一本を座右に備へ以て大資料とする所あれ。

進化學上より觀察したる

日露の運命

文學博士 加藤弘之君著

全一冊洋裝大判正價拾貳錢郵稅四錢

優勝劣敗適者生存不適者死滅とは進化學の定理にして、啻に動植物界のみならず、天地間の森羅萬象皆此天則に由りて支配せられざるなし、今此理法に依り、今日の文明時代にありて、適者たる日本が益々隆盛に進み、不適者たる露國が次第に衰亡に傾かざるを得ざる所以を說けるものなり。

伯爵大隈重信君講述
武井宗十郎君筆記

大隈伯時局談

▲正價參拾錢 郵稅八錢

大隈伯時局に對して滿腔の熱血を吐き帝國戰後の大經營と對露對淸對韓の政策に於て縱論横說餘す所なく以て天下の輿論を斷す言々剴切句々烈實、讀者をして思はず拍案快躍せしむ看よ刻下國民の必讀すべきもの本書にあらずして抑も何ぞ

十五銀行頭取
園田孝吉君著

赤心一片

▲正價四拾錢 郵稅八錢

日露戰爭は帝國空前の國難にして國家存亡の繫る所なり此秋に方り國民たる者貴賤貧福を論ぜず堅忍奮勵大に軍資の供給を圖り出征將士の忠勇義烈と相俟ち以て國家最終の目的を達するを務めざるべからず本書軍資の供給其他政治經濟社交風俗に關し言々愛國の赤誠より成り句々奉公の熱情より出づ世人一本を机上に備へ徐に繙讀玩味せば其得るや大也

佛國アド、ビゾール君原著
故酒井雄三郎君著

近世 歐洲外交史

全二冊背皮上製美本紙數千六百頁
正價參圓五拾錢 小包料貳拾錢

本書は最近八十年間に於ける歐洲外交界の沿革を叙述し、列國の親和、抗爭聚合、離散する所以の形勢事情を明にせる者也幾多歐洲外交界の英物が龍驤虎搏の壯技を演ずるの狀歷々として覩るべし。

法學士 原田豐次郎君著

最近外交史

洋裝大判 正價四拾錢 郵稅八錢
特製本 正價五拾五錢 郵稅拾錢

●維納列國會議 ●神聖同盟 ●反動時代 ●希臘の獨立 ●クリミヤ戰爭 ●伊太利亞統一 ●普佛戰爭 ●普墺戰爭 ●露土戰爭 ●伯林列國會議

●三國同盟 ●露佛同盟 ●中央亞細亞問題 ●西米戰爭の合衆國 ●獨立殖民政策 ●歐洲國際の新局面 ●日淸戰爭 ●日淸戰役後の韓國問題 ●同上淸國問題 ●最近絕東問題

（後付の二）

讀書類——博文館

法學博士寺尾亨君校閲
法學士永井亨君著

言文一致 戰時國際法

洋裝大判正價金六拾錢郵稅拾錢

言文一致體を以て時局問題を深遠なる國際上の法理に照し懇到の解説を下したるもの也、宣戰公布と敵對行爲の關係、滿洲、遼西の國際法上の性質、敵國船の捕獲、其他日露關係事件に明解を與へたり

法學博士有賀長雄君著

戰時國際法

(上卷)總論及陸戰之部　正價壹圓四拾錢　郵稅拾四錢
(下卷)海戰及中立之部　正價壹圓六拾錢　小包送拾五錢

著者は十數年來陸軍大學校及海軍大學校に於て戰時國際法を敎授し、二十七八年の戰役には第一軍司令部の顧問として戰時公法の實地を躬踐する所多く後又海牙の平和會議に參列して陸戰の法規慣例に關する規則の議定に與り、且屢赤十字萬國總會に出席して列國々際法學者と議論を上下す蓋し斯學に關しては我國隨一のオーソリチーなり著者が此書を著すや近世の著書は悉く之を參照し又日清戰後は勿論日露開戰以後に於て發生したる新事實をも加へたれば本邦戰時の公法に關する著述にして此書の右に出づるものはあらざるべく、眞に戰時の寶典たり。

文學士大町桂月君著

軍國訓

▲正價貳拾八錢郵稅四錢

一隻の烱眼時勢の表裏を洞察し日露戰爭の由來を明かにするのみならず日本の國是を說き特長を說き其說く所警拔にして痛切行るに縱横雄活の筆を以てす苟くも國家の憂を解して今後日本國の爲めに盡さむとするの士は必ず一讀せざるべからざる好著也

劍舞獨習圖解

適心齋井口義爲君著

▲正價貳拾五錢郵稅六錢

著者武術柔道に精通し劍舞又蘊奥を極め時局に感ずる所ありて此書を著はす其說明頗る懇篤にして劍舞の手を附するに畫工を其席に侍せしめ親しく其姿勢を實寫せしむ故に圖解と活動圖とを對照せば讀者は立所に了解し自在に斯術を演ずることを得べし況や征露の今日國民必讀必習の書なること言を待たざるなり

日比野正吉君著

劍舞術敎範

▲正價拾八錢郵稅四錢

法學士森山守次君著

政治史

洋裝大判正價四拾錢　郵稅八錢
特製本正價五拾五錢　郵稅十錢

- 維也納會議
- 神聖同盟
- 希臘獨立
- 英國憲法の改正
- 佛國七月の改正
- 七月革命の影響
- 佛國二月革命
- クリミヤ戰爭
- 伊太利統一
- シユレスウ井ッヒホルスタイン事件
- 西班牙問題
- 波蘭問題
- 墨西哥事件
- 普墺戰爭
- 普佛戰爭
- 露土戰爭
- 十九世紀末後に於ける諸國の動靜

法學博士有賀長雄君著

近時外交史

全一冊上製　正價壹圓五拾錢　小包送十五錢

斯學專攻の有賀博士が多年研鑽の餘に成りしもの、筆を維納公會に起して希土戰爭に至りて結ぶ列國の交涉最も頻繁なる時代を網羅す材料豐富叙事精確文章亦雄麗なり

發兌元——時局必

滿洲委任統治論

早稻田大學講師 法學博士 有賀長雄君陣中著述

洋裝金文字入美本紙數 百六十頁
正價金五十錢 郵稅 四錢

今や皇軍連勝已に奉天を占領し露軍をして復た立つ能はざらしめんとす此時に當て滿洲の處分を盡すゝ敢て早計たらざるべし抑滿洲の處分は東亞の大事にして亦世界の問題なり日露交戰の餘力を以てこれを解決するにあらざれば何れの日か解決するの機あらん著者は征露軍國際法顧問の要職に在り其實驗と學識とは化して本書となり滿洲の主權、外交軍政司法民政經濟、東清鐵道の處分其他實際に起るべき重要の問題は、學理と先例とに依據してこれを斷じ國民今後ゝ覺悟に一大敎訓を與へたるものなり。

朝鮮開化史

東亞同文會幹事 恒屋盛服君著

大判總クロース金文字入美本
正價金壹圓 郵稅 拾四錢

著者恒屋君夙に朝鮮の經綸に志あり、往年遂に入て朝鮮の內閣輔佐官に任ぜられ、記錄編纂に關する事を掌り、職を去るの後、尙半島の風物を商量し、歷史に沈潛すること年あり、以て此書を著す、全卷を地理、人種、文化、外交の四編に大別し更に幾多の細目を繫け、敍述明晰、觀察精透、方今半島の眞相を知らんと欲する者此書を措て他に求むべからざるなり。

實用露和會話

露國神學士西海枝靜君著

袖珍總クロース美本
正價五拾錢郵稅四錢

日露戰役は空前の快事にして又絕後の大戰たり、此時に當り露語研究の必要なるは今更喋々を要せず、著者は夙に彼地に在つて露語に精通するの人、先づ單語、いろは順、會話對話、軍事會話、書翰文例、動詞變化法等の部門に別ち、實に露語を修むる者に取りて無二の寶典たるのみならず、軍人商業家に必要なる兵話、商業取引文等を網羅せり

滿韓土語案內

陸軍大尉平山治久君著

袖珍總クロース 美本
正價貳拾五錢郵稅貳錢

滿韓の土語は我外征軍隊に於て一日も缺くべからざる必要語なりとす、此書對總は滿洲土語彼總は朝鮮土語の會話を收蒐し、主として我軍隊附地に於ける作戰行動の便に資せんが爲、特に軍事的著眼を以て編纂し、殊に極めて解し易きを旨とせり、携帶に便なる爲め縱四寸橫三寸の堅牢美麗なる袖珍本となしたれば軍人諸君は常に携帶せらるべきは勿論、將來我ゝ領地に於て起業殖產の計ある志士必らず一本を備へ玉はんとを

寫眞畫報臨時增刊

- 遼陽大決戰
- 遼陽占領紀念寫眞帖
- 征露第一軍寫眞帖
- 征露第二軍寫眞帖
- 旅順降伏紀念帖
- 旅順現狀寫眞帖
- 陸海敵軍寫眞帖

毎冊戰況寫眞銅版及石版密書
約五十頁記事六十四頁
一冊正價貳拾錢 郵稅貳錢

本館の日露戰爭實記及日露戰爭寫眞畫報が其寫眞及記事の頗る精選豐富にして而も售價の極めて低廉なる點に於て世間幾多疑似の書を超脫し其每卷の發賣部數が實に我邦雜誌界空前の巨額に達せる事は夙に江湖の知悉する所なり、而して我館特派の從軍記者及寫眞班は日夜砲烟彈雨の下に立ち其親睹目擊したる所を撮影し隨時寄贈したるもの及び大本營の御認版に係るものを請へる等紀念とすべき貴重なる資料は積んで山の如く其粹を拔き英を選むも尙到底每月定期刊行する所の戰爭實記三册寫眞畫報一冊に收載する能はず加ふるに皇軍の大飛躍大戰鬪ある每に特に其眞況を序列して戰捷の紀念となしたるもの前記の寫眞帖是なり軍國民たるもの豈一本を備へずして可ならんや。

萬國戰史

- 澁江保君著 希臘波斯戰史
- 澁江保君著 ヒューニック戰史
- 松井柏軒君著 英佛聯合征清戰史
- 澁江保君著 フレデリック大王七年戰史
- 澁江保君著 印度蠶食戰史
- 澁江保君著 波蘭衰亡戰史
- 越山平三郎君著 ナイル海戰史
- 松井柏軒君著 伊太利獨立戰史
- 澁江保君著 普墺戰史
- 柳井録太郎君著 希臘獨立戰史

每冊洋裝中判紙數三百餘頁

實價一冊金拾錢郵稅六錢宛

陸軍少將福島安正君著
支那語教科書 **四聲聯珠**
正價貳圓五拾錢
小包送料五錢

本書は章首に同時異聲一音殊聲のものを標出し、以て音聲の起原變化を別ち、又其字を文中に挿入し、以て其運用作用を示せしものにして、紙數八百三十餘頁、卷末には註釋を附して以て難解の虞なからしめ、彼國人情風俗より、軍國の重事に至るまで、網羅蒐討殆んど餘蘊なく、實に清國語學書中、空前の大著なり

前東京外國語學校教授呉泰壽君編
日清往來尺牘
正價金參拾錢郵稅六錢

支那の言語は南北同しからず朝鮮も亦た其國語あり然るに支那十八省及朝鮮を通じて一樣なるは支那尺牘即ち往復文書なり此書は應用の文例を網羅して和譯を附したれば支那語朝鮮語を知らざる人も筆を以て自由に用務を辨じ得べし

新作征露軍歌

- 大和田建樹君作歌 高等音樂學校教授上眞行君作曲 **日露開戰軍歌** 正價參錢五厘 郵稅三冊貳錢
- 佐々木信綱君作歌 上眞行君作曲 **露西亞征討の歌** 正價參錢五厘 郵稅三冊貳錢
- 文學士久保天隨君作歌 上眞行君作曲 **征露新軍歌** 正價四錢 郵稅二冊貳錢
- 文學士大町桂月君作歌 上眞行君作曲 **露國征伐軍歌** 正價四錢 郵稅三冊貳錢
- 文學博士井上哲次郎君作歌 山田源一郎君作曲 **征露の歌** 正價貳錢五厘 郵稅八枚貳錢
- 巖谷小波君作歌 山田源一郎君作曲 征露軍歌 **旅順の海戰** 正價貳錢五厘 郵稅八枚貳錢
- 巖谷小波君作歌 東儀鐵笛君作曲 征露軍歌 **決死隊** 正價貳錢五厘 郵稅八枚貳錢
- 野口寧齋君著(戰詩) 征露 **宣戰歌** 正價五錢 郵稅二冊貳錢
- 佐藤六石君作(戰詩) **征露大捷歌** 正價五錢 郵稅二冊貳錢
- 國府犀東君著(戰詩) 征露 **大陸劍歌** 正價五錢 郵稅二冊貳錢
- 佐々木、大和田、中村外數君共作 上眞行君、小山作之助君作曲 日露戰爭 **國民唱歌** 正價一冊八錢 郵稅二冊貳錢
- 女子大學教授文學士鹽井雨江君作歌 女子大學音樂教授白井規矩郎君作曲 **女子軍歌** 正價拾錢 郵稅貳錢

博文館編輯局編纂

日露海戰史

洋裝大判正價金參拾錢郵稅參錢

評論は海戰に關する内外評論家及軍人の諸說を掲ぐ皆之れ剴切の文字▲本紀は日露海戰開始よりの戰況を最も趣味多く叙述し一讀人をして戰場を親睹するの感あらしめ讀み來つて覺えず痛快と絶叫せしむ▲史傳海軍將校の列傳を掲げ精忠貫日の勳功を詳叙す▲雜纂には海戰に關する軍器艦の說明より地理に至までを掲げ我海軍の大捷を博する所以を知らしむ▲地圖鮮明精確の圖を以て海戰の狀況を明示す▲日誌▲其他海戰に關する事項を網羅す

上野義八郎君著

海軍兵器說明

全一冊洋裝正價拾八錢郵稅四錢

本書は世界各國の海軍に於て均しく使用する所の兵器を列擧し其運用効用を平易なる文章を以て記述したり一度之を繙くときは兵器の要點を精確に窺知することを得又挿圖を觀覽珍味するに於ては兵器の運用に係る諸多の疑惑は融然として氷解すべきなり

露國トルストイ伯原著
日本　田山花袋君譯述

哥薩克兵

▲正價金拾八錢郵稅四錢

高加索嶺の北、露領の最南端一國あり「コサック」州といふ、多く美人を産す、世界第一の稱あり、是を以て露國士官の「アプリーク」に防禦の爲めこの州に送られたるもの、大槪鴛鴦の盟を兵馬倥傯の間に締せざる者なし。レチ、トルストイ伯は露國の詩人、十九世紀錚々たる大詩人たり、而して其作「コサック」兵は實にこの間の消息を陳べて神来の詩題を婉麗なる筆に描出したるものなり。

文學士中内義一君譯

日露戰爭未來の夢

▲正價金貳拾五錢郵稅六錢

日露の關係愈々切迫して戰雲益々急に砲火正に相搏んとして未だ發せざるに當り露人サマローフ氏意を小說に寓して其日露戰爭觀を公にせるもの即ち本書の原著にして例の能文なる中内文學士其才筆を呵して此書をなす收むる所の文字如何に警拔に勁健に而も彼國内の民意の如何に此帝室を離るゝかを知るに足る

海軍大尉長尾耕作君編

國民必携 海軍一斑

大判洋裝正價貳拾五錢郵稅六錢

我邦は東洋の海國たり是れ建國上海軍の必須なる所以なり、本書は長尾大尉の筆に成り海軍に關する百般の事項を網羅して餘す所なし苟も我國の擁護に忠なるの士は大に海事思想を養成し其海軍の基礎を益々鞏固にして以て國利國權を伸張せざるべからずされは海軍の志願者は勿論苟くも我國民たるものは一讀せざるべからず

久留嶋武彦君編

國民必携 陸軍一斑

大判洋裝正價貳拾五錢郵稅六錢

著者は久しく職に陸軍にありて軍隊事務に經驗ある人にして本書は萬般の軍務を說述し巻頭には獨逸軍政綱領及び陸軍禮式を明にし讀者の閱覽に供せり國家の基礎たるべき軍事これにて知るを得べきを以て啻に軍人のみならず苟も義勇奉公尚武心を有する日本國民たるもの亦必讀の書なり

海軍大尉長尾耕作君編

海軍出身案內

全一冊洋裝正價四拾錢郵稅六錢

▲附 在鄉海軍々人心得
帝國海軍法規

著者は海軍部內に於て名聲嘖々たるの人書中收むる所海軍の如何なる吻なるかを詳述して亦遺憾なく卷末帝國海軍法規は地方官衙公署に於ける兵事主任及部內當事者の爲に必要なる現行法規を編纂せしもの其召集事務に關しては疑義條項を擧げ之に指令を加へたり吾國民必ず一讀せざる可からず

三宅青軒君編

陸海軍人書簡文

全一冊洋裝正價貳拾五錢郵稅六錢

本書は戰時平生兩樣の書翰文に就て作法を叙し、作例を述べ、實地活用の便に供すること極めて懇切、而して之に加ふるに祝吊記傳公用文等の諸作例を示し鼇頭別に軍人心得なるものを添ふ眞に軍人諸君が座右の寶庫、蓋し一日も缺く可からざるの良書なり

嚴谷小波君序 押川春浪君著

武俠艦隊

▲正價金參拾錢郵稅六錢

本書は江湖大喝采の「海底軍艦」「武俠の日本」の後を受けて變幻出沒、壯快無比、世界の大秘密は日露戰爭に關係して一讀骨鳴り肉動く、武俠艦隊一出、露國バルチツク艦隊、黑海艦隊の如き微塵とならんとは小波山人の贊言、愛國の士必讀の好著なり。

江見水蔭君著

武裝の卷

▲正價金貳拾五錢郵稅六錢

軍事小說家として本邦有名なる江見水蔭氏が獨特の快筆を揮つて以て戰爭の表裏を描き得意の短篇小說を以て軍國の出來事を詩想化して劍と筆とを一致せしめ文學力を以て露國退治を企てたる近時稀に見るの一大雄篇なり

法學士武田千代三郎君著

理論實驗 競技運動

全一冊洋布上綴大判
正價壹圓貳拾錢小包送拾五錢

此書は著者が西歐諸家の學說幷に我邦體育界の鼻祖ともいふべき故ストレーンヂ師の講話其他自己の實驗若くは觀察したるところに據り運動の價値より生理上の原理幷に體勢訓練の方法等を仔細に記述せるものにて敎育家幷に自家體質の發達に心あるものゝ好讀本なり蓋し本邦競技運動に關する從來の書中にては最も該博詳密のものなるべし

法學士武田千代三郎君著

少年競技運動

袖珍美本山中古洞君筆口繪入
正價金拾八錢 郵稅四錢

本書は室外敎育の理法に通曉せる武田先生の字內近時の大勢に鑑み近き將來に於て世界に覇たるべき天運を有する我帝國の少年の爲めに、如何にせば能く其心身を訓練して大國民に缺くべからざる實力を養ひ得べきやの問題を、極めて簡易平易に解說せられたる空前の良著にして、戰時の讀物として、每家庭に一本を缺くべからざる寶典なり

◎ボート競漕 ◎銃獵案內
◎新游泳術 ◎馬術
四冊共正價各拾貳錢郵稅貳錢宛

(後付の七)

發兌元＝時局必讀書類＝博文館

陸軍參謀本部御編纂

淸國事變戰史

全部八冊洋裝最大判本文二千餘頁
石版着色刷附圖附表各一冊宛
上製正價拾五圓小包料五拾錢
並製正價拾貳圓小包料五拾錢

明治三十三年淸國に義和團の匪徒蜂起し、北京に於ける列國公使館の重圍に陷るや、列強各之が救援の師を出せり。而して此聯合軍の主動となりて作戰を計畫し、之を遂行せられたる我參謀本部は、該戰役の編纂に力められ、諸種の方面より正確なる材料を蒐集し、義和團の由來、事變の起因より說起し、北京陷落して淸國皇室蒙塵の後、列強の媾和協定に至る迄、細大漏すことなく、然も審查微密なる戰略、戰術の觀察を以て、精詳究し、能く其事實の眞相を穿ち、簡明確切に之が編纂を終結せられたり、加之作戰、戰闘の景色、諸圖百有餘稿を附挿し、讀者をして作戰地の形狀、或は作戰の狀況、各時期に於ける戰闘の情況に至る迄歷々指摘するを得せしめられたり。

海軍機關總監 工學博士 宮原次郎君校閱
工學士 增田知藏君著

軍艦詳說

全一冊洋裝大判總クロース美本
正價壹圓貳拾錢郵稅拾四錢

帝國の海軍は、世界最強の名譽を博せり。此の赫々たる名聲を永遠に保護すべきは、帝國臣民の責任ならずや。而して其の任務を全うし海軍の進歩を迅速ならしむるものは、決して資金の力にあらず、正に國民の海軍思想の發達これなり。本書は尤も平易なる文字を以つて、軍艦に關する一切の事項を詳述して餘蘊なし。海事思想の發達は、先づ軍艦の何物たるかを知るにあり。戰捷國の臣民として其の名に負かざらむと欲する諸士は、須らく此書を繙かざる可らず。

東京
博文館
發兌

大本營參謀總長
元帥侯爵山縣有朋君題辭

日露戰役 紀念寫眞帖

每卷洋裝クロース表紙意匠鑑金文字入
寫眞銅版百面配色アートペーパー刷拾枚入
第一卷定價金壹圓廿錢郵稅拾貳錢

本卷收むる所は第二軍の鹽大澳上陸より金州南山の激戰ダルニーの占領德利寺の奇捷偕は蓋平大石橋の數戰を經て營口占領に至る迄の戰況風光網羅して遺す所なく、此等の諸寫眞は他に絶無にして獨り本館に於てのみ之を有する者、加ふるに製板は斯術を以て海內無比の稱ある所の關西寫眞製版印刷合資會社の手に成り装幀亦優雅堅牢を旨としたれば實に絶好無二の紀念帖たり、家々人々宜しく一本を備ふべきの寶典なり

陸軍軍醫監森鷗外君序
田山花袋君著

第二軍從征日記

全一冊洋裝大判
正價金六拾錢郵稅拾貳錢

第二軍の滿洲に於ける功績は、實に赫々として日月の天地を貫くが如し。南山、得利寺、蓋平、大石橋、遼陽等其の進路の極めて遼遠たりしにも拘らず、其戰捷の活潑なる實に端睨すべからざるものありて存す。著者博文館從軍寫眞班の一員として、宇品より其軍と共に乘船し、嘗むべきの困難は共に嘗め、耐ゆべきの辛楚は共に耐へ、かくして、漸くに身を寓するを得たるは、天地間最壯美の大活劇。況んや著者はこの大活劇を觀るに一種の特色ある眼光を以てし、戰闘を記し、砲烟を記し、殺戮を記するにも尋常紀文家の如く、乾燥殺伐なる文字を用ゐず、多樣にして多趣、恰も一篇の叙事詩を繙くの槪あるに於てをや。

（後付の八）

伯爵大隈重信君序文
農學博士玉利喜造君校閲
農學博士横井時敬君校閲

家庭園藝術

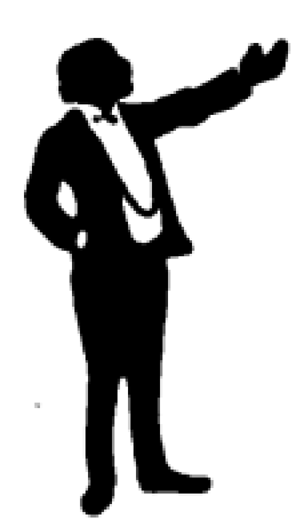
農學士富益良一君
花浪田中萬逸君 合著

全一册
洋裝三六判
頗美本紙數
四百五十頁

近日發行

◎口繪（美麗着色花卉の圖）橋本邦助君畫
◎大隈伯邸園及温室の光景（寫眞銅版）

清新なる家庭には清新にして多趣味なる遊戯が必要である。家庭の平和を望むには家庭を賑はす事が必要であると共に家庭の團欒には相樂むといふ事が何よりも肝腎で、即ち家庭の園藝は此の多くの目的を果すべく、至極格好のものである。實に園藝は神秘なる術で、是れに因つて快絶なる娯樂と、壯絶なる興味を得る許りでない。健全なる精神をも涵養出來るし身體をも強壯に出來るし尚も其上利益を得る事が出來る。況や園藝は生産的遊戯と云ふべく、泰西諸國の家庭に比べて一般に物淋しい、我國の家庭には此上なき良好の事業である。茲に本書は其師友として生れたので、彼の艶美なる花卉は勿論、芊々たる蔬菜、纍々たる果樹の培養に至る迄、蕪を捨てず細を揭げ、一々丁寧に洩れなく嶄新なる學說と多年の經驗を平易に說明せる外に其調理法と文學趣味をも附加してある。で婦人小兒の讀本且學生の參考書として適應してゐるし一讀直に實行し得べき實際のものであると斷定して置く。想ふに一家に白米が必要である如く、家庭には是非とも本書を備へ置かればならぬ。



發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

第五卷第七號

明治卅八年五月五日發行
毎月一回五日發行



(定價金貳拾錢)

(東京市小石川區久堅町百八番 博文館印刷所印行)